

NHK放送予定(平成22年1月~2月)

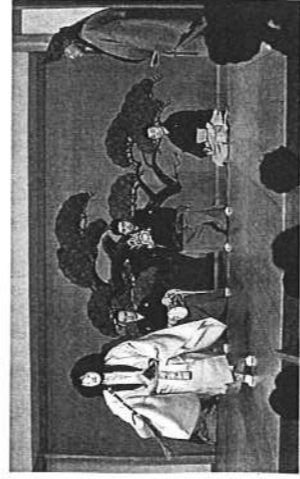
- NHK-FMラジオ(日曜日7:15~8:00)
1月23日 楽謡「葵上」(宝生流) 金井雄資ほか
1月30日 狂言「口真似」(和泉流) シテ 佐藤友彦
2月6日 楽謡「当麻」(観世流) 坂井音重ほか
2月13日 楽謡「藤戸」(宝生流) 今井泰行ほか
2月20日 楽謡「芦刈」(金剛流) 廣田隆一ほか
2月27日 楽謡「竹生鳥」(金春流) (再) 金春總高ほか

- 教育テレビ
1月30日(日) (15:00~17:20)
能「鉢木」(喜多流) シテ友枝昭世ほか
仕舞「山姥・ウセ」 シテ 塩津哲生
2月27日(日) NHK能楽鑑賞会(15:00~17:20)
狂言「鷲撃」(大藏流) 山本東次郎ほか
能「安宅」 勸進帳・延年之舞・立貝付(観世流) 観世清和ほか

演能カレンダー

名古屋能楽堂

- (平成23年1月)
15日(出) 第13回万作を観る会 (有料)
23日(日) 第55期・第1回 名古屋宝生会定式能 (番組②面)
30日(日) 第7回つぼみ会 (番組②面)(無料)
〔2月〕
13日(日) 名古屋観世会定例公演能 (番組③面)(有料)
19日(出) 第3回名古屋片山能 (番組③面)(有料)



五色の会 朋の会 能「田村」上演

恵を上演。会場いっぱい二百五十人を超える来場で熱心な観能がつづられた。
能組は、仕舞「山姥」(シテ宇高通成)、狂言「轟山伏」(シテ野村小三郎)、能「田村」(シテ羽多野良子、ワキ高安勝久、笛・鹿取希世、小鼓・河村真之介、間・松田高義、後見・廣田幸稔、地頭・宇高通成)

朋の会(金剛流)シテ方羽多野良子(師主彦)は「五色の会」能を観る「のタイトル」で、毎年花間会舞台(岡崎市大西町奥長入)で演能を行っているが、第12月23日(日)、第12回公演として、能「田村」(喜

能楽の友

発行 能楽の友社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 X 731-7984
F A (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

能「忠度」狂言「八句連歌」

豊田市能楽堂三月能

豊田市能楽堂三月能は、三月二十日(日)能「金剛流」忠度「狂言」和泉流「八句連歌」が上演される。午後一時半開場、午後二時開演。狂言「八句連歌」シテ野村小三郎、アト松田高義。
能「忠度」シテ宇高通成、ワキ福王茂十郎、ワキツル福王知登、中村直成、アト奥澤健太郎。
笛・藤田六郎兵衛、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・安福光雄、地謡・

松野恭蔵、今井清隆ほか。
入場料 正面席六〇〇円、脇・中正面席四〇〇円、チケット販売場所 豊田市能楽堂(T.E.L.05665・35・8200)
インターネット予約 Eto:~/www.tel06-6761-8055、大槻能楽堂ホームページ Eto:~/www.horikyoge.com
ロケーションチケット 1コート56068

第三回「名古屋片山能」が、二月十九日(出)名古屋能楽堂で上演される。
名古屋片山能は、昨年三月に第一回の公演が行われ好評を博し、今回第三回公演は、能「葵上」を「観世能(ちうそくのう)」という形で上演。「昔日の屋内の舞台」が照明として蠟燭を使っていたように、蠟燭を照明の一部として使用し、揺らめく明かりに映し出される幽玄の世界を鑑賞した頂きたい」とその趣旨を述べている。
なお片山幽雪氏子息・清言氏は

本年一月より、十世片山九郎右衛門を襲名する。
能組は、半能「融・舞返」シテ古橋正邦、ワキ宝生欣哉、仕舞「豊清」片山幽雪、(蠟燭能)能「葵上」シテ片山九郎右衛門(片山清言改メ)ワキ宝生欣哉。(番組③面掲載)午後2時始
指定席(正面・脇正面とも)五〇〇〇円、自由席(中正面・脇正面後方)四〇〇〇円、学生席(自由席のみ)二〇〇〇円。
主催 財団法人片山家能楽・京舞保存財団(T.E.L075・55

1・65535、FAX075・532・2841)

能の魅力

大槻能楽堂自主公演

2011年大槻能楽堂自主公演能「能の魅力」シリーズは「平家物語を観る「戦のあわれ」を語る」テーマで催されるが、その1~3月公演は次のとおり。
1月22日(出)午後2時開演
お話 騎虎の勢い「朝日將軍」そして最後は「井沢 元彦」
能「大嘗」願書・恐之舞 シテ山本順之
能「巴」替義東 シテ多久島利之、ワキ福王知登
2月19日(出)午後2時開演
お話 戦乱を生きぬいた古武士「美盛」中西 進
能「美盛」シテ梅若玄祥、ワキ福王茂十郎
3月26日(出)午後2時開演
お話 武人として、歌人として「忠度」高橋 謙郎
能「忠度」替之型 シテ浅見真州、ワキ福王茂十郎
入場料金 一般自由席前売四二〇〇円、当日四七〇〇円、学生自由席前売二六〇〇円、当日三〇〇〇円
入場券取扱 大槻能楽堂事務局(T.E.L06・6761・8055)、大槻能楽堂ホームページ Eto:~/www.horikyoge.com
ロケーションチケット 1コート56068

旅人の聴く能楽

3月26日 藤田舞台

KNOW INO 社(東京都新宿区矢来町47-15)主催の「第4回旅人の聴く能楽」は、3月26日(出)名古屋市西区幅下の藤田舞台で催される。
プログラムA(午後1時開演)
素囃子「神舞」(笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村真之介、太鼓・加藤洋輝)
一調「百萬」(謡・武田文志、太鼓・加藤洋輝)、二調「竹生鳥」(謡・河村清道、大鼓・河村真之介)
半能「教盛」(シテ観世喜正、ワキ橋本幸)
プログラムB(午後3時半開演)
素囃子「禰鼓」(笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村真之介)
一管「草之神楽」(笛・竹市学、一調「夜討曹我」(謡・橋本光史、小鼓・後藤嘉津幸)
半能「熊坂」(シテ観世喜正、ワキ橋本幸)
全席指定(入れ替え制)五〇〇円、取扱のうの事務所(T.E.L03・32266・1020、藤田舞台は名古屋千種区千種2-10-9)

謹

賀

新

年

名古屋観世九皇会

観世喜正之
高橋 瞭 一

鳳鳴会

武田友志房
武田友志房

大槻清韻会

大槻文蔵

片山清司改メ
十世片山九郎右衛門
片山幽雪
京都市東山区西之町24
電話(〇七五)五六一一二九一

名古屋観世会

観世清和

T 466-0033
名古屋市昭和区台町二丁目十六番
電話(〇五二)八四二一四六三番

梅田邦久
梅田部沢一
今本須清
田部沢一
高橋 瞭

大西智久

T 606-0014
京都市左京区下鴨芝本町58
電話(〇七五)七二二一六八五〇

藤井徳三

山本博通
山本勝一

名古屋観衛会

梅若吉之丞
梅若猶義
梅若猶会

名古屋宝生会定式能 (第155回期)

平成二十三年一月二十三日(日)

午後一時開始

名古屋能楽堂

仕舞 田村キチ 衣斐正直 地謡 衣斐 貞直
飛能 飛能 御頭 貞直

能 **春日龍神** 飯倉雅介 河村総一郎 鬼頭 義命
飛能 飛能 御頭 貞直 大野 誠

問合 枝 郁雄

後見 衣斐正直 地謡 鈴木久七 和久 莊太郎
佐藤 耕司 大森尚成 綿川 善一郎
久野 幸三 辰巳大二郎

狂言 **寝音曲** 佐藤 融 井上 靖浩

後見 佐藤 友彦

仕舞 西行桜キチ 佐藤 耕司 地謡 辰巳 清次郎
飛能 飛能 御頭 貞直 綿川 善一郎

能 **源氏供養** 竹内 澄子 橋本 幸 後藤 孝一郎 鹿取 希世
飛能 飛能 御頭 貞直 橋本 敬

後見 玉井 博祐 地謡 津田 節和 久 莊太郎
衣斐 愛 平田 正文 辰巳 大二郎
竹内 澄子 橋本 幸 後藤 孝一郎 鹿取 希世

(終了予定四時半頃)

主催 **名古屋宝生会**

問い合わせ先 **名古屋宝生会**

〒31-231-191 名古屋市中区御器所 3丁目19番1号 衣斐正直 方

TEL/FAX 052-882-2560

全自由席 正会員券 一八、〇〇〇円 (年間通用4枚綴り)

観賞券 二、〇〇〇円 (各一回限り)

学生券 一、〇〇〇円

プレイガイド (観賞券のみ取り扱い)、芸文 (地下2階)

米プレチケ92 (3超地下)、ナディアパーク (7階)

中日ビル (1階)、松坂屋本館 (7階)

第七回 つばみ会

一月三十日 (日) 午前十時開始

名古屋能楽堂

仕舞 橋舟慶 衣斐 愛 地謡 衣斐 貞直

仕舞 黒塚 河村 さやか 紅葉狩 加藤 豊彦 奈

素謡 **春日龍神** シテ 伊藤 武利史 山本 洋子 長尾 幸子
ワキ 河村 直巳 河田 正子 弓削 節子 熊野 孝子

仕舞 鶴亀 萬取 由乃 熊野 孝子 高取 未夕
仕舞 嵐山 福谷 美幸子 熊野 孝子 高取 未夕

仕舞 程盛 丹羽 郁子 班女 江口 しげ子
仕舞 丸丸 前畑 正子 笹之段 山本 洋子

舞臺子 西王母 林 加代子 花 月 中西 良美
玉 葛 前田 洋子

素謡 **八島** シテ 中西 孝文 廣瀬 安司
ワキ 小宮 水杉野 允 吉田 剛夫
トモテ 安東 明江

仕舞 **歌占** シテ 山田 あき子 楊貴 妃 小坂 柳子
野宮 土川 喜枝 融 小 柳子

舞臺子 胡蝶 坂口 佑 枕 慈童 吉田 美香
須磨源氏 水野 ゆき子

素謡 **三山** シテ 長野 猛 平田 正文 武
ワキ 中島 暉夫 門内 淳一 武
トモテ 高 暉夫

仕舞 **熊野** シテ 吉田 則夫 玉 葛 廣瀬 安司
熊野 奥田 勝子 熊野 勝子

仕舞 **半部** 天野 元成 鞍馬 天狗 島津 元幸
郡 大島 鶴江 碓 間 上 豐代 枝

舞臺子 養老 安東 明江 葛 城 大塚 恵

素謡 **咸陽宮** シテ 成瀬 豊代子 吉田 勝子 東 松ノエ
ワキ 島崎 桂一 大毛 麗子 田前 松ノエ
トモテ 阿部 三和子 佐藤 美洋子 岩田 基子

素謡 **黒塚** シテ 櫻 立 典子 奥田 勝子
ワキ 丹羽 美幸子 中西 小 見子
トモテ 丹羽 美幸子 土方 利子

仕舞 **籠太鼓** 櫻川 麗子 碓 松村 七雅子
阿漕 千田 美和子

能 **葵上** 山本 あけみ 飯倉 雅介 河村 真之介 加藤 洋輝
飛能 橋本 幸 後藤 孝一郎 鹿取 希世

問合 井上 靖浩

後見 衣斐 貞直 地謡 星野 猛 和久 莊太郎
内藤 飛能 平田 正文 竹内 淳一

素謡 **経政** シテ 中西 良美 田中 結香子 水野 ゆき子
ワキ 田中 信子 河村 さやか 吉見 全子
トモテ 橋本 幸三 酒井 善由 貞

仕舞 **鶴龜** 竹内 淳一 八 島 平田 正文
清経 中島 暉夫 高野 物狂 門内 淳一

舞臺子 桜川 鈴木 マチコ 高 砂 五 酒井 善由 貞

終演十七時頃

主催 衣斐 愛 会

名古屋市中区御器所 二丁目三十一番二

サンマンシミンアトレ御器所 三丁目二〇二

坂口 方



観 芳 会
観 世 芳 伸

怡 樂 会
山 階 彌 右 衛 門
山 階 弥 次

久 田 観 正 会
久 田 勤 鷗

前 野 郁 子 親 子
星 野 路 子

〒460 名古屋市名東区一社3-10
電話(〇五二七〇五五五)

舞 橋 岡 會 橋 岡 久 太 郎
* * * * *

山 野 橋 岡 久 太 郎
山 岸 池 尚 伸 明 明

坪 荒 宮 下 木 茂 路 之
小 島 出 田 友 三 郎 功 亮

吉 塚 小 田 重 章
松 田 重 雄 章

小 倉 内 美 美 樹
橋 岡 佐 喜 男 富

山 野 池 尚 伸 明 明
岸 池 尚 伸 明 明

武 田 謳 樂 会

武 武 田 欣
武 田 大 邦 志 弘 司

春 鶯 會
梅 若 善 高

〒500 0064 豊中市新千里南町三丁目18-12
電話(〇六〇六八三二一七八五)四一二
〒166 0003 東京都杉並区高円寺南4-27-7 908
電話(〇三二三三二二一〇五七〇)

梅 春 會
井 戸 和 良 祐 男

〒545 0004 大阪市阿倍野区文の里3-16-17
電話(〇六〇六六二二一二二九九)

上 田 観 正 会 能 樂 堂
上 田 観 正 会 TEL 〇七八一
六 九 一 一 五 四 四 九

上 田 貴
大 公 拓 介 威 司 弘

名 古 屋 修 諷 會
梅 若 修 一

名 古 屋 淡 交 會
橋 岡 慈 觀

三 交 會
久 田 三 津 子

〒460 名古屋市名東区一社3-10
電話(〇五二七〇五五五)

財 團 法 人 鎌 倉 能 舞 台

中 森 貫 太

初 陽 會
武 田 宗 和

宗 典
連 絡 先 電 話 0 3 3 3 5 9 2 7 8 3

笙 月 會 中 川 雅 章

〒590 0000 長浜市地蔵寺町八ノ二九
電話(〇七五〇) 〇六三〇番

賀 水 會
桑 名 賀 水 會
名 鉄 百 貨 店 友 の 會

加 賀 敏 彦

〒463 0000 名古屋市守山区森孝二丁目七〇九
電話(〇五二七七七一八九四五)番

松 盛 會
小 松 勝 憲

松 舞 台
〒511 0000 三重県桑名市西別所一〇六一之五
TEL・FAX 〇五九四(三三四五八二)

洗 心 會 奥 村 富 久 子

観 修 會 祖 父 江 修 一

〒507 0000 多治見市日ノ出町2の2
電話(〇五七二二二二五五六)

幸 誦 會 近 藤 幸 江

〒444 0000 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話(〇五六四) 〇五二九九

千 早 會 八 神 孝 充

〒464 0000 名古屋市千種区穂波町3-10-11-201
電話(〇五二七六六二二二〇一)

桜 月 會 加 藤 春 枝

〒500 0000 可児市早ヶ丘3-1-113
電話(〇五七四) 六四一三〇六

七、「名古屋和泉会」①

竹尾 邦太郎

昭和三十六年(一九六一)二月三日、東京在住の和泉流宗家・和泉保之の後援と名古屋の和泉流狂言の育成発展を願い予て計画中で

あつた「名古屋和泉会」が、華やかな時代は和泉流狂言師お抱えの尾張徳川家の末裔・徳川義親氏を会長に置き、伊藤次郎左衛門・岡谷惣

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る



【入場料】当日券六〇〇〇円(自由席)(毎教制限アリ)
取扱い 名古屋能楽堂(052・231・0888)
名古屋観世会事務所

主催名古屋観世会
事務所 名古屋市昭和区台町2-16-15
TEL FAX 052284146932

附祝言 (終演五時頃)
後見 坂口 眞信 地謡 吉沢 孝旭 祖父江 修一
武田 邦弘 久田 勘助 芳伸 仲久 勘助 芳伸 仲久

熊野 親世 清和 榎王 茂十郎 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛
読次 雨之留 榎王 知登 大倉 源次郎

雲屋 久田 勘助 松山 幸親
野守 梅田 邦久 地謡 清沢 一正 高橋 一

狂言 船渡 松田 高義 野村 小三郎 野口 隆行
後見 伴野 俊彦

嵐山 高安 勝入 河村 眞之介 加藤 洋輝
武田 邦弘 後藤 嘉津幸 竹市 学

名古屋観世会定例公演能
二月十三日(日)十二時半始
名古屋能楽堂

助・松坂佐一・高木市之助・西川 田植 和泉 保之
長吉氏ら諸名士の賛助を得て結成され、發会を兼ね「狂言小舞の会」が午後六時、栄の中区役所ホールの催される。先づ会長挨拶、次いで和泉保之宗家の「狂言と小舞について」の話があり、以下の番組で狂言共同社同人による小舞が演じられる。

「最後の殿様」といわれた徳川義親先生のおかげで、和泉流と名古屋との格別深い結びつきができました。もともと和泉流は七代目から尾張の徳川家お抱え狂言大夫となつて巨石の扶持をいただき、徳川家とは特別の因縁がありました。――中略――昭和三十年、サウナケイホールのこけら落としに何十

主催名古屋片山能制作委員会
指足席(正面・側正面共) 五〇〇〇円
自由席(中正面・側正面後方) 四〇〇〇円
学生席(自由席のみ) 二〇〇〇円
【チケット取扱い】
▽片山能楽・京舞保存財団(T E L 0 7 5 - 5 5 1 1 6 5 3 5)
▽名古屋能楽堂(T E L 0 5 2 - 2 3 1 7 0 8 8 8) ▽ナディア
バークプレイガイド(T E L 0 5 2 - 2 6 6 0 0 1 1 5) ▽チケットぴあ(T E L 0 5 7 0 - 0 2 9 9 9 9 9 / F O R D 4 0 9 - 2 0 4)

能 葵 上 室生 欣哉 河村 眞之介 加藤 洋輝
空之折 大日向 寛 後藤 嘉津幸 竹市 学
後見 小林 方玄 地謡 大江 広祐 古橋 正邦
河村 博重 片山 九郎右衛門 分林 道治 青木 道喜

第三回 名古屋片山能
二月十九日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂
半能 融 古橋 正邦 河村 眞之介 加藤 洋輝
室生 欣哉 後藤 嘉津幸 竹市 学
後見 大江 信行 地謡 武田 大志 大江 広祐 分林 道治
片山 九郎右衛門 清沢 一政 片山 村方 伸重

司宝会
〒490 名古屋市中白区島田二丁目三〇二
島田橋住宅二三〇電話〇五二八〇七三七

宝生流 嘉宝会
〒496 名古屋市中区川名本町二ノ五二
鬼頭 嘉男

衣斐正宜後援会
〒496 名古屋市中区御器所3-1-23-19
御器所パークマンション802号
電話(〇五二)八八二一五六〇番

佐野由於
〒698 神戸市東灘区田中町1-13-22 809
電話(〇七八)四四一五五六五番

名古屋巽会 豊橋巽会
辰巳満次郎
〒170 東京都豊島区東鴨五十二三三八
電話〇三(三九二五)二二七六番

近藤乾之助
〒170 東京都豊島区東鴨五十二三三八
電話〇三(三九二五)二二七六番

名古屋宝生会
金剛永謹
龍謹

(株)大阪能楽会館
〒530 大阪府北区中崎西2-1-17

宇高通成
徳成

松野恭憲
松野恭憲能の会
〒616 東京都右京区鳴滝泉殿町一八二三
TEL 〇七五(四六)三二二四八番
FAX 〇七五(四六)二六〇九八番

豊嶋三千春
豊嶋能の会 春会

廣田泰能
廣田泰三

廣田鑑賞会
廣田陸一
廣田幸稔

金剛永謹
龍謹

高安勝久

知登幸郎

福王茂十郎

和谷栄太郎
〒516 007 伊勢市中島二丁目26-12
電話(五七六)〇一五九番

和谷衡市
喜多流

長田驍後援会
〒514 04 津市高野町三三五一四六
電話(〇五九二)〇〇六九七番

伊勢金春会
宇仁田吉邦
〒516 006 伊勢市八日市場町5-1-16
電話(〇五九六)五二九八

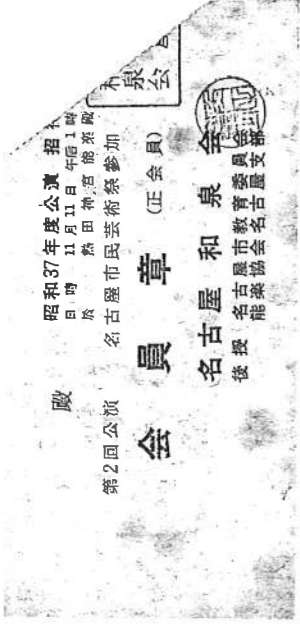
本田光洋
〒164 006 東京都中野区上高田二ノ五二
電話(〇三三三八)六二三四二番

年ぶりかで「唐人相撲」を上演いたしました。その時は、東京ではおそらく初めてでしょう、名古屋の徳川美術館にある、豊太閤が朝鮮から持ち帰った戦利品で作ったといわれる唐装束を拝借して上演したのです。

元来、ざつぱらんな気取らない戯戯でしたが、「釣狐」を扱きました。昭和二十二年ごろから、名古屋へ来いというお勧めを受けました。名古屋は和泉流の本拠地で、昔は旧家の若たちが儀作法の勉強として狂言をやっていた。それがだんだん時代が変わって縁が遠くなっている。だからほとんどころへ泊まって稽古に来いとおっしゃるのです。当時狂言共同社の代表であった歌村彦四郎氏からも稽古に来られてはと、手紙をもらい、かねがね徳川先生がおっしゃって下さったことが実現したわけ。——後略

記念すべき第一回公演は同年一月一日、舞台は熱田神宮能楽殿、名古屋市民芸術祭に参加する。狂言組は順に狂言三番「鯛牛」和泉保之、河村丘造、三宅右近、「牛盗人」井上松次郎、佐藤卯三郎、石田喜樹、佐藤秀雄、井上祐一、「鏡太郎」三宅藤九郎、和泉保之、三宅右近、小舞四番「小山伏」石田喜樹「柳の下」井上

③面よりつづき



上義次「山崎通ひ」井上祐一「宇治の廻」山本光太郎、狂言二番「隠理」河村丘造、野村又三郎、「業平餅」和泉保之、井上松次郎、石田喜樹、井上礼之助、山本光次郎、井上祐一、佐藤友彦、井上義次、井上斌實、歌村彦四郎、野村又三郎。和泉保之「業平餅」は初演。

なお、名古屋和泉会の発足に当り、年一回狂言の公演を催し紹介普及する、趣旨のもと会員の募集も行われた。正会員(二〇)三百円(招待券一枚)、賛助会員(二〇)五百円(招待券指定席一枚)、維持会員(二〇)一千円(招待券指定席二枚)。また、公演に先立ち名古屋狂言共同社発行の機関紙「狂言」第四八号は「和泉会特刊号」として巻頭に和泉保之宗家の挨拶を掲載する。

名古屋和泉会も地元諸氏の御努力に依って結成され、第一回公演を迎えるに至り、伝統の強さというものを痛切に感じ、魔びも又一人であります。

伝統に対する認識... 演出に於ても時に今日特異個性というものゝを要求され、次第に各々のブレ、考へにのみとらわれた形が多く、実際に各界に此傾向がみられる中で、伝統芸術の価値が稀薄になつてきたと考へられ、狂言も又時代と共に進化して参りましたが、今日の物事を処理する人達の間には伝統というものゝの考へ方には随分と異つた解釈がなされ、これからの伝統芸術を維持していくことに非常に難しさを感じられます。

その中であつて名古屋和泉会も伝統芸術の維持と発展とに、今後

大いに尽し中京に於ての伝統芸術の花として咲きほこるべく皆様の御支援を仰ぐ次第であります。

因に名古屋で一結社により毎年催される狂言会は、昭和三四年四月五日に発足した「朝日狂言会」、同年四月一六日の「狂言鑑賞の会」に始まり翌三五年に第一回として発足した和泉流野村又三郎家の「やるまい会」があり、「名古屋和泉会」に二年先行する。

和泉流山脇派、いわゆる宗家派を標榜する名古屋狂言共同社の後援を受けて縁の尾張名古屋に活動の場を挙げた在京の宗家と泉保之は昭和二年(一九三七)七月一日生、昭和十八年九月一日、山脇元清家の養嗣子となり和泉流一九世宗家を継承、山脇保之を名乗る、時に六歳。昭和二十二年二月に山脇を和泉と改姓、昭和三年に東京「和泉会」で「花子」を披露、三四年「花子・真ノ型」、三五年の第二回「朝日狂言会」で三度目の「花子」を。このとき、狂言組の案内チラシに「和泉流の若き宗家を観る会」のサブタイトルが付き、宗家の「花子・真ノ型」の近影が載る(写真)。

第二回は昭和十七年二月一日、狂言三番「文相撲」井上礼之助、井上祐一、佐藤友彦、「川上七」和泉保之、井上松次郎、「木六駄」野村万蔵、野村又三郎、野村万之丞、歌村彦四郎、小舞三番「名取川」野村又三郎「陣」野村万之丞「鉄輪」和泉保之、狂言「泣尼」河村丘造、佐藤卯三郎、佐藤秀雄、舞囃子「業」金森準三、田鍋惣太郎、吉田定男、鬼頭八郎、狂言「團」井上松次郎、井上

祐一、佐藤友彦、井上義次、佐藤秀雄、山本光次郎、井上礼之助、石田喜樹、伊藤安文、井上斌實。

この年、三月二十八日、前年度の朝日狂言会「花子」、名古屋和泉会「鯛牛」などの好演と、宗家として活発な名古屋での狂言活動に對して和泉保之に名古屋演劇ペンクラブ賞が贈られる。また五月二十三日、宗家保之は坂井忠正氏の縁酌で山野辺洋子と結婚と報じられる。

第三回は昭和十八年一月一日、市民芸術祭参加。狂言二番「冠山伏」井上礼之助、野村又三郎、佐藤友彦、「寶聲」河村丘造、佐藤秀雄、井上祐一、小舞「七つ子」和泉保之、狂言「宗論」佐藤卯三郎、井上松次郎、山本光次郎、舞囃子「絃上」内藤泰二、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、河村丘造、鬼頭喜太郎、狂言「團罪人」三宅藤九郎、和泉保之、野村又三郎、井上松次郎、佐藤秀雄、井上礼之助、大野弘之、井上祐一。

第四回は昭和十九年一月三日、初代井上菊次郎、二代井上菊次郎、井上新三郎、歌村彦四郎の連善狂言会。番組は、舞囃子「経政」内藤泰二(金森準三、田鍋惣一郎、西尾孫太郎、地頭戸田秀雄)、狂言「伊文字」和泉保之、佐藤卯三郎、佐藤秀雄、河村丘造、連吟「藤戸」前田昌広、前田茂徳、仕舞「天鼓」山田仁三郎、陽仕舞「環遊」萬安滋郎、狂言「不見不聞」井上松次郎、歌村彦助、井上祐一、小舞二番「御田」茂山十五郎(地謡茂山七五三、善竹弥五郎、善竹圭五郎)「業阿弥」善竹弥五郎(地謡善竹圭五郎、茂山十五郎、茂山七五三)、狂言「釣狐」井上礼之助、野村又三郎、舞囃子「融」柴田初太郎(藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、西尾孫太郎、鬼頭八郎、地頭柴田収武)、狂言「團罪人」三宅藤九郎、野村万蔵、和泉保之、野村又三郎、佐藤友彦、大野弘之、井上斌實、井上義次、井上松次郎。

因に連善される四人の生没年は初代井上菊次郎は一八四六一一九二〇、二代菊次郎は前名鉄次郎(一八四一—一九〇四)井上新三郎(一八八七—一九五五)、歌村彦四郎(一八九二—一九六三)、名前が示す通り後の三人は何れも初代の息男、また「不見不聞」シテ井上松次郎は二代の、アド歌村彦助は彦四郎の、秘曲「釣狐」シテ井上礼之助は新三郎の、それ以外、息男、即ち三人とも初代菊次郎の孫である。「釣狐」を扱いた井上礼之助は自署「祖父・父を憶ふ」(平成七年十二月二十二日刊、私家版)の「万蔵・藤九郎両先生のこと」の中で次のように述べている。

學生が「釣狐」を扱いたのは昭和十九年十一月、四十九歳になつてのことである。身体は大きいし、年齢も年齢であり、お世辞にも身体が切れるとは言えない身である。それでも自分なりに一所懸命で稽古し、演じた。眞師を努めて戴いた野村又三郎師に全面的に教を乞うた。当日の出来はともかく、學生の「狐」で自働出来るのは、舞台の表後見として野村万蔵、三宅藤九郎両先生にお借り戴いたことである。両先生揃つてのことは前代未聞のこと、自分達の息子が演ずる時には、親の立場の者は内後見に回らねばならぬかと拝聴し恐縮した次第である。

第五回は昭和四〇年一月一日、番組は舞囃子「神舞」藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、寛狐一、鬼頭八郎、狂言四番「鉢叩」和泉保之、井上松次郎、野村又三郎、佐藤秀雄、大野弘之、井上義次、井上祐一、佐藤友彦、井上礼之助、三宅右近、河村丘造(狐ノ神)、「見物左衛門」三宅藤九郎、「鏡男」佐藤卯三郎、佐藤秀雄、井上礼之助、「三人片輪、三曲」三宅藤九郎(唾)野村又三郎(有徳人)三宅右近(徳頭)和泉保之(颯)、小書の「三曲」は酒宴の場の三人の舞が、座頭の「風車」は「景清・前」、颯の「兎」は「鉢木」、唾の「景清・後」は「鶴鯛」「八鳥・後」などに替り三季競演の形になるという(「狂言辞典・事項編」より)。なお、「鉢叩」と「見物左衛門」は今回まで当地の記録に見えない超稀曲、初演か。

——以下次号——

年 新 賀 謹

宝生 欣哉 閑	西村同門会 橋杉飯本元江富 正雅	大倉源次郎	幸友会	飯嶋六之佐	桂 会
高久田 久田 舜一 高橋 陽春 王子 子	谷田同門会 岡有松林 遼 充一 努大	藤田舞台 藤田六郎兵衛	福井 四郎兵衛	呉竹会 伝統文化(能楽)こども教室	後藤孝一郎 嘉津幸
大倉流小鼓 松月会	清水利宣	大倉源次郎	福井 良治	寛 鑛	
吐石会 河村 総一郎 河村 眞之介	亀井 俊一	幸友会	福井 聡介		

NHK放送予定(平成23年2月~3月)

- NHK-FMラジオ(日曜日7:15~8:00)
2月27日 素謡「竹生鳥」(金春流)(再)金春戀高ほか
3月6日 素謡「山姥」(観世流)野村四郎ほか
3月13日 素謡「隅田川」(宝生流)田崎隆三ほか
3月20日 素謡「忠度」(金剛流)今井清隆ほか
3月27日 素謡「田村」(宝生流)(再)小林与志郎ほか

教育テレビ

2月27日(日) 第25回NHK能楽鑑賞会 (15:00~17:00)

狂言「鶏聲」~大藏流
シテ 山本東次郎ほか
能「安宅」
勸進帳・延年之舞・貝立貝付~観世流
シテ 観世清和ほか

演能カレンダ-

- 名古屋能楽堂 (TEL 052-231-0088)
(2月) 19日(出) 第3回名古屋片山能
(3月) 5日(出) 名古屋能楽堂3月定例公演 (番組①面)
12日(出) さわってみよう/能の世界/ (要整理券)
20日(日) 第55期・第2回名古屋宝生会定式能 (番組①面)(有料)

京都府文化賞受賞

特別功労賞 茂山忠三郎氏
功労賞 味方健氏

京都府における文化の振興と発展に寄与した人に贈られる京都府文化賞がこのほど発表され、能・

演能案内

名古屋能楽堂三月定例公演

三月五日(土) 午後二時開演
名古屋能楽堂

狂言(和泉流) 墨塗
大 松田高義 木郎記者 野口隆行
女 野村小三郎
後見 伴野 俊彦

後見 伴野 俊彦

能 清経 飯富 雅介
(全善流) 船戸 昭弘 大野 誠

「入場券料」(全自由座)
正会員券 一八、〇〇〇円(年間通用4枚綴)
鑑賞券 五、〇〇〇円(各回1回限り)
学生券 二、〇〇〇円(各回1回限り)
「取扱い」ブレイクガイド、妻文(地下2階)
栄フレチケ92(三蔵地土)、ナティアパーク(7階)
中日ビル(1階)、松坂屋本館(7階)

能巻

後見 竹内 淳子 地謡 竹内 孝成 和久壮太郎
衣斐 愛 久野 幸三 辰巳大二郎
間 鹿島 俊裕 福井 聡介 加藤 洋輝
高安 勝久 河村 総一郎 竹市 学

能忠

和久壮太郎 飯富 雅介 河村 真之介 大野 誠
後見 衣斐 正直 地謡 村上 久仁彦 佐藤 耕司
辰巳大二郎 玉井 智幸 石黒 潤次郎
井上 靖浩 佐藤 謙 飛能 孝

能度

三月二十日(日) 午後一時始
名古屋能楽堂
和久壮太郎 飯富 雅介 河村 真之介 大野 誠
後見 衣斐 正直 地謡 村上 久仁彦 佐藤 耕司
辰巳大二郎 玉井 智幸 石黒 潤次郎
井上 靖浩 佐藤 謙 飛能 孝

名古屋宝生会定式能

入場料 前売指定四〇〇〇円(当日四五〇〇円)
学生一般三〇〇〇円(当日三五〇〇円)
学生一般二〇〇〇円(当日二五〇〇円)
取扱所 名古屋能楽堂(電052-231-0088)
チケットぴあ(05770-02)
Pコード409・999
市内ブレイクガイド、ナティアパーク7階PG(052-265-2015)

主催 名古屋市文化振興事業団
(名古屋能楽堂)
能楽協会名古屋支部

後見 金春 穂高 地謡 前田 登山 井 綱雄
本田 芳樹 加藤 英昭 吉路 金春 井 綱雄
小島 芳一 本田 由樹

片山九郎右衛門 襲名記念公演

3月19日 京都観世会館

片山清司改め十世片山九郎右衛門襲名記念公演が三月十九日(土)京都観世会館で催される。

この襲名の会には、観世清和宗家をはじめ観世鏡之丞、梅若玄祥、大槻文蔵、浅見真州、野村万作、茂山七五三、曾和博朗、亀井忠雄、林吉兵衛の諸師が出演。息男・清愛(きよあか)君が初シテ「岩船」を披露する。

演目予定は次のとおり。
舞囃子「春米」観世鏡之丞、能「養老・水波之伝」観世清和、狂言「二人袴」野村万作、舞囃子「西行桜」片山幽雪、別置一調「勸進帳」梅若玄祥、曾和博朗、一調「雲林院」大槻文蔵、亀井忠雄、一調「笠之段」浅見真州、林吉兵衛、能「三輪・白式神楽」片山九郎右衛門、狂言「春柳落」茂山七五三、能「岩船」片山清家

開場午前九時より、開演午前十時三十分。
観能券 S席・二万円、A席・一万五千元、B席八千元
申込 問い合わせ片山家能楽・京橋保存財団(TEL075・551・6535、FAX075・532・2841)

開演(午後9時終演予定)
入場料金(全席指定)
S席12000円/A席10000円、B席7000円、学生席3000円

申込 電子チケットぴあ(TEL0570・02・9999)Pコード409・0527ロソンチケット(TEL0570・084・003)Lコード34385

△国立能楽堂 窓口販売のみ(午前10時~午後6時)
藤田六郎兵衛事務所(TEL052・571・5763、FAX52・571・5763)

△ポロ音楽事務所(TEL03・5379・8717、東京都新宿区左門町6-10)

主催 藤田六郎兵衛事務所、ポロ音楽事務所、後援 花と緑の農芸財団、日本ワントゥイッシュエイト協会、協力 左近クリエイション

狂言関係では、狂言師・茂山忠三郎氏が「文化賞特別功労賞」、能楽師・味方健氏が「文化賞功労賞」を受賞した。

「受賞者紹介」
茂山忠三郎氏 茂山忠三郎家の伝統を継承し、偉大な演技と飄々としておらかな芸風で多くの観客を魅了。海外公演にも積極的に出演し、国際文化交流に貢献。

味方健氏 観世流能楽師としての能の舞台に意欲的に取り組む一方、能楽研究者として数々の研究を発表、能楽普及に精力的に活動。

める場面に合わせる笛の譜が特別にあり、小鼓四流儀の競演とともに注目と期待がよせられる。

上演は次のとおり。
(小鼓四流儀競演)
一調一管「葛城」初演
謡・梅若玄祥、小鼓・大倉源次郎(大倉流)

一調「松虫」謡・観世鏡之丞、小鼓・幸正昭(幸清流)
一調「女郎花」謡・大槻文蔵、小鼓・観世新九郎(観世流)

一調「声」玉意」謡・片山幽雪、小鼓・横山晴明(幸流)
狂言「石神」夫・野村万作、妻・野村高寛、仲人・石田幸雄

能「熊野」村雨留
シテ・観世清和、ツレ・観世喜正、ワキ・宝生順、ワキツレ・宝生欣哉、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、太鼓・亀井忠雄

とき 四月一日、国立能楽堂、午後5時30分開場、午後6時30分

笛方藤田流十一世宗家・藤田六郎兵衛師が主催する「萬歳楽座」は、能、狂言、仕舞という能楽公演が多いなか、普段見ることのない上演形式を加え、能楽の世界を「声」からも感じて頂きたいという想いで企画、昨年春(平成22年3月26日)、東京・国立能楽堂で初めて公演。つづいて昨年三月に第二回が催され、話題をよんだ。

第三回目の公演はきたる四月一日(金)国立能楽堂で午後6時半開演。能「熊野」と狂言「石神」のほか、小鼓四流儀の一調一管、一調一管が上演される。

能「熊野」村雨留は、シテ方観世流宗家・観世清和師、狂言「石神」には、人間国宝・狂言方泉流・野村万作師が出演する。

「熊野」の小書、短冊の段には、藤田流独自の習いがあり、眼に筆を付ける場面、短冊に書き始

した。また個人的なことですが、本年は私にとりまして、不惑の年にも当たり、師父への供養の意味をこめまして、四百年余の長きにわたり中絶することなく継承されて参りました和泉流野村派の当主名「野村又三郎」を来たる五月二十九日開催の「狂言やるまい会」を以て襲名させて頂く決意を致しました。是を一つの機として、ますます精進致す所存でございますので、今後も倍の力とご指導ご鞭撻、また大きなお力添えをお願い申し上げます。

狂言方・野村小三郎師

13世野村又三郎襲名

5月29日 狂言やるまい会で披露

和泉流狂言方・野村小三郎氏は先代・野村又三郎氏(平成二十年十二月十二日逝去)のあとをうけ、十三世野村又三郎を襲名するこになり、来たる五月二十九日開催の「狂言やるまい会」で襲名披露する。
襲名にあたって次のように挨拶

している。
師父・野村又三郎の三回忌追善公演を終えた頃より、襲名に関して各方面からお言葉を賜うまうになりましたが、すでに一門の当主不在が三年におよぶこともあり、流儀の重鎮各位にご相談し上げ、ご賛同を得ることができま

「萬歳楽座」第3回公演
能「熊野」、狂言「石神」
4月1日 国立能楽堂

発行 能楽の友社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0868)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

能楽の友

七 「名古屋和泉会」 ②

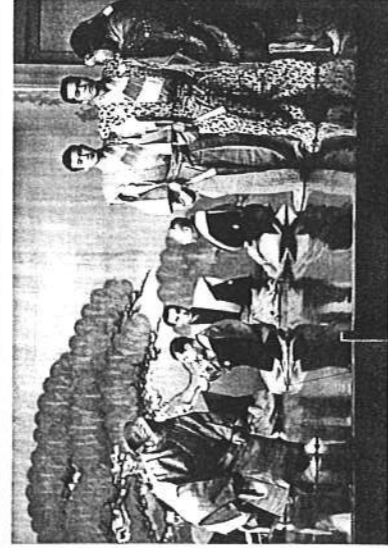
第六回は昭和四一年一月二日、昨年に引き続き市民芸術祭参加(因に昭和四九年の第一回まで)で河村健三郎師廿七回忌追善。番組は養雄子「男舞」藤田六郎兵衛・田鍋惣太郎・寛一、狂言五番「慈師平太」井上祐二・佐藤秀雄・佐藤友彦、「胸突」野村又三郎・井上礼之助、「鏡太郎」和泉保之・井上松次郎・三宅右近、「武悪」河村丘造・佐藤卯三郎・佐藤秀雄、「米市」井上松次郎・三宅右近・和泉保之・野村又三郎・佐藤友彦・井上義次・大野

弘之・井上礼之助。河村健三郎(一八六三—一九四〇)は名古屋狂言同好社設立同人の一。昭和二年菊月、狂言共同社先覚物故者追善の狂言会のために纏まれた記念の冊子「狂言」は次のように略歴を紹介する。

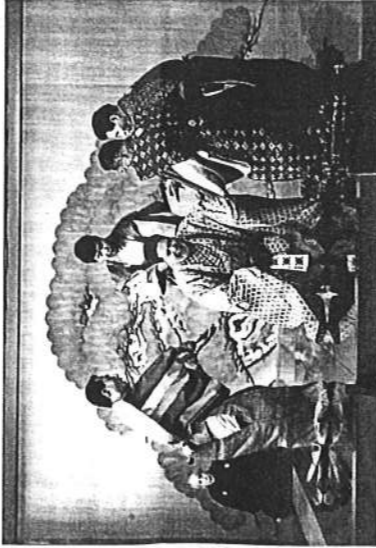
河村健三郎 本名河村武七、名古屋の宮町の酒造家四代目の子として、文久三年に瓜々の声を揚げ、七才にして早くも九代目野村又三郎師に入門して狂言を習い、明治十二年十七才の時頭穿よく三

当地の各流儀・流派・結社。社中の消息を辿る ②

竹尾 邦太郎



第8回和泉会「枕物狂」左より三宅藤九郎(シテ)、和村裕、三宅右近、河村丘造(乙) (高辻幸一氏撮影)



第8回和泉会「干切木」左より大野弘之、井上義次(うしろ)、和泉和之(まえ)、佐藤春雄、野村又三郎 (高辻幸一氏撮影)

番叟を抜き、続いて釣狐を、明治三十三年には大曲花子を勤めらる。其の後、技愈々円熟し東西に名を馳せ、昭和五年名古屋市公会堂落成祝賀に「福の神」を勤められしを期として、舞台を引退せられしも其の存在は狂言界に釣狐の重さを加えられた。(詳細は機関紙「狂言」百号記念特集号)

第七回は昭和四二年一月一日。狂言三番「墨塗」佐藤卯三郎・佐藤友彦・井上祐一、「佐渡狐」野村又三郎・佐藤春雄・井上松次郎・小舞「海人」和泉保之・養雄子「中之舞」藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・吉田定男、狂言三番「宗論」野村万蔵・和泉保之・河村丘造、「弓矢太郎」井上松次郎・井上礼之助・大野弘之、佐藤秀

雄・佐藤友彦・井上祐一、佐藤卯三郎・井上義次。「狂言」紙第百二号の巻頭コラム「狂言人語」は次のように言う。今回は重文個人指定(人間国宝)を受けられ目出たく今秋古稀を迎えられた野村万蔵師をお招きしました。そしてこの万蔵師に宗家保之師演の「宗論」を中心として松次郎、礼之助のコンビに社中総出演の「弓矢太

郎」など、豪華な曲目を揃えて開催されます。

第八回は昭和四三年一月九日。狂言三番「戦猿」井上松次郎・井上礼之助、井上斌資、井上豊弘、「茶壺」佐藤卯三郎、野村又三郎、佐藤秀雄、養雄子「早舞クツロギ」藤田六郎兵衛、福井啓次郎、河村総一郎、観世元信、狂言「枕物狂」三宅藤九郎・三宅右近・和田裕・河村丘造(写真)、一調「花筐クルヒ」田鍋惣二郎、柴田初太郎、狂言「干切木」和泉保之・大野弘之・佐藤友彦・佐藤秀雄・野村又三郎・井上祐二・井上義次・井上斌資・三宅右近(写真)。

「狂言」紙第百十号は「老いらくの恋に狂う——枕物狂の世界——」の題で鈍太郎(ペンネーム)が次のように言う。

芸術の秋——自白押しに並んだ芸能番組の中に、今年も狂言「和泉会」の名が健在している。「朝日狂言会」「やままい会」と並んで

能 船 舟 慶 上田 拓司
重前後之替
お話 村瀬 和子

能 正 壽 榎若 玄符
起請文・郷入
お話 井沢 元彦

能 千 手 塩津 哲生
能 重 衛 大槻 文蔵

能 碓 潜 浅井 文義
榎本による
お話 村井 康彦

能 屋 島 高 観世 清和
大暮・那須之藍
お話 高橋 聰郎

能 通 盛 浅見 眞州
お話 馬場あき子

能 教 盛 武富 康之
二虎之舞・踊入
お話 井沢 元彦

能 清 経 片山 龍蔵門
恋之章取(清司改メ)
お話 村上 港

能 品 平家物語を観る—
「戦のあわれ」を語る

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

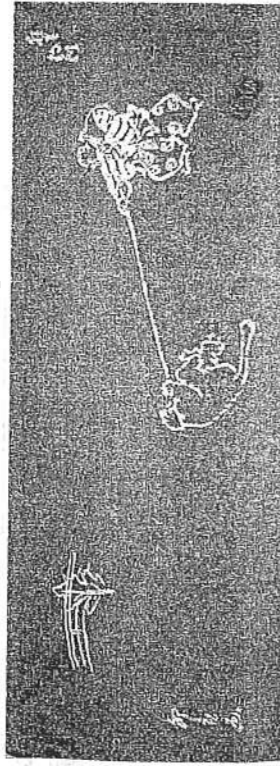
能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。

能 大 阪 大槻能楽堂の平成二十三
年(二〇二一年)の自主公
演能番組は次のとおり。



三宅藤九郎「枕物狂」



佐藤卯三郎「釣狐」

能に「関守小町」「松垣」「桜巻」と三つを「三老女」といい、いわゆる老女物の内でも特別に重い曲として取り扱われているが、狂言でこれに当るのが「比呂貞」

「庵の梅」とこの「枕物狂」の三曲で、前二者は尼、枕だけは祖父であり、いずれもかなりの差刀の上になんが大きな条件であり、長年の修業をつんだ「名人」のみに許される曲である。

能に「関守小町」「松垣」「桜巻」と三つを「三老女」といい、いわゆる老女物の内でも特別に重い曲として取り扱われているが、狂言でこれに当るのが「比呂貞」

名古屋での記録をさかのぼると約半世紀、大正七年十一月共同社の大先輩角淵新太郎演じて以来のものであり、東西でもめつたに観られることのないものである。

で名古屋の地に味ながら確実に狂言を定着化させつつある恒例の秋の催しである。別掲の如く豪華番組を取り揃えているが、中でも今回の話題は三宅藤九郎師演ずる所の「枕物狂」に尽きると云つてよいだろう。

第一〇回は昭和四五年二月一日

第九回は昭和四四年二月五日。番組は素囃子「男舞」藤田六郎兵衛・田鍋惣一郎・寛弘一、狂言四番「二人袴」佐藤友彦、佐藤秀雄・河村五郎、大野弘之、「柑子巻」和泉保之、井上礼之助、井上豊弘(写真)、無布縫「野村万蔵」野村又三郎、「止動方角」佐藤卯三郎、井上松次郎、大野弘之、佐藤友彦。



第九回和泉保之、井上豊弘(装の中)、井上礼之助(高辻幸一氏撮影)

番組は祝賀に相応しい能二番を初めと終りに据える。能「橋弁慶」・弦師「河村健二」・佐藤友彦・河村大(子方)和泉保之(アと弦師)野村又三郎(アと通行人)囃子方寛三男・福井啓次郎・寛弘一・地頭中川清・後見柴田初太郎・殿島修二(写真)、狂言三番「三本柱」和泉保之、井上松次郎、佐藤友彦、大野弘之、「腰折」三宅藤九郎、三宅右近、野村又三郎、

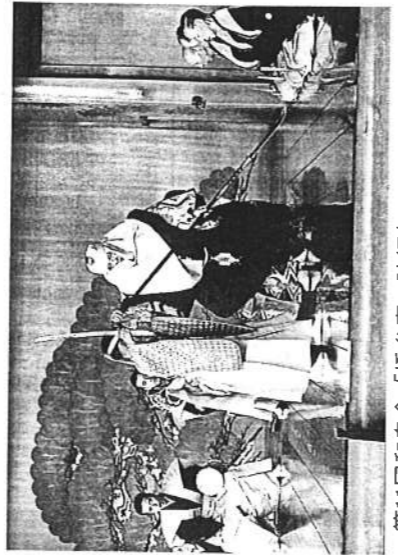
第一回は昭和四六年一〇月一日、狂言共同社結成八十年記念会とする。番組冒頭に共同社から福井家八世初太郎、九世五郎遺著の幸友会での披露(アト野村又三郎)以来一五年ぶりの再演、しかも八〇歳(明治廿四年生)の老翁とあつて大評判であつた。第八回の藤九郎「枕物狂」のひそみに倣うか、書画を能くする卯三郎も「釣狐」の手法を染め(写真)観客に配っている。

「釣狐」佐藤卯三郎、井上松次郎、一調「松虫」田鍋惣一郎、宝生英雄(調)、狂言「引括」井上礼之助、佐藤秀雄、井上祐一、佐藤友彦、大野弘之、井上義次、歌村鴻助、今枝良治、井上良二、井上豊弘、鷺見政行、半能一石橋、連獅子「辰巳孝、内藤泰二、高安滋郎、囃子方藤田六郎兵衛、田鍋惣一郎、河村健二、鬼頭喜太郎、地頭宝生英雄、後見鬼頭喜男、吉田俊彦。

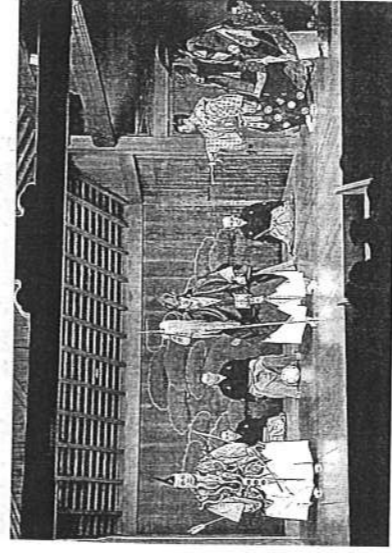
「釣狐」白蔵主狐の卯三郎、八十を越えたが老人とは思へぬ元氣ハツラツたる声、動き、秘事口伝づくめの太曲だけに、極度の氣力、体力の充実を要するそうだが、その要求に見事にこたえた大舞台であつた。さすがに後半から引つ込みやや疲れが見えたようだが、とにかく、ご当人のながい禁煙を飾るにふさわしい一番として、心から拍手をおくりたい。松

「釣狐」を勤める佐藤卯三郎は昭和二年一月一日、小鼓方福井家八世初太郎、九世五郎遺著の幸友会での披露(アト野村又三郎)以来一五年ぶりの再演、しかも八〇歳(明治廿四年生)の老翁とあつて大評判であつた。第八回の藤九郎「枕物狂」のひそみに倣うか、書画を能くする卯三郎も「釣狐」の手法を染め(写真)観客に配っている。

「釣狐」佐藤卯三郎、井上松次郎、一調「松虫」田鍋惣一郎、宝生英雄(調)、狂言「引括」井上礼之助、佐藤秀雄、井上祐一、佐藤友彦、大野弘之、井上義次、歌村鴻助、今枝良治、井上良二、井上豊弘、鷺見政行、半能一石橋、連獅子「辰巳孝、内藤泰二、高安滋郎、囃子方藤田六郎兵衛、田鍋惣一郎、河村健二、鬼頭喜太郎、地頭宝生英雄、後見鬼頭喜男、吉田俊彦。



第11回和泉保之、橋弁慶・弦師(高辻幸一氏撮影)



金剛定期納会「放下僧」まえ、(左より)宇高徳成・金剛龍謹・茂山正邦・福王知登(原田七寛氏撮影)

次郎の演師がまたよろしい。演技の手堅さに加えてハラも十分、白蔵主狐とちようちようハツシのやりとりは見所をうならせた。

第二回は昭和四七年一〇月一日、名古屋市民会館開館記念として舞台を熱田神宮能楽殿から会館中ホール特設舞台での公演。名古屋和泉会は第四回の初代及び二代目井上菊次郎、井上新三郎、歌村彦四郎の追善狂言会に小舞二番を大蔵流の茂山正太郎と善竹弥五郎が舞つたが、今回は大蔵流特有の本狂言「月見座頭」を大蔵流

去年今年(ごぞごとし)の舞台から

「金剛定期能・廿二年度納会」と「名古屋能楽堂正月特別公演」第十二回万作を観る会

竹尾邦太郎

「放下僧」先づ親の敵を討たんと血気に逸る小次郎(ツレ徳成)の、名宣から兄(シテ龍運)と此の事を語り合はんの意気込み、まっぴらりと爽やか。シテ、ツレ問答で、単刀直入仇討ちを切り出すツレに、出家の立場を慮る慎重なシテの態度も好ましい。シテ

の決断を促さんと唐土の故事に孝心の強きを誇る熱いツレ語、更に、敵に近付くには放下(大遣雲)人に身をやつして、と準備周到な方途を説くところ、真情が。晴を固め、厚手に決意を漲らせ回調するシテの、兄弟愛の真剣味も亦清々しい。前場の若者らしいシテ

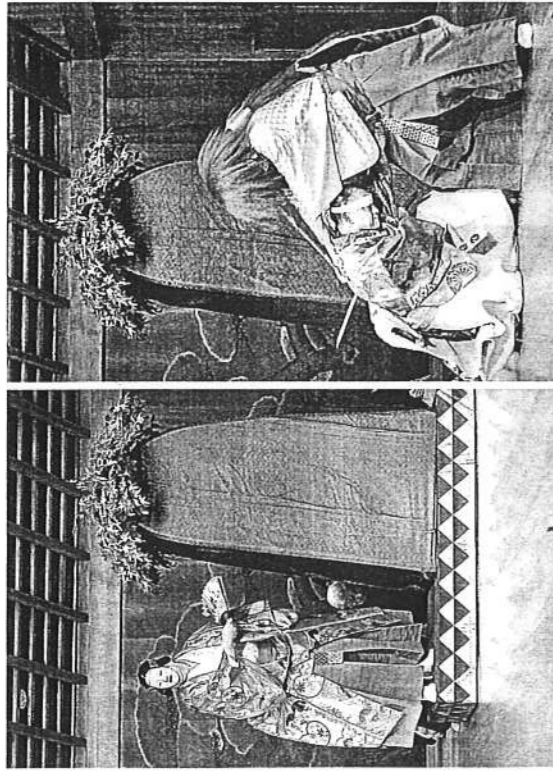
とツレの活きくした詞の力強さが光る。

後場、夢見が悪いと敵の利根(アと正邦)を伴う酒中、事に拘わりたくないワキは名を明かすなとアとに口止め、折柄の放下も無用と。しかしアとは小賢しさを発揮し、何かとしゃくり出る辺り味をみせる。一方、放下の体のシテとツレ、願みて己れの死世を憂へ、軽蔑しい時の流れと重ね、儚い己れの身が他者を敵と思ふは如何か、の一抹の悔いも、これもアとに名を問われ、ば一転、浮雲流水などに茶化した名乗りに敵の相手の氣を引く深慮が。すればワキは面を肩で隠し、面々に不審申したき、とシテとツレそれぐの出立ちについて真し、赤言を問ひ(写真)、更にシテとツレ相手に展開する種問答がハキハキと快調。「切つて三断となす」と刀に手を掛け逃るツレに気色はむワキ、そこを紛らし執り成すシテ、三者の呼吸よく合ひ響きつける。ワキの意に適い回調を許されたシテとツレ、物着にシテは杖杖を置き、曲舞から端鼓を緩で軽やかに舞う。敵討ちを悟られぬよう真聲に舞う面構えも美しい。舞上げる、へ面白の花の都や、と昂ぶる氣持に小歌の高調、へ地主の桜は、と面使と薄く照らし、へ茶臼は朧木に、と膝つき縁を朧木として挽くなど、具象の型を極める、これ迄とはかりに敵の形代は笠に迫り、ツレと双方から討つと

ころ(写真)きびきびと痛快。トメはツレが二ノ松で太刀振りかざし闇を上げ、シテは常座で心晴れぐとユウケン。終始気魄の籠つた、若々しい赤実の舞台だつた。囃子方は市和・一郎、有辞、地頭に瀟灑、後員は恭愍。(六〇分)「証書」津の國の暈壳(アト茂)、都で和泉の酔壳(シテ十五郎)の聲高な売り声に動いたか怒鳴りつければ、シテは咄嗟に目代と見誤り平伏。その態度を見て図に乗るアト、シテに善哉問われ、ば自ずと偉大、「津の國の暈壳ちややい」と辰丈高。「何ちやや、暈壳ちや」と緊張も解け拍子抜けのシテ、目を剥き「何ちや」の口吻、ニエアンスは師父、干作に酷似。「牛に喰はられ、証された」が如何にも為て運られた、の思いも相手が一礼せずば「許は売せない、ときは總やかてはない。相手に敬意を払わせるには氏系性の確かを認識させること、アトが辛い暈に掛けた縁語で系図を述べれば、シテも酸い酢に掛けた縁語の系図で応酬。あいこになれば、遺すからの風物を取り上げ「カライ」「スイ」の秀句合戦、興に乗れば互いを「お主、出来るな」の氣持ちにさせ、秀句が巧く敷れば、それを四度五度させるうちに可笑味が増幅され、二人が阿々大笑するところなど息の合った父子共演の果、小品ながら豊饒な喜劇の世界を満喫。(16分)

「紅葉狩」生き長らへるも憂き世、物の哀れ一人の秋、寂しさも却つて懐かしく、上臈(シテ永護)が同輩の女達(ツレ幸洋・龍成・夏樹)と侍女(アと洋海)を伴う気散じの紅葉狩は、華打ち廻し酒宴の場に。シテ、ツレ連吟はよく揃い、華やかな登場。折しも狩りて通りか、る平維茂(ワキ勝久)と従者二行、華の内がさる御方の事と知つてワキは馬上を降り降りて通過のところ、シテ、ワキ掛合から地(三千春・通成・泰能ら)のへ袂に纏り留むれば、で妖艶なシテがワキを引きとめれば、ワキも振り切る訳にはゆかないと思わせる濃密さ。縦殺されへこの世の人とも思はれず、とワキ、へ胸うち騒ぐばかり、のユウ

(四角つづき)

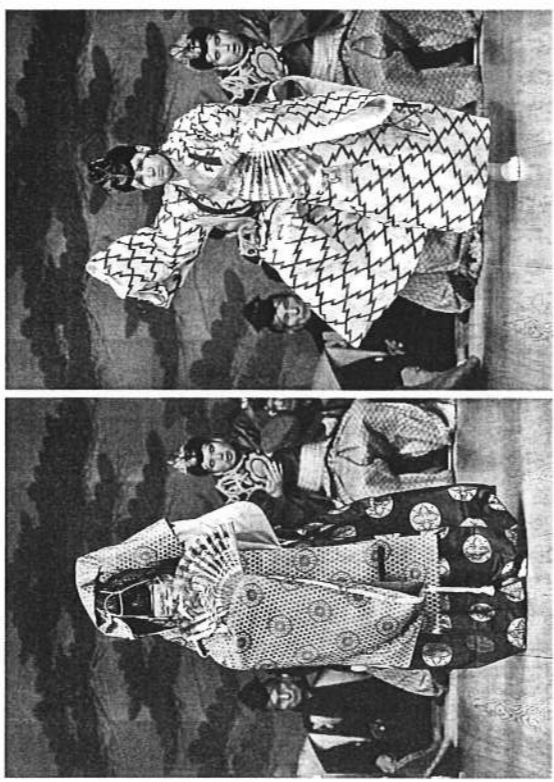


②金剛定期能「紅葉狩」まえ 金剛永謙
左より高安勝久、金剛永謙

④金剛定期能「紅葉狩」あと 原田七寛氏撮影

③面よりつづき
ケンには正に激しくだくめく胸のう
ち、面白。クセにワキへ動に立
つシテ、受けまいと思つワキも、
シテと向き合ひ最詰められれば此
に見込まれた蛙、心も愛わろ。中
之舞になり、途中、刃り鏡を素
振りから寝入つたワキを見、確か
め様とツマミ扇にワキへ近付く
としてやつたりの喜悅は急之舞
に直つて鮮烈。中入前、八月待つ
程の仮寝に、と月ノ扇(写真)、
一舞台を下りるとへ夢はし覚まし
給ふなよ、と眠りをあおる心が。
招き扇に再びワキへ近付く師さ、
凄味は偉丈夫のシテの迫力。返シ
句一杯に戻り物へ中入すると、
ツレ三人も舞へ退き、代つて末社
ノ神(アと正義)がワキの危機に
至つた仔細を立シキベリ、ワキに
神勅を伝えて神剣を授け、「疾く
く目を覚め候へ」と拍子ツツ
強く踏んで退くと後場。
作物を出たシテは赤頭・面敷
若、赤ノ打杖を振り上げてワキを
高みから睨め付ける姿はまさにへ
その丈二丈の鬼神の、脅威。剣を
抜きシテに挑むワキがへ飛び違ひ
むすど細み、とシテの襟に飛び込
めば、シテはへ頭を掴んで、とワ
キの襟をつかんで引き上げんとす

る(写真)など、凄まじい闘争を
如突に見せ素晴らしい。キリはへ
剣に恐れ、二ノ松へ逃れるシテ、
後勾欄へ足を掛け両手を上げてへ
麻へ登る、型に軍に逃げんとする
ところ、追いついたワキに後ろか
ら斬られて佛倒しするの鮮やか
か。トメは常座でワキが剣を掛け
留拍子を踏んだ。金剛・高安両宗
家の気合充分、力の籠つた好舞台
だった。型の切しめ、力強
さ、舞会剛の面目躍如。(1時間
20分・12月19日・金剛定期能納会
・京金剛能楽堂)
「翁」正月らしい往連繩を張
りめぐらした舞台、森森として文
字通り神の降臨を待つ庭の趣。能
始めの「翁」はいつも清々しく張
る激気である。翁(シテ邦弘)の
舞に先立ち露払いの千歳(ツレ大
志)の舞は風流として起ころ清
風、トメに大小前へ行き、問いた
扇を左手に替へ、小廻りに直ツて
扇を前へ、右袖きりりと巻き上
げ、右足高々と上げ(写真)踏ま
んとするところ若さの発露、胸が
すく。翁の舞はゆつたりした袖捌
きも優美に、踏む天地人の足拍子
の庄重。左袖振き、扇を面に当て
る所謂翁の型もうまく極る(写
真)。
三番叟(邪雄)は先づ揉之段、
当初、唾子に自然体であるように
はみえず、合わせようとするところ
もみえだが、鳥飛とを元気に高く
飛び、次第に唾子にうまくのつ
てくる。鈴之段になると飛もみ
え足腰に力強さが失せるきらい。
下半身の強化要だが、出番に
なるまでの整石の気構えも。(1
時間11分)
「目近」古名は目近込骨(め
ぢかこめぼね)。正月、果報者
(シテ靖造)、来客に齋例で目近
込骨を進上するにつき太郎冠者
(アト健太郎)と次郎冠者(小ア
ト隆行)を都へ使いに連る。しか
し二人とも目近込骨がどんな物
か、互いに相手頼みで分らず、今
更聞きに返る訳にもゆかず、大声
で目近込骨求めようと呼はわれは
案の定すつば(小アト小三郎)に
誑され、古扇を掴まされる。因に
目近は要(かなめ)を末端近くに
打つた扇、込骨は骨より骨が込ん
だ扇。すつばの、相手に有無を言
わせぬ強引な解説に籠絡され、納
得させられる両冠者だが、その理
由つけが如何にも破天荒。込骨の
仔細は、唐と日本の潮境の筑羅
(ちくら)の沖という所は一粒万
倍の米が獲れる目出度い所で、こ



この米を
扇の骨に
で込めたの
と、など
と違方も
ない。口

から出任せの厚顔、小三郎活き
くと精彩。両冠者が戻り、叱責
されるのを見越して主の機嫌が直
る様々めでもの罪滅しに唾子物を
教えるのは「米ばかり」と同工。
キリは無事と成つて(写真)シ
ヤキリ留入。偽物を本物に見立て
る過程に無理があり、減多に上演
されぬ稀曲を探り上げた労を多
とする。(37分)
「屋島、弓流・那須語」西国
行脚の僧(ワキ勝久ワキツレ元・
正樹)、讃岐・屋島の浦で漁翁
(シテ修一)に借を借り、漁翁と
懐かし

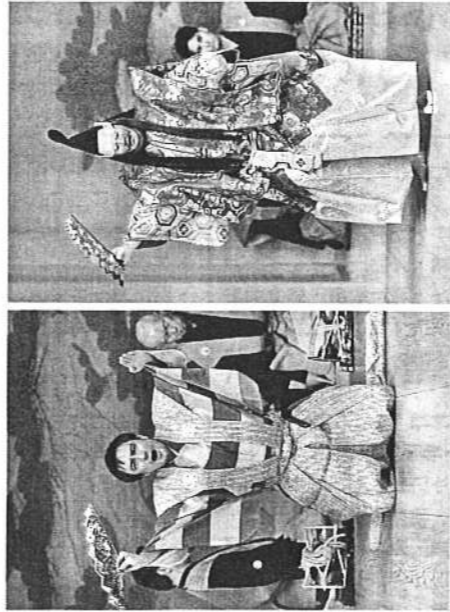


名古屋能楽堂正月特別公演
「目近」左より奥津健太郎、井上靖浩、野口隆行
(杉浦賢次氏撮影)



「写真」名古屋能楽堂正月特別公演
①④「翁」千歳 武田大志
①⑤「翁」武田邦弘 ①⑥「翁」三番叟
(左より)今枝郁雄、鹿島俊裕(面箱)
(写真はいずれも杉浦賢次氏撮影)

漁夫(ツレ旭)から源平合戦の故
事を聞く前場。
漁から戻るシテとツレ、掛合と
連合に、語境に溶け込む浦の景を
愛でる平安は、ワキの一行に一度
は乱されるが、都人と知り借をす
ることになれば、シテ・ツレ問答
は淡々として滋味。シテは面朝着
尉・襟淺黄・茶系無地寛斗目着付
・茶水衣、白茶染分際裏、ツレは
直面・襟淺黄・紺無地寛斗目着付
・浅黄縷水衣、白紺染分際裏の
姿。初回(邦久・一政・義安ら)
へ(屋島)立てる、で床几を立
つシテは正中へ。膝をつき扇で火
を煽ぐ型、火に当たるようワキへ
左手指さすは粗末な苦屋の巻の夜
の寒さ。へ都と聞けば、と都か
ら来たワキ
へアシラ
と、懐かし



名古屋能楽堂正月特別公演
⑤「屋島」那須語 佐藤誠
(杉浦賢次氏撮影)

さへはやがて涙に、
がつくり腰を落とし
シラル。シテ修一、
心情凄やかにみせ
上々。湿つばい勢固
気は、源平の合戦譚
をなつワキに「易き
間のこと」と請け合
うと一変、シテ語
に。大将軍義経の風
姿を一鞍笠に突つ立
ち上がり」と背筋を
すつと伸ばすとこ
ろ、刃りを扱う気韻
を漂わす。ツレとの
掛合から地へは三保
ノ谷と景情との一瞬
討ちを。へ著たる兎
の、と居立って開いた扇を左手に
ツマミ前へ出し、へ引きちぎつ
て、と体を左へ捻れば、扇を引き
ちぎる趣。語の詳しさに疑念を抱
くワキに素姓は明かさず、へ名の
らすとも、で居立ちへ名のると
も、と立つと常座へ。へ夢はし覚
まし給ふなよ、とワキへ振り向
き、扇で指して念を押すと返シ句
に送り荷で退いてゆくところ、合
戦譚の喧嘩の後の一入の寂しめ。
次いで出立の温屋を見回る捕人(ア
と融)、ワキと出合、問答に邪領
早市のこと「まなうで見候へ」
とをわれ「那須語」を。「早市そ
の頃二十ばかり」の刃り繰り返
もあつたが、まぎくと快くに勤
めて無難。

後シテは源義経(修一)、極り
らしいが袷法被は紫地、赤地半切
の盛装に気品。小書の手流は、へ
忘れぬものを、と修羅遣は戦の有
様をみせるクリ・サシ・クセに義
経の靡臥心を強調する。正中、小
鼓方の床几に掛かるのも小書ゆ
え、へ鐘を侵して、で床几を立つ
とイロエに一巡、ワキ座前で弓に
振した扇を落すが小鼓の音とは合
わない。危いところだがへされど
も、と面使と扇へ合膝して進み左
手で拾うと再び床几に。地のサ
シ、一寸乱れたようだがクセへ、
弓を撃かれて小兵と知られ侮られ
るへ無念の次第、と面クモラセ
ル。弓を惜しむは名のため、へ借
しまぬは一命、とすつくと立つと
戦闘の狂騒はカケリ。一ノ松へ流
れきりく小廻り二・三度、へ海
山一回に、で戻ると、へ船よりは
胸の声、と雲ノ扇は海上に暮まる
とよめきの心を(写真)。キリは
へ呼き沈むと、合膝、一ノ松へ、
へ浦風なりけり、と地のうちに走
り込み、ワキが常座で留めた。囁
き、扇で指して念を押すと返シ句
に送り荷で退いてゆくところ、合
戦譚の喧嘩の後の一入の寂しめ。
次いで出立の温屋を見回る捕人(ア
と融)、ワキと出合、問答に邪領
早市のこと「まなうで見候へ」
とをわれ「那須語」を。「早市そ
の頃二十ばかり」の刃り繰り返
もあつたが、まぎくと快くに勤
めて無難。
「三本柱」いつの世も善請は
めたいもの、果報者ノ主(シテ
万作)は山で伐採した三本の柱を
和意・晴夫 三人で二本づつ下ろ
して来るように言い付ける。出掛
て喜ばしいなどと和やかに満足気
分もめたいが、それは狂言役者
としてある現在の境遇をも言い得
て妙。山で所定の柱は見付かる
が、ハタと困惑の三人、試行錯誤
の末に知恵者の太郎冠者が謎を解
き、持ち出すだけでは能が無いと
出。主もこれ喜び、賑やかな中
へ加わりシヤキリ留入に。因に柱
は面取りがしてあり断面は六角形
の亀甲、これも目出度かつた。
(21分)
「鈍木郎」三年以上も知らん
ぶりんで養を留守にして居た鈍木
郎(シテ万作)、都に戻つて先づ
下京の妻(アト博治)の所へ行け
ば、権使いを男に持つたと締め出
され、それならばと上京の女(小

アト敬樹)の所に寄れば、長刀使
いを男に持つた追つ払われるてい
たらく。「真女而夫にまみえず」
などと飛んだ負け惜しみをぬけ
く口にして、いけしゃあしゃあ
と余りにも調子の好すぎるシテ。
無常を感じて世捨人は即ち出家に
成ろうというのも踏舞で、本音は
腹癒せの自棄のやん八で坊主にな
り、女達を見返してやるぞではな
く、同情を買って貰おうの魂胆で
は。
一方、妻と女、それへ夜前の
男がシテと分つて互いに消音を案
じ、尋ねに出て行き合ひ、意気投
合シテを探すことに。そこへ鉦を
叩き同情を誘うような哀調で念佛
を唱えるシテ、すわとはかりに妻
と女、二人が戻るよう懇願すれば
する程冷たく翻弄、「そなたはど
うやら似た様な人ぢや」とど惚
けるのも憎い。シテの目録良まん
まと因に当たり、果ては閑味につ
け込み妻と女を訪ねる日教までも
は言語道断では。万作シテの心情
細やかに活写。なお当初シテは万
之介、旧臘身罷り兄、万作の代
動。野性味が感じられ、ヌーヴォ
ーとした器量の大きな個性を持つ
てをられたと思うが、得難い人材
を失い残念、唯々御長福をお祈り
するばかりである。(32分)
「止動方角」茶比へ行くの
に茶も無く、皆が馬で行くといつ
て来るように言い付ける。出掛
て喜ばしいなどと和やかに満足気
分もめたいが、それは狂言役者
としてある現在の境遇をも言い得
て妙。山で所定の柱は見付かる
が、ハタと困惑の三人、試行錯誤
の末に知恵者の太郎冠者が謎を解
き、持ち出すだけでは能が無いと
出。主もこれ喜び、賑やかな中
へ加わりシヤキリ留入に。因に柱
は面取りがしてあり断面は六角形
の亀甲、これも目出度かつた。
(21分)
「鈍木郎」三年以上も知らん
ぶりんで養を留守にして居た鈍木
郎(シテ万作)、都に戻つて先づ
下京の妻(アト博治)の所へ行け
ば、権使いを男に持つたと締め出
され、それならばと上京の女(小

NHK放送予定(平成23年3月~4月)

NHK-FMラジオ能楽鑑賞(毎週日曜日7時15分~8時)
3月20日 素謡「忠度」(金剛流) 今井清隆ほか
3月27日 素謡「田村」(宝生流)(再)小林与志郎ほか
※能楽鑑賞は4月3日(日)より放送時間を変更
午前7時20分~8時15分(55分)となります。
4月3日 素謡「西行櫻」(観世流) 観世喜之ほか
4月10日 素謡「熊野」(宝生流) 今井泰男ほか
4月17日 素謡「雨月」(観世流) 関根祥六ほか
4月24日 素謡「善知鳥」(金春流) 本田光洋ほか

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係)
(TEL 052-231-0088)

Table with columns for dates and event names: [3月] 第55期・第2回 名古屋宝生会定式能(有料); [4月] 梅田邦久師傘寿祝賀記念会(無料); 青陽会定式能(有料); 名古屋観世会定例公演能(有料); 平成23年度梅越会名古屋公演(有料); 幸友会(有料); 離子会(無料).

「桜祭能」公演中止

本紙前号②面掲載の奈良・斑鳩町で開催予定の「桜祭能」(4月3日)は、今回の東北地方太平洋沖地震の関係で公演中止と決定。班鳩町観光協会から発表された。前売チケット代金は購入場所または観光協会にて返金される。

篠山春日能

4月9日「熊野」土蜘蛛
重要文化財・春日神社能舞台建立百五十年記念の「篠山春日能」(第三十八回)は、四月九日(土)春日神社能舞台で催される。能組は、能「熊野」(シテ観世銀之丞、ツレ長山桂三、ワキ福王茂十郎)狂言「伯母ケ酒」(茂山茂、佐々木千吉)能「土蜘蛛」(シテ大槻文蔵、ワキ福王茂十郎)午後一時開演。問い合わせは篠山市教育委員会社会教育・文化財課(TEL079-5552-5792)。

篠山春日能
重要文化財・春日神社能舞台建立百五十年記念の「篠山春日能」(第三十八回)は、四月九日(土)春日神社能舞台で催される。能組は、能「熊野」(シテ観世銀之丞、ツレ長山桂三、ワキ福王茂十郎)狂言「伯母ケ酒」(茂山茂、佐々木千吉)能「土蜘蛛」(シテ大槻文蔵、ワキ福王茂十郎)午後一時開演。問い合わせは篠山市教育委員会社会教育・文化財課(TEL079-5552-5792)。

徳川美術館の能楽講座

4月から4回開催
徳川美術館主催の平成23年度能楽講座は「隅田川」をテーマに、馬場あき子氏のお話、藤田六郎兵衛氏の同会進行とシテ方、ワキ方の表演で催される。4月23日(土)シテ方が語る母の情愛シテ方宝生流・辰巳満次郎氏。5月7日(土)「母物狂いの中世」歌人馬場あき子氏。6月4日(土)「隅田川」シテ方観世流寺沢幸祐氏、寺沢拓海氏。7月2日(土)「ワキ方・渡し守からみた「隅田川」」ワキ方宝生流宝生欣哉氏。受講料 一般10000円、申込み 徳川美術館「能楽講座」係、TEL052-9335-6262

「笹之段」「山姥」など七番。チケットは梅若基徳後援会事務所、大阪能楽会館(TEL06-6373-1726)、出演楽師。

廣田鑑賞会能

4月3日能「海人」
金剛流廣田鑑賞会主催の「第16回廣田鑑賞会能」は、四月三日(日)、金剛能楽堂で開催される。午後一時半始曲。能組は、狂言「祭化」(茂山千三郎、茂山實司、茂山あきら)。ご案内は文筆家・井上由理子。能「海人」・懐中之舞、シテ廣田幸彦、子方・西村鑾、ワキ・高安勝久、ワキツレ・小林努、岡本、笛・相原一彦、小鼓・曾和尚靖、大鼓・谷口正壽、太鼓・井上敬介、後見・金剛永護、松野恭寛、廣田泰能、地謡・今井清隆、種田道一、金剛龍護、掛川昭二、重本昌也、宇高竜成、和田次夫。料金/一般八千円(正面・脇正面)、五千円(中正座)、学生二千五百円。申込・廣田鑑賞会(TEL075-722-9123)、ロソン

観世流梅田邦久師傘寿祝賀記念会

名古屋、京都で開催
観世流梅田邦久師は邦謡会主宰として活躍、能楽協会名古屋支部・前支部長として斯界に尽力しているが、このたび傘寿を迎え、きなる4月3日(日)名古屋能楽堂で傘寿祝賀の記念大会を開催。能「葵」をはじめ、素謡、舞獅子、仕舞などを上演する。(番組①面)なお名古屋での祝賀大会につき、4月17日(日)京都観世会館、今秋10月2日(日)名古屋能楽堂で祝賀記念大会、さらに10月22日(日)名古屋能楽堂で「傘寿記念能」が開催される。

友楽の友社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号)464-0858
電話(052)731-7984
FAX(052)733-2837
振替口座00800-6-36393
購読料 1年11000円
郵送の場合 1年11800円

能楽の友

謹んで震災のお見舞いを申し上げます

梅田邦久師傘寿祝賀記念会(一)
四月三日(日)午前九時三十分始
名古屋能楽堂

素謡 神歌 三口謙介 梅田嘉宏
風山 山本道子 飯田美緒
草子洗小町 味岡マキ子 横江美貴子
仕舞 蝉丸 平松美代子
芭蕉 貴女 成田延子
二人静 朝日和子 宇佐美幹子
熊野 成田延子 森岡節子
西行桜 朝日和子 宇佐美幹子
高半之段 大岩昭子
西行桜 近藤とき子 遠山美津子
阿山郡田駒之段 古賀則弘
大原御幸 飯島美津代 古賀則弘
仕舞 柏崎 導行 森明美

能 葵上 横江嘉宏 河村総一郎 上田慎也
後見 片山伸吉 本橋清須郎 本橋忠樹 青分林道治
番外仕舞 遊行柳 片山幽雪
附祝言 主催 邦久 梅田邦久 嘉安
青陽会定式能(第五十五期)
四月九日(土)十二時半開演
名古屋能楽堂
仕舞 羽衣 近藤幸江 地謡 星野尚香
善知鳥 今沢美和 地謡 村井三子
老松 高安勝久 河村真之介 加藤洋輝
後見 前野郁子 地謡 角田尚香
田村 加賀敏彦
鞍馬天狗 須部甫 地謡 久田勘吉
狂言 文蔵 今枝郁雄 佐藤謙 後見 佐藤友彦
楊貴妃 前野郁子 河村総一郎 鹿取希世
附祝言 主催 青陽会

七 「名古屋和泉会」 ③

第二三回は昭和四八年一〇月一日。素囃子「羯鼓」藤田六郎兵衛・福井啓次郎・寛弘一、狂言四番「牛盗人」和泉保之(兵衛三郎)井上松次郎(牛奉行)佐藤友彦・大野弘之・今枝郁雄(子)、「千鳥」井上礼之助・井上祐一、佐藤友彦、「川上」三宅藤九郎・和泉保之、「三人片輪・三曲」佐藤秀雄(廻)大野弘之・野村又三郎(巫頭)佐藤卯三郎(雙)、藤田六郎(廻)佐藤卯三郎(雙)、野村又三郎(廻)佐藤卯三郎(雙)は酒宴の場で三人が舞に舞う常のレバ

トリ)がそれぐ替になる演出。七世野村万藏著「狂言 任承の技と心」一九五五年七月五日、平凡社刊に次の記述がある。

常の演出では巫頭が「風車」、いざりが「魂」、唄が「景漣」の「屋に上がれば」を舞いますが、「三曲」のときには巫頭が「景漣」の「眼こそ睨けれど」、いざりが「鉢木」の「切りくべて今そ御理守」、唄はなるべく強い舞を

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る ②

竹尾 邦太郎

戦」を舞います。

第一四回は昭和四九年一二月二三日、狂言三番「観猿」井上礼之助(大宅)井上松次郎(猿鬼)井上祐一(太郎冠者)今枝郁雄(猿)、「無布柄経」野村万藏、野村万之介、素囃子「イロエ掛、中之舞」藤田六郎兵衛・福井啓次郎・吉田定男、狂言三番「木六駄」佐藤卯三郎・井上裕一(主)佐藤秀雄(伯父)野村又三郎(采屋)〓(写真)〓「鈍太郎」和泉保之、大野弘之(夢)佐藤友彦(上京ノ女)



第14回「木六駄」(左より)佐藤卯三郎・野村又三郎



第15回「井杭」佐藤卯三郎 (狂言共同社提供)

年一二月三日、狂言三番「船渡舞」井上祐一(廻)井上松次郎(男)佐藤秀雄、「八句連歌」三宅藤九郎・和泉保之、「井杭」今枝郁雄(井杭)井上松次郎(何某)佐藤卯三郎(算置)〓(写真)〓「安宅」瀧流シ藤田六郎兵衛・後藤孝一・吉田定男、狂言三番「大般若」大野弘之(徳)佐藤友彦(神子)井上礼之

助、「止動方角」佐藤秀雄・野村又三郎(主)井上礼之助・大野弘之(馬)

第一六回は昭和五年一二月二一日、佐藤卯三郎追善。番組は順に狂言三番「観猿」井上松次郎(大宅)井上礼之助(猿鬼)井上祐一(太郎冠者)井上功元(猿)、「ちやちや馬馴らし」和

泉保之(隣郷ノ巻)三宅右近(娘)三宅藤九郎(親)・孝雄子「羯鼓」藤田六郎兵衛・後藤孝一・吉田定男、狂言三番「名取川・カケリ入」野村万藏、野村又三郎、「千鳥」三宅藤九郎・井上松次郎・三宅右近(酒屋)、「一首引」佐藤友彦(親鬼)大野弘之(為朝)佐藤秀雄(猿鬼)井上祐一・鷺見政行・今枝良治、歌村鴻助・石田喜樹。

「ちやちや馬馴らし」は三宅藤九郎が昭和二七年七月に発表した新作狂言で当地での初演且つ名古屋和泉会が採り上げた最初の新作。台本は昭和五五年六月五日、能楽書林刊の「藤九郎新作狂言集」に収録されている。

「名取川」の小書「カケリ入」は小舞謡にも採られている「名取川」のへ浮名を流す腹立ちや、と川尽しになるへ川は機々多けれど、の間にカケリが挿入される演出。

佐藤卯三郎はこの年一月九日、脳内出血により死去、享年八



栄謡曲クラブ月例会30周年記念の会 ④素謡「恋重荷」(柴田舞台にて)

栄謡曲クラブ 30周年記念会

3月6日 柴田舞台で開催

謡曲愛好者のついでとして、素謡会を毎月催している「栄謡曲クラブ」(三口謙介主宰)は、名古屋・中区栄五の栄能楽堂での謡

会で始まり、こととして月例会発足三十周年を迎えたので、これを記念して、さる三月六日、柴田舞台で月例会発足三十周年記念謡曲まつりを開催、会員はじめゆかりの愛好者が集い、盛会に催した。

曲目は素謡「養老」「山姥」「江口」「藤戸」「恋重荷」舞囃子「弓八幡」、仕舞「教盛」「松風」「笹之段」「邯鄲」「車僧」さらに祝言「高砂」などを上演、自祝した。

同クラブは、となたでも自由に

参加はじめての人でも気兼ねなく謡える。謡の仲間を求めている人たちを歓迎、これまでの参加は延べ四千人を越えているとしている。

名古屋観世会定例公演能

四月十日(日)十二時半始
名古屋能楽堂

能 忠 度 高安 勝久 河村真之介 藤田六郎兵衛
後見 梅若 玄梓 後藤孝一 郎
地謡 杉江 元 正樹

能 忠 度 高安 勝久 河村真之介 藤田六郎兵衛
後見 梅若 玄梓 後藤孝一 郎
地謡 杉江 元 正樹

狂言 昆布売 大宅 井上 清浩 島若 充 佐藤 誠
後見 今枝 郁雄

仕舞 卷 相 前野 郁子 八 神 孝 充
阿 采 女 近 藤 幸 江 地 謡 津 沢 一 政 一
漕 久 田 三 津 子 松 山 幸 親
能 葉 上 飯 富 雅 介 寛 弘 一 加 藤 洋 輝
後見 梅若 玄梓 後藤孝一 郎
地謡 杉江 元 正樹

平成23年度 梅猶会名古屋能楽公演

四月十七日(日)十二時開演
名古屋能楽堂

能 実 盛 高安 勝久 河村真之介 加藤 洋輝
後見 梅若 玄梓 後藤孝一 郎
地謡 杉江 元 正樹

能 実 盛 高安 勝久 河村真之介 加藤 洋輝
後見 梅若 玄梓 後藤孝一 郎
地謡 杉江 元 正樹

附祝言 (終演午後四時頃)

主権 名古屋観世会
事務所 名古屋昭和区台町2-16-5
TEL: FAX 052-284-1463 2
TEL: FAX 052-2331-0088 (救済制限アリ)

附祝言 (終演午後四時頃)

主権 名古屋観世会
事務所 名古屋昭和区台町2-16-5
TEL: FAX 052-284-1463 2
TEL: FAX 052-2331-0088 (救済制限アリ)

附祝言 (終演午後四時頃)

主権 名古屋観世会
事務所 名古屋昭和区台町2-16-5
TEL: FAX 052-284-1463 2
TEL: FAX 052-2331-0088 (救済制限アリ)

仕舞 梅 難 波 梅若 猶義
熊 自然居士 井戸 良祐 地謡 鷺野 三千代
坂 岡田 見一 梅若 善久

狂言 二千石 主人 佐藤 友彦 大徳 繁著 大野 弘之
後見 今枝 郁雄

能 斑 女 小松 勝憲 後藤孝一 郎 大野 誠
後見 梅若 玄梓 後藤孝一 郎
地謡 杉江 元 正樹

附祝言 (終演午後四時十分頃)

主権 梅 猶 会
梅猶会定期能連絡所
桑名市大字西別所1-0-6 1-5
申込み 出演楽師 名古屋能楽堂 小松 勝憲 方
電話 0594-23-4582

附祝言 (終演午後四時十分頃)

主権 梅 猶 会
梅猶会定期能連絡所
桑名市大字西別所1-0-6 1-5
申込み 出演楽師 名古屋能楽堂 小松 勝憲 方
電話 0594-23-4582

幸友会囃子会

四月三十日(土)午前10時始
名古屋能楽堂

吉野 天人 梅田 兼宏 寛 弘 一 大野 誠
玄 象 武田 大志 吉口 典孝 加藤 洋輝
東方 朔 八田 三津子 福井 啓次郎 竹市 孝輝
井 筒 加藤 卯三郎 藤田 六郎兵衛
草子 洗小町 近藤 幸江 河村 真之介 鹿取 希世
小袖 曾我 吉沢 大志 岡田 明子 大野 誠
海 士 中村 瑞穂 大野 誠

連調 葛 城 星野 弘子 原 郁子
狸 々々 梅若 修一 中 満 河村 純子 藤田 六郎兵衛
菊 慈 童 須賀 繁子 加藤 洋輝
鈴木 千鶴子 竹市 孝輝

連調 蝉 丸 船戸 昭弘 水野 真理子 竹市 孝輝
六 浦 宅 小川 真之介 加藤 洋輝
小山 美佐子 藤田 六郎兵衛

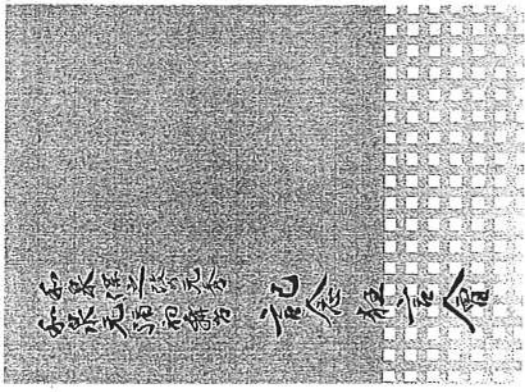
胡 蝶 之 段 祖父 江 修一 遠藤 千代
河村 真之介 加藤 洋輝
丹羽 智子 藤田 六郎兵衛

類 政 衣斐 愛 小坂 純子 竹市 孝輝
上野 智永 大野 誠

一調 咸 陽 宮 観世 喜正 岩崎 透
河村 真之介 加藤 洋輝
鈴木 マチコ 鹿取 希世

類 鶴 亀 観世 喜正 岩崎 透
河村 真之介 加藤 洋輝
鈴木 マチコ 鹿取 希世

類 鶴 亀 観世 喜正 岩崎 透
河村 真之介 加藤 洋輝
鈴木 マチコ 鹿取 希世



②面よりつぎ)
四歳。狂言共同社の機関紙「狂言」第二七六号(昭和五二年二月一日)のコラム「狂言人語」に掲載の追悼文を次に再録する。

佐藤卯三郎師は、去る一月八日、師が狂言を指導する「玉石会」に、本年初の稽古に出かけられ、稽古の指導中に倒れられたものである。すぐさま国立名古屋病院に入院され、手当を受けたが、十日余りの昏睡状態の後、一月十九日正午過ぎ、終に意識を回復されることのないまま、不帰の人となった。八十四歳。生前の師の元気な姿を知る者には、余りにも突然の出来事であった。

師は明治二十四年十一月生れ、この年の六月には、奇しくも狂言共同社が先人達によって設立された年に当っており、師の一生は、

文字通り狂言共同社と共に生れ、歩んだ道であった。
幼少より九世野村又三郎入門以後十世又三郎、及び先代河村健三郎に師事する。

明治三十年 「口真似」初舞台
昭和三年 「三番見」披露
昭和三十年 「釣狐」披露
昭和三十八年 「花子」披露
昭和五十年 重要無形文化財総合保持者に指定、日本能楽会会員。

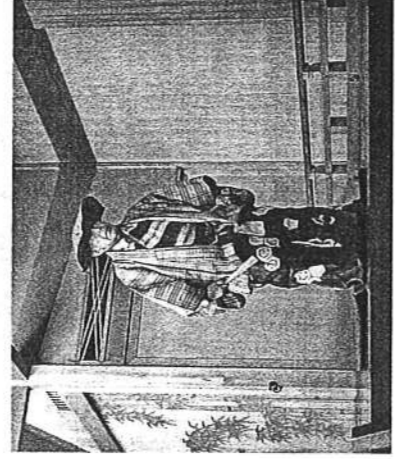
ともかく元気を師であった。八十歳を超えた晩年も、しゃれたスポーツシャツに、愛用の帽子、サングラスといった出立で、能楽堂に通われ、元気な舞台姿はとてもその年には見えなかつたであろう。

こうした師の元気が、昭和四十六年十月、「共同社創立八十周年記念狂言会」における「釣狐」を苦もなく演じて見せたものである。狂言の中でも最も重い習い物であり、体力気力とも最も充実している若い頃に演じてきた困難な大曲を、八十歳という高齢で演じたのは、おそらく師が初めての記録ではなからうか。その後も昭和三十八年「花子」、四十九年「木六駄」と大曲を演じ、いよいよその元気な姿を見せてくれたものだった。

最後の舞台となったのは、昨年十二月二十一日、能楽殿で名古屋市教育委員会青少年芸術劇場における「民布売」、及び同日夕刻よりCBCホールでの「鶴牛」に野村又三郎師の相手役として主を勤めたのが最後となった。謹んで師の冥福を祈るものである。

狂言共同社同人
第一七回は昭和五二年二月二三日、番組は狂言四番「隠狸」井上松次郎、大野弘之、井上礼之助、「磁助」三宅九郎、三宅右近、鳥越正夫、「鐘の意」佐藤友彦、井上

三宅九郎、三宅右近、鳥越正夫、「鐘の意」佐藤友彦、井上



第6回「武悪・替装束」河村丘造

礼之助、「宗論」佐藤秀雄・野村又三郎、井上祐一、素囃子「早舞」藤田六郎兵衛・福井啓次郎、吉田定男、助川龍夫、狂言「髭枝」枝崎雄一、大野弘之、佐藤友彦、歌村博助、今枝良治、石田喜樹、鷺見政行。

第一八回は昭和五三年二月二九日、番組は狂言三番「犬山伏」井上礼之助、大野弘之、井上松次郎、佐藤秀雄(犬)、「隠狸」野村万之丞、野村万作、「井杭」今枝崎雄一、井上松次郎、井上祐一、素囃子「楽」藤田六郎兵衛、後藤孝一郎、寛弘一、鬼頭章太郎、狂言三番「八尾」和泉保之、佐藤友彦、「千切木」野村万作、井上礼之助(当座)佐藤秀雄(太郎冠者)野村又三郎(妻)大野弘之、佐藤友彦、歌村博助、石田喜樹、鷺見政行、今枝良治。

この年、三月三〇日、初回以来欠かさず出演、滋味ある芸を見せてくれた狂言共同社の長老、河村丘造が死去、享年八三歳。昭和四四年、第九回「二人袴」のアト男が本狂言での最後の舞台、その後永らく病床にあり遂に復讐はならなかった。第六回の河村健三郎廿七日忌追善に勤めた「武悪・替装束」の主が印象的(写真)。

第一九回は昭和五四年二月一日八日、「和泉保之改め元秀、和泉元彌初舞台 記念狂言会」と表記のB5判(週刊誌大)表紙とも26頁アート紙のパンフレット(写真)が入場者に配布される。内容は

い。因にその後、昭和57・58・61・62・63平成1・2・3・4年、と同日表紙デザインで、色とその都度の表記だけを交えたパンフレットが出されてきた。なお「名古屋和泉会」(「和泉会」)「狂言和泉会」とも)は名古屋和泉会・狂言共同社を主催に運営されてきたが、此の年(昭和五四年)は和泉元秀の主催、そして昭和五六年の第二回を最後に名古屋和泉会・狂言共同社の主催は無くなり、ここに「名古屋和泉会」は終回した、と言ってよからう。以後は和泉宗家後継者が主催する別組織の「名古屋和泉会別会」へ移行することになる。前後したが第一九回は番組に先立ち十九世和泉元秀の次の挨拶がある。

このたび長男元彌の初舞台を機に、不肖私も俣之を名乗り名である元秀と改名、さる三月、東京において披露をいたしました。

代々尾張徳川家のお抱えでありました和泉流宗家にとつては流儀発祥の地でもあります名古屋において、このたび記念公演を催すことが出来まことを一人嬉しく存する次第でございます。私と二十三歳のころより、故徳川義親先生のお勤めもあつて招かれて以来、名古屋和泉会も発足し、また、地元職分も永年一致協力して伝承に努めてくれており、此後とも名古屋和泉流の伝統を守り育てていかなくてはと存じております。

元彌初舞台を流儀田籍の地で披露いたしますについて、特に大蔵

は番組及び曲目解説・主催者挨拶・研究者による山脇和泉家の系譜・宗家と研究者との対談・宗家の舞台写真(七巻)宗家による子女の「狂言子育て記」の他は知名の士による祝辞の類、賛助広告で満載。

このパンフレットは立派(?)なだけに一部を除けば却つて宣伝員が鼻に付き、資料的な価値は少ない。

また私自身を省みますと、宗家継承披露の六歳より幸に必要なものを全て大至急仕込んでくれましたが、そのお蔭で漸く今日このごろようやく胸を張つて舞台を勤められる心境になつたような気がいたします。

そして、また新たに、自分の芸を後世に託す一子がスタートいたします。一入その責任を痛感しつつ、なおお前の分身を一人でも多く育てて行かなくては、使命感に燃え、将来に向かつて大きく胸をふくらませております。

芸に対しては素直であれという自身の身上を以つて購進したく、元彌ともども今後ともよろしく御後援のほど僥えにお願いいたします。次でござります。

番組は順に舞囃子「岩船」至生・英照、藤田六郎兵衛、後藤孝一郎、吉田定男、助川龍夫、地頭内藤泰二、狂言三番「報復」三宅右近(犬名)三宅藤九郎(猿)佐藤友彦(太郎冠者)和泉元彌(徳)、隠の酒」井上松次郎、井上禮之助、佐藤秀雄、「金剛」和泉元秀、井上祐一、藤田六郎兵衛、福井啓次郎、河村健三郎、地頭野村万之丞、「那須須」大蔵彌太郎、小舞「小山伏」和泉元彌、地頭和泉元秀、三宅藤九郎、三宅右近、狂言「二人袴」野村耕介(徳)野村又三郎(奥)大野弘之(太郎冠者)野村万之丞(親)、半能「高砂、祝言之式」観世清和、西村欽也、飯富雅介、杉江元、藤田昭彦、福井啓次郎、寛弘一、鬼頭章太郎、地頭関根根六、後見角寛次郎。

以下次号

◆晩秋から早春の舞台◆

「名古屋宝生会 定式能」と「名古屋観世会 定例公演能」

竹尾邦太郎

「春日龍神」外国の文物・思想を崇拝する排外思想に対し、それらを排斥する排外主義がテーマ。釈迦の佛誕巡りを志す明恵上人を思いとどまらせ、春日明神の神託に降臨する龍神、の構図。入唐渡天を望む明恵上人(ワキ雅介)、従僧(ワキツレ左)を伴い南都春日明神へ暇をい下向の道行、連吟の意気盛んが如何にも。一声の囃子で常座へ現れた宮守ノ翁(前シテ飛能)は翁鳥囃子・耐髪・面小耐・襟浅黄・小格子厚板着付・白大口・茶練袴衣(肩上ゲ)の姿に袈裟を持ち、清明平安の世を喜び、清々しい御社を讀めるところ、爽やかな口跡がよい。ワキとの問答はききくど、入唐渡天を諷め、釈迦在世ならぬも角今は春日の山こそ靈鷲山へ

心無き、とワキへ詰メルところは、初回(満次郎、壽一ら)へ三笠の森の草木、野辺の鹿まで拝跪する様を納得せんとする気魄も、へ神慮を崇めおはしませ、とつかくと正中へ出ると下居、後見が袈裟を引き、袴衣の肩下スレ、更に入唐渡天の意圖を地との掛合に我国へ敷衍して説くヤシカ。現は春日明神の有難さを述べる居こそ厚閑かりけれ、とワキへアシラフところには翻意を促すかの風情。入唐を断念するワキの意を酌み、釈迦一代の姿(当今のシオラマの世界一)をへ悉く見せ奉る、と居立ツところは確約の気持、へ(暫くここに)待ら給へ、立つて願へ巻指シ、常座でキリく

(幸及会番組つぎ)

番外兼囃子

河村真之介
幸 福井昭弘 藤田六郎兵衛
船戸 昭弘
女 郎 花 河村真之介 竹市 学
一 調 雲 林 院 衣菱 正宜 今岡了子
連 調 唐 船 北川 暎子 岩田 典世
高橋 暎子 飯田 節子
西 行 櫻 高橋 暎子 飯田 節子 義翁
香原 義一 大野 誠
一 調 難 波 若 修 一 松久 孝子
天 養 蟬 老 丸 河村真之介 竹市 学
中 西 深 雪 加 洋
大 野 誠 鹿 取 希 世
連 調 櫻 川 小 吉 川 明子
熊崎 香代子 渡辺 厚子
熊崎 香代子 渡辺 厚子
紅 葉 狩 深見 しげ 河村比奈子 鹿取 香世
羽 衣 伊藤 秀子 藤田六郎兵衛
融 大 河村真之介 竹市 学
小 林 真之介 大野 誠
鶴 花 月 小 河村真之介 竹市 学
河 村 真之介 大野 誠
又 一 藤田六郎兵衛

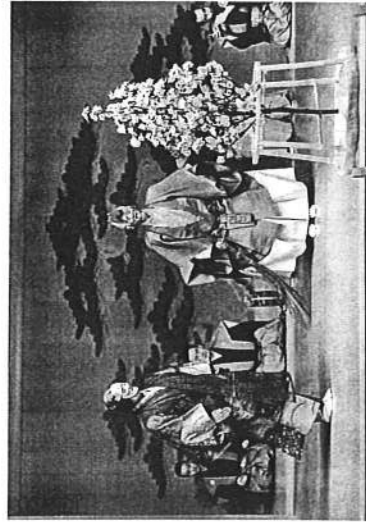
主催 幸友会
後援 弘福井四郎兵衛
船戸昭弘

「御来聴歓迎」

小廻り、へかき消すやうに、来序(誠・昭弘・総一郎・義翁)で中入。代つて末社ノ神(アト都雄)は上人の全てが宮守の諫止に合った経緯を立シヤベリに、神託は釈迦一代の姿を見せる旨を「如何に春日の人々」と触して引くと後場。急迫する早苗の囃子に姿を見て観神(後シテ飛能)、一旦幕へ入つて弾みをつけるや佛の会座へ参会する心にノ松へ。面黒露・赤頭・輪冠龍戴・紅入厚板着付・半切・槍法被(肩脱ぎ)に扇を構え、地との掛合きびく、と舞台に入り佛の会座に下居、へ御法を聴聞する、と首を垂れるのも小気味よい。へ立ち舞ふ波瀾の袖、と立つと囃子は爽快よりは若さの壮意を確めるところ、説得せずは塵かない氣迫もよく現れた。未だ若さの生輝を無きにしもあらずも力

強さを発揮、爽やかな舞台だった。(1時間6分)
「裏書曲」夜前、主(アト清造)にたましく語を立ち聞かれ、語えとせがまれ太郎冠者(シテ融)、今後、度々語わされては敵われない予防線、飲まねば駄目と条件を。主も然る者、飲ませると太郎冠者も強か、今度は女共の膝枕でなければ起つては語えぬと。止むを得ず自分の膝を貸す主に恐縮する太郎冠者も、酔いの勢いでへ春毎に君を祀りて若菜摘む、と語い出すは小舞謡「雪山」。見事に語い切つて御意に叶えば、起きて語えの命に「面白の花の都や、と「故下僧」の小歌を謡うが「声が出ませいで喉が出来ます」と極せよ。へ立ち舞ふ波瀾の袖、と立つと囃子は爽快よりは若さの壮意を確めるところ、説得せずは塵かない氣迫もよく現れた。未だ若さの生輝を無きにしもあらずも力

(4)面くつづく



観世会「嵐山」(左より) 武田大志 武田邦弘

を、と再び膝を貸せば、へ酒宴をなしてかいぐしく、と氣持よく語り「目尽し」、主が膝の上の太郎冠者の身体を上げ下げするうち声の出方が逆転、悪巫山殿も露見する。なお、使用する謡は流派で相異もあるが、「蟬丸」の一節、花の都を立ち出でて憂き音(憂)に鳴(泣)くか賀茂(慶)川や、の飄刺が得難い。シテ融の謡が巧くなった。氣紛れに奉公人の私事に入り込む主と、私事が時聞外労働になり兼ねないのを拒みたい奉公人の心情も斯くあらんか。(27分)

③(固よりつつき)を、と再び膝を貸せば、へ酒宴をなしてかいぐしく、と氣持よく語り「目尽し」、主が膝の上の太郎冠者の身体を上げ下げするうち声の出方が逆転、悪巫山殿も露見する。なお、使用する謡は流派で相異もあるが、「蟬丸」の一節、花の都を立ち出でて憂き音(憂)に鳴(泣)くか賀茂(慶)川や、の飄刺が得難い。シテ融の謡が巧くなった。氣紛れに奉公人の私事に入り込む主と、私事が時聞外労働になり兼ねないのを拒みたい奉公人の心情も斯くあらんか。(27分)



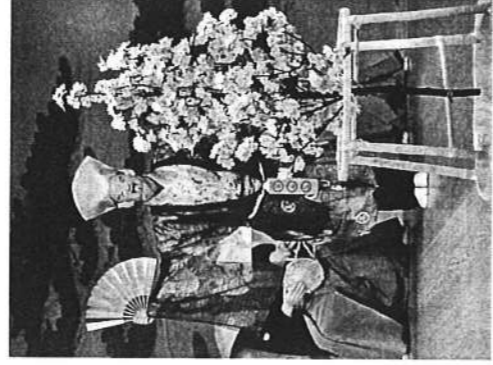
観世会「嵐山」武田邦彦(杉浦賢次氏撮影)

角も動めると、面壇女、前折鳥唱子・襟白二・白帯着着付・緋大口・紫長絹の紫式部ノ霊(後シテ澄子)が一ノ松へ。恥かしくワキを見込むその姿を怪しむワキ、掛合のうちに舞台へ入るしては、へ名づくと知らし召されずや、と。ワキも紫式部と分れば、心置きなく寝ずへ光源氏の跡申はん、の心にシテも懐かしやかに合掌、有難やと布施を申し出ればワキは舞を所望に。小書「舞入」でイロエは報謝の中之舞に替へ、三段を舞上げると今の心情をクリ、サシに。物語の主人公・光源氏の供養を志す科で芋萩の晴れぬ苦しみを得たワキに手渡し教われんと思ひ。ワキは右ウケ下居に展げた巻物をへ南無や光源氏の幽霊成等正尊、と地(正直・耕司ら)に読ませて読



観世会「嵐山」(左より) 八神孝充、吉沢旭

むとき、下居にシテも静かに合掌のところは如何にも神妙。クセは二段の舞クセで、施主紫式部が源氏の趣旨を佛に告白、へ(冥樹の)花散りぬ、でワキは巻物を畳み元の座に。クセ中、へ松風の吹くとしても、と抱土扇に正中からシテ柱へ見るところ、へ(七宝荘蔵の)真木柱のもとに、と扇を持ち替へ袖返すところ、へ南無や西方新陀如来、と正中から笠柱へ雲ノ扇、などそつ無く廻め、トメ拍子踏むまできれいに纏まるが、艶麗さは余り感じられなかった。(1時間11分・1月23日・名古屋宝生会定式能55期第1回)

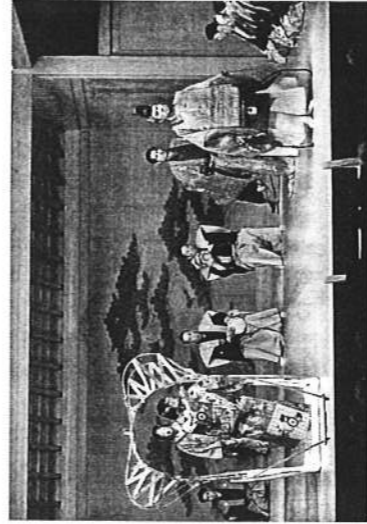


観世会「嵐山」野口隆行(杉浦賢次氏撮影)



観世会「船渡聲」(左より) 松田高義、野村小三郎

木、とシテ。ワキは、風を厭う花の名所になぜ山の名を、と不審。シテはそれこそ神慮、風の名を持つ山の桜の不思議を顕示しようの意しみ、と。淡々とした中に気合の入ったシテ・ワキ問答が惹きつける。頼もしい神の恵みを待み、へ名こそ風の山なりとも、シテ・ツレ連時にシテがワキへ詰めれば「花はよも散らし、と確信する心を受ける地謡(勘助・正邦ら)の力強さ、吉野の神の宿る嵐山の桜の、神木たる面目でもある。更に地謡は、シテとツレの昂ぶる胸のうちに代弁、へ風にも勝手子守として(風にも勝つて木を守るという名で)、へ夫婦の神は我ぞかし、とつい声高に素姓を明かし、へ人に知らせ給ひそ(他言無用)、と。地謡が聞かせる。中人地へ(夕陽残る)西山や、とシテは袂巻を捨て常座から橋懸へ、ツレも嬉々中人米序の離子で退くと、代つて子守勝手の前神に仕える末社ノ神(アと隆行)が末社来序で出、嵐山は神木の桜の謂れ立シヤベリに仔細を語ると、ワキを慰める三段ノ序(写真)を舞いへこれ迄なりやと末社ノ神は元



観世会「熊野・詠次之伝・村雨留・黒次之伝・隆行留」(左より) 梅田嘉宏・観世清和・福王知登・福王茂十郎

の社へ帰りにけり、と退くと、桜立木もひかれ、のどかで陽気な舞團の下の下り端の離子(学・嘉津幸・眞之介・洋輝)の中を勝手・子守(ツレ旭・孝充)の前神が共に桜枝を持ち登場。へ離せし神遊、と桜枝を扇に替えて舞う連舞はよく揃い爽やかに気持ちがいい。二段のオロシで勝手は袖被キ、子守は袖巻クところ、舞上げて、へ羅鏡の杖を翻し舞、と前神とも袖被クところも綺麗だった。勘正で共に舞へ雲ノ扇に魔王権現(後シテ邦弘)の来現を促すと早苗で一ノ松へ。面大飛出・赤頭・輪冠・赤地半切・紺地袴袴衣の威風は辺りを払い、舞台へ入つては豪快なまきくした動きに生氣溢満、へさてまた虚空に御手を差上げては(写真)、の勢い、へ嵐の山に攀ち登り、の合際など力感溢れ見事だった。(1時間21分)



観世会「熊野・詠次之伝・村雨留・黒次之伝・隆行留」(杉浦賢次氏撮影)

「船渡聲」酒に目が無い大騒がわせたが災難、舞(アト小三郎)が目出度い舞入に勇毛へ土産に持参の角樽は早速シテに目を付けられる。角樽が記かりものか持参かと勘酌する気持ちはあ

る。酒宴の時はクセ、へ立ち出でて(曇の雲)で立つとクセ舞はへ南を遙かに眺むれば、と上段、へこれ観音の御利生、と合掌するシテ、ワキの心変わりせぬうちへむところ、母を想う心も切ない。クセが済み、ワキへ動に立つと「さし舞ひ候へ」と勧められるシテ、へ深き情を人や知る(悲しみに沈む気持ちは誰が知ろうぞ)、口惜しさをシラリながら一ノ松へ走る気持ちは鎮め、舞へ戻ると舞うイロエ中中之舞。舞の中、扇開いて大小流シで一ノ松へ

アトに懸願、匂いだけならと嗅がせたが運の尽き。寒くもあり、飲むためには強硬手段も辞さないシテ、船を揺らさたり、流されるに任せたりと脅しにか、れば、アト代りに船の垢取りの柄杓を川の水で濯ぎ、一つ飲むや間髪を入れず、栓をしようとするアトの腕を掴み早投(写真)、そして、厚かましくも「一献酒は飲まぬものぢや」の暴言。シテとアトの感情の壁を激やかに突き破る。姑は隆行。(34分)

「熊野・詠次之伝・村雨留・黒次之伝・隆行留」朝顔(ツレ嘉次)の齋す痛母の文を三ノ松で目を通し心中穏やかならぬ熊野(シテ博和)、平定盛(ワキ茂十郎)に文を見せて慰めたい強い思い。文之段は詠次之伝にワキ、「さらば諸共に読み候べし」と床几を下りて文を受け取り、床几には戻らず下居にへ甘泉殿の春の夜の夢、とワキは独吟を始め、へ(心)弱き、からシテ、ワキ連吟になるところ、しんみりした情緒が格別。哀願も受け入れられず、強いられて花見車の人となるシテ、へ東路とても東山、と車の柱を掴みへ其方の懐かしや、とシラルのも哀感一入(写真)。クモリがちな面は落着かない胸中を外側の景色に紛らす心か、足運び細かく就中ロンギは地(秀伸・邦久ら)のへ愛宕の寺ももう過ぎぬ、のところ、右ウケ一足返るのはへ六道の辻とかや、の恐れ、印象に残

行くなどあり、舞を止めるとへなうく俄かに、と村雨留に。へ降るは涙か、と扇面に落花を受ける心へ散るを惜しまぬ人やある、とシラリ、左へ廻り大小前、下居して受けた落花をこぼす様に扇を伏せると短冊之段。扇を畳み裏に探し、袂から三ツ折の紅い短冊を出して(写真)三度に分けて書き記す墨次之伝。扇を開き短冊を載せ、ワキへ渡すのに隣り寄る所謂隆行も殊様に、ワキがへいかにせん都の春も惜しけれと、と上の句を詠めば、すかさずシテがへ馴れし東の花や散らん、と付けてシヤルところ、流石に含たいワキも惻隱の情、シテの情面を許せば、へこれ観音の御利生、と合掌するシテ、ワキの心変わりせぬうちへむところ、母を想う心も切ない。クセが済み、ワキへ動に立つと「さし舞ひ候へ」と勧められるシテ、へ深き情を人や知る(悲しみに沈む気持ちは誰が知ろうぞ)、口惜しさをシラリながら一ノ松へ走る気持ちは鎮め、舞へ戻ると舞うイロエ中中之舞。舞の中、扇開いて大小流シで一ノ松へ

「能を観る」

梅若基徳 後援会

四月二日(土)午後二時始 大阪能楽会館

Table listing cast members and their roles for the performance. Roles include 仕舞 (Lead Actor), 狂言通圓 (Kōgen Tsūen), 仕舞水 (Lead Actress), 西行桜 (Saiyō Sakuragi), 笹之段 (Sasa no Dan), 頼政 (Tōsei), 石橋 (Ishibashi), 半能 (Han'ei), 狂言通圓 (Kōgen Tsūen), 仕舞水 (Lead Actress), 西行桜 (Saiyō Sakuragi), 笹之段 (Sasa no Dan), 頼政 (Tōsei), 石橋 (Ishibashi), 半能 (Han'ei).

「入場料」指 定 前売六〇〇〇円 (当日七五〇〇円) 自由席 前売五〇〇〇円 (当日六〇〇〇円) 取扱い 後援会事務所 大阪能楽会館 出演能楽師 (終了五時三十分頃)

NHK放送予定(平成23年4月~5月)

- NHK-FMラジオ才能鑑賞(日曜日7時20分~8時15分)
4月24日 素謡「善知鳥」(金春流) 本田光洋ほか
5月1日 素謡「屋島」(観世流) 武田志房ほか
5月8日 素謡「雲林院」(宝生流) 中村孝太郎ほか
5月15日 「百万」(宝生流) 「海士」(観世流)
片山九郎右衛門(片山清司改め)
5月22日 素謡「彈丸」(喜多流) 栗谷能夫
5月29日 狂言「呼声」(大藏流) 大藏吉次郎
狂言「花盗人」(大藏流) 普竹十郎

演能カレンダ一三

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)

- [4月] 平成23年度梅福会名古屋公演
17日(日) 幸友会 離子 (有料)
30日(出) 豊水会春季大会 (無料)
[5月] 3日(火・祝) 幸西村同門研究会 (有料)
7日(出) 豊水会春季大会 (有料)
15日(日) 西村同門研究会 (有料)
22日(日) 狂言やるまい会名古屋公演 (有料)
29日(日) 野村小三郎改メ野村又三郎襲名披露 (有料)

能楽の友

友楽の能行社

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号) 464-0858
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送の場合 1年 1800円

能「求塚」狂言「髭櫓」

豊田市能楽堂五月能

豊田市能楽堂五月能は、五月一日(日)観世流能「求塚」和泉流狂言「髭櫓」が上演される。午後一時半開場、午後二時開演。
能組は次のとおり。
解説 水原紫苑氏(詩人)
狂言「髭櫓」シテ髭男・野村万作、アト妻・石田幸雄、立衆・深田博治、高野和憲ほか、注連の者・野村小三郎。
能「求塚」シテ・梅若紀彰、ツレ・川口晃平、土田英貴、ワキ・福王和幸、ワキツレ・長川正彦、

喜多雅人、アイ・石田幸雄。
笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村大、太鼓・加藤洋輝、後見・松山隆之、小田切康陽、地謡・河村和重、河村博重、河村晴道、味方玄、味方園、田茂井広道、河村和貴、河村和晃。
入場料/全席指定、正面席六〇〇円、脇・中正面席四〇〇円
チケット販売/豊田市能楽堂(電話0565-3358200、インターネット予約Eメール:ミミエチケット、チケットぴあ)

名古屋文化振興事業団(名古屋能楽堂)、能楽協会名古屋支部主催の平成23年度の「名古屋能楽堂定例公演」の日程は次のとおり。
平成23年度は能楽がユネスコ有形文化遺産として宣言されてから10周年に当たる。これにちなんで、今年には、海外の情景を描いた作品や、海外で上演された作品「能・狂

名古屋能楽堂

23年度定例公演日程

能・狂言と「世界」

- 言にいち早く触れた外国人と関わり深い作品などが能・狂言と「世界」のテーマで上演される。
「6月公演」(市民能楽セミナ一)
6月4日(出)空生流能「葉上」梓之出(シテ衣笠正直) 和泉流狂言「伯母ケ酒」(シテ今枝郁雄)
指定席3000円、自由席2000円 午後2時始
「7月公演」
7月3日(日)観世流能「一角仙人」(シテ梅田邦久) 和泉流狂言「取相撲」(シテ野村又三郎)
指定席4000円、自由席3000円
「9月公演」(初秋能)
9月4日(日)第一部(午前10時始)空生流能「井筒」(シテ玉井博志) 和泉流狂言「鎌腹」(シテ佐藤友彦) 第二部(午後2時始)観世流能

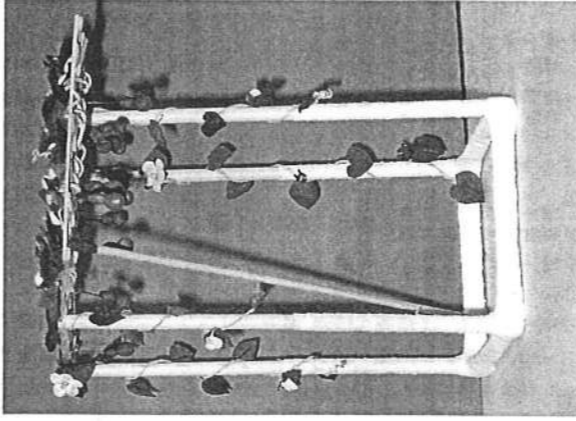
能面と能装束

前熊コレクション展 金沢能楽美術館

金沢能楽美術館では、春季特別展「前熊コレクション」能面と能装束展を4月16日から5月29日まで開催。

この展覧会は、大正から昭和初期に大阪で美装束家として活躍した前田熊太郎氏(故人)の能楽コレクションを紹介するもので、証書業で活躍した野村徳七氏(野村美術館創設者)らと茶能に親しみ、さらに貴重な美術品として蒐集した能面、能装束、光悦謡本、楽器など総数四百点にもなる類い希なコレクションといわれる。
またコレクションには、大名旧蔵品が数多く含まれ、加賀藩前田家旧蔵の豪華な能装束、12代藩主前田斉広(なりなが)の能装束も郷寄りして展示される。

入場料/一般・大学生三百円、65歳以上二百円、開館時間/午前10時/午後6時、毎週月曜日休館。
主催/金沢美術館(金沢市広坂1-2-25、TEL076-220790)



能「半部」の半部屋

演能案内

豊水会春季大会

五月三日(火・祝) 午前10時半始
名古屋能楽堂

- 能 鶴 早川 寛
高安 勝久 河村総一郎
堀元 正樹 後藤嘉津幸 藤田六郎兵衛
野村小三郎
問

作り物のミニチュア贈呈 名古屋能楽堂の定例公演・新企画

名古屋能楽堂定例公演は、二十三年度は六月を初回として、明春三月まで七回開催されるが、今年度は定例公演に菜場の方の中から抽選で一名に素敵な作り物のミニチュアがプレゼントされることになった。

- 平成24年1月3日(火) 観世流能「翁」(シテ久田勘助、三香叟・松田高義 観世流能「小鍛冶」(シテ武田大志) 和泉流狂言「素袍彦」(シテ野村又三郎)
指定席5000円、自由席4000円 午後2時始
「3月公演」
3月3日(出)喜多流能「隅田川」(シテ長田豊) 和泉流狂言「欄干山伏」(シテ井上清造) 指定席4000円、自由席3000円 午後2時始

六月四日の初回公演(市民能楽セミナ一)には、能「半部」に登場する半部屋で、作者は観世流能楽師・今沢美和氏。
当せんは、開演前に菜場された方で希望の方の中から抽選で決定。七月公演以降は、先着百名の中から抽選で決定。
なお、七月公演では羯鼓台(天鼓)、九月公演では鳥居(野宮)、十月公演では井筒(井筒)、十二月公演では柴折戸(小笠)、正月特別公演では鉢木(鉢木)、三月公演では車(熊野)がそれぞれプレゼントされる。

ほか素謡「東北」「弱法師」「砦」「法下僧」、舞囃子、仕舞など

入場無料

主催 豊水会 高橋 瞭一

幸謡会大会

五月七日(土) 十二時開演

名古屋能楽堂

番組

番外仕舞 草子洗小町 村井 邦子

- 義 山下 須美子
同 山石川 晴子
小 小野内喜春子
田 中 孝子
近 藤 孝子

素謡 安宅

- 芝 崎 恭子 吉房 徳二
勲 進 順

仕舞

- 鞍 馬 天狗 三浦美由紀
梅 枝 千 百瀬水三子
桜 川 夕 小林 俊雄

漫吟 頼政

- 荒 木 悦子
載

舞囃子 百班

- 山 下 須美子 河村 眞之介 加藤 誠輝
近 藤 幸子 河村 眞之介 大野 誠
吉 房 徳二 河村 眞之介 加藤 誠輝
福 井 四郎兵衛 大野 誠輝

素謡 求塚

- 小 林 俊雄
高 取 良昌 鈴木 善太郎

漫吟 笠之段

- 石 川 晴子

素謡 木曾

- 義 仲 近 藤 幸江
池 田 加 藤 孝枝
頭 書 小 野 内 喜 春 子

仕舞

- 藤 戸 高 取 良昌
西 行 桜 芝 崎 恭子
石 川 晴子

舞囃子 誓願寺

- 鈴 木 善 太 郎 河 村 眞 之 介 加 藤 誠 輝
福 井 四 郎 兵 衛 大 野 誠
田 中 米 子 河 村 眞 之 介 大 野 誠
船 戸 昭 弘

番外仕舞 芭

- 蕉 千 大 概 文 藏
波 近 藤 幸 江

主催 寺 近 藤 幸 江

御来場歓迎

岡崎本町田本町一三三
TEL(〇五六四)二二二五二九

当地の各流儀・流派・結社・社中の消息を辿る

竹尾 邦太郎

七 「名古屋和泉会」

第二〇回は昭和五五年一月二四日、和泉流歴代宗家追善と銘打つ別会。番組は当地観世流の仕舞四番「江戸」水藤五三「藤戸」飯島修二「鶴之段」河村証二「融」杉村竹翠、狂言三番「昆布売」野村又三郎、井上松次郎、「木六駄」和泉元秀、井上祐一(主)井上礼之助(伯父)三宅右近(兼)「舞獅子」葛城辰巳孝、藤田昭彦、福井啓次郎、河村総一郎

・鬼頭亨太郎、地頭衣裳正武、狂言二番「宗論」三宅藤九郎、三宅右近、佐藤秀雄、「金津地蔵」和泉元弥、佐藤友彦(田舎人)和泉元秀(題)大野弘之、鳥越正夫、飯島正治、井上礼之助、井上松次郎。

第二回は昭和五六年一〇月一日、番組は素囃子「神楽」藤田昭彦、福井長久、吉田定男、鬼頭亨太郎、狂言五番「三人長者」井

上礼之助(せせなき長者)佐藤友彦(彌生ノ長者)大野弘之(森長者)、「法師ケ母」井上松次郎、佐藤友彦、「悪太郎」和泉元秀、井上松次郎(伯父)三宅右近(兼)、「井杭」佐藤融、大野弘之(何某)佐藤友彦(舞臺)、「釣針」三宅右近、飯島正治(主)今枝良治(妻)歌村鴻助、石田喜樹、今枝郁雄、今枝雄雄、鷺見政行、鳥越正夫(乙)。

先号に既出の通り名古屋和泉会、狂言共同社に拠る主催公演「名古屋和泉会」は、こゝに終ることになり、以後は和泉宗家後援会に拠る主催公演になる。銘記はされていないが、その第二回は昭和五七年一月二一日、「和泉元秀舞台四十年」三宅藤九郎兼舞祝賀記念「狂言会」として催される。素囃子と頭、和泉元秀の挨拶がある。

狂言の世界では年齢物と申しま

して、釣狐・花子の興秘の曲として、枕物狂は老人、庵の梅・比丘貞は老女、この三番を三老曲と称し、狂言の最終曲に置いております。古来より遠慮以後に限って勤めるものとされておりますものを、この機会にと存じ昨年十月に東京で枕物狂を勤めましたが、和泉流由縁の名古屋でのこのたびの舞台には庵の梅を初演させていただき、おそらく名古屋では初めてご覧になる方ばかりであろうと存じますが、早春を背景にした特色の豊かな老女の曲でございます。大体この曲を勤める方には当然のことながら師匠はすでに無く、それまでの若の蓄積によつて自ずと独自の工夫もあつて勤めるケースがほとんどですが、父の存命中に勤めることで、多少とも習う気持の最後のチャンスとも思っております。

その父藤九郎も歳暮に至り、大

郎冠者物の狂言の中でも大曲であります木六駄は当人が最も好む曲の一つでもあり、曲中で舞う鶴舞は鶯流から自身が節・型付けをして和泉流の小舞として採り入れた想い出も一入深い曲でございます。なお、ついでながら満七歳四ヶ月になりました元彌に、本殿狂言の代表曲であります木六駄を勤めさせます。私も木六駄を勤めましたのが満六歳六月でございます。

父子三代の狂言に朝比奈と、稀曲・大曲を並べました記念の舞台、よろしくご後援のほどお願いいたします。

番組は素囃子「神舞」藤田昭彦・福井啓次郎、河村総一郎、観世元信、狂言三番「夫廣かり」和泉元彌、三宅右近、野村耕介、一佐渡狐」野村又三郎、大野弘之、井上礼之助(兼妻)、「庵の梅」和

泉元秀、野村万之丞、三宅右近、野村耕介、佐藤友彦、鳥越正夫、飯島正治、語「那須守市語」井上松次郎、狂言二番「朝比奈」野村万之丞、三宅右近、地頭野村又三郎、「木六駄」三宅藤九郎、井上祐一(主)井上松次郎(伯父)和泉元秀(兼妻)。

因に「庵の梅」は昭和一七年(一九四二)四月五日、観世九尊会名古屋支部の初世観世喜之三回忌追善能で十世野村又三郎傳英(一八六五・三・一五―一九四五・一・一五)が勤めて以来四〇年ぶり。

なお昭和三六年の初回から終回の昭和五六年まで全二〇公演、秋の和泉会として親しまれ毎年一〇月(4回)か十一月(7回)に催されてきた「名古屋和泉会」だったが、此の時季を踏襲する形で和泉宗家後援会主催公演も秋一二月に行なわれ、昭和五七年は一月(3回へつづく)

東日本大震災

チャリティ能 5月5日

名古屋能楽師有志が演能

未曾有の被害をもたらした東日本大震災。巨大な津波は多くの家や街並みを押し流し、加えて放射能汚染の懸念、電力供給不足は社会、人々の生活に大きな影響を及ぼし、懸命な救助、救援活動とともに、国際的にも強い励ましと活動が繰り返りひろげられている。

能楽界では、この救援活動の一環として、名古屋能楽師の有志が挙つて、5月5日(木・こどもの日)に「東日本大震災チャリティ能」が開催される。この演能にはNPO法人名古屋能楽振興協会が協力。当日は、名古屋駅前・ミッドランドスクエア地下一階特設舞台で午後1時から午後8時まで開催。半能「竹生鳥」はじめ独吟・独鼓・仕舞・舞囃子・狂言・狂言小舞が上演される。

開催趣旨は次のとおり。

この度の未曾有の災害により被災

された方々に心よりお慰め申し上げますとともに、一日も早い復興を祈念致します。

このたび名古屋能楽界としても微力ながら、この状況下で私どもの特性を活かした形で協力しようと考えました。

名古屋の能楽師が一丸となり、支援金の募金活動、支援能を実施し少しでも社会協力を努めて参りたいと思います。

この困難にあつて被災者の方々と心をつなげて、一日も早い復興のため、微力を尽くす所存です。

どうぞ、私共の取組にご理解を賜り多数の皆様のご来場をお待ち申し上げます。

(上演は5日午後1時から休憩をはさみながら夜8時まで行われる)

第五回 西村同門会 研究能

五月十五日(日)午後一時開演
名古屋能楽堂

挨拶、解説 飯富 雅介
伝統文化子ども能楽教室 おけいこ発表指導 寛 弘一

喜多流 シテ後者 平塚 昭子
能 関原 巽市
ワキ 奥市 飯富 雅介 寛 弘一 加藤 洋輝
ツレ 立業 橋本 陸 船戸 昭弘 大野 誠
ツレ 立業 橋本 陸 船戸 昭弘 大野 誠
ツレ 立業 橋本 陸 船戸 昭弘 大野 誠

問 早打 今枝 郁雄

後見 加藤 誠子 地謡 加藤 幸孝 松井 俊介
伊藤 勝毅 長田 晴
福田 昭弘 船戸 昭弘 大野 誠

宝生流 学生仕舞指導 竹内 澄子

舞囃子 西王母 小林 陸 福井 啓次郎 山村 友子
伊藤 鳳香 松浦 祥子
石川 咲奈 竹内 澄子
道家 静奈 佐藤 啓子

高安流 朝長 大崩語り 高安 勝久

和泉流 狂言 井 杭 シテ井杭 井上 喜大 アド舞置 井上 清浩
アド何某 佐藤 融

喜多流 シテ鬼女 辰田 鏡
能 黒塚 三郎 有松 達一 坂野 晃 加藤 洋輝
ワキ 祐慶 有松 達一 坂野 晃 加藤 洋輝
ツレ 山伏 岡 充 船戸 昭弘 大野 誠

後見 井上 弾喜

郁諷会大会

五月二十二日(日)午前十時半開演
名古屋能楽堂

番組

番外仕舞 玉之段 前野 郁子
仕舞 小鍛冶 治 杉野 かよ子
(全品屋 大字 殿直)

素囃子 小袖曾我 中野 裕子
小島 澄江

素囃子 籠 澤田 國松 佐治 光幸

舞囃子 清 経 志津 明子 河村 眞之介 大野 誠
片山 明美 後藤 孝一郎 加藤 洋輝
船戸 昭弘 大野 誠

素囃子 砧 森 静子 吉田 篤子 上田 大介

舞囃子 杜 若 伊藤 明美 河村 眞之介 加藤 洋輝
船戸 昭弘 鹿取 希世
佐治 光幸 船戸 昭弘 鹿取 希世

能 井 筒 熊谷 翠子
飯富 雅介 寛 弘一 大野 誠
井上 清浩

野村小三郎改メ 野村又三郎襲名披露

第54回 狂言やるまい会 名古屋公演

五月二十九日(日)正午開演
名古屋能楽堂

翁 片山九郎右衛門 三番 野村又三郎
千歳 観世 喜正

大鼓 打掛 河村 総一郎
飯取 曾和 伊藤 喜夫 太鼓 加藤 洋輝
飯取 幸 森平 笛 藤田 六郎兵衛

大黒風流 大黒天 野村 萬歳 風 佐藤 友彦 風 野口 隆行
井上 靖浩 風 奥津 健太郎

後見 味方 幽玄 清沢 一政 古橋 正邦
片山 幽雪 地謡 祖父江 修一 武田 邦久
梅田 嘉宏 青木 禮喜

狂言 佐渡狐 考 大藏 彌太郎 佐渡の百姓 茂山 良輔
観世の百姓 大藏 基誠

別習二調 勸進帳 謡 片山 幽雪 小鼓 曾和 博明

狂言 子盗人 共人 野村 萬 乳母 野口 隆行
阿茶 野村 福丞

狂言 朝 猿 本名 松田 萬義 太郎 齋藤 奥津 健太郎
舞臺 野村 又三郎 旗 野村 証二

主催 株式会社 野村 事務所
問合せ先 電話 090・8323・3210
メール info@kyogen.net

〔入場料〕
(花) 前売 一三〇〇〇円 (鳥) 前売 一〇〇〇〇円
(風) 前売 八〇〇〇円 (見) 前売 六〇〇〇円
(当日券 二〇〇〇円増)

和泉宗家後援会 名古屋特別公演

昭和57年11月28日(日) 開演 熱田神宮能楽殿 電話(052)2812

特別公演番組の表紙



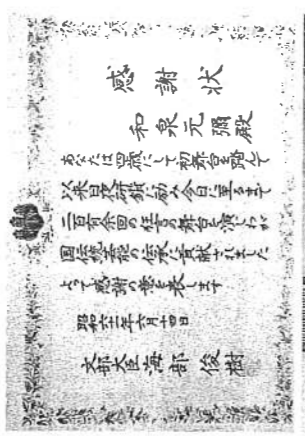
和泉会別会

11/24 (林)11時開演 熱田神宮能楽殿 電話(052)411-2912

和泉会別会の子チケット



二八日に。此の年は年一回公演になる。「和泉宗家後援会・名古屋特別公演」(写真と銘打つ番組は狂言四番「犬山伏」井上松次郎・井上礼之助・大野弘之・今枝靖雄(犬)、「井杭」三宅藤九郎(箕)野村万之丞、和泉元彌(井杭)、「花子」和泉元秀・佐藤友彦(太郎冠者)井上祐一、「養抱落」野村万之丞・鳥越正夫(主)井上松次郎、能「狸々乱」梅田邦久・西村欽也・藤田六郎兵衛・福井啓次郎・寛鈺一・鬼頭喜太郎・地頭久田徹二。



「三宅藤九郎氏の稀曲復曲」の他は例によつて著名士達の祝辞と賛助広告。なお「釣狐」佐藤友彦は披露。昭和五九年一月三日は「和泉宗家名古屋特別公演」番組は狂言「船渡鯉」井上松次郎(男)大野弘之(鱈)井上礼之助(妻)半能「翠茂」御田久田徹二・前野郁子(ツレ)西村欽也・飯富雅介・杉江元、和泉元彌(神主)和泉元秀、井上祐一・佐藤友彦・鳥越正夫(早乙女)藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・寛鈺一・鬼頭喜太郎・地頭喜太郎・狂言三番「萩大名」和泉元秀・井上祐一・鳥越正夫、「繩綱」和泉元秀・鳥越正夫・佐藤友彦、「福の神」三宅藤九郎・井上松次郎・井上礼之助・地頭和泉元秀。替間の「御田」シテ和泉元彌は初演。

昭和五八年一月二七日、「和泉元彌三番豊波麿」和泉特別公演」番組は「三番見」和泉元彌・井上松次郎(千歳)一噌庸二・福井啓次郎(頭取)後藤孝一郎(脇鼓)柳原富司忠(脇鼓)国川純・後見和泉元秀・三宅右近(狂言三番「釣狐」佐藤友彦・井上松次郎・後見和泉元秀・井上祐一・鳥越正夫・三宅藤九郎・三宅右近・鳥越正夫(茶屋)、「語」文蔵語「和泉元秀」能「石橋」梅田邦久・村瀬純・井上礼之助・大野弘之・井上祐一(仙人)・一噌庸二・福井啓次郎・国川純・助川龍夫・地頭矢代善弥・主後見岩井順一。今回もB5判アート紙22頁のパンフレットが出される。番組及び和泉元秀と山崎有一郎との対談「父と子の三番見」、小林貴の

「三宅藤九郎氏の稀曲復曲」の他は例によつて著名士達の祝辞と賛助広告。なお「釣狐」佐藤友彦は披露。昭和五九年一月三日は「和泉宗家名古屋特別公演」番組は狂言「船渡鯉」井上松次郎(男)大野弘之(鱈)井上礼之助(妻)半能「翠茂」御田久田徹二・前野郁子(ツレ)西村欽也・飯富雅介・杉江元、和泉元彌(神主)和泉元秀、井上祐一・佐藤友彦・鳥越正夫(早乙女)藤田六郎兵衛・後藤孝一郎・寛鈺一・鬼頭喜太郎・地頭喜太郎・狂言三番「萩大名」和泉元秀・井上祐一・鳥越正夫、「繩綱」和泉元秀・鳥越正夫・佐藤友彦、「福の神」三宅藤九郎・井上松次郎・井上礼之助・地頭和泉元秀。替間の「御田」シテ和泉元彌は初演。

「前略」子供の出演で気になるのは父子続演の場合です。父子の愛情は誰しもわかり過ぎるほどわかっているだけに、見所はとかく先入観にとらわれがちです。二人の演技に妥協はないか、父が子の可愛さに向けて舞台が甘くなりはないか、これなどは見所の多くが抱く懸念です。演者の側では、そんなことは絶対ないと云われるかも知れないが、相手は子供。気力、気迫などを含めて演技力一般の未熟、不十分は当然過ぎること、それをカバーしようとして親こころがちよつとでも顔を出すと、見所の目には「それみたことか」ということになりかねない。和泉元秀氏の著書を見ても、少年期に子供にはかなり無理と思え

昭和六〇年一月四日は「和泉会別会」番組は狂言三番「蜘蛛人」和泉元秀・佐藤友彦・井上松次郎・大野弘之・今枝良治・鳥越正夫・野村又三郎・井上祐一、「大般若」和泉元秀、和泉元彌(巫女)井上祐一、「三人片輪」井上松次郎(鱈)野村又三郎(座頭)井上礼之助(鱈)大野弘之(主)、「ごあいさつ」本多静雄・和泉宗家後援会名古屋支部長、能「船弁慶」前後之替「久田徹二・武田大志(子方)西村欽也、飯富雅介、和泉元彌(アヒ船頭)藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎・助川龍夫・地頭高橋暎一、後見中川雅章。後日、能評家・前田満穂は本紙第二八号(昭和六〇年二月)「観能雑語」に「狂言の父と子」の題で次のように述べている。

「前略」子供の出演で気になるのは父子続演の場合です。父子の愛情は誰しもわかり過ぎるほどわかっているだけに、見所はとかく先入観にとらわれがちです。二人の演技に妥協はないか、父が子の可愛さに向けて舞台が甘くなりはないか、これなどは見所の多くが抱く懸念です。演者の側では、そんなことは絶対ないと云われるかも知れないが、相手は子供。気力、気迫などを含めて演技力一般の未熟、不十分は当然過ぎること、それをカバーしようとして親こころがちよつとでも顔を出すと、見所の目には「それみたことか」ということになりかねない。和泉元秀氏の著書を見ても、少年期に子供にはかなり無理と思え

昭和六一年一月二四日は和泉元彌文部大臣特別表彰記念(写真)後略

早春の舞台から 金剛定期能と名古屋能楽堂三月定例公演 「名古屋宝生会定式能」

竹尾邦太郎

る役を次々と演りされた経験が述べられていますが、それが家元修業という特別なケースだとしても、そこにはあくまで「演者の論理」はあつても「見所の論理」はない。演者の側からは、たとえちよつとくらい不消化な舞台を見せることがあつても、それは修業上の「必要悪」として見のがしても構はないかも知れませんが、見せられる側がそれを甘受しなければならぬ理由はない。必要があろうとなかろうと、悪は悪であるというのが「見所の論理」です。

昭和六二年一月二三日は和泉元彌舞台十年和泉宗家後援会十周年を名目の名古屋「和泉会別会」番組は狂言四番「秀句傘」和泉今枝郁雄(参会)大野弘之(太郎冠者)。

今回もB5判アート紙16頁のパンフレットが出され、「和泉流の歴史」その二「圓屋後援」「古さの新社」西山松之助、永六輔の散文詩、「伝承の心意気」荒井良泉、などの寄稿がある。なお脇狂言「松脂」は明治四二年(一九〇八)三月二十九日、那古野神社舞台での角淵皇翁遷階祝賀の催しで翁自身が外堀新太郎の筆名で勤めて以来、七八年ぶり上演の稀曲。

「声刈」困窮ゆえ余儀なく妻(ツレ見嗣)と別れ、流浪の果ては市の立つ難波津の賑わいの中、元手要らずで廉・腹實の材料となる声刈り売りを小商いの夫、日下左衛門(シテ龍麿)。一方、妻は都の富家の乳母と成つてゆとりを得、従者(ワキ大)供人(ワキツレ努・速二)を伴い、盛り場ならばと夫を探し求め淀川を下る。しかし、難波津の里人(アヒ千三郎)にワキが尋ねてもシテの消息は知れず、逗留中ツレの隠みに何か面白い事は、で紹介されたのが声売りの男である。当時、物売りの風俗は専ら寺社の縁日や繁華な青空市などに見られる真さんでお馴染みの屋台の唄、呵売か、品物を持ち歩き、売り声や、更には大過堂にみる様なパフォーマンスで人々の耳目を惹きつける行商。ワキに声を勧めるシテは、いわゆる聞き上手は訊ね上手のワキに誘導されるように、筆(よし)と声(あし)の相違を問答、掛合に、御津の浜の事とも問答に、生真面目そのもの、几帳面



金剛定期能「声刈」金剛龍謹 (原田七寛氏撮影)

元秀・鳥越正夫・井上祐一、「水汲」和泉元秀・和泉祥子、「鬼丸」和泉元秀・佐藤友彦(旅僧)井上松次郎(老父)地頭井上祐一、「繩綱」井上松次郎・大野弘之・井上礼之助、兼雌子(神舞)水汲之匠「藤田六郎兵衛」福井啓次郎・寛鈺一・助川龍夫・狂言「兼平餅」和泉元彌・井上祐一(餅屋)和泉祥子(雑思)大野弘之・吉川秀秋・井上靖浩・佐藤融(隨身)今枝郁雄(香持)和泉元秀(役持)和泉淳子(乙)地頭佐藤友彦。

昭和六二年一月二三日は和泉元彌舞台十年和泉宗家後援会十周年を名目の名古屋「和泉会別会」番組は狂言四番「秀句傘」和泉今枝郁雄(参会)大野弘之(太郎冠者)。



金剛流定期能「声刈」左より金剛龍謹・原大、豊嶋晃嗣 (原田七寛氏撮影)

ちツレへ行き動をするところ(写真)、「正に恨みうち忘れる心、シテの緊張ぶりも滑々しい。喜びの男舞二段、袖拂きも鮮やかに軽快。切地、月も残り、と正先の月ノ扇には一抹の名残り惜しさも。ツレとワキは暮へ退き、ワキツレは切戸へ、シテが常座でトメ。雌子は兼弘・一郎・由訓、主後見は連成。若々しい力の籠つた好舞台だった。(1時間30分)

「寄越」兄(次子ト宗彦)からいつも舎弟としか呼ばれない弟(シテ逸平)、シヤテイの意味が分らず、といつて直に聞くのも頼、善い事か悪い事かを何某(アト十志)に尋ねれば、何某は虚けた奴とばかりに悪戯心を抱き、素知らぬ顔で盗人の譚だと教える。そうとは知らぬ兄は弟の愚鈍に

たじく、釈明をするにも最早舎弟即盗人の弟の固着観念の打破は不能、逆に弟から舎弟(盗人)呼ばわりされ、は対抗せざるを得ない。口角泡を飛ばし、互いに旧悪の癖き合いとなり、果ては取っ組み合いの喧嘩に。積年の鬱憤が溜つている分、弟に勢いが。倒されて忿怒やる方ない兄の表情もよい。寒の兄弟の熱演、それにしては些細な誤解が生じ怖さは何処にもあるの教訓。(13分)

「雲林院」幼少から伊勢物語に慣れ親しむ声屋の公光(ワキ勝久)、悪夢に誘われ従者(ワキツレ努・正樹)と花の雲林院へ赴くと、花に惹かれ一枝手折れば、耳聡い老翁(シテ恭慈)に花を散らせた事を咎められる。何れ散らしても、手折つて観賞に供するか、花の心の根に自然に任せるか、互いに古歌を引き合いの問答をするところが面白く精彩。地(永護・連成・泰能ら)の枝をへ惜しむもなほも情あり、と古歌問答が収束すると、身元問われるワキ。当地へ来た趣は、夢に見た伊勢物語嫌く男女が実は兼平と二条の後、と夢の翁に教えられたから、と伊勢物語オタクのワキは委細を。されば、兼平がワキの心に感応ゆえ、此処に寝て夢の続きを、とシテは素性を隠し中人へ。いや、我が名を何と夕映えの、と面や、轟々七静かに右ウケた姿は余情側々、色白の面小尉の気品

(4)面つづき



金剛定期能「雲林院」マエ 松野赤憲 (原田七寛氏撮影)



金剛定期能「雲林院」アト 松野赤憲 (原田七寛氏撮影)

④(面よりつづき)
が真公子の後シテ兼平の面差しを
反映するか。花鳥の所の者(アト
耕運)がワキと問答、居語に兼平
の事どもを語って退くと後場。
一声の囃子(市和・尚靖・正寿
・光長)で現われる兼平(シテ恭
憲)、面中将・初冠・縫箔着付・
紫指貫・黄地直衣の、華やかなお
つとりと大きな風姿は、正に句や
かな殿上人とワキに言わしめる券
困気。この伊勢物語とどんな人が
どんな事から恋に到ったのか、ワ
キの仰しやるのも御尤も、とシテ
の達解が明かされるサン・クセ。
へ信濃路や、の上が端あと、へ冠
の中子にうち抜き、と袖被き副を
面に当てる姿は如何にも人目忍ぶ
心、美しい。へ降るは春雨か、と
扇下からスツと上げへ落つるは
涙かと、カサシ面に面を伏せ、へ
しをく、左へ廻つてゆくところ
の寂しきは、序之舞にも反映して
しつとりと優雅。へ時移れば、と
桜木立を背にして月ノ扇に華を見
込むキリ、へ返すや、夢の告の
枕)、と袖被クのは語り尽きぬ物
語封印の象徴か。へ覚むる夢、と
常座で小廻り、返シ句にシテ柱み
てトメた。大様な悠揚迫らざるシ
テ恭憲の、濃やかな袴袴の行き届
いた立派な舞台だった。主後見三
千春。(1時間38分・2月27日・
金剛定期能・京都金剛能楽堂)

「墨塗」 「還か遠国の大名」
と正先の名乗りも磨れやかに、訴
訟も叶い安堵の御教書(所領地の

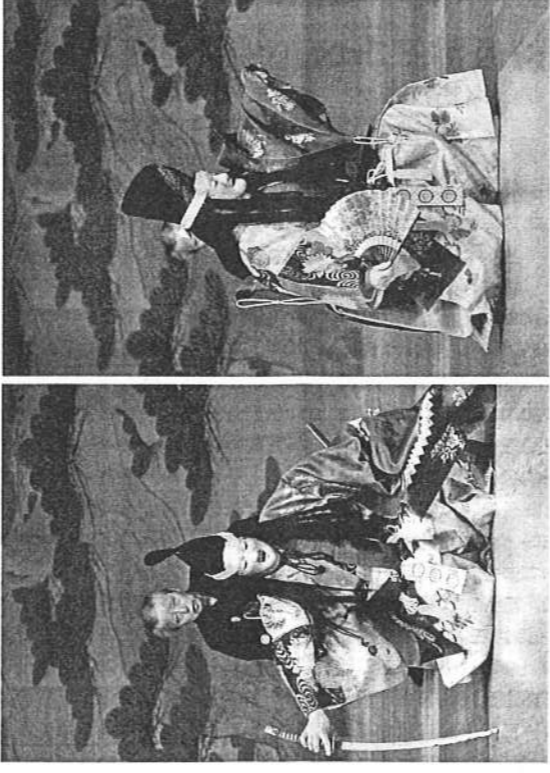
承認書)を頂戴して国元へ帰る寛
き気分の大名(シテ高義)、「そ
てかの人の方へは知らせず下つ
たものであろうか」と太郎冠者
(アト健太郎)に判断を任せるは
かりか、お供をすれば女(小アト
小三郎)への用件は帰国の事まで
「太郎冠者、汝うつて呉れい」と
躊躇する始末。惚れた女には盲目
的で空気が読めない大名、海千山
千の強かな女に翻弄され、別れの
悲歌にくれる女の差花の涙も兼水
入れの水と分らず「さてく気の
毒な事ぢやなう」と監視するだ
け。見兼ねて太郎冠者、注意も取
り合つて貰えないと分つて水を墨
と入れ替えれば、流石に目覚める
大名。「まんまと身求をたばかり
をつた」怒りを抑え、「朝々手置
れた鏡おや」と殊勝そうに形見の
鏡を与え復讐を謀つた大名に、大
恥か、されて地上した女は連二無
二大名の顔へも墨を(写真)。太
郎冠者頼りの気弱な癖に女には甘
い大名を高義好漢。(21分)

「清経」 主君・平清経の遺骸
携え上洛の淡津三郎(ワキ雅
介)、辛い使者に屈託を感じさせ
る運に、連行へはや時雨降る、
と並に手をやり右へ見上げると
ろ、先を案する心も。留守宅を訪
ね、「此方へ入れ」と清経ノ妻
(ツレ尚久)の直の声に、「や、
これは御声にてあり氣に候」と思
わす等を捨てたのも、未だ気持ちが
整っていない風。用件を問われ、
どう話してよいか苦衷にシラルの



名古屋能楽堂
三月定期公演
「墨塗」左より野村小三郎、松田高義、
奥津健太郎 (杉浦賢次氏撮影)

を見奪め、なぜ物も言わず泣くそ
とツレ。緊張するツレ・ワキ問答
が可。清経入水の仔細を知り、ツ
レは夫の死に様を怨み、悲しみ、
初回(安明・広明ら)へ何事も修
かりける世の習ひ、とシラルが切
な。へ今は誰をか憐りの、でワ
キは扇面に遺骸の守袋を載せ、捧
携え上洛の淡津三郎(ワキ雅
介)、辛い使者に屈託を感じさせ
る運に、連行へはや時雨降る、
と並に手をやり右へ見上げると
ろ、先を案する心も。留守宅を訪
ね、「此方へ入れ」と清経ノ妻
(ツレ尚久)の直の声に、「や、
これは御声にてあり氣に候」と思
わす等を捨てたのも、未だ気持ちが
整っていない風。用件を問われ、
どう話してよいか苦衷にシラルの



名古屋能楽堂
三月定期公演
「清経」本田光洋 (杉浦賢次氏撮影)



名古屋能楽堂
三月定期公演
「清経」本田光洋 (杉浦賢次氏撮影)

ツメルと懸嘆場の雰囲気を持つよ
うに「この上は怨みを晴れ給へ」
とシテ。床几にかゝると「さても
一門は」と源平の合戦譚に。宇在
八幡へ祈誓はするが色色濃く、へ
さては仏神三至も捨て果て給ふ、
と落胆の心を大きく打合せ、立つ
キは扇面に遺骸の守袋を載せ、捧
携え上洛の淡津三郎(ワキ雅
介)、辛い使者に屈託を感じさせ
る運に、連行へはや時雨降る、
と並に手をやり右へ見上げると
ろ、先を案する心も。留守宅を訪
ね、「此方へ入れ」と清経ノ妻
(ツレ尚久)の直の声に、「や、
これは御声にてあり氣に候」と思
わす等を捨てたのも、未だ気持ちが
整っていない風。用件を問われ、
どう話してよいか苦衷にシラルの

子から利所きびくしくと美しく極め
る。上が端へおどきなやとても消
ゆべき露の身を、と諦めの心境
は、へ西に傾く月を、地裏へ眺
め、へいさや我も遅れんと、と各
拳するもの哀切、へ南無阿弥陀仏
弥陀如来、と六ツ拍子踏むのは、
幼児が駄々を捏ねる気持ちにも。
入水の場は、へ船よりかつばと落
汐の、と拍子踏みスミから木小前
下居、へ底の木履と、で相返シ居
立ち高カサシ左へ小廻り、ちり
くと腰落し、がつくり安座シラ
ル。文字通り憂き身の果の悲し
さ、しんみりとみせる。
キリは一転、へさて修羅道に、
と相返シ居立ってキツとツレを見
込む(写真)と、地の返シ句に立
ち烈しい闘争の場。へ月は精剣、
と抜く太刀の、鮮やかな太刀捌き
も、へ真は最後の十念、と膝つく
と(写真)太刀を手放し合拳、立
つて常座へ廻り込みシテ柱みてト
メた。優しみの中にも自我を通じ
た公達が居た。囃子は誠・昭弘・
颯一、後見は穂高・芳樹。(1時
間8分・3月5日・名古屋能楽堂
三月定期公演)

「忠度」もと後成卿に仕えた
者、御没後、出家した旅僧(ワキ
雅介)、従僧(ワキツレ幸・正

樹)を伴い西国修行の途次、須磨
浦に伝へ聞く若木の桜を見んと座
着く。一行の朗々とした連行がよ
い。一声囃子(誠・孝一郎・眞之
介)で山から下りる心に老翁(シ
テ莊太郎)、面紫尉・襟淺黄・濃
緑無地殿斗目着付・茶水衣の姿、
右に杖、左に木ノ葉を持つ。常座
で生業の辛さ、土地柄の他しさを
詠つとスミ近くへ。或る人亡き跡
の、標の一本の桜がある心に、へ
山より帰る折毎に、と下居、木ノ
葉を手向け合拳、へ帰らん、と立
つてゆくのに掛けるワキ。山鏡
(和入)か、と問えば海士と答え
るシテ、不審のワキにシテは、塩
を採るには藻塩を焼く塩木(薪)
が必要故に山へ通う、といった事
をワキと掛合にはきはき説くところ、
若いシテの気負いも感じられ
初々しい。地(溝次郎・孝・耕司
ら)となりへ通う清風に山の桜も
散るものを、と常座で胸杖し、右
前方を静かに眺める姿には或る感
概も。ワキに宿を乞われ、「や、
此花の蔭程のお宿の候べきか」と
シテ、忠度の歌を引き、作者はへ
此舌の下、と杖突いて示すとへ逆
縁なりとも、なぜ帯い給わぬとワ
キを咎める様にアシラと詰るのも
シテの辛立ち。花の主が己の仕え
た後成卿の友と知るワキの、手向
を聴聞の心にシテは正中下居、へ
有難や、と合拳する。その誓は様
子を語るワキに、御僧に申われた
いと来たのが、とシテ、ワキにア
シラつとへ花の蔭に、と直つて居
立ち、へ夢の告を、と杖取つて立
ちへ行く方知らず、と常座で小廻
り、返シ句に送り笛で中入するこ
ろ余情。代つて須磨ノ里人(ア
ト彦彦)「今日は長閑に候間」と
散策に出てワキと会い、求めに応
じ、都落ちの忠度が撰者、後成卿
の許へ引き返してまで千載集に自
作を採つて欲しいと切願したこと
と、採用確約も動勸の身ゆえ読人
知らずにされたこと、合戦最後に
残された藤の短冊のこと、若木の
桜の調れなどを居語に滔々と語
る、見事。ワキに忠度への供養を
勧めて退くと後場。
へ袖を片敷く草枕……風激しき
気色かな、とワキ、ワキツレ待語
から一声で忠度ノ亡霊(シテ莊太
郎、面中将・黒垂・梨子打鳥帽

子・襟淺黄赤・織文縫箔着付・白
大口・濃黄破し七宝文長絹・太刀
・短冊付矢を背に「へ松へ。歌は
採られても読人知らず、されたの
に拘ね、縁で今の定家卿に執り成
しを、とサンに。へげにや和歌の
掛かるが、文字通りへさも忙がは
しかり身の忙しさは返シ句に床
几立つとも面白く、都から戻れば
一ノ合の合戦。へさる程に、二ノ
松へ掛け、船に乗りずへへ動の手
綱、を両手に絞る型に正先へ、六
弥木との組打ちきびくしくと、「ど
うと落ち」て膝つき「取つて抑
へ」るところなど力が入る。へ六
弥木を取つて投げ、と左袖サツと
投げ出す型も鮮やかに、へ今は敵
はじと、安座、へ光明運照、と片
手合拳、へついに御首を打ち落
す、と扇を高く頭に挙げて後ろ
へ倒す抽象的な型も極め、トメま
で破綻なく整つて締つた良い舞台
だった。(1時間30分)

「誓」 当時、小鳥の飼育が流
行というが、「鳴合せ」と云い鶯
などの鳴き声を持ち寄り、鳴き声の
優劣を競ふ品評会は当今も。囃り
の音が持つ「鶯合せ」は毎年
東京では四月五日頃、下谷根岸で
盛んな晩合会が催され、各地から
愛鶯家が寄るといふ。
段殿斗目・長袴・小刀の何某
(アト題)、立派な籠に入った鶯
を野に出て轉らせて居ると、騎者
袴・太刀・小刀の梅若殿の家来と
名乗る男(シテ靖造)が現われ、
ちへ行く方知らず、と常座で小廻
り、返シ句に送り笛で中入するこ
ろ余情。代つて須磨ノ里人(ア
ト彦彦)「今日は長閑に候間」と
散策に出てワキと会い、求めに応
じ、都落ちの忠度が撰者、後成卿
の許へ引き返してまで千載集に自
作を採つて欲しいと切願したこと
と、採用確約も動勸の身ゆえ読人
知らずにされたこと、合戦最後に
残された藤の短冊のこと、若木の
桜の調れなどを居語に滔々と語
る、見事。ワキに忠度への供養を
勧めて退くと後場。
へ袖を片敷く草枕……風激しき
気色かな、とワキ、ワキツレ待語
から一声で忠度ノ亡霊(シテ莊太
郎、面中将・黒垂・梨子打鳥帽

なりともなつて太刀の戻る歌を、
の感概。本歌取の一首「初春の太
刀も刀も、ささぞぞ燃る本の
住家に」と詠み、「ああ、しない
たり」と浅慮を詠歎、刺棒捨て入
る。前半の、いけしやあしやあと
厚顔構着なシテと、勢い辛々なら
ざるを得ないアト、両者の問答が
惹きつけ、一転、キリの殊勝な独
白、充実の舞台だった。(29
分)

「巻網」 遅刻に敵しいのは当
今では空論提出日だろうか。天皇
の敬神厚に三熊野に宣旨で巻網十
疋を納めに下る都ノ男(ツレ飛
能)、音無天神の梅の香に誘われ
選なわつたのを勅使(ワキ勝久)
にどの利いた声で敵しく咎めら
れ、勅使ノ従者(アト都建)に
「浦つたぞ」と縄を掛けられる。
「なう」と呼掛でそれを抗議する
巫女(シテ正直)、へ解けや手綱
髪・翁鳥帽子・襟白赤・露草文白
摺箔着付・紅白段縫箔腰巻・浅黄
長絹の姿。ツレの傍へ行き、へこ
の手を見れば、とツレを立たせ、
きつい縛りようにへ情なや、とシ
ラルの切実。シテ、ワキ問答
は、音無天神でツレが詠んだとい
う歌を疑うワキに、歌を納受した
「神慮を偽るとや」とシテがきつ
くアシラフ感じが佳。地(孝・寿
一・莊太郎ら)となり、へげに疑
ひの従心、でツレを座わらせ縄を
解くと、ツレは切戸へ退き、シテ
は和歌の徳を強調、へ眠り(須磨
ノ迷入)遅かに眼を去る、のユー
ケン風には昂揚感も。クセは濃羅
門傳正と行基菩薩の問答歌にも和
歌の徳を。ワキに祝詞を勧めら
れ、幣を取ると、へ纏上再拜、と
大小前下居に幣を左右に敵い、両
手に敵いて立ち、地のへありがた
や、と選擇、神楽(孝・聡介、総
一郎・洋輝)に。途中、幣を扇に
替えて舞上げ、へ飛行を出だし
て、で再び幣に替えて地との掛合
に舞い進み、キリはへ(神は上が
らせ給ふと云ひ)捨つる、と正先
で両手を高々と挙げ、幣を後ろへ
投げ捨てるのが如何にも神慮り落
ちて狂い覚める様、常座でトメ。
手堅い舞台だった。(1時間1分
・3月20日・名古屋宝生会定式
納)

を。ツレの心情
を受ける地のへ
怨みをさへに言
ひ添へて、で踏
むシテのニツ拍
子には、形見の
怨みに加え命を
捨てた怨みを重
ねるツレへの奇
立ちも。へあし
くくなるぞ悲し
き、とシラルの
も情無さゆえ
か。舞台一巡し
て大小前、へ思
ふも濡らす袂か
な、の返シ句に
ツレへ二・三歩
を見奪め、なぜ物も言わず泣くそ
とツレ。緊張するツレ・ワキ問答
が可。清経入水の仔細を知り、ツ
レは夫の死に様を怨み、悲しみ、
初回(安明・広明ら)へ何事も修
かりける世の習ひ、とシラルが切
な。へ今は誰をか憐りの、でワ
キは扇面に遺骸の守袋を載せ、捧
携え上洛の淡津三郎(ワキ雅
介)、辛い使者に屈託を感じさせ
る運に、連行へはや時雨降る、
と並に手をやり右へ見上げると
ろ、先を案する心も。留守宅を訪
ね、「此方へ入れ」と清経ノ妻
(ツレ尚久)の直の声に、「や、
これは御声にてあり氣に候」と思
わす等を捨てたのも、未だ気持ちが
整っていない風。用件を問われ、
どう話してよいか苦衷にシラルの

NHK放送予定(平成23年5月~6月)

Table with NHK-FMラジオ能楽鑑賞(日曜日 7時20分~8時15分) and various program details including dates and names.

演能カレンダー

名古屋能楽堂

Calendar of events for Nagoya Noh Theater, listing dates, event names, and ticket information.

友楽の友社

Contact information for Yuraku no Tomo-sha, including address, phone numbers, and membership fees.

能楽の友

真夏の夜の祭典として親し

Article about the 'Night of the True Summer Festival' ceremony, mentioning the awarding of the Japanese Art Academy Award to Yamamoto Takashi.

名古屋名駅新能

7月31日(日)に開催

Article about the 'Nagoya Nishikyo Shinnoh' performance on July 31st, including details about the venue and ticket prices.

Article about the 'Nagoya Noh Association' and their activities, including the 'Nagoya Noh Association' and 'Nagoya Noh Association'.

Article about the 'Nagoya Noh Association' and their activities, including the 'Nagoya Noh Association' and 'Nagoya Noh Association'.

会と催し

金剛流豊春会

Details about the 'Kongorin Ryusei Kai' event, including dates, times, and ticket information.

Article about the 'Kongorin Ryusei Kai' event, including details about the performance and ticket prices.

Article about the 'Nagoya Noh Association' and their activities, including the 'Nagoya Noh Association' and 'Nagoya Noh Association'.

Article about the 'Nagoya Noh Association' and their activities, including the 'Nagoya Noh Association' and 'Nagoya Noh Association'.

能楽後継者育成研修発表会(第十九回)

Details about the 'Nagoya Noh Association' and their activities, including the 'Nagoya Noh Association' and 'Nagoya Noh Association'.

大垣深声会春の会

Details about the 'Ogaki Fushin Kai' event, including dates, times, and ticket information.

Article about the 'Nagoya Noh Association' and their activities, including the 'Nagoya Noh Association' and 'Nagoya Noh Association'.

名古屋能楽堂六月定例公演

Details about the 'Nagoya Noh Theater' June regular performance, including dates, times, and ticket information.

Article about the 'Nagoya Noh Association' and their activities, including the 'Nagoya Noh Association' and 'Nagoya Noh Association'.

源氏供養

Details about the 'Genji Kyu' event, including dates, times, and ticket information.

若鯨能(第五回)

Details about the 'Waka Kaminari' event, including dates, times, and ticket information.

市民能楽セミナー

Details about the 'Citizen Noh Seminar' event, including dates, times, and ticket information.

Article about the 'Nagoya Noh Association' and their activities, including the 'Nagoya Noh Association' and 'Nagoya Noh Association'.

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ③①

竹尾 邦太郎

七 「名古屋和泉会」 ⑤

付「和泉会別会」

昭和十三年一月七日の「和泉会別会」は人間国宝五世三宅藤九郎米寿祝賀及び和泉祥子十世三宅藤九郎名跡継承記念の名目。番組は素雛子「養老・水波之伝」藤田六郎兵衛・柳原昌司忠・寛敏一・泉頭喜太郎・狂言二番「唐人子」和泉元秀(唐人)井上松次郎(国守)井上祐一(太郎冠者)井

上靖浩(次郎冠者)和泉博子・祥子(唐人)和泉元弥(日本子)・地謡(佐藤友彦・大野弘之・鳥越正夫・鷺見政行)、「呂律」井上松次郎・井上礼之助・大野弘之「那須与市語」と泉祥子、狂言二番「隠麗」と和泉博子、和泉祥子、「弓矢太郎」と和泉元弥、和泉元秀(当屋)佐藤友彦・井上祐一・鷺

第一回、第二回公演では「照明能」という形で鑑賞いただき、

お一人お一人に感謝申し上げたいと存じます。私は本年一月に片山家をの当主名である片山九郎右衛門を襲名いたしました。その名に恥じぬよう精一杯舞台を務めて参りたいと存じますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

昨年三月の第一回の公演を行い、皆様のお蔭をもちましてこのたび第四回公演のご案内をさせて頂く運びとなりました。名古屋片山能をお支え頂いているお客さま

門師は次のようにあいさつを述べている。

開催に当たって、片山九郎右衛門

第四回「名古屋片山能」が七月二十四日(日)名古屋能楽堂で上演される。

「好評をいただきましたが、今回も能「鞍馬天狗」を照明能で鑑賞いただきます。

能「狸々乱」和合三段之舞(音木連喜、味方玄、ワキ飯富雅介) 仕舞「砵」(片山幽雪) 能「照明能」(鞍馬天狗)白頭、素翹(片山九郎右衛門、生若・片山清愛、ワキ飯富雅介) 指定席五〇〇〇円、自由席四〇〇〇円、学生席二〇〇〇円

チケット取扱片山家能楽・京舞保存財団(075・551・6535)、名古屋能楽堂(052・231・0088)、ナディアパークプレイガイド(052・265・2015)、栄プレチケ92(052・953・0777)

名古屋観世会定例公演能

六月十二日(日) 十二時半開演
名古屋能楽堂

能 竹生島 梅田嘉宏 祖父江修一 高安勝久 寛敏一 加藤洋輝 杉江元 後藤嘉津幸 竹市学 榎元正樹

間 奥津健太郎

後見 松山幸親 吉沢孝旭 加賀一邦 正敬彦 久田勤 地謡 八八八 神充古 橋田正 須部南 清沢一 政

狂言 棒縛 野村又三郎 松田高義 奥津健太郎 後見 伴野俊彦

仕舞 杜若 片山九郎右衛門 地謡 武田大志 高橋一 藤弘

能 辛都婆小町 片山幽雪 室主 関河村総一郎 藤田六郎兵衛 一野文彦 則久 英志 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛

後見 梅田嘉宏 地謡 松山幸親 古橋正邦 梅田邦久 清沢一 片山九郎右衛門 祖父江修一 久田勤

附祝言 主催 名古屋観世会 事務所 名古屋市昭和区町町2-16-15 電話/FAX 052-841-4632

第五十五期・第三回 名古屋宝生会定式能

六月十九日(日) 午後一時始
名古屋能楽堂

能 誓願寺 玉井博祐 坂富雅介 河村真之介 鹿頭養命 橋本正樹 後藤嘉津幸 鹿取希世

間 佐藤友彦

後見 武田孝史 津田正武 石黒孝 内藤飛能 地謡 大田正文 衣斐正直 久野幸三 和久壯太郎

狂言 蚊相撲 鹿島俊裕 井上靖浩 後見 佐藤友彦

仕舞 俊成忠度 衣斐愛 和久壯太郎 大江山 竹内淳子 地謡 石黒正直 内藤飛能

能 鉄輪 宝生和英 高安勝久 寛敏一 加藤洋輝 杉江元 後藤孝一郎 藤田六郎兵衛

間 佐藤融

後見 衣斐正直 地謡 村上孝茂 稲川善一 和久壯太郎 竹内淳一 辰巳潜次郎 辰巳大二郎 玉井博祐 道夫 佐藤耕司

(終了予定五時頃)

主催 名古屋宝生会 (全自由席) 事務局 名古屋市昭和区御器所3-23-19 正会員券一八〇〇円 (年間通用四枚綴り) 鑑賞券五〇〇円 (各一回限り) 学生二〇〇円

電話/FAX 052-842-5600

「鑑賞券取扱」プレイガイド、栄文(地下2階) 栄プレチケ(三連地下)、ナディアパーク(7階) 中日ビル(1階)、松坂屋本館(7階)

二十五周年記念 三交会大会

六月二十六日(日) 午前九時半開演
名古屋能楽堂

番外仕舞 弓八幡 久田三津子
仕舞 紅葉狩 北澤育代
阿龍田 園さなえ
井筒 柳原洋子
松風 岩崎光子
羽衣 早川功一

素謡 阿漕 松井輝子 八神孝充 藤弱法 杉本昭夫 上田公威 藤谷音彌 秋田恵美子 藤谷音彌 戸松花枝 久田三津子 久保勘一朗

控能 野宮 坂富雅介 河村総一郎 鹿取希世 合巻 井上靖浩

舞雛子 養老 坂井七子 河村真之介 大野誠 源氏供養 後藤阿紀 河村総一郎 藤田次郎 卷絹 菊地翔子 後藤嘉津幸 鬼頭義命 砵象 山内満智子 河村真之介 藤田次郎 玄象 伊藤和美 河村真之介 大野誠 舞雛子 屋島 後藤弘次郎 河村真之介 大野誠 草子洗小町 市川美保子 船戸昭弘 竹市学 蝉丸 山田妙智子 福井四郎兵衛 竹市学 三輪 渡辺幹子 福井四郎兵衛 加藤洋輝 仕舞 辛都婆小町 瀬戸勝治 船戸昭弘 竹市学

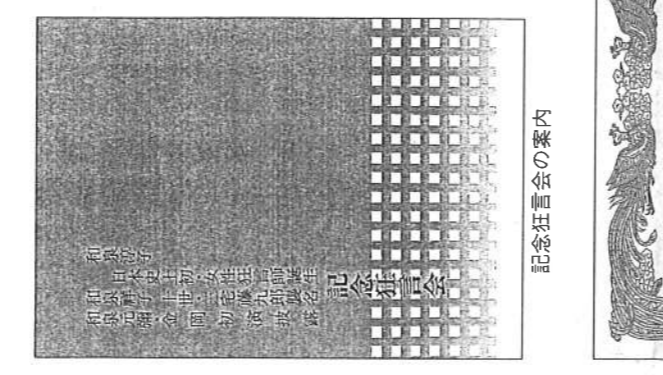
能 葵上 高安勝久 上野養雄 加藤洋輝 原田千恵子 後藤孝一郎 藤田次郎 地謡 榎元正樹

間 佐藤融

舞雛子 高砂 夏樹陽子 上野義雄 加藤洋輝 狸々 藤井美 船戸昭弘 藤田次郎 藤井美 園陸 後藤孝一郎 竹市学

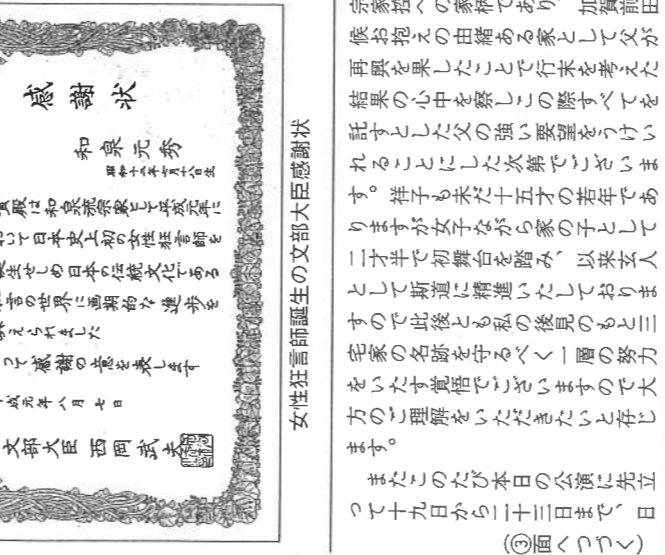
主催 三交会 久田三津子
「御来場歓迎」 お問い合わせ 電話052-7334-6192

見政行・今枝靖雄・井上靖浩・大野弘之(以上参会人)鳥越正夫(太郎冠者)。例によりB5判A1ト紙のパンフレットは今回24頁、「三宅藤九郎家の歴史」関屋俊彦、「伝統芸能の粋・狂言」関山和夫、「一種曲狂言に想う」山崎有一郎、「三宅藤九郎芸歴」、「つきぬ戀」松本幸四郎への寄稿を収録、和泉元秀「こあいさつ」に次のようにある。



本年は実父人間国宝三宅藤九郎の米寿ということで多くの方々から祝意をいただきまして六月には東京、九月には大垣そして本日名古屋での公演を迎えました。本人は只今入院加療のなか、リハビリを兼ねて稽古を続けております。主治医もその意欲と精神力の旺盛さには驚嘆しておりますが暫く遠ざかっております舞台出演には此上なく

おりましたが此たびの米寿記念に際し私の次女祥子を是非と指名されましてその名跡継承の披露もあはせてさせていただくこといたしました。和泉流に在って三宅藤九郎家は宗家控への家柄であり、加賀前田侯お抱えの由緒ある家として父が再興を果したことで末を考えた結果の心中を察しこの際すべてを託すとした父の強い要請をうけられることになった次第でございます。祥子も未だ十五才の若年でありますが女子ながら家の子として二十才で初舞台を踏み、以来父人として新道に精進いたしてありますので此後とも私の後見のもと三宅家の名跡を守るべく一層の努力をいたす覚悟でございますので大方のご理解をいただきたいと存じます。またこのたび本日の公演に先立って十九日から二十三日まで、日





まり千代
橋本明治画(昭和29年)

平成元年一月二三日は「和泉
余別会」を名乗ってはいないが主
催は変わらず和泉家宗家後援会、名
目は和泉淳子日本史上初・女性狂
言師誕生、和泉祥子十世・三宅藤
九郎襲名、和泉元彌、金岡初演披露
記念狂言会。番組は素囃子
「神舞」竹市守・榎井良久・河村
総一郎・鬼頭喜太郎、狂言四番

最後に本日上演いたします「唐
人守屋」は今日まで上演記録を見
ない現行曲であつたものを復曲い
たしました。装束や舞事も全く例
を見ない特異な点が多く上演を見
たことはまことに本懐でございます
す。さまざまな思いを込めた今回
の公演に今後とも限りないご支援
をおねがい申し上げます。



女性狂言師和泉姉妹への感謝状

「采広かり」和泉淳子・
三宅藤九郎、和泉元秀、
「金岡」和泉元弥・三宅
藤九郎、地謡(井上祐一
・佐藤友彦、鳥越正夫・
森良男)、「権纏」井上
松次郎・大野弘之・井上
礼之助、「太鼓負」和泉
元秀・井上祐一(妻)佐
藤友彦(領人)和泉元弥
・鳥越正夫(書図)井上
保志・井上悠志(雅見)
和泉淳子・三宅藤九郎
(神子)。
B5判A4ト紙のパン
フレットは22頁。和泉淳
子、十世三宅藤九郎(和
泉祥子)、和泉流宗家後

援会関係者の挨拶のほか番組・曲
目解説(長尾一雄)、「大曲・金
岡と稀曲・木更寺」と矢野輝雄、
「暑さとのた、かい」名古屋で見
たデザイン博覧会の狂言 徳川美
術館の装束展と新狂言3日連続公
演」柳沢新治の寄稿、賛助企業の
広告。なお本公演につき三宅庄市
(九世藤九郎)に次の挨拶がある。

私事昨年来寿を機に、三宅藤九
郎の名跡を、直孫和泉祥子(和泉
流宗家和泉元秀二女)に継承さ
せ、その披露宴を昨春五月にさせ
ていただきましたが年改まるにあ
たり、明治維新の折、能五流宗家
とともに狂言方として、能楽復興
に尽力いたしました三宅家七世庄
市の名をこのたび隠居名として襲
名することいたしました。何卒
此後とも宜敷くお願いいたしたく
ご挨拶申し上げる次第でございます

◆陽春の舞台から◆ 「青陽会定式能」 「名古屋観世会定例公演能」

竹尾邦太郎

「老松」北野天神に深く懐依
する権津何某(ワキ勝久)、ある
夜、筑紫安楽寺へ詣れとの靈夢に
従者(ワキツレ元・連)を伴い下
向、花守の老翁(老松ノ精シテ一
政)と若者(紅梅殿ノ精ツレ旭)
に出会う。長閑な春光の宮居に梅
の花盛りを言うシテ、ツレ連吟も
しつくりと、手折られてはならじ
と花垣いざや圍はん、と行動を
起こすシテがツレを誘う様に行き
合い、正中へ出る気勢は如何にも
老いの一極。ワキが無遠慮に有名
な飛梅の所在をシテに問えば、飛
梅とは何事とはかりにツレが割つ
て入り、我等は一途に「紅梅殿と
こそ崇め申し候へ」と気色ばむの
も(写真) 進新。成程と納得する

ワキを階揚に執り成すかのシテ
が、さて傍らの松をどう見るかの
問いに、通り一連の答を返すワキ
の想像力の選別、ツレがシテと連
吟に紅梅殿は木も花守も若く華や
か、と地前へ退き下居すれば、正
中佇立のシテの心を受け、対照的
な松の老いを述べる初回(勸鵬・
修一・瞭一ら)で、神慮もいかが
恐ろしや、と静かに腰を落として
ゆき、じつくり下居するシテは如
何にも老い。更に当社の調れ詳し
くととわれ、地と掛合に社の佇ま
いを述べるサシから天神普公の愛
した梅と松に纏わる唐の故事を語
る居タセ。へ紅梅殿も老松も皆未
社と現じ、など一々ワキへ念を押
すよう徐にアシラフところに笠置



青陽会「老松」マエ
左より 吉沢旭、清沢一政
(杉浦賢次氏撮影)



青陽会「老松」アト
清沢一政

気、クセ切に立ち、へ花も松も諸
共に、と指込開き、へ神扱びて失
せにけり、と廻りから返シ句に
權懸へ極く静かに入る。門前ノ者
(アト増造)が曹公安楽寺へ下向
の仔細、紅梅殿老松が崇敬される
事ども唐語に語り、重ねて奇構を
待たれよ、とワキに言い置くと後
へ神の告を待たて見ん、とワキ
・ワキツレの待語に、出
端(誠・昭弘・眞之介・
法輝)で老松ノ精(後シ
テ一政)が紅梅殿を代弁
の地との掛合に一ノ松へ
出現、ワキを慰めんとして
歌を語り舞を舞ひ、と指
込開き、紵衣の露を取つ
て地のうちに舞台へ入る
と、へありがたや、と達
押して真ノ序之舞三段。
重々しく莊重に舞うも慎
重に過ぎて神楽きにゆと
りを欠く感も。キリは
へ千代に八千代に、と袖
返シ下居、へ殿となり
とと曇ノ扇(写真)に
晴れやかな御代を寄ぎ、

へ若のむすまで、と立ち、へ輪を
授くる、とするくと前へ、右
左と威勢よく袖巻キ上げると常座
へ、トメ拍子を踏む。(1時間36
分)
「文蔵」太郎冠者(アト麩)
が戻つたを耳にして出向く主(シ
テ御進)、激怒するも京内参りと
知つては都の様子も聞きたく許せ
ば、伯父御敬を見舞つたとも。予
て伯父御は振舞い好きで、他人様
に珍しい物を供するが、何も食う
ては来なんだか、と問えば食べた
と。それが何か、どうしても知り
たい主。焦らす訳ではなくとも即
答出来ない太郎冠者が「物でござ
る」と問(主)をとれば「何ち
や」と焦る主。「忘れました」と
きては時が明かず、とみて次々あ
れこれと思いつくまゝに貴い物の
名を挙げるが駄目。奇立つ主
の、覚え難い事は物に寄せて
なりとも、の言葉に、俄然、
主の読む草紙の中にそれがあ
つたと思ひ出す太郎冠者。床
(28分)
(4)面くつづく

また息女一人につき父・宗家に
次の挨拶が。
長女淳子、次女祥子とも三才の
初舞台以来、家の子として男子と
同じように稽古、そして舞台と精
進させてまいりました。
おかげさまで私の稽古にも耐え
二人とも那須與市語・三番聖と、
女人としての道も踏みながら流儀
の姿をうけつづ自覚もでき、今日
まで稽古は勿論のこと舞台も嫌わ
ず、物ごころついたときにはすで
に心の中にも身体の中にも狂言が
何の抵抗もなく存在していて今更
これを切り離すことはできない
と、広言してはばからぬほどに成
長を遂げております。
このたび長女淳子が成人を迎え
まして、流儀の職分としての資格
をもつてこれからも一層努力をい
たささせていただきますが二女祥子も昨年の
春、祖父人間宮丸九世三宅藤九郎
が指名いたしましたことで名跡継
承の披露をいたしました、年改
まった平成元年正月に九世三宅藤
九郎が三宅庄市を隠居名として改

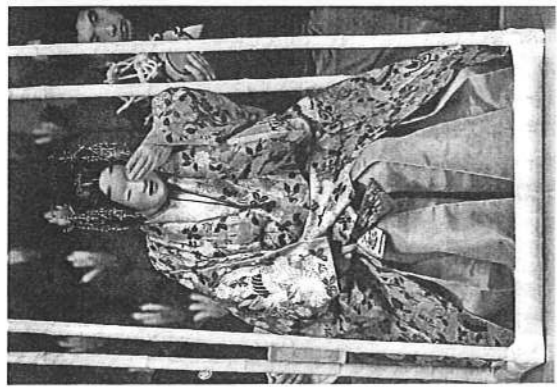
名いたしました。祖父の強い希望
もありこの機会に十世三宅藤九郎
を正式に襲名いたすことになりま
した。
これから姉妹相携えて女性狂言
の道をひらく先達として斯道に励
んでまいることと思います。
なにとぞ前途多難であろうこの
二人に心からなるご温情とご後援
を備へお願い申し上げます。
さて、和泉祥子(一)の三宅藤
九郎襲名のこと、見所(観客)の
大方は九世三宅藤九郎の次男三宅
右近(48)が十世を継ぐものと思
つていたので吃驚した。成程、邦
楽の世界では女流の宗家も多々、
歌舞伎囃子の当代田中傳左衛門の
ように重い名跡を継ぐ例もあるが
能楽界では絶無、後継者に人材が
無ければともかく不審としか言
えない。因に昭和58年、和泉
元彌(当時九歳五ヶ月)三番聖披
露の和泉特別公演では三宅右近は
兄和泉元秀宗家と共に後見に就い
て居り、また父三宅藤九郎シテの
「磁石」ではアトを勤めたが以
後、舞台が途絶える。その事情が
奈辺にあるのか不明で居たこと
ろ、昭和60年10月の「能楽タイム
ズ」第四〇三号の能楽対談・第三
四八回、「夕鶴」と狂言協議会の
題での茂山十之丞と小林真の対談
中、概略次の発言があった。
小林 右近さんに謹慎処分
知が出たのは去年(昭和59年)の
6月ですか。
茂山 ええ。しかし、能楽界全
体が兄弟喧嘩の延長ぐらいに思っ
ていたので表面には出なかつたの
ではないですか。それにしても、
謹慎の理由がはつきりしないです
ね。
小林 問題化してきたのは二月
頃ですか。
茂山 去年の暮れからです。い
ろいろな方面から言つてこられて
いますので、それに対して、何ら
かの意思表明をする必要もあつ
た。協議会としては一方の肩を持
つというのではなしに、将来もこ
ういうことが行なわれるとなれ
ば、人権とか生活権にも関わる大

変なことですから、はつきりさせ
たかつた。それで我々が宗家会に
解決を要請する文書を提出したの
が四月で、その後、狂言協議会に
観世宗家の元正さんがみえまし
て、我々の出した文書に対する回
答ということで、謹慎処分が解除
されて、右近氏が舞台に復帰でき
るようになったと報告されたわけ
です。
小林 こういうことこそ、狂言
協議会が解決していかなくてはは
いけません。
この件で当事者の和泉元秀は昭
和60年12月の「能楽タイムズ」第
四〇五号に「狂言の生存と伝承の
責任について 三宅右近謹慎問題
に關して」の題で四項目に分け
自論を展開するが、見所一般が知
りたいのは、なぜ由緒ある三宅藤
九郎の名跡を美子とは言へば和
泉祥子に継がせ、実力ある美弟三
宅右近を排除したのか、というこ
と。二項目で和泉元秀は次のよう
に述べている。
「そもそも、三宅右近謹慎問題

は、三宅右近個人の名著とブライ
バシーを損う事等、諸々の事情を
配慮し、私の最初の心づもりとし
ましては、三宅右近本人のためにも
出来る限り、美三君には詳しい
事情は知らせない方針で参りまし
たので、今までは、各流宗家だけ
には、通知して頂きました。
その後、本年五月一七日、観世
元正氏に陪同され、私宅を訪れた
三宅右近は自らの非を認め、宗家
に対し陳謝致したことにより、私
も三宅右近の反省の色を汲みと
り、謹慎を解く結果となりました。
——後略——
そして此の問題の解決に尽力し
た狂言協議会は昭和61年2月の
「能楽タイムズ」第四〇七号に
「三宅右近氏の謹慎措置に就い
て」の題で第一回総会の経緯・議
事の顛末を報告するが、結局のと
ころ此の謹慎事件の本体は分ら
ず仕舞。
函に衣着せず、舞袖も恐れない
辛辣な幸流小鼓方の穂高光晴も後
に上梓した自著「近代能楽諸系列

——以下次号——

伝」平成10年7月・能楽出版社刊
に「この間の事情は能楽タイムズ
一九八五年十月号・十二月号や現
代能楽一九八六年三月創刊号など
に見えるが、それらを読んでも真
相はよく分からない」とお上手に
である。
時代は三〇年ほど遡るが昭和28
年4月の「能楽タイムズ」第一四
号に「まり千代姐さんの三番聖」
の記事がある。新橋の名妓まり千
代に稽古をつけたのは新橋素枝連
に狂言を教え、指導していた九世
三宅藤九郎。この素枝連の教育に
当り、老師となつた九世からの跡
目相続を巡る兄弟間の相克葛藤が
謹慎問題の因である、と仄聞した
ことがある。ついで乍ら権図の妙
と明快な線による独自の肖像画で
著名な文化勲章受章の日本画家・
橋本明治(一九〇四—一九九二)
にこの名妓を描いた「まり千代」
昭和29年作がある。



青陽会「楊貴妃」前野都子

(写真 いずれも杉浦賢次氏撮影)



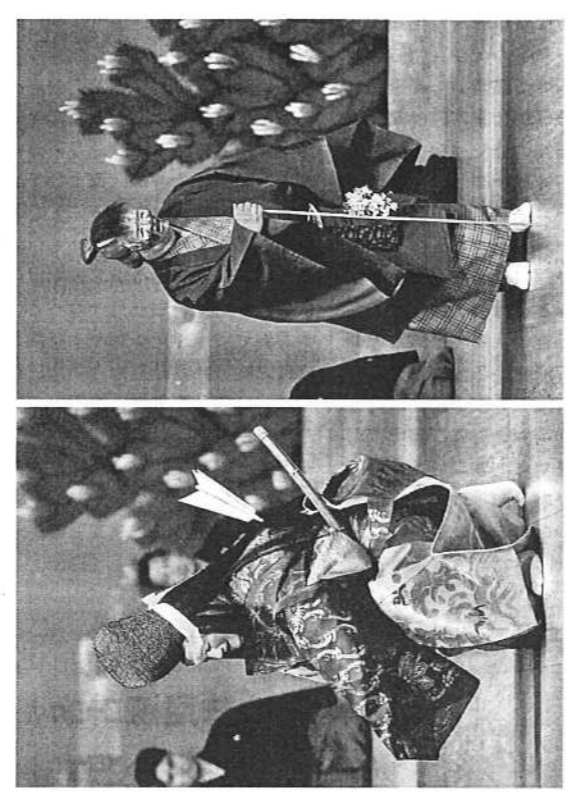
青陽会「文蔵」今枝郁雄

イロエ・舞ケセ・序之舞三段。女流のシテに相応しい肉面の優しさは、すつきりした身のこなしも

③面よりつづき) 「楊貴妃」玄宗皇帝の旨言で亡き楊貴妃の魂魄の在処を尋ねる事を約し、漸く蓬萊宮に到る方士(ワキ元)、名ノリ、道行確りと如何にも謹慎な態度が光る。蓬萊國ノ者(アヒ彈意)の教えを頼り、木真鹿を尋ね当て、目指す楊貴妃(シテ都子)に案内を乞うが、アヒは新人とは云え少々上がり気味で未だし。初回(勘齋・修一・敏彦ら)の切、ハ粉黛の顔色の無きも、で引廻シが取られ床几のシテが姿を現わす。問答で帝の近況伝えるワキ、却つて辛さが暮るとシテ、約を采した証拠をワキが望めば、シテから授かる筈には類似の品もあるゆえ、帝と貴妃だけが知る言葉も、とワキ。この辺り、しみり感傷に耽るシテはハ私語なれども、とシラル入の思い(写真)。ハ比翼も友を恋ひ、と作物を出、ワキに帝への伝言を托せば、鏡を戻させてそれを押し、舞に在りし日々を偲ぶ。因に比翼は伝説上の鳥で雌雄各一日・一翼、常に対(ついで)飛ぶとい

美しい。舞上げ、ハ稀にぞ返す、の一瞬の絶向も大過なくキリハ。ワキは叩頭して再び鏡を扇に受け、眼を乞い突つと一ノ松、へさるにても、と名残を惜しむシテへ下居一礼すると地のうちに幕へ。シテも立つと小廻りに作物へ入り、直つてハ伏し沈み、扇で面を隠し、すく立つとハ留まりける、と地一杯に作物出てトメた。曲趣に適う品のよい舞台だった。(1時間30分・4月9日・青陽会定式能)

「忠度・替之型」シテ女祥。前は須磨浦で討死にした忠度の化身の老翁、面阿古父尉(か)横浅黄・茶系小格子着付・黒茶衣・杖・負柴でなく左手に桜枝を持つ。曲の深い解釈と爪先に至るまで神経の行き届く演出を具現するシテ、山を下りる心に一ノ松で不図足を止め、ハ海士の呼声、を右ウケて聞き、直つてさりげなく杖を左へ寄せ、ハ鳴く十鳥の音を遠くに聞かか風響もこまやが。へそもくこの須磨の浦、土地柄淋しくないとは云えないが、と一足退き、それでも気持ちは倦びしさの中の華、山陰の桜は何某の墓標、と幕へ眺めるところ、一木の桜に奪せる強い思いが。ハ足引



観世会「忠度・替之型」マエ 梅若女祥
観世会「忠度 替之型」アト 梅若女祥

(写真は杉浦賢次氏撮影)

の山より帰る、と杖軽く一ツ突き運び出し舞台へ。旅僧(ワキ勝久)との問答は、山に通う故に山人、と誤解するワキに、「そも海士の汲む汐を其の俵置き俵へか」となるシテ(写真)の皮肉は、地 邦久・正邦・修一ら)との掛合にハ奈りに愚かなるお僧の御座かな。とワキへアシラと語メルところ迫力。どの浦も同じだが、ただ辛いのは花にハ墓の風や山風の音、と僅かに見上げ、心持ち面を伏せ耳を澄ますと小廻り常座へ。ハ誘ふ浦風に、右上方を眺め、一・二足退り、ハ山の桜も散るものを、と桜枝を挙げる機にしたが、脚枝に見るのでなく珍しかつた。ワキがシテに宿を借りるところは、問答・掛合に「行き暮れて木の下蔭を宿とせば、花や今宵の主ならまし」の一言にみる通り。シテの方はワキの代弁をする地ハ法の差聞きて花の右に、と勧められてワキに近寄り正中に下居、桜枝を置くが、桜枝にも象徴される忠度の、回向を願うため。ハ佛果を得んを憶しき、とシテがワキへアシラフ養情も、先にワキをけなした機とは自ずから異なる。立つとハ(夢の告音をも)待ち給へ、とワキハ詰メ念を押すとハ

都へ言伝て申さんとて、右へ廻り、ハ行く方知らず、の返シ句で橋懸へ、送り笛で入る。材は地のうちに後見がひく。須磨ノ里人(アヒ女彦)がワキとの問答から居語に忠度の最期、若木の桜の謂れなどを語つて退くと後場。

ハ神を片歌く草枕、と野宿の心は一夜の花に旅寝して心も共に更けゆくや嵐嵐しき気色かな、とワキは高安流の待謡。現われる後シテは忠度亡霊、平家一門都落ちのへさも忙がはしかりし身の、中に在つてニツ拍子に逸る気持ちをみせ、返シ句に二ノ松へ走るとハ俊成の家に、と一ノ松へ取つて返し、ハ歌の望みき、と自分の歌が千載集に採られるよう歎願の心を俊成に、アシラフかに見せ、望みが叶うと、ハまた弓箭に携はりて、と陣中へ戻る心に舞台へ入つて来るが、須磨の浦は源氏にゆかりで平家には無縁、踏む四ツ拍子は地団駄であらう。へさる程に、で再度は橋懸へ行かず舞台を一巡、「六弥太を取つて抑へ」る所は又ミ、膝をつき、神をさつと返し、ぐつと抑え込む



観世会「昆布売」左より佐藤融、井上靖浩 (杉浦賢次氏撮影)

力強さ(写真)胸がすく。連続する型所をきびくと極め、攻守が逆転、シテはハ今は敵はじ、と安座、ハ光明遍照……と片手台掌はハ御声の下よりも、と静かに手を下ろしてくるのが無念の哀しみ。目打も落とされる扇の型から六弥太の立場に替ると、ハ僕はしや、と立ち、忠度の死を悼む場に。脇正で膝をつき、死骸にハ錦うちの後見がひく。須磨ノ里人(アヒ女彦)がワキとの問答から居語に忠度の最期、若木の桜の謂れなどを語つて退くと後場。

ハ神を片歌く草枕、と野宿の心は一夜の花に旅寝して心も共に更けゆくや嵐嵐しき気色かな、とワキは高安流の待謡。現われる後シテは忠度亡霊、平家一門都落ちのへさも忙がはしかりし身の、中に在つてニツ拍子に逸る気持ちをみせ、返シ句に二ノ松へ走るとハ俊成の家に、と一ノ松へ取つて返し、ハ歌の望みき、と自分の歌が千載集に採られるよう歎願の心を俊成に、アシラフかに見せ、望みが叶うと、ハまた弓箭に携はりて、と陣中へ戻る心に舞台へ入つて来るが、須磨の浦は源氏にゆかりで平家には無縁、踏む四ツ拍子は地団駄であらう。へさる程に、で再度は橋懸へ行かず舞台を一巡、「六弥太を取つて抑へ」る所は又ミ、膝をつき、神をさつと返し、ぐつと抑え込む



観世会「葵上・梓之出・空之折」マエ 久田勘齋

兵衛・孝一郎・真之介、後見は邦弘・大志。(1時間33分)

「昆布売」大名(シテ靖浩)が自身に太刀を持つのは体面に関わるか……。誰かに持たそうと思うところ、やつて来た昆布売(アト融)に早速擦り寄り回遭、初対面で押れくしいが、と事前に断るの真のうら、無心を聞いては呉れまいかと切り出す。似合う用なの直垂、を眺める心は、余人に非ずいかにさまこれは、と立ち、矢を取り常座へ、ハ旅僧の題を据え、と短冊を詠む態に臨む二ツ拍子は驚きの気持。短冊手に舞台一巡のうちに下の句を飲み正中へ、へさては、と指分して右へ廻りハ薩摩の守、とハタと思ひ当る打合に思はず矢を捨て、下居合掌には深い哀傷が。

キリは忠度の心に戻るシテ、ワキにハ御身この花の蔭に、立寄られたので、と袖アシラヒし、ハ斯く物語申さんとて、とワキへ進み正中へ。ハ日を暮し留めし(傷腹、得物はこちら

を暗いまゝ)なり、と扇を上から下へ降ろす程に時間を象徴的にみせるのが妙。シテ忠度ノ亡霊、即ちハ花は根に帰るなかり、と地のうちに一ノ松へ、ハ木蔭を旅の、と袖返シ舞ノ扇、ハ花こそまなりけれ、と右ウケ留メ拍子。目の離せない巧緻な舞台、面白かつた。雌子は六郎とばかり逆にシテを脅して小サ刀を取り上げ(写真)、昆布を売らせる。アトに命じられるがま、様々な売り声の節で売らされ、「そちは中々覺えの良い者ぢや」と煽てられ、最後は「今度は殊の外むつかしさうな事ぢや」と結構乗り気に踊り節で。権柄ずくなシテが体面に囚われ、我れと我が太刀で自爛自縛の憂き目。鳥の合つたシテ・アト両者の熱演。(26分)

「葵上・梓之出・空之折」葵上の御座ただならず、臣下(ワキツレ元)は口寄せの上手、照日ノ巫女(ツレ旭)を招き、物の怪を呼び出すよう命じると、ツレは脇座を立ち両腕の葵上を象徴する出小袖の前、正中に出ると、アツサの雌子の中へ天清浄、と謡い出し、ハ六根清浄、で幕が揚がる。姿現わす六条御鳥所ノ生霊(シテ勘齋)、二ノ松でシラルと一ノ松へ、三ツの車に、と謡い出し、右ウケ二ノ向へ連る方なきこそ悲しけれ、と直つてシラルと小書で直くハ梓の弓の音は、となり、刃を親うか。ハ裏屋の、でツレは脇座へ戻り、シテはハ姿をなれば、と勾欄に縋つてシラル、懐に取り付く心。傷わし、とその様子眺め、ツレはワキツレにアシラフと、物の怪は「もし斯様の人にてもや」とワキツレには良えなシテの姿を伝える。大方さうだらうとワキツレは姿が見えないのことでツレに対し「名を御名のり候へ」と。シラル舞いたシテは何事



観世会「葵上・梓之出・空之折」アト 左より久田勘齋、飯富雅介 (杉浦賢次氏撮影)

もなく舞台へ入り、常座から出小袖を脱ぎ、大小前に来てハ(それぞれ姿婆電光の境には恨むべき)人もなく、と下居、ハいつまで浮かれ初めつらん、とシラル。クドキは鬱屈した思い吐き出そうの重苦しさ。

枕之段は、ハ今は打たでは、とキツと唇立ツ勢いを留めんとするツレを、「いや如何に言ふとも」と左袖アシラヒ、拒む心にすつと立ち出小袖の前、膝を滑き「ぢやう」と打つ下ろす型に直く立ち常座、ハ思ひ知れ、と強く一ツ踏む拍子に怨念の怖さ。沢辺の娘はあまり面使とせず割に淡泊、ハなほも思ひは、と扇抱えて出小袖を脱めつけ(写真)、謡叩きつけると二ノ松へ走り乍ら塵籠引き脱ぎ、被いて入るところ、凄切。巫女では足りず、横川小聖(ワキ雅介)が呼ばれると後場。

ワキが加持を始める、忍びやかに被衣でワキの後ろに居るシテ、被衣を上げる気配に振り向き数珠を握むワキ(写真)、鬼気迫る。折りに、シテは長巻総巻かし、二ノ松へ抜けて胸杖にワキを見込むところも無気味。ワキはシテを見失つた態に、有らぬ方は目付柱、胸杖に向かつて懸命に折る小書「空之折」が面白い。赤く打杖振りかざし、非難符を鮮やかに擲いて立ち向かうシテも、ワキに祈り伏せられ、ハ即身成佛、と数珠で打ち据えられ安座。般若若に耳義き、ハこれまでぞ、ワキへアシラフと、キリは下居に胸杖のシテ、ハ忍辱慈悲、と立つと打杖を捨て、ハ得脱の身となり、常座で合掌、返シ句に右ウケ詰メ留めた。終始、緊張の引き締った舞台だった。雌子は誠・昭弘・敏一・洋輝、後見に邦久・嘉宏。(52分・4月10日・観世会定例公演)

【訂正】本紙前号四目号の3面「春の舞台から」の8段「雲林院」の3行目「雲夢」とあるのは、「雲塵」の誤りでした。お詫びして訂正します。

能楽の友

発行 能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-798 8 4
FAX (052) 733-283 7
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
郵送料 1年 1800円
郵送の場合 1年 100円

NHK放送予定(平成23年6月~7月)
6月26日 NHK-FM ラジオ能楽鑑賞(日曜日 7時20分~8時15分) 小林与史郎
7月3日 素謡「求」 梅若万三郎
7月10日 素謡「千」 佐々木宗生
7月17日 素謡「海」 長山礼三郎
7月24日 素謡「盛」 片山九郎右衛門
7月31日 狂言「佐渡狐」(和泉流) 三宅右近
「見物左衛門・花見」(和泉流) 石田幸雄

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係)
(TEL 052-231-0088)

三交会25周年記念大会 (無料)
平成23年度名古屋能楽堂 (関係者)
小・中学生芸術鑑賞会

平成23年度名古屋能楽堂小・中学生鑑賞会 (関係者)
舞古屋能楽堂7月定例公演 (無料)
名古屋能楽堂同好会ゆかた祭り (無料)
10日(日) 御酒落名匠狂言舞 (無料)
18日(月) 言也いまい (無料)
23日(土) 4回名古屋山 (無料)
24日(日) 4回名古屋山 (無料)
31日(日) 第3回全国学生能楽コンクール (無料)

武蔵野大学 能楽公開講座

9月29日と10月5日
武蔵野大学能楽資料センターでは、「能・狂言と近代国家」のテーマで平成二十三年度公開講座として今夏六月に二回開催。今秋九月二十九日と十月五日に次の講座が開講される。
▽九月二十九日(初代権若美の日清・日露戦争 明治20年) 30年

第10回 名駅新能 能「高砂」「石橋」 7月31日 観世宗家来演

第10回記念「名古屋名駅新能」は、7月31日(日)観世宗家・観世清和師が来演して、JR名古屋駅タワー1スカーゲン特設会場で開催される。午後5時開場予定、午後6時開演。
入場は無料。ただし整理券が必要。整理券の応募方法は、往復はがきに郵便番号、住所、氏名、年齢、電話、希望席数(一通2名まで)を記入の上、次の宛先へ送付。当選は発送をもって替える。
宛先 〒453-1002 名古屋市中村区名駅4-16、大黒寺内、名古屋名駅新能実行委員会事務局 電話052-482-3680。応募締切は7月13日(必着)。
※自由席は当日先着順
ホームページからの応募はごまかせない
http://www.taki.or.jp/
「名古屋名駅新能」主催 財団法人観世文庫、名古屋名駅新能実行委員会



演能は次のとおり。
観世流能「高砂」八段之舞
シテ観世清和、ツレ坂口貴信、ワキ高安勝久、ワキツレ杉江元、相元正樹、間狂言・佐藤友彦、笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村総一郎、太鼓・加藤洋樹
後見 梅田邦久、上田公威、梅田嘉宏
地謡 観世芳伸、上田貴弘、武田邦弘、上田拓司、清沢一政、木月宣行、武田大志、吉沢旭
舞囃子「玉響」シテ久田三津子、笛・竹市学、小鼓・船戸昭弘、大鼓・河村眞之介、地謡 山田義高、上田拓司、藤谷章彌、松山幸親、八神孝充
狂言「鏡男」シテ井上靖浩、アト佐藤麟、アト今枝郁雄
仕舞「田村」観世芳伸、「西行」松橋間懸観
半能「石橋」大獅子
シテ久田勘彌、ツレ上田公威、梅田嘉宏、久田勘吉郎、ワキ飯富雅介、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・船戸昭弘、大鼓・河村眞之介、太鼓・加藤洋輝、後見上田貴弘、武田大志、吉沢旭、地謡 下川宜長、山田義高、古橋正邦、清沢一政、藤谷章彌、木月宣行、松山幸親、八神孝充

お洒落 名匠狂言会 7月10日 名古屋能楽堂

狂言共同社では、七月十日(日)名古屋能楽堂で「第十二回御酒落名匠狂言会」を開催する。
共同社では、昨年創立百二十年を記念して公演したが、今回は狂

代「権若日記」から
近世日本文学研究家 気多憲子
氏
▽十月五日(日)「明治演劇史の中の能・狂言」明治末から大正にかけて
能楽師・狂言方大藏流 山本英次郎氏
演劇評論家 渡辺 保氏
武蔵野大学客員教授 羽田飛氏
時間 午前十時四十分~十二時十分
分
会場 武蔵野大学6号館雷頂講堂
(東京都西東京市新町一丁目二〇)
聴講無料(予約不要)

演能案内

長袖会 舞の会

七月二日(土)十時半始
名古屋能楽堂
「雲雀山」塩津 圭介
仕舞「天鼓」長田 郷
「殺生石」松井 俊介
独吟「程政」大原 佳子
仕舞「岩船」古市 拓也
「大江山」森原 泰匡
「大江山」横尾 淳子
「船巻」鳥居 仁子
「船巻」北井 万理恵
「羽衣」中井 理恵
「雲林院」葛谷 朋美
舞囃子「鱗形」伊藤 英毅
「船巻」古本 和枝
仕舞「女郎花」加藤 領一
「網之段」橋田多重子
「網之段」三浦美千代
独吟「橋巻」岡田 元良
柳谷多美子
能 飯富 雅介
河村総一郎 加藤 洋輝
後藤嘉津幸 大野 誠
加藤 領一 松井 俊介
森田 哲男 大村 定一
伊藤 英毅 高林 伸二
黒野 安菜夫 内田 成信
長田 郷
長田 郷

能 杜 若 飯富 雅介
河村総一郎 加藤 洋輝
後藤嘉津幸 大野 誠
加藤 領一 松井 俊介
森田 哲男 大村 定一
伊藤 英毅 高林 伸二
黒野 安菜夫 内田 成信
長田 郷
長田 郷
「源氏供養」坂田 祥子、河村以佐子、藤本 義明
小村 昌子、松田臺代子、濱地 弘子、伊藤すへの
仕舞「駒之段」石井小枝子、「母之段」本多 敏子
舞囃子「西王母」山本 雅枝
「富太鼓」中澤 友里、「松風」庄司乃ぶ代
独吟「紅葉」手塚 昭子
「紅葉」星野安菜夫、英 上 竹田 哲男
祝言 舞囃子「岩船」長田 郷
主 催 喜多流 長袖会
長田 郷
長田 郷

名古屋能楽堂七月定例公演

七月三日(日)午後二時開演
名古屋能楽堂
解説「一角仙人」の見どころ 梅田邦久師

狂言 蚊相撲

大名 野村又三郎 7ト 松田 高藏
後見 後野口 隆行
井上 靖浩
観神 久田勘吉郎
梅田夫人 梅田 嘉宏
梅田 邦久
能 一角仙人
飯富 雅介 河村総一郎 鬼頭 義命
橋本 正幸 後藤嘉津幸 藤田六郎兵衛
酔中之舞 相元 正樹

地謡 黒田 博加
八神 孝亮 清江 敏彦
須部 高徳 江修一
浦 高徳 藤一
(午後三時四十分終了予定)

〔チケット料金〕
前売 指定席四〇〇〇円 主催 名古屋文化振興事業団
自由席三〇〇〇円 (名古屋能楽堂)
学生席二〇〇〇円 能楽協会名古屋支部
自由席のみ当日五〇〇円増
取扱い 名古屋能楽堂(052-231-0088)
プレイガイド(英)プレチケ(松坂屋他)
チケットぴあ(052-02-9999) Pコード412
4270-02 ほか

狂言共同社 物故者追善 第12回 お洒落 名匠狂言会

七月十日(日)午後二時三十分開演
名古屋能楽堂

〔和泉流〕蚊相撲

大名 善竹 十郎 本師 善竹 大二郎
教の精 善竹 富太郎
後見 野島 伸七
〔和泉流〕重 喜 重喜 井上 蒼大 侍 井上 靖浩
地謡 合枝 靖雄
井上 枝 後藤 裕
後見 大野 弘之

〔和泉流〕悪太郎

悪太郎 佐藤 融 伯父 佐藤 友彦
後見 今枝 靖雄
〔和泉流〕箕 被 何来 野村 萬 妻 野村 万藏
後見 野村 萬丞

〔和泉流〕母

山伏 井上 靖浩
何来 大野 弘
妻 井上 上 枝 後藤 裕
妻 井上 上 枝 後藤 裕
妻 井上 上 枝 後藤 裕
妻 井上 上 枝 後藤 裕
後見 佐藤 友彦
終演予定 午後四時三十分
主催 狂言共同社

〔チケット〕前売 前S席七〇〇〇円、A席四〇〇〇円
(当日一〇〇〇円増)
〔取扱い〕チケットぴあ(TEL 052-057-002)、チケットぴあスポット
(Pコード412・8070・02・9999)
ファミリア・マルト・サリカルK、サンクス
名古屋能楽堂(052-231-0088)
プレイガイド(英)プレチケ(松坂屋他)
ナナイア・プレイガイド
狂言共同社
(052-834-8607又は052-911-8784)

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ⑩

竹尾 邦太郎

七、「名古屋和泉会」 付「和泉会別会」

平成二年一月二三日「和泉会別会」は和泉流九代目宗家・山脇和泉守元信(遺傳)三百年祭和泉元彌「釣狐」披きと銘打つ。B5判A4紙パンフレット24頁、和泉宗家後援会名古屋支部長・本多敏雄と主催の和泉元秀のあいさつ、番組、曲目解説(最尾一雄)、D・リチー、S・ワナメイカー、関屋俊彦、関山和夫、北川

【会場】全指定席
正座席六〇〇〇円
脇・中正座席四〇〇〇円
(学生半額)
【チケット】豊田市能楽堂(電0565358800)
チケットぴあ(電0570029999)
Pコード4099904

浮舟

前・男女 榎岡 金記
後・浮舟の霊 榎岡 金記
ワキ・旅の僧 殿田 謙吉
アイ・里の男 野村又三郎
笛 藤田六郎兵衛
小鼓 成田 達志
大鼓 河村眞之介
後見 守屋 泰利
後見 山中 一馬

加藤 英昭 金春 總高
鬼頭 尚久 本田 光洋
本田 布由 吉場 廣明
前田 登 本田 芳樹

主催 豊田市能楽堂
豊田市・豊田市教育委員会
豊田市西町一丁目200番地
(電0565358200)

金春流能「浮舟」

16日 豊田市能楽堂七月能

豊田市能楽堂の「七月能」は、七月十六日(土)豊田市能楽堂で開催される。午後二時三十分開場、午後二時開演。番組は次のとおり。

忠彦、柳沢新治、矢野輝彦、山崎有一郎、荒井良雄、永六輔らの諸士による遺傳及び釣狐に関する寄稿、賛助広告多々。

番組は兼雌子「神楽」藤田六郎兵衛、福井啓次郎、寛範一、助川龍夫、狂言四番「瓢の神」和泉元秀・和泉淳子(瓢の神)佐藤友彦・野村信行・鳥越正夫・吉澤洋一郎・榎谷朝暉、「釣狐」和泉元彌・井上祐一・後見和泉元秀・佐藤友彦、「磁石」井上松次郎(すっぱ)佐藤友彦(田舎者)大野弘之(八入)、「千鳥」三宅藤九郎(和泉祥子)和泉淳子(酒屋)和泉元秀(主)後見和泉元彌。

和泉元秀はあいつの中で概略次のように述べる。

本日の追善公演で未だ十六歳で

【場内】全指定席
正座席六〇〇〇円
脇・中正座席四〇〇〇円
(学生半額)
【チケット】豊田市能楽堂(電0565358800)
チケットぴあ(電0570029999)
Pコード4099904

浮舟

前・男女 榎岡 金記
後・浮舟の霊 榎岡 金記
ワキ・旅の僧 殿田 謙吉
アイ・里の男 野村又三郎
笛 藤田六郎兵衛
小鼓 成田 達志
大鼓 河村眞之介
後見 守屋 泰利
後見 山中 一馬

加藤 英昭 金春 總高
鬼頭 尚久 本田 光洋
本田 布由 吉場 廣明
前田 登 本田 芳樹

主催 豊田市能楽堂
豊田市・豊田市教育委員会
豊田市西町一丁目200番地
(電0565358200)

第5回 吉田城新能

8月6日 豊橋公園本丸跡

豊橋 NPO法人三河三座(藤村圭喜理事長)主催の「吉田城新能」はきたる八月六日(土)午後六時から豊橋公園吉田城本丸跡で開催される。開場午後五時。

吉田城新能は今回で第五回を数え、豊橋市、豊川市、蒲郡市、新城市、田原市、豊橋文化振興財団、各市の文化協会が後援している。

能組は、「本日の能について」(夏田郷氏解説)
仕舞「西王母」佐藤寛泰、「八島」栗谷浩之、「玉葱」内田成信、「彈丸」大村定、「殺生石」高林伸二

火入式
舞雌子「高砂」長田郷
狂言「附子」井上靖浩 佐藤 融、今枝郁雄

能「葵上」シメ長田郷、ツレ松井俊介、ワキ橋本孝、ワキツレ相元昌樹、笛・大野誠、小鼓・後藤嘉津彦、大鼓・河村眞之介、太鼓・加藤洋輔

入場料五〇〇〇円、三河三座会員四五〇〇円。雨天の場合、豊橋中学校体育館(当日正午決定)

【場内】全指定席
正座席六〇〇〇円
脇・中正座席四〇〇〇円
(学生半額)
【チケット】豊田市能楽堂(電0565358800)
チケットぴあ(電0570029999)
Pコード4099904

五十周年記念 岐阜幽謡会

岐阜幽謡会(片山幽謡師主宰)は、七月三十一日(日)岐阜市大宮公園前、萬松館で、五十周年記念岐阜幽謡会を開催する。午前十時始、来場歓迎。

番組は、素謡「三輪」高井昭裕、浅井徳光、「羽衣」永津邦彦、安江幸洋、「盛久」曾根健之、熊田宗次、ワキツレ河崎博、「井筒」新谷樽子、小寺妙子、「景清」早川力、トモ野野公子、ヒメ富田静美、福井芳秀、「木賊」太田和夫、ツレ河崎博、橋本磯遣、「鸚鵡小町」平野薫夫、片山九郎右衛門

舞雌子「狸々」富田静美、新谷樽子、「菊慈童」柳野公子

番外仕舞「風山」片山九郎右衛門、番外舞雌子「姥巻」片山幽謡

【場内】全指定席
正座席六〇〇〇円
脇・中正座席四〇〇〇円
(学生半額)
【チケット】豊田市能楽堂(電0565358800)
チケットぴあ(電0570029999)
Pコード4099904

五十周年記念 岐阜幽謡会

岐阜幽謡会(片山幽謡師主宰)は、七月三十一日(日)岐阜市大宮公園前、萬松館で、五十周年記念岐阜幽謡会を開催する。午前十時始、来場歓迎。

番組は、素謡「三輪」高井昭裕、浅井徳光、「羽衣」永津邦彦、安江幸洋、「盛久」曾根健之、熊田宗次、ワキツレ河崎博、「井筒」新谷樽子、小寺妙子、「景清」早川力、トモ野野公子、ヒメ富田静美、福井芳秀、「木賊」太田和夫、ツレ河崎博、橋本磯遣、「鸚鵡小町」平野薫夫、片山九郎右衛門

舞雌子「狸々」富田静美、新谷樽子、「菊慈童」柳野公子

番外仕舞「風山」片山九郎右衛門、番外舞雌子「姥巻」片山幽謡

第5回 吉田城新能

8月6日 豊橋公園本丸跡

豊橋 NPO法人三河三座(藤村圭喜理事長)主催の「吉田城新能」はきたる八月六日(土)午後六時から豊橋公園吉田城本丸跡で開催される。開場午後五時。

御来場歓迎(入場無料)

主催 也留舞会
参加 如月舞会
熊本/築池 みのる会
三重/伊勢 一色町芸保存会

連絡先 野村事務所
名古屋市中区栄区一丁目〇番号
TEL 〇五二二三五〇七九七二
FAX 〇五二二三五〇七九七二

【場内】全指定席
正座席六〇〇〇円
脇・中正座席四〇〇〇円
(学生半額)
【チケット】豊田市能楽堂(電0565358800)
チケットぴあ(電0570029999)
Pコード4099904

御来場歓迎(入場無料)

主催 也留舞会
参加 如月舞会
熊本/築池 みのる会
三重/伊勢 一色町芸保存会

連絡先 野村事務所
名古屋市中区栄区一丁目〇番号
TEL 〇五二二三五〇七九七二
FAX 〇五二二三五〇七九七二

十四世 野村又三郎 襲名記念 狂言也留舞会

七月十八日(海の日) 午前十時開場
名古屋能楽堂

【第一部】午前十時三十分開演

未だひろがり 果報者 磯村 美和 本殿冠者(高段二年志) スッパ 奥津健太郎

佐渡と狐 鏡の屋 東 信彰 鏡の屋 守屋 善巳 兼 者 田島 晴雄

いろは 弟(神谷二愛々) 兄 野村 信明(小学五年志)

井 雁 白石 敦子 何 某 奥津健太郎(小学五年志)

原 木 平山みよ子 何 某 奥津健太郎(小学五年志)

太殿冠者 伴野 俊彦 主 野村又三郎

電 衫浦 勝裕 兼 師 松田 高義

男 高村 幸子 何 某 奥津健太郎

重 喜 堀場 智吾 任 持 伊藤 泰

祖父 喜多 芳夫 太殿冠者 松田 高義

(終演予定 午後一時三十分頃)

【第二部】午後二時開演

裁大名 大名 加藤志津子 本殿冠者 野口 隆行 庭の孝主 藤波 徹

いろは 金法師 加美山 舞 兼 野村又三郎(小学二年志)

舎弟 兄 藤 里美 何 某 伴野 俊彦

山伏 小川 寛範 子 親 野口 隆行(高段三年志) 奥津健太郎

太殿冠者 神戸 ことね 主 松田 高義

大名 田島 晴雄 太殿冠者 田島 晴太郎 坂井の者 服部 和洋

陸に上れば 伊藤 悦子

山 殿 伊達 義也 女 伊達 義子(中学二年志)

スッパ 山内 理至 田舎者 原 有作

太殿冠者 安保 育子 主 田端 泰衛

親太郎 吉村 紀子 下京の妻 野村又三郎 上京の妻 野口 隆行

山伏 宇佐美昭子 伊勢の脚師 坂倉 純子 茶屋 屋林 恭子 大黒 柴田 鑄子

(終演予定 午後六時頃)

【場内】全指定席
正座席六〇〇〇円
脇・中正座席四〇〇〇円
(学生半額)
【チケット】豊田市能楽堂(電0565358800)
チケットぴあ(電0570029999)
Pコード4099904

青陽会定式能(第五十五期)

七月三十日(土) 十二時半始
名古屋能楽堂

仕舞 花 筐 狂 入田三連子 地謡 村井 邦子 八神 孝元 武田 大志 今沢 美和

能 清 經 萬安 勝久 河村眞之介 後藤 孝郎 鹿取 希世

後見 豊野 邦久 地謡 村井 邦子 梅田 寛宏 高橋 幸親 武田 邦弘 藤田 一政

(番組⑤面へつづく)

【場内】全指定席
正座席六〇〇〇円
脇・中正座席四〇〇〇円
(学生半額)
【チケット】豊田市能楽堂(電0565358800)
チケットぴあ(電0570029999)
Pコード4099904

第四回 名古屋片山能

七月二十四日(日) 午後二時始
名古屋能楽堂

能 狸々 乱 飯富 雅介 河村眞之介 加藤 洋輔 和合三段之舞 後藤 嘉津幸 藤田六郎兵衛

仕舞 佔 片山 幽謡 地謡 大江 広祐 片山 伸吾 分林 道治 河村 博重 橋本 忠樹 古橋 正邦

後見 片山 幽謡 地謡 大江 広祐 武田 邦弘 梅田 寛宏 武田 邦弘 橋本 忠樹 古橋 正邦

地謡 分林 道治 武田 邦弘

【補助能】
花見 味方 青木 道喜 片山 幽謡 佐々木 信子 分林 道治 佐々木 信子 大江 信之助 片山 清愛 片山 九郎右衛門

能 鞍馬天狗 飯富 雅介 河村眞之介 加藤 洋輔 白願 後藤 嘉津幸 藤田六郎兵衛

間 鹿力 野村又三郎 木葉天狗 松田 高義

後見 片山 幽謡 地謡 大江 広祐 河村 博重 青木 道喜 梅田 寛宏 武田 邦弘 橋本 忠樹 古橋 正邦

(終演予定 四時半頃)

第4回 まいまい狂言会

七月二十三日(土) 十時十五分開演
名古屋能楽堂

① 狂言 報 猿 大名 野村又三郎 本殿冠者 野村 信明 兼 者 野村 信明 小兼 者 野村 信明

② 狂言であ・そ・ば!!
親子で楽しむワークショップ

料金 大人二五〇〇円 主催 まいまい狂言会
小人一〇〇〇円(全指定席) 問い合わせ TEL 050(10)9113
(三歳以上小学生まで)



狸腹鼓

和泉元秀
和泉元秀舞台五十年和泉流
現行曲全曲完演と英国シヤパン
フェスティバル参加公演の記念狂言
会、主催は和泉宗家後援会。B5
判A4横紙パンフレット20頁の内
容は「ごあいさつ」本多静雄・和
泉元秀、番組、曲目解説、「舞台
五十年を御祝いで」六世中村歌
右衛門、「三代にわたる芸の伝
承」矢野輝雄、「御祝詞にかえ
て」松本幸四郎、「和泉元秀師の
少年時代」長尾一雄、「狐と狸
と」柳沢新治、「狂言シヤパン」
ピアの英国公演を観て」井村君
江、「和泉元秀君のこと」長尾一

雄、「青春・和泉元彌」藤田洋、
「十代で釣狐に挑む元彌」山崎有
一郎、贊助企業の広告。
番組は狂言「蟬生」三宅藤九郎
(和泉祥子)和泉泉子、佐藤友
彦、素雛子「序之舞」藤田六郎兵
衛・福井啓次郎・河村総一郎、狂
言三番「狸腹鼓」和泉元秀・井上
祐一・後見和泉元彌・井上松次郎
・佐藤友彦、「葦袴巻」井上松次
郎・大野弘之・井上礼之助(伯
父)、「骨皮」和泉元彌・和泉元
秀・井上靖浩(倉徳)松田高義
(馬徳)野村信行。和泉元秀の挨拶は左の通り。



お陰をもちまして舞台五十年を
恙なく迎え、和泉流現行曲すべて
を勤めあげる幸運を得ましたこと
は本欄此上もございません。
省みますと七歳で宗家を継承い
たしました時から昨年十二月十九
日に没しました美父二世三宅庄市
が目的のある稽古と、稽古のため
の稽古を両輪として二十歳の成人
までの間に、実に膨大な稽古を与
えてくれたことが今日の結果を生
む大きな財産でありました。

「美盛」何事もなく遊行上人
(ワキ勝久)と從僧(ワキツレ元
幸)が座着くと、里人(アト
麿)の所謂狂言口開。日中、ワキ
が独り言をする、と不審がる世人
があれは知らせるよう触れると、ワ
キ・ワキツレ説法の場。連吟の、
厚みのある着に惹かれ一松へ出
る老翁(シヤ猶義)、面朝倉尉・
襟浅黄・濃緑無地敷目着付・朽
葉色水衣の姿に致珠をもつ。へ笠
歌遣かに聞ゆ、と諷い出しも神妙
に、へ紫雲の立つて候ぞや、と静
かに合掌するところ、有難さも如
実。へ一念翁名へ選どへ無阿
弥陀佛、と常座へ、下居ワキへ合
掌する。シヤ・ワキ問答は、余人
を問うワキに、折角の法悦境に浸
って居るところを、邪魔されるか
らに披露の名を明かすこと厭うシ
ヤ。さりながら、ワキが「只包

そしてただ狂言だけの知識にと
とまらず必要とするあらゆる芸を
習得させ、見学することを奨励し
十代から二十代をただひたすら斯
道一筋に専念することのできた
時代に、良き師に師事できたお陰
でもあります。
「狸腹鼓」を完演記念に勤めさ
せていただきます(写真)が、此

催し 夏休み親子 能楽教室

8月2・3日 名古屋能楽堂

名古屋能楽堂では、能の世界を
親子で体感し、のびやかな、夏
休み親子能楽教室を開催する。

と き 八月二日(火) 三日(水)の2
日間。午前10時から午後
2時30分

会 場 名古屋能楽堂・けい古場

対 象 小学校一年生から中学三
年生までの子どもとその
保護者

要 員 三十組六十人(定員を越
えた場合は抽せん)

曲 目 能「狸々」

内 容 一日目/仕舞と謡の練習
二日目/能面体験、能舞
台でのミニ発表

講 師 衣斐正直・衣斐葵、大塚
恵(宝生流シヤ方)

◆陽春から初夏の舞台◆

「平成廿三年度・梅猶会名古屋能楽公演」と「第五回・西村同門会」「第五回金剛定期能」

竹尾邦太郎

「美盛」何事もなく遊行上人
(ワキ勝久)と從僧(ワキツレ元
幸)が座着くと、里人(アト
麿)の所謂狂言口開。日中、ワキ
が独り言をする、と不審がる世人
があれは知らせるよう触れると、ワ
キ・ワキツレ説法の場。連吟の、
厚みのある着に惹かれ一松へ出
る老翁(シヤ猶義)、面朝倉尉・
襟浅黄・濃緑無地敷目着付・朽
葉色水衣の姿に致珠をもつ。へ笠
歌遣かに聞ゆ、と諷い出しも神妙
に、へ紫雲の立つて候ぞや、と静
かに合掌するところ、有難さも如
実。へ一念翁名へ選どへ無阿
弥陀佛、と常座へ、下居ワキへ合
掌する。シヤ・ワキ問答は、余人
を問うワキに、折角の法悦境に浸
って居るところを、邪魔されるか
らに披露の名を明かすこと厭うシ
ヤ。さりながら、ワキが「只包

参加費 親子一組一五〇〇円(追加の場合、子ども一人五〇〇円、親一人一〇〇〇円)

【申込方法】はがきに(住所・氏名(親子とも)・電話番号・学校名・学年・性別)を記入のうえ左記あてに送る。

締切 平成23年7月4日(月)

申込 名古屋市中区三の丸一丁目一番一号
名古屋能楽堂親子教室係

「徳川の姫君」徳川美術館企画展

徳川美術館では、企画展示「徳川の姫君」を七月三十日(日)から八月十九日まで開催する。

徳川美術館には、御三家筆頭の

盛の最期を居語で神妙に語り、その霊が吊られる旨を融して退くと後場。

ワキ・ワキツレ立木、持謡はへ鉦を鳴らして、で膝を着きへ面無阿弥陀佛、はワキのみ合掌する。

出端(希世・嘉津幸・総一郎・洋輝)で舞台に入る美盛(シヤ後シヤ吉之丞) 面朝倉尉・白垂・梨子打高帽子・萌黄赤段厚板着付・紺地金波文半切・法被・太刀の袋。地と掛合に阿弥陀佛の有難さを、ワキと掛合に己が風来に惚れ、地へ黄金作りの、と瘋いた太刀の柄に目をやると、へ今の身には、それが何の宝、と踏む七ツ拍子が無用の長物を強調し、へ池の蓮の台こそ、とワキへ進み、袈裟シ胸で指さすところには、佛法の不滅を知った気負いを感じさせ、面白。へそれ一念弥陀佛即滅無量罪、とクリに大小前床几に掛かると、慚愧悔のシヤ語は敵の本當側から伝える美盛が白髪を染めた経巻。首裏後に髪をへ洗はせて、と腕に首を載せる心は、括げた腕を掲げ持ち、左手添え床几を降りるところ、死者への敬意沁々。正先へ出て左手に抱える心に出すと、へ洗ひてみれば、と二度水を注いで結果如何と目を凝らし、へ髪は流れ、と右へ流れを追うと、へ元の白髪に、エリケンシ

家柄を誇る尾張徳川家の姫君をはじめ、將軍家や御三家の姫君ゆかりの品々が今に伝えられている。

江戸時代、女性として最高に地位にあった姫君たちの生活はどのようであったのか、波乱の人生を送った千姫、天皇家へ嫁いだ真福門院和子と、「江」ゆかりの姫君たちはじめ、尾張徳川家歴代の姫君たちが眺め、手に取り、心を慰めたであろう調度品や衣服、書画などを通し、その知られざる生涯や人物像に迫る。

開催時間 午前10時〜午後5時
休館日 11月曜日(8月15日は臨時開館、9月19日(月)は開館、翌20日は休館)

観覧料 一般二〇〇円、高校生七〇〇円、小中学生五〇〇円

問い合わせ 徳川美術館(名古屋市長区徳川町一〇七、電話〇五二・九三三・六二六二)

て天晴れ名を借しむ武士の鑑と賞讃。その心根へ侵しや、と共感の打合せ、手綺麗な所作に巧者ぶりを発揮する。

クセは錦の直垂を着用のこと、も。俗にも「故郷に錦を着て帰る」とあり、近年は武蔵国在のシヤ、戦場の北国は故郷とあれば赴くに当たり賜わる錦の直垂、されば漢の朱買臣の故事に倣いへ(錦の袂)を会稽山に懸し、で強く袖返シ、強く一ツ踏むところ飄爽意氣盛んをみせるが、へ今の実盛は、から舞台を一巡し大小前、へ名は末代に有明の、と月ノ窟に目付柱上を見るところには行く末に思いを馳せる悲愴感も。

地と掛合にロンギはシヤ最期の光景、敵の郎等の首掻き切りへ捨て、げり、と左拳バツと開くのが如何にも抛擲の趣なら、手塚と組み合いに力も折れへ手塚が下、と合膝返シにがつくり安座となるころも鮮やか。柔らかみの中に尖鋭さを秘め神経の行き届いた念な作劇の好舞台だった。(1時間30分)

「二十石」抜参物の一。無断で英内語の太郎冠者(アト弘之)に激怒の主(シヤ友彦)、手討にせんとするも都のことも懐しく、様にも聞きたいと有免すれば、大きに喜んだ太郎冠者は早速京に流行

(番組④画よりつづき)

仕舞 岩井 船 梅田 嘉宏
阿雨 之 武田 邦弘 地 謙
漕 正邦 古橋 正邦 加賀 敏彦

狂言 子盗人 佐藤 融 大野 弘之
吉原 旭 井上 靖浩
能 殺生石 杉江 元 河村 総一郎 加藤 洋輝
後見 久田 三津子 地 謙 角田 尚香 梅田 嘉宏
武田 邦弘 須部 幸吉 久田 勲 古橋 正邦
前野 柳子 祖父 江修一

附 祝 言 主催 青 陽 会

〇前売券二五〇〇円、当日券三〇〇〇円、学生二〇〇〇円
〇入場券はチケットぴあ 電話〇五七〇一〇二一・九九九(ポコト
七八六一三〇三) URL http://pia.jp/ticket
チケットぴあスポット、サークルKサンクス、セブン・イレブン各店
〇お問い合わせ 名古屋能楽堂(電話〇五二一三三三三・八八八)及び各出演者宅
〇お問い合わせ 名古屋市長区一社三の二六二
久田 勲 事務所
電話〇五二一七三四一六九二

という語を披露。へ二十石の松にこそ千年を祝ふ後迄も其名は朽ちせざりけり、と得意然と諷い、「日本一の御機嫌に申し上げた」と自己満足で更に復讐するのを、怒りて左右に身を振じらせ、地面が読めない無頼着な太郎冠者、阿者の呼吸よく合い上々。

主にとり此の謡「二十石」は先祖が八幡太郎義家のもと従軍、陣中、前祝の酒宴に肴を求められ舞つたもの。その甲斐あり勝利の恩賞に宇田の庄を賜わり今日の繁栄を築き、遊れるまで「二十石」を封じ込め記る程の謡、「都へは己れが持つて行て流行せたものであらう」と主の語は憤りの語気強々と説得力。

手討にと太刀に手を掛ければ泣きだす太郎冠者、命が惜しいかと迫る主に、そこは目端の利く太郎冠者、父への追慕尊尊でない主の頭点を衝き、太刀の柄に手を掛けて手元が大殿様に酷似で、懐かしく哀れを催し泣く、などと主を翻弄すれば、まも貫い泣き。太郎冠者は手討を免れたばかりか、七父を思い出させて貰った礼にと主から太刀など次々に拝領、拳向は子親に似るは目出度いと兩人してドツと笑と留マ。アト弘之の馳瀟

とした味わい、捨て難い。(27分)

「班女」美濃国野上宿の遊女・花子(シヤ) 東に下る吉田少将(ワキ)と再会を約して形見に扇を取り交わし、少将の戻りを待つも、客を取らず宿ノ長(アト)の激辨に触れて放逐され、少将にも逢えず、当て所なく少将を慕い狂おしく上洛、札の森で形見の扇が證、無事再会を果たすという。

狂言口開、アト靖浩、シヤ勝麿の出るのを「さてもくぬるい事かな」ともどかしがり、ワキ歴に底で怒ると、「えい腹立や」とすつと立ち常座のシヤへ、扇を奪い下に置くがもつと横げに叩きつける程の勢いがあつても。面若女・橋白赤・金刺菱文白摺指着付・菊女段鷹織のシヤ、扇拾うのに勿体ないことを、の氣持あまりなく只管注浦。流れの身を嘆きシヤリ、初回(和男・光之助・基徳ら)へ分け送る行方も、知らずにへ野上の里を立ち出でて、と立ち、返シ句に右ツケる姿には、しつとりした地と相俟ち感傷も一入、惹きつける。

後場は東から上洛参次のワキ元と從者ワキツレ幸、季節は春から既に秋、野上に着き魂る心はワキツレにシヤの在在を尋ねさせ、所

(④画へつづく)

③(面よりつづき)

ノ者アと郡雄から宿ノ長との不伏事不在の田を知り、そのまゝ上洛して札の森は下瀬茂神社に詣る心にワキ座床几に。一声(誠・孝一郎・鉦)で唐織脱ぎ下ゲの狂女の姿で彷徨うシテ、舞台に入り、神々にワキとの再会を祈誓して下居会事もいじらしく、胸の内の思い最厚うわさになったか、と狂おしく舞うカケリにへあら恨めしの人心や、とシラルのも切なく、恋の在り様、苦しみ、を訴え、神助を願うサシ・下歌・上歌。ワキツレに声を掛けられ、問答に狂えとけしかけられ、非情をなじるも、例の班女の扇は、と郡雄され、は思い出す扇にまつわる故事。クセは、へさるにても、と我が身に及べはへ願めて来ぬ夜は、とスミへ進み、へ欄干に立ちつくして、へ其方の空よ、と右ウケ、へ眺むれば、と左へ廻り正中へ、へあの松をこそ、と扇で目付柱を指すところには思いの丈。舞は中之舞、初段で右へ廻るのに一寸ぐらつとしたが二段無難に舞上げ、ワカとなつて地と掛合に扇に思ふ秋の寂しみ。へ逢はでそ恋は添ふものを、返シ向に下居シラルのも哀れ。ワキから狂女が扇を見だしとあつてワキツレとの問答に、シテはへ人に見する事あらじ、と扇を懐中して上から押えるのも然も、ありなんの姿。ワキを代弁する地とシテ掛合のロンギは、へ興の内より、でワキの扇を持ち正中へ出るワキツレの処へ、シテも出てその扇を見ると、書で交わし合つた扇と納得、へこの上は、とシテはワキへ進み、互いに扇面を見せ合ふ辺りも手際よく、生真面目な素直な舞台だった。(1時間21分・4月17日・権猶会平成23年度名古屋能楽公演)

「関原興市」昭和52年10月5日発行の『多流刊行会による『多流曲名總覧』に曲名は見えないが、大方は多流だけにあるとす。今回の「関原興市」は復曲上演ということになろうか。さて、不遇を叫つ牛若丸(シテ光樹)が徒者(ツレ照子)を伴い東に下る途次、美濃国山中の里に来ると、公方から美濃国中川の班

を勝つた関原興市(ワキ雅介)が領地入りをする、と早折(アヒ郡雄)が御止で触レルのを、ツレは様子を窺う態にアヒの後を追ひ、忍ぶが傳奏とシテに献言、シテがその身支度のうちに切戸へ退くと、ワキが郎党(ワキツレ陸・観・幸・正樹)を従え、任地が城を構え入国を阻止せんとするを打ち破らんと勇ましく橋懸へ。任地また遠く、人馬に一息をとワキ、姿を忍ばんとするシテと正中で行き違ふ際、ワキは右足強く踏み、馬がシテに跳ねを掛けた態。一旦通り過ぎた一ノ松のシテは笠に手をやり、ワキに向かって無礼を咎め、馬を乗り熟せずは下人に引かせよ、と。この詞をワキツレ(大刀持・陸)が更にワキへ言上すれば、「何と申すぞ」とワキは烈火の怒り、郎党に下知しシテとの斬れ切戸へ、次は斬られ膝ついてかち切戸へ、イロエのうち斬られた二人も喋り方(誠・昭弘・鉦・洋輝)の後ろを通つて切戸へ消える。へ胸疵け寄せて、と馬上の態に床几のワキは、へえいやと、大刀打ち下ろすところを斬られ、組落シに落馬の心に切戸へ。シテは大刀を投げトメ、拍子は踏まなかつた。(27分)

世に不満で綱絛らしい牛若丸、口先だけの力の無い科白でなく、もつと少年らしい腹から力一杯の強い声を出して貰いたいと思つたし、また斬組でも佛倒れの様な大技も探りたかつたが、稀曲を意欲的に採り上げる姿勢は立派。

「久しぶり」 久しぶりにワキの語は高安流宗家勝久。「朝長」も「機法」の小書のとみにしか語られないワキ方の重習。保元の乱の因を述べ、郡大崩で大夫之進源朝長が膝の口を射られて深傷を負つたことどもを語る。気魄の籠つた語り口も重々しく、格調高素晴らしかつた。(6分)

「井杭」 愛撫のつもりには違いないのだが、会えばいつも何某(アト陸)に頭を叩かれる幼童の井杭(シテ蒼大)、それが五月蠅く、清水観音に籠れば授かる頭巾。叩かれる時の備えに被る物であらうと念点、様子を見ようとして何某方へ出向けば、糸の定。咄嗟に

頭巾を被ると、「これは如何な事、井杭がとれへやらい」と何某。隠れ頭巾と分れば、井杭はこれまでの仕返しとはばかり悪戯心に何某を翻弄する。困つた何某は通り掛かりの算置(小アト靖造)を招き、占わせれば、尋ねる物は生類と指摘、感服する何某にシテも「いかい上手ぢや、それがしは疑も無い生類ぢや」と幼童が大人言葉でハキ／＼と納得するのも可笑しい。何某と算置の間にあつて双方に悪戯を仕掛け、末は唾唾に至らしめるところなども巧まぬ自然体の上手は、狂言の言葉で使う利根(利口・利発)。隠れつ放しでは気の毒、と頭巾を脱ぎ、大人の唾唾を分けて退いてゆくのも優しい。蒼大君立派。(27分)

「黒塚」 山伏祐慶(ワキ遊一)、供山伏(ワキツレ亮)と能力(アヒ郡雄)を伴い日暮れた安達原に灯を見て菰小屋に宿を乞うと、濃紺の冠見取シ取られた中に憂き世を託つて老女(シテ観)が。陋屋とて一度は断るも、憐れしと初回(阿二・俊介・郷ら)へさらは

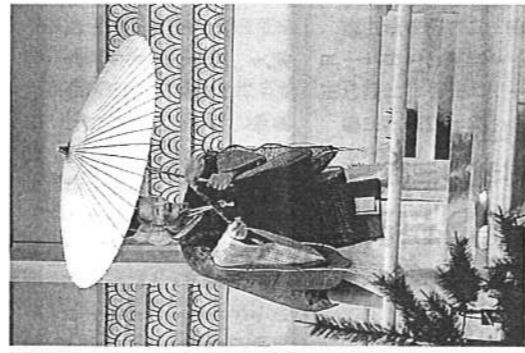
留まり給へとて、扉を開き出るシテ、面曲見、襟掛・紺無地敷斗目着付、本地無紅唐織の姿。梓林輪が正先なもの珍しく、「あれなる物は」とワキに問われ、シテは近寄り下居、糸を紡ぐところ、作物がや、遠く手が届かなかつたが、巧者動かすことなく心持ちで型を見せ妙。煩惱に縛られ、不老に執着して離れられない情無さ述べるクセを省き、ロンギは地と掛合に糸繰り労働の唄は尽し。へ月に夜を待ちぬらん、と右へ月光を仰く風情には一寸一服の気分も。へ長き命のつれなきを、で手が糸に届くと(極く徳が踊り寄つたらうか)、へ思ひ明石の、でワキを見、把手速く回す斥奮は、手を止めると安座又シラルの激情。この間に鎮静したろうか、シテは客僧達を感り直ぐ「余りに夜寒に」とワキにアシラと、飛火の木を踏る故「御待ち候へ」と、シテは立つて行きか、り、常座までも行かずキツと面切ルかに振り向くと、「なう、関の内ばし御覧じ候な」と念を押し橋懸りへ。一ノ松で不図止まり、後の不安に逡巡するか一呼吸、意を決する様に左様さ

つと取ると走り込む後姿に鬼気も。ワキに止められても関の内を見たい天邪鬼のアヒ、抜け出て三度目に見はしたが驚愕し、逃げ出し一ノ松。果して確かに見たのか、の思は恐々再度確認に。扉少し開けて下から上へ跳めて腰を抜かし、「見て御座る」とワキへ注進すると「恐ろしや恐ろしや」と走り込む。鞋はずみな天邪鬼ぶりが旨い。

後場。事が分かりへ足に任せて逃げて行く、ワキ・ワキツレは映

「鐵通」 和歌の神を祀る玉津鳥へ徒者(ワキツレ努・亮)を伴い参詣の途次、日暮れて大陰りの雨の上、馬も動かず途方に暮れる紀貫之(ワキ勝久)、へ灯火暗うしては、と漢語の詩句口ずさむの小(清一・一郎)アシラとで老翁人(シテ清隆)、面小尉・翁烏帽子・小椀着付、白大尉・茶縹着衣の姿で傘をさし松明を持ち出る

と一ノ松、雨の夜の神歌の付まいを述べるサシ、へ社頭を見れば、と舞台へ松明を向け(写真)、へよしく御灯は暗くとも、と運じ舞台へ入ると、問答・掛合に、下馬しなかつたワキの不遜を咎めるシテ。初回(永誼・恭憲・通成ら)へげにも社壇のありけるぞ、



④「鐵通」アト 今井清隆氏 (原田七竜氏撮影)



⑤「鐵通」アト 今井清隆氏 (原田七竜氏撮影)

像のストップ・モーションの趣。出端(誠・昭弘・晃・洋輝)で鬼女(後シテ観)が出る。小書は無かつたが黒頭・動イ般若・襟掛・白地鱗箔着付・黒地丸紋尺筵箔・腰巻・紺打杖。ワキとの闘争は祈。シテの面切ル鋭さ、打杖扱ひの強さも、折り伏せられ安座、へさて微りよ、と両手で耳を塞ぐように観念の姿。へ今までは、の地の返シ向に扇開き、立つとへ天地に身を約め、と合際によりめきを見せ、へ隠れ様みしも、と菰小屋

とシテは灯を興へ居けるかに松明を右へ少し振り、ワキはそれを見て下居、へかくとも知らで、と不心得を詫がる中、シテは後員に筆と松明を預け扇を持つ。ワキが歌人と分れば、神慮に歌を手向けるよう勤めるシテに、躊躇はするもワキはこの場を素直にへ雨雲のたふ重なれる夜半なれば鐵通とも思ふべきかは、と詠むが、皮肉とも反発とも取れる一言。へあら面白の御歌や、とシテがワキへ一・二足踏メルのは、我が意を得た気が、とシテが和歌の講歌・治草を代弁する地のうちに下居すると、クセはワキが誇う上端まで、地が貫之の作歌論を代弁する居クセ。上々端あと、へ月毛の此の駒を、と手綱をとる心に立つワ

を指シ、立つと地のうちに二ノ松へ。へ恥かしの我が姿を、膝をつき扇で面を隠すと、右ウケ立つてトメ、拍子は踏まない。ワキもよかつたが地は手薄、厚みを求めるのは望蜀か。(1時間1分・5月15日・第五回西村同門会研究会。因にこの会に伝統文化こども能楽教室及び大学能楽部の仕舞が参加し入場無料。催会に当り代表飯富雅介は関係者の労を多とする)

きは、己れの歌に感応した神慮に平伏、シテに祝詞を請う。シテは物着に袷衣の袖を下ろし、扇を幣に替えて正先へ。ノットでへ謹上再拝、と幣を敷い、へ有難や、と両手を大きく広げ合掌すると(写真)、へそもく神慮を、では幣を左袖で蔽い胸に抱えるが、岩戸に籠る天照大神(幣)を象徴するだろうか。へ(古の袖)思ひ出られて、と一呼吸あつて立つと、古の神樂の神を幣に托して立廻に舞台を一巡する。シテ・ワキ掛合に、神佛が衆生と縁を結び、利益することが最後の務め、神の代七代、欲得無く行われてきたへ舞歌の道こそ素直なれ、と称えるとキリ。

素直な歌に感じて現れたのだ、とワキを見詰めたシテは、へ豊居の笠木に立廻れ、とシテ柱に寄り、幣を当て、捨てると、地のうちに二ノ松へ抜けそのまま、兼へ。ワキは常座へ進み見送る心、扇開きユークン扇にトメ拍踏んだ。落ちていた洗い舞台だつたが、一寸意地悪な、物咄めする鐵通ノ神がボーカー・フェイスで謹直に勤め、正直で謙虚な紀貫之に、和歌の徳を再認識させような趣も感じられ面白かつた。(1時間2分)

「千鳥」 祭に不可欠とは云え溜まつたツケを清算もせず太郎冠者(シテ宗彦)を酒屋(次アト七五三)へ遣る主(アト洋海)、有無を言わせぬ強い声、ツケなどに動しない態度も中々。シテは小賢しさをこゝそと発揮、弁舌爽やかに酒屋を籠絡に掛ければ、あつさり乗せられてしまう酒屋は好人物。しかし、口先の甘言だけでは借りられそうもないとなれば、酒



⑥「海人」アト 今井清隆氏 (原田七竜氏撮影)



⑦「海人」アト 今井清隆氏 (原田七竜氏撮影)

屋の好奇心を探るだけ、津島祭の様子を酒樽小道具に活き／＼と見せるのも堂に入る。それでも酒樽奪取を気取られること二度、諦めて帰ろうと気を持たせれば、「もそつと他の話をしておくりやれ」と引き止めさせる手廻持ち合わせのシテ。流鏝馬の様子を見させて馬場先の人払いをへ馬場のけく、と酒屋に囁かせてをいて「お馬が参る／＼」と声高らかに、酒樽文字通り怪り獲つて逃げる。父子共演の熟れた舞台。(29分)

「海人」 七母追善に讃州志度浦を徒臣(ワキ努)と訪ねる房前大臣(子方・文巻)、そこで一人地悪な、物咄めする鐵通ノ神がボーカー・フェイスで謹直に勤め、正直で謙虚な紀貫之に、和歌の徳を再認識させような趣も感じられ面白かつた。(1時間2分)

「千鳥」 祭に不可欠とは云え溜まつたツケを清算もせず太郎冠者(シテ宗彦)を酒屋(次アト七五三)へ遣る主(アト洋海)、有無を言わせぬ強い声、ツケなどに動しない態度も中々。シテは小賢しさをこゝそと発揮、弁舌爽やかに酒屋を籠絡に掛ければ、あつさり乗せられてしまう酒屋は好人物。しかし、口先の甘言だけでは借りられそうもないとなれば、酒

へ一つの利剣を、と居立つてへかの海底に、と立ちする／＼正先へ乗込み、右へ廻りへ煙の波を、指分、へ海風々々、大きく両手を広げ放く心に橋懸へ。地(道一・龍謡・宮紀ら)が、八龍・悪魚などに守られる龍宮の玉の所在を述べるうち、あの波の彼方、へ父大巨もおはすらん、では幕際まで行く。シラルこと二度、へ又思ひ切り、と合掌すると、へ南無志度守の観音菩薩の力を、と観音の拍子に真気を傳ると、へ大悲の利剣を、と頭上に扇を翳し身を屈め、龍宮へ飛び入らんばかりに疾走(写真)する凄まじい勢いは、八龍・悪魚らもへばつとを退いたりける、であつたらう。乳の下掻き切り、王を押し締め、小廻りにどつと安座したところも鮮烈。へ人々喜び、と立ち、へ引き上げたすは、書でも海底へ潜り、海女が名珠を拾い上げた、の故事。シテ・ワキの問答はき／＼展開し爽やかに、シテがへあら奈なや候、と正中継を置き下居、扇前に合掌すれば、房前も己が身の上にあふところを明かす健気。この祭囃気、へ海松藻を刈るのでなく、「この度は海人の海に入つて玉取りたる所を褒うて御見せ候へ」とワキに勧められ、眼目の玉之座。

後場。母・海女の亡霊、龍女(後シテ)と現われ、法華経の功德で成佛したことを喜び、舞う早舞(写真)、大きな舞ぶり如何にも喜悅。(1時間34分・5月22日・第5回金剛定期能)

NHK放送予定(平成23年7月~8月)

7月24日	NHK-FMラジオ能楽鑑賞(日曜日7時20分~8時15分)	素謡「海士」(観世流) 片山九郎右衛門
7月31日	狂言「岩船」(和泉流) 三宅右近	狂言「見物左衛門・花見」(和泉流) 石田幸雄
8月7日	人間国宝に聴く(1) 金春右衛門	太鼓方金春流 聞き手:羽田 飛
8月14日	人間国宝に聴く(2) 春雄 飛	大鼓方高安流 聞き手:羽田 飛
8月21日	人間国宝に聴く(3) 仙幸 飛	笛方一噌流 聞き手:高桑いづみ
8月29日	人間国宝に聴く(4) 宝生 閑	人間国宝に聴く(4) 宝生 閑

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)

[7月]	(有料)	第4回まいまい狂言会
23日(日)	(有料)	第4回名古屋片山能
24日(月)	(有料)	第3回全国学生能楽コンクール
30日(日)	(無料)	名古屋能楽堂・夏休み親子能楽教室
31日(月)	(無料)	同上
[8月]	(無料)	名古屋学生能楽選抜例会
2日(火)	(無料)	名古屋学生能楽選抜例会
3日(水)	(有料)	第7回衣装正装選抜例会
23日(日)	(有料)	狂言 ござるの乃盛
28日(金)	(有料)	狂言 秋
[9月]	(有料)	狂言 秋
3日(日)	(有料)	狂言 秋
4日(月)	(有料)	狂言 秋

演能案内

第33回七彩会

八月七日(日)午前10時始
名古屋能楽堂

能加茂 森 杉 奈美 江子 利典 子香
兼謡「鶴亀」「井筒」「駒田川」
舞囃子「桜川」「西王母」「邯鄲」「松風」
「須藤源氏」「田村」「小堀曾我」
「富士太鼓」「養老」

仕舞 二十三番

〔御来場歓迎・入場無料〕 主催 七彩会(にしのかい) 竹内澄子
名古屋名東区にじが丘三三三七一

能楽の友

発行能楽の友社
名古屋市中種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
1年 1180円
郵送の場合 1100円

初秋能

名古屋能楽堂

9月公演

9月4日 2部制で開催

名古屋能楽堂九月定期公演は、「初秋能」として、九月四日(日)2部制で開催される。

能組は、第一部(午前10時開演)喜多流仕舞「八島」金春流仕舞「半部」狂言「鎌腹」宝生流能「井筒」

第二部(午後2時開演)金剛流舞囃子「枕蓑童」狂言「仁王」観世流能「鶴亀」

第4回「萬歳楽座」公演

能「道成寺」上演

10月19日(日) 東京 国立能楽堂

笛方藤田流十一世宗家 藤田六郎兵衛師主宰の観能の会「萬歳楽座」(第四回公演)が十月十九日(日)東京・国立能楽堂で開催される。

演能は、能「道成寺」と大鼓五流儀の一調、一調一管の上演。

能「道成寺」中之段数齣・無間之崩シテ観世清和、ワキ宝生閑、狂言・野村萬斎、笛 藤田六郎兵衛、小鼓・大倉源次郎、大鼓・亀井広忠、大鼓・観世元祐。

●大鼓五流儀競演

一調「殺生石」謡・観世鎮之丞、大鼓・守家田訓(観世流)

一調「真蓮」謡・大槻文蔵、大鼓・山本孝(大倉流)

一調「放下僧」謡・梅若玄祥、大鼓・安福建雄(高安流)

一調「鐘之段」謡・片山幽雪、大鼓・石井仁兵衛(石井流)

初演 一調一管「獅子」笛 藤田六郎兵衛、大鼓・亀井忠雄(観野流)

チケット料金 前売指定四千円、自由席三千円、自由席のみ当日五百円増。(番組②面)

大阪新能

8月11、12日2日間

平成二十三年度「大阪新能」は八月十一日(日)、八月十二日(月)の二日間、大阪・生國魂神社で行われる。午後五時半開演。

「八月十一日」(日)
観世流半能「般若」梅若基徳
観世流能「生國魂」上野朝義
観世流能「紅葉狩」林本 大

「八月十二日」(月)
観世流半能「巴」山中雅志
金剛流能「百万」田中敏文
観世流能「小鍛冶」勝部延和

料金 一般三千円、当日三千五百円、学生二千五百円
問い合わせ 生國魂神社(TEL 06-6777-0002)、能楽協会大阪支部(大槻能楽堂内)(TEL 06-6761-8055)

第15回片山家

能装束・能面展

片山家能楽・京舞保存財団では八月五日(金)から七日(日)まで京都文化博物館(中京区三条高倉上土)で「第15回能装束・能面展」を開催する。入場無料。

開館は午前10時~午後6時(最終日は午後5時まで)

長良川新能

8月26日(金)能鞍馬天狗

「伝統文化の夕べ」として、第25回「長良川新能」は、八月二十六日(金)、長良川特設舞台岐阜クラントホテル前河原で開催される。

主催/長良川新能実行委員会・岐阜市、午後五時開場、午後六時開演、入場無料

演目は、能「鞍馬天狗」(シテ観世喜正)、狂言「煙の酒」(シテ野村寛)、公家の子どもたちによる謡(うたい)孝謡/みなもと会連謡/桂会。雨天または増水時には、岐阜市民会館にて開催。

新能 くるす桜

8月7日(日)郡上市で

「古今伝授の里」として親しまれる岐阜県郡上市大和町の明建神社で、八月七日(日)「新能・くるす桜」が上演される。主催・新能くるす桜実行委員会。

演能は能「水無月歌」シテ味方健ワキ高安勝久間 野村又三郎、狂言「鼻取相撲」シテ野村又三郎、仕舞歌占河村和重通小町 梅田邦久

能「くるす桜」シテ味方玄、ワキ高安勝久

前売 一般(大学生を含む)三千円(当日三千五百円)、高校生五百円。

問い合わせ/郡上市役所、大和振興事務所(電話0575-882211)

何

名古屋観世会

梅若吉之丞
梅若猶義

観世清和

山本勝一
山本博通

十世片山九郎右衛門

片山幽雪

〒605-0088 京都市東山区西之町224
電話(〇七五)五六一一九二一

御

大槻清韻会

大槻文蔵

〒540-0005 大阪府中央区上町A番七号
電話(〇六)六七四一〇八九八番

中

鳳鳴会

武田志房

武田友志

〒600-0014 京都市左京区下鴨芝本町58
電話(〇七五)七二三一六八〇

暑

名古屋観世九皇会

観世喜正
観世喜之

高橋 瞭 一

梅田邦久
梅本須清
田部沢 一
田嘉美
田部政 久

〒466-0033 名古屋市中区台町二丁目十六番
電話(〇五二)八四二一四六三番

第27回 衣斐正直後援会能

八月二十八日(日)午後一時始
名古屋能楽堂

講演 能芸術の精華
松風という一曲 林 望

仕舞 弱法師 水上輝和
内藤 飛能
衣装 正宜
能松 風 高安 勝久 河村真之介 藤田六郎兵衛
見留 間 佐藤 友彦 後藤 嘉建幸
後見 東川 光夫 地謡 竹内上 茂 水上 謙
辰巳 二郎 久野 幸三 和久 太郎 藤和助 隆之

名古屋能楽堂九月定例公演

— 初秋能 —

九月四日(日)二部制
名古屋能楽堂

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ③③

竹尾 邦太郎

名古屋和泉会別会

平成四年一月二三日は和泉流宗家祖先と銘打つ名古屋和泉会別会主催、和泉宗家後援会、B5判A4紙パンフレット16頁の内容は「ごあいさつ」本多静雄・和泉元秀、番組、曲目解説(長尾一雄)、「山脇家の人々(その七)六代元政」関屋俊彦、ベルサイユ祭参加写真、和泉元彌映画初出演「未来の想い出」記念写真、「元彌師の映画出演記念・ビデオとCD」猿に始まり狐に終わる、「柳沢新治、ビデオ・CD・アレホンカイト宣伝写真、賛助企業広告。

番組は「三番叢・陰陽之式」和泉元彌、和泉淳子(千歳)、藤田六郎兵衛、後藤孝一郎(頭取)柳原富司忠、後藤嘉建幸(鷹鼓)河村総一郎、素囃子「早舞」藤田六郎兵衛、福井啓次郎(寛範)・鬼頭喜太郎、狂言三番「松栢」和泉

淳子(津の国の百姓)三宅藤九郎、(和泉祥子、丹波の国の百姓)、井上祐一、「悪坊」井上松次郎、井上礼之助、大野弘之、「政頼」和泉元秀、和泉元彌(寛大王)和泉淳子(前鬼)三宅藤九郎(後鬼)吉浪洋一郎、森良男・井上清浩(獄卒鬼)向後恵太(犬)、地謡井上祐一、佐藤友彦・松田高義、柿谷朝暉、囃子藤田六郎兵衛、福井啓次郎、寛範一、鬼頭喜太郎。

平成五年一月二三日の名古屋和泉会別会は東京和泉会寄回記念・シンガポール政府主催招聘アジア芸術祭参加記念とする。パンフレットはA4判(一サライ)大、と判が大きくなり表紙に和泉一家の囃子写真を用いる。内容は和泉宗家後援会関係の名士や政治家による挨拶、祝辞、和泉家の

【第一部】(午前十時開演)

仕舞(喜多遊)八 長田 曉
仕舞(金春遊)半 部 加藤 英昭
狂言 鎌腹 シテ 佐藤 友彦 7下 今枝 郁雄
玉井 博祐
能井 筒 高安 勝久 河村総一郎 鹿取 希世
(宝生遊) 間 鹿島 俊裕

【第二部】(午後二時開演)

舞囃子(金剛遊)枕 慈童 鈴村 昌美
狂言 仁王 シテ 松田 高義 井野村 又三郎
今鹿島 謙 講浩 三
大野 弘之 大野 謙
能鶴 飼 廣富 柴介 河村真之介 加藤 洋輝
(観世遊) 間 橋本 幸 福井 聡介 大野 誠

【チケット料金】指定(前売)四〇〇〇円
(一部・二部各)自由一般三〇〇〇円
自由席当日券一〇〇〇円増
問い合わせ/名古屋能楽堂 TEL0522-23311-80 7588
FAX0522-23311-87 566

プロフィール、番組、曲目解説(山崎有一郎)、「アメリカを横断した和泉宗家の狂言」井村君江、アメリカ・フランスでの公演写真、賛助企業のローマ字による社名の羅列(47社)。

番組は素囃子「早舞・クツロギ」藤田六郎兵衛・福井啓次郎・河村総一郎、鬼頭喜太郎、狂言四番「張鶴」和泉淳子・三宅藤九郎(和泉祥子)、佐藤友彦、「悪太郎」和泉元彌、井上祐一、和泉元秀、「栗焼」井上松次郎、井上礼之助、「千切木」和泉元秀、和泉元彌(当座)吉浪洋一郎(太郎冠者)三宅藤九郎(和泉祥子・巻)井上清浩、佐藤謙、野村信行、鷲見政行、向後恵太、松田高義、大野弘之。

この年、和泉宗家門は海外公演が四月(アメリカ三週間)五月(フランス)十一月(シンガポール)の三度、そしてシンガポールから一〇日後が今回の名古屋和泉会別会、この間際を縫ってと云おうか、五月初旬に掲載写真にみられる通りの公演案内のチラシがでる。大蔵、和泉、画流の狂言役者が一堂に会する空前の好企画に大蔵彌右衛門、和泉元秀は共に語て筆を添えることになって居たが、その後、本番組(写真)が出たと、和泉宗家の名は無かった。狂

言協議会とは当紙先号(五三三)既述の通り乱雑もあったであろうが、折角の企画、小泉を捨て大同に就いて欲しいは全ての狂言愛好者の願いであつたらう。「狂言協議会特別公演 袴狂言と小舞の会」は名古屋を皮切りに翌平成六年七月二日には東京国立能楽堂でも催されたが遂に和泉宗家の出演は無かった。何故、と云わざるを得ない。

平成六年一月二三日の名古屋和泉会別会は和泉宗家親子十九世和泉元秀二十代和泉元彌を観る会の名目で、更に番組には和泉元秀和泉流十九世宗家在位五十年和泉元彌和泉流二十世宗家継承者成人記念とある。A4判パンフレットは16頁(表紙除)、内容は宗家後援会関係者五氏のあいさつ(5頁)番組、曲目解説(2)山脇和泉家系図(2)宗家親子あいさつ(2)同年四月フイレンツエでのオペラHAGGROMO出演の和泉淳子、祥子姉妹舞台写真及び原語の案内(2)後援賛助企業那語社名の羅列(37社)フラス一社(3)、なお表紙紙に後援会組織の拡大を目指すかの和泉宗家一人会入会案内・申込書。番組は素囃子「神楽」藤田六郎(3)面(つづく)

暑中御見舞 申し上げます

壺 泉 会
泉 嘉 夫
名古屋市昭和区山手通3-8-2,308
電話(〇五二)八三二二二八五
西宮市甲陽園目神山町三二二五五
電話(〇七九八)②二四五八

梅 若 万 三 郎
観 芳 会
観 世 芳 伸
幽 花 会
片 山 伸 吾

怡 楽 会
山 階 彌 右 衛 門
山 階 弥 次
久 田 観 正 会
久 田 勘 鷗

梅 春 会
井 戸 和 良 祐
部 員 会 前 野 郁 子
松 議 会 松 山 幸 親 子
星 野 路 子

武 田 武 田 大 邦 欣 志 弘 司
〒460 名古屋市名東区一社3-102
電話(〇五二)七〇五二一五五

舞 橋 岡 会 橋 岡 久 太 郎
* * * * *
坪 内 苜 路 之
宮 下 木 亮
小 出 年 彦
塚 田 章
吉 田 重 雄
松 原 美 樹
宮 内 美 富
小 倉 美 富
橋 岡 佐 喜 男
橋 岡 信 明
野 池 尚 美
山 岸 登

春 鶯 会
梅 若 善 高
〒500 0084 豊中市新千里園町三丁目18-12
電話(〇六六)八三二一七八五四
〒166 0003 東京都杉並区喜田南4-27-7,908
電話(〇三三)三二二一〇五七〇

梅 春 会
井 戸 和 良 祐
〒545 0004 大阪市阿倍野区文の里3-16-17
電話(〇六)六六二二二二一九

上 田 観 正 会 能 楽 堂
上 田 観 正 会 TEL〇七八一
六九一五四四九

上 田 貴 弘
大 公 拓 介
介 威 司

名 古 屋 修 諷 会
梅 若 修 一

名 古 屋 淡 交 会
三 交 会 岡 慈 観
久 田 三 津 子
〒460 名古屋市名東区一社3-102
電話(〇五二)七〇五二一五八五

財 団 法 人 鎌 倉 能 舞 台
中 森 貫 太

初 陽 会
武 田 宗 和 宗 典

笙 月 会 中 川 雅 章
〒520 0006 長崎市地福寺町八ノ二九
電話(〇七九)〇六三三〇番

賀 水 会
桑 名 賀 水 会
名 鉄 百 貨 店 友 の 会
加 賀 敏 彦
〒463 名古屋守山区藤孝子丁目七〇九
電話(〇五二)七七一八四四五番

松 盛 会
小 松 勝 憲
松 舞 台
〒510 0006 三重県桑名市西別所一〇六一の五
TEL・FAX(〇五九)四二二三四五八二

洗 心 会 奥 村 富 久 子

②面よりつづき)
 兵衛・後藤孝二郎・河村総二郎・
 鬼頭喜太郎・狂言四番「權の神」
 井上松次郎・井上靖浩・大野弘
 之、「武悪」和泉元彌・和泉元秀
 (主)佐藤友彦(太郎冠者)・
 「權の酒」和泉淳子・三宅藤九郎
 ・井上祐一、「小倉」和泉元秀・
 和泉元彌・野村信行(田舎人)佐
 藤 颯・井上靖浩・警見政行・向後
 惠太・松田高義・吉屋洋一郎(在
 所ノ者)井上祐一(忌)。
 平成七年十一月二三日の名古屋
 和泉会別会は和泉流(山脇和泉
 守)歴代宗家追善公演 和泉流十
 九世宗家 和泉元秀嫡男 和泉元彌 和
 泉流宗家二十世披露を謳う。
 此の年、六月二三日、十九世元
 秀は東島文化村シアターコロン
 での「狂言&狂言オペラ」出演
 中、不調を訴え退出、療養に努め
 るも六月二〇日、五八歳を一期と
 して急逝。この事情もあつてかパ
 ンフレット表紙は前年と同じで和
 泉一家の舞台写真はモノクロ。
 内容は、あいさつ和泉元彌、「和
 泉元秀芸談」取材記・小櫃万津
 男「永遠に生き続ける父子相伝
 の巻」井村君江、「天才十九世宗
 家との子弟四十年を語る」村岸文
 輔(札幌さざんざ会代表九五
 翁)・柳沢新治・山崎有一郎二氏
 の旧稿の再録、山脇和泉家の系
 図、和泉元秀芸歴、和泉元彌芸
 歴、裏表紙に元秀「蘇大名」元彌
 成人式の日 家族写真。
 番組は妻離子「神舞」寺井八八
 郎 福井啓次郎・河村真之介・鬼
 頭喜太郎、「田權」和泉元彌(神
 主)和泉淳子・三宅藤九郎・吉浪
 洋一郎・向後惠太、「朝比奈」和
 泉淳子・和泉元彌、「那須興市
 語」和泉元彌、「宗説」和泉淳子
 (主)三宅藤九郎(法華)和泉
 元彌。解説は四曲それく活字が
 異なり、書で使されたものの転
 用が歴然、そぞろ統率者を欠いた
 哀れもさることながら、此の年の
 公演から和泉流の金城澤池たる名
 古屋の狂言井田社・野村又三郎家
 からの出演は皆無となる。理由は
 十九世宗家存命中、早計に過ぎ
 る二十世宗家継承問題の独断専行
 に、十九世没後も嗣子元彌が流内
 に居ることなく「二十世宗家」を
 金梨玉条に据り、固執すること

とへの流内の反発であつたらう。
 親なら誰しも子に自分に後を継
 いで貰いたいと思つのは人情、ま
 してや生業が垂の道なら、その忌
 いは至極当然であらう。それが流
 儀の宗家ともなれば、たま／＼当
 代の宗家が親であらうと、子が
 軽々に次代を継げるとは限らな
 い。
 能楽界にはシテ方(五)ワキ方
 (三)囃子方(二)四)狂言方
 (二)の職能集団(括弧内は流儀
 数)があり、囃子方は更に笛方
 (三)小鼓方(四)太鼓方(五)
 太鼓方(二)の四つに細分され

る。計二四の流儀中、現在、全て
 に宗家が居る訳ではなく、宗家預
 りや宗家代理も居り、狂言方和泉
 流も兼て宗家不在で職能の異なる
 シテ方安生流宗家の預りとなつて
 いた。というのも歴史的な見地か
 らみてもシテ方は物理的な力関係
 で三役(ワキ・囃子・狂言)の優
 位にあり三役を使う立場、和泉流
 はシテ方安生流のいわゆる座付き
 であつたらう。現に狂言小舞など
 で地謡が居並ぶとき、和泉流は地
 頭の位置を安生流と同じくする。
 和泉元秀(当侍保之)が十九世宗
 家に就いたのも和泉流々内の総意
 は勿論、シテ方五流の宗家会の推
 挙、認可があつてこそ、それがな
 ければ能楽界の認知は受けられな
 い事例であつたらう。
 和泉元彌が十九世宗家の庇護の
 下、宗家名を使い出したのは平成
 五年(一九九三)年のパンフレッ
 トの中、和泉家のプロフィールで
 「和泉流次期二十代目宗家継承
 者」と。翌平成六年のパンフレッ
 ト表紙には「和泉元彌和泉流二十
 世宗家継承者成人披露」とあつ
 て、以後、和泉流内の推挙、宗家
 会の認可の無いまま、二十世宗
 家に就いたのも和泉流々内の総意

此の年、六月二三日、十九世元
 秀は東島文化村シアターコロン
 での「狂言&狂言オペラ」出演
 中、不調を訴え退出、療養に努め
 るも六月二〇日、五八歳を一期と
 して急逝。この事情もあつてかパ
 ンフレット表紙は前年と同じで和
 泉一家の舞台写真はモノクロ。
 内容は、あいさつ和泉元彌、「和
 泉元秀芸談」取材記・小櫃万津
 男「永遠に生き続ける父子相伝
 の巻」井村君江、「天才十九世宗
 家との子弟四十年を語る」村岸文
 輔(札幌さざんざ会代表九五
 翁)・柳沢新治・山崎有一郎二氏
 の旧稿の再録、山脇和泉家の系
 図、和泉元秀芸歴、和泉元彌芸
 歴、裏表紙に元秀「蘇大名」元彌
 成人式の日 家族写真。
 番組は妻離子「神舞」寺井八八
 郎 福井啓次郎・河村真之介・鬼
 頭喜太郎、「田權」和泉元彌(神
 主)和泉淳子・三宅藤九郎・吉浪
 洋一郎・向後惠太、「朝比奈」和
 泉淳子・和泉元彌、「那須興市
 語」和泉元彌、「宗説」和泉淳子
 (主)三宅藤九郎(法華)和泉
 元彌。解説は四曲それく活字が
 異なり、書で使されたものの転
 用が歴然、そぞろ統率者を欠いた
 哀れもさることながら、此の年の
 公演から和泉流の金城澤池たる名
 古屋の狂言井田社・野村又三郎家
 からの出演は皆無となる。理由は
 十九世宗家存命中、早計に過ぎ
 る二十世宗家継承問題の独断専行
 に、十九世没後も嗣子元彌が流内
 に居ることなく「二十世宗家」を
 金梨玉条に据り、固執すること

狂言協議会特別公演
袴狂言と小舞の会
 平成五年七月二十日(土)午後二時
 於 熱田神社 富能楽堂 観衆
 番組
 狂言 末広かり 主 鬼頭 井上松次郎 次 三宅藤九郎 山本東次郎
 大 黒 大 藤原若門
 小 雲土 大 大藤原太郎
 蛸貝 尽し山車 大 大西安太郎 主 藤原若門
 小 津渡下り 依 依 藤原五郎 主 藤原若門
 字 治の晒り 井上祐一 主 藤原若門
 小 孤 小 藤原山五郎 主 藤原若門
 京道 明 依 依 藤原山五郎 主 藤原若門
 謝 童 依 依 藤原山五郎 主 藤原若門
 小 名 取 三 三 藤原若門 主 藤原若門
 深 方 野 依 依 藤原若門 主 藤原若門
 小 下 主 主 藤原若門 主 藤原若門
 景 七 下 主 主 藤原若門 主 藤原若門
 清 山 本 依 依 藤原若門 主 藤原若門



- 観修会 祖父江 修一
〒507-0001 多治見市日ノ出町2の2
電話(〇五七二)二二二三五六
- 幸謡会 近藤 幸江
〒442 岡崎市鴨田本町十一番地ノ三
電話(〇五六四)④二五九
- 千早会 八神 孝 充
〒404 岡崎市千種区池町2-1-9
電話・FAX(〇五二)七五三四二二九
- 桜月会 加藤 春枝
〒300 岡山県児市早ヶ丘3-1-113
電話(〇五七四)六四一三〇六
- 名古屋宝生会
宝生流 嘉宝会
〒460 名古屋市昭和区川名本町二ノ五一
鬼頭 嘉男
司宝会
〒460 名古屋市天白区農田二丁目三〇一
農田橋住宅十三〇番電話(〇五二)八〇七三二
- 宝生和英
金剛永謹
龍謹
- 恵美寿会
衣斐正宜
衣斐正宜後援会
〒460 名古屋市昭和区御器所3-23-19
御器所パークマンション802号
電話(〇五二)八八一五五〇〇番
- 近藤乾之助
〒170 東京都豊島区巣鴨五十三三八
電話(〇三)三九二五二三七六番

- 名古屋異会
豊橋異会
辰巳満次郎
佐野由於
倉本雅
宝生流 嘉宝会
〒460 名古屋市昭和区川名本町二ノ五一
鬼頭 嘉男
司宝会
〒460 名古屋市天白区農田二丁目三〇一
農田橋住宅十三〇番電話(〇五二)八〇七三二
- 菊扇之会
廣田泰三
廣田泰能
松野恭憲
松野恭憲能の会
松野恭憲

- 豊嶋能の会
豊嶋春会
豊嶋三千春
宇高通成
徳成成
シテ方金春流宗家
金春安明
〒107 東京都杉並区南荻窪三丁目17-16
電話(〇三三)三三二二五七二番
- 本田光洋
〒104 東京都中野区上高田二ノ二五二
電話(〇三三)三八六二六四二番
- 伊勢金春会
字仁田吉邦
〒516 0070 伊勢市八日市場町5-16
電話(〇五九)六〇五二九八
- 長田驍後援会
〒514 0044 津市高野町三三五二一四六
電話(〇五九)三〇六九七番
- 福王茂十郎
知和登幸

「翁 父尉延命冠者・橋懸之舞
十人室」 「大黒風流」
浄めの切火あつて幕上がり、面

箱持ちは十四世を襲名する又三郎
の後嗣信明十歳。小結烏帽子も
凛々しく、面頬博量に胸に抱く様

「野村又三郎襲名披露 第54回やる
まい会」と「梅猶会 大阪能楽公演」
竹尾邦太郎



やるまい会「翁」
野村信明
(杉浦賢次氏撮影)

に横へ入ると高く掛け持ちスミ一舞台に躍る。面揃きとなり面箱持

へ、下居
に膝へ置
く写真
シテ翁
九郎右衛
門は正
先、翁烏
帽子が床
に着く
深々とし
た拝礼に
凛然の気

◆初夏の舞台から◆

「茶壺」野村万蔵・万之丞・史
高、養囃子「現之楽」大野誠 幸
信吾・河村総一郎、「金匱」野村
小三郎・松田高義、「那須藤」野
口隆行、「酢薑」茂山十作・松本
薫、「井杭」野村又三郎・小三郎
・万之丞。
また同年七月一四日の第38回
「朝日狂言会」は指定四十円、自
由三十円、階上二十円で番組は養
囃子「天女之舞」竹市孝・後藤孝
一・大野弘之・井上礼之助・鷺見
政行・今枝郁雄・達浩・佐藤融。
金銭を云々するのは卑しい所業
とは分ついても如何に和泉会別
会が法外であつたかは瞭然、能楽
協会で規制は出来ないものだろう
か、と見所の人間は思わざるを得
ない。

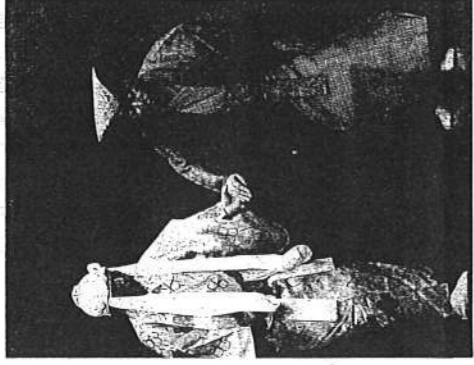
平成九年(一九九七)一月二
三日は和泉流十九世和泉元秀三回
忌進善公演。名古屋和泉会別会、
主催は和泉流二十世和泉元彌和泉
流宗家、和泉流宗家後援会。パン
フレットは前年同様のスタイル。
内容は後援会々長と二十世宗家
和泉元彌(商標通り)の挨拶、一周
忌から三回忌までの活動(国内・
海外)記録、後は殆んど東京新聞
に掲載した記事のスクラップ、こ
「あやめ酒」和泉元彌。前年同様
入場料はS席一万円、A席五千
円。因に同年五月一九日、第39回
「やるまい会」は野村小三郎名跡
継承披露はA四千五百円、B三千
五百円、C二千五百円で番組は

「茶壺」野村万蔵・万之丞・史
高、養囃子「現之楽」大野誠 幸
信吾・河村総一郎、「金匱」野村
小三郎・松田高義、「那須藤」野
口隆行、「酢薑」茂山十作・松本
薫、「井杭」野村又三郎・小三郎
・万之丞。
また同年七月一四日の第38回
「朝日狂言会」は指定四十円、自
由三十円、階上二十円で番組は養
囃子「天女之舞」竹市孝・後藤孝
一・大野弘之・井上礼之助・鷺見
政行・今枝郁雄・達浩・佐藤融。
金銭を云々するのは卑しい所業
とは分ついても如何に和泉会別
会が法外であつたかは瞭然、能楽
協会で規制は出来ないものだろう
か、と見所の人間は思わざるを得
ない。

「茶壺」野村万蔵・万之丞・史
高、養囃子「現之楽」大野誠 幸
信吾・河村総一郎、「金匱」野村
小三郎・松田高義、「那須藤」野
口隆行、「酢薑」茂山十作・松本
薫、「井杭」野村又三郎・小三郎
・万之丞。
また同年七月一四日の第38回
「朝日狂言会」は指定四十円、自
由三十円、階上二十円で番組は養
囃子「天女之舞」竹市孝・後藤孝
一・大野弘之・井上礼之助・鷺見
政行・今枝郁雄・達浩・佐藤融。
金銭を云々するのは卑しい所業
とは分ついても如何に和泉会別
会が法外であつたかは瞭然、能楽
協会で規制は出来ないものだろう
か、と見所の人間は思わざるを得
ない。

「茶壺」野村万蔵・万之丞・史
高、養囃子「現之楽」大野誠 幸
信吾・河村総一郎、「金匱」野村
小三郎・松田高義、「那須藤」野
口隆行、「酢薑」茂山十作・松本
薫、「井杭」野村又三郎・小三郎
・万之丞。
また同年七月一四日の第38回
「朝日狂言会」は指定四十円、自
由三十円、階上二十円で番組は養
囃子「天女之舞」竹市孝・後藤孝
一・大野弘之・井上礼之助・鷺見
政行・今枝郁雄・達浩・佐藤融。
金銭を云々するのは卑しい所業
とは分ついても如何に和泉会別
会が法外であつたかは瞭然、能楽
協会で規制は出来ないものだろう
か、と見所の人間は思わざるを得
ない。

名古屋和泉会別会
和泉十九世宗家 和泉元秀一周忌進善公演



三軒瓦
和泉元彌
和泉元秀
和泉元彌
和泉元秀
和泉元彌
和泉元秀

21世紀ノ心の文化のパフォーマンスは和泉宗家より
21Century "Heart" Culture "Performance" from IZUMI-SHON
和泉元彌 55歳 和泉元秀 58歳の伝承研究
和泉元彌 55歳 和泉元秀 58歳の伝承研究
和泉元彌 55歳 和泉元秀 58歳の伝承研究

平成八年二月二三日、名古屋和泉会別会
和泉流十九世宗家 和泉元
秀一周忌進善公演を謳
い、和泉流五五八年の伝
統・中国公演(北京・瀋
陽・上海・広州)中国国
際シンポジウム参加凱旋
公演とパンフレット表紙
にあり、和泉元秀・元彌
親子の「川上」を載せる
写真)。パンフレット
の内容は十九世宗家遺影
・遺墨、和泉元彌及び後
援会々長あいつ、「和
泉宗家十九世和泉元秀一
周忌進善公演によせて」

平成八年二月二三日、名古屋和泉会別会
和泉流十九世宗家 和泉元
秀一周忌進善公演を謳
い、和泉流五五八年の伝
統・中国公演(北京・瀋
陽・上海・広州)中国国
際シンポジウム参加凱旋
公演とパンフレット表紙
にあり、和泉元秀・元彌
親子の「川上」を載せる
写真)。パンフレット
の内容は十九世宗家遺影
・遺墨、和泉元彌及び後
援会々長あいつ、「和
泉宗家十九世和泉元秀一
周忌進善公演によせて」

平成八年二月二三日、名古屋和泉会別会
和泉流十九世宗家 和泉元
秀一周忌進善公演を謳
い、和泉流五五八年の伝
統・中国公演(北京・瀋
陽・上海・広州)中国国
際シンポジウム参加凱旋
公演とパンフレット表紙
にあり、和泉元秀・元彌
親子の「川上」を載せる
写真)。パンフレット
の内容は十九世宗家遺影
・遺墨、和泉元彌及び後
援会々長あいつ、「和
泉宗家十九世和泉元秀一
周忌進善公演によせて」

平成八年二月二三日、名古屋和泉会別会
和泉流十九世宗家 和泉元
秀一周忌進善公演を謳
い、和泉流五五八年の伝
統・中国公演(北京・瀋
陽・上海・広州)中国国
際シンポジウム参加凱旋
公演とパンフレット表紙
にあり、和泉元秀・元彌
親子の「川上」を載せる
写真)。パンフレット
の内容は十九世宗家遺影
・遺墨、和泉元彌及び後
援会々長あいつ、「和
泉宗家十九世和泉元秀一
周忌進善公演によせて」

暑

中

御

何

高安勝久	幸友会
福井四郎兵衛	福井良治
福井聡介	福井聡介
桂	後藤孝一郎
嘉津幸	嘉津幸
大倉流小鼓 松月会	大倉流小鼓 松月会
久田舜一郎	久田舜一郎
久田陽春子	久田陽春子
高橋奈王子	高橋奈王子
弘耀会	弘耀会
船戸昭弘	船戸昭弘
吐石会 河村総一郎	吐石会 河村総一郎
河村眞之介	河村眞之介
河村大	河村大
(石井喜彦改め)	(石井喜彦改め)
石井仁兵衛	石井仁兵衛
石井保彦	石井保彦
大倉源次郎	大倉源次郎
(株)大阪能楽会館	(株)大阪能楽会館
飯嶋六之佐	飯嶋六之佐

昭和三十三年(一九六二)、名古
屋和泉会と狂言共同社の主催で発
足した「名古屋和泉会」は昭和五
十六年の第二回を以て所期の目的
を達し(?)昭和五十七年以後は和
泉宗家後援会乃至は和泉元秀宗家
が主催の別組織と言え、何かと
事々しく名目を付けては(中に別
会の名に相応しくない)内容の充
実が伴わないと思える「名古屋和
泉会別会」に移行、平成九年(一
九九七)まで全一七回(初年度は
二公演)例年一月に熱田神宮能
楽殿で行われてきた。

宗家の名のもと和泉元秀の専横
が香間取り沙汰もされたが、良か
った点は和泉流現行曲売演の目的
もあつて稀曲を積極的に採り上げ
てきた事であろう。名を成せば毀
誉褒貶は免れられないことも、も
つと協調性があつたらば惜しま
れる。外見は押出しの立派な狂言
大夫の大きさがみられたが、案外
に小心であつたのではと思われ
る。御冥福を祈るばかりである。

その後、いわゆる二十世宗家を
自称する元彌が先代の七回忌、十
三回忌と進善会を重ねてきたかど
うか、タレント(?)としての噂
を仄聞するが、各地の能楽堂での
催会については裏聞にして知らな
い。

「翁」和泉元彌(親) 向後恵太
(馬)、狂言小舞二番「野老」和
泉元彌、「大黒木」和泉淳子、三
宅藤九郎。入場料は前年に同じだ
が学生三千五百円が加わる。なお
新作沙翁狂言は昭和五二年四月、
和泉元秀の父・九世三宅藤九郎作
の「ぢやぢや馬ならし」(馬喰・
娘・舅)とは異曲。



やるまい会「翁」
河村総一郎(打掛)
(杉浦賢次氏撮影)

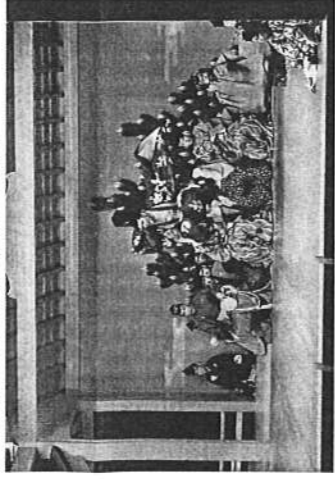
道臺・正邦)となりツレは面相持の權に下居、シテのみ悠揚と舞続け、地へ萬歳樂、のシテの返シ句へ萬歳樂、には昂る喜悅が。扇で面徹の面相前へ行き下居、ツレも立つてゆき、共に面を外すとシテは再び正先で深々と平伏、翁席りに、ツレも後に続く。面箱持・信明の、役をよく弁えた健氣な頑張り光れば、九郎右衛門・喜正という当代を代表する壮年シテ方の端正にして精悍、品位ある翁・千歳コンビが素晴らしい。
三番叟となり大鼓・総一郎、一ノ松へ抜ける右膝つく構え、小鼓三挺・尚靖(頭取)伊喜夫・泰平が打ち出し、笛・六郎兵衛が加わる中を大鼓は打ち出し、立つと打ちやら(写真)舞台へ入り正面階近くまで出、打ちやら退つて床几に掛かる。大鼓方石井流の流シ打掛の重い習。打掛の詳細は金剛右京談・三宅義聞書「能楽芸話」昭和46檜書店刊、森田操著



やるまい会「翁」
左より觀世喜正、片山九郎右衛門
(杉浦賢次氏撮影)

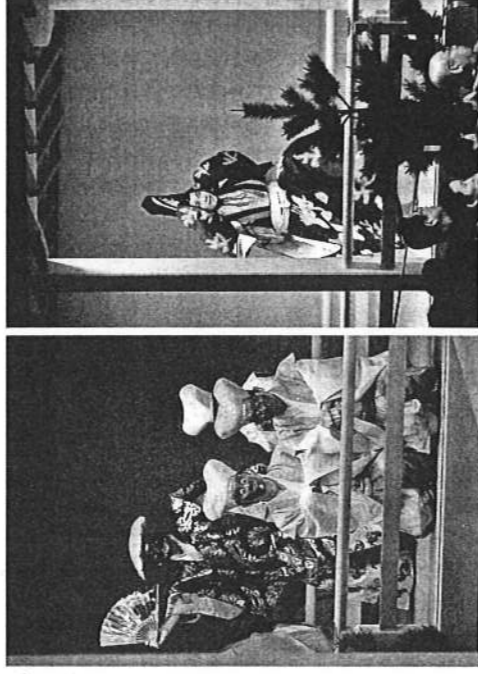
謝の喜びが横姓。小書「權懸之舞」は幕際まで走ると面箱拍子、足拍子力強く踏みつ、(写真)一ノ松へ。そこから脇柱へ走り出るところ、また、笛前から高々と飛ぶ鳥飛(写真)躍動感が見事。殊之段を舞上げ物着に黒式尉・烏帽子をつけると鈴之段。「あら目出度やな、物に心得たるアトの大夫殿に見参申さう」と面箱持に呼び掛ける三番叟・又三郎に、立つと「丁度参つて候」と心える面箱持・信明、実の親子の問答は子沢山を巡る小書「十人子玉」。子を呼ぶに其処な者では銘々が我が事と思ふ故「十人の子供に差をつけて候よ」と又三郎、「あら目出度や、さあらは鈴を参らせう」と信明、「やうがましや候」と挿紗に頭下げ鈴を受け取る又三郎、微笑ましくも此処に葉の伝承は親子のつながり、じんときくる。難役を兼し、信明が舞へ退くと、三番叟は出番だが何やら賑やかな雰囲気に出番子を見申

「千野の摘草」昭61ベリカン社翻刻に記事がある。総一郎の打掛は平成二年一月二十八日、宝生能楽堂での構間入馬シテの「翁」以来か。因にその後、総一郎の次子眞之介が横姓能楽堂で勤める。
さて、合膝でアと座を出る三番叟・又三郎はへおさへく、と珠之段に。喜色満面、朗々と謡い出すところには襲名を自祝し、七師父・先代に捧げる感



やるまい会「三番叟・揉之段(鳥飛)」
野村又三郎
(杉浦賢次氏撮影)

する三番叟に、へ子の日の座この言日に立ち出づる、と謡い作らせろろく出て来ると白鼠使は、大黒の「何れもこれにて見物候へ」の三



やるまい会「大黒風流」
野村万蔵ほか
(杉浦賢次氏撮影)

さばやと存する」と下居。三番叟掛りの「大黒風流」でシテ大黒天・万蔵が威容を一ノ松に現わし、名宣から不審する三番叟との問答は、舞台へ入つては目出度い御能見にと。興味津々の三番叟に、三面六臂の大黒のこと問われ、ば、大小前の床几に掛り、延暦寺の開山・伝教大師との関わりを。大師に通力を軽視され「大黒に怒りをなし」と足拍子強々と二ツ踏むところに奇持は「忽ち三面六臂に」と。それを聞き納得の三番叟、大黒にかまけていたとはかりに「未だ鈴之段を舞はず候」と大黒にも見物を勧めれば、大黒は笛前に床几を移動。と、「あら禁上や」「舞はれぬ間に」とりき座に佇立

三番叟の言に、四隅に各一匹、大黒の膝元に二匹、計六匹(友彦・融・靖浩・隆行・健太郎・健一郎)が。三番叟は鈴之段を舞い始める。と、目付柱・脇柱と白鼠を構い出し、悪巫山戯ともみえないが、キリに拍子一ツ強く踏むと吃驚するシテ柱の老鼠(友彦)、舞上げ、へあらく目出度やくな三番叟に進み出て、と舞い出す大黒。へ袋に入れて、と脇柱の白鼠が大黒から袋を受け取り、それを三番叟に渡すと、へなはく所察言に守らん、と打出小袖も三番叟へ。キリはへ観山指して帰らせ給ふ、と大黒は一ノ松でユウケン扇(写真)、三番叟は切戸へ退き、老鼠のみ大黒の後から入った。稀曲だが演者の喜びも晴れくと、前半の張り後半の寛ぎ、調和のとれた目出度い輝しい舞台だった。(1時間27分)



やるまい会「子盗人」
野村萬
(杉浦賢次氏撮影)

「舞はれぬ間に」とりき座に佇立する三番叟に、へ子の日の座この言日に立ち出づる、と謡い作らせろろく出て来ると白鼠使は、大黒の「何れもこれにて見物候へ」の三



やるまい会「佐渡狐」
左より茂山良暢、大藏弥太郎
(杉浦賢次氏撮影)

の。年貢納めに上洛の途次、道連れになった越後ノ百姓・基誠と佐渡ノ百姓・良暢、徒然の雑談に話題は狐。居るまいがの、と意地悪そうに佐渡を揶揄する越後、「居る」と断言はしたものの、心懸りな佐渡。ならば狐の有無を賭縁にして銘々が腰の物を、と越後。裁定は誰に、ときて弱みのある佐渡は「御館に上りお養者に判断を」と、ここで追いまくられていた佐渡が主導権を握り裏面工作が可能に。早速、奏者・弥太郎に取り入れれば、「今朝より冷飯を暖めて居り雑談には付合へぬ」と語気荒く「臆する奏者も、「これは私の寸志でござる」の佐渡の言葉は確と耳に、背を押し辺りを窺い袖の下から手を出すところ(写真)迫真。越後も物に揃い、さて奏者の裁定は、「佐渡に狐は」と思わせぶりに一呼吸、腰を浮かせ固唾飲む佐渡へ、狐の姿形を問う越後の、拭い難い疑念も言わずもがなの佐渡寄りの奏者の一言「また折々は白いのもあらうがの」に打

暑

中

御

伺

茂山千作
千五郎
七五三
千三郎

鬼頭義命

長生会

上田悟

谷口正壽

谷口正喜

寛 鑛

呉竹会
伝統文化(能楽)こども教室
東海能楽伝承会

亀井俊一
保忠雄
実 雄

狂言やるまい会
野村又三郎
松田高義
野口隆行
奥津健太郎

驚鹿今井佐大
見島枝上藤野
政俊郁靖靖
行裕雄雄浩

狂言共同社
井上藤野
大友弘次郎
彦之融

大藏狂言会
大藏彌太郎
千太郎
基 誠

茂山忠三郎
茂山良暢

大藏狂言会

大藏狂言会

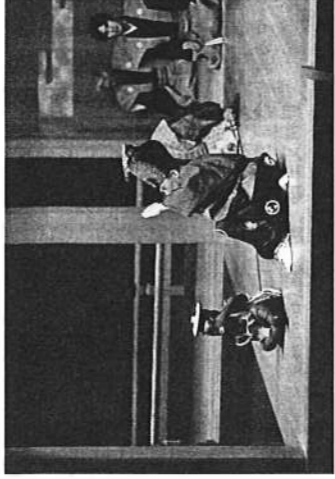
茂山忠三郎
茂山良暢

「なう愛しいお子や、ちやつとござれ」と赤ん坊を抱いた乳母が留めて入る。円転滑院の境の萬、素晴らしい。(21分)

「靱猿・替装束」 「隠れもなしい射手です」と野へ狩りに出る大名・高義、偶々出会う猿鬼・又三郎の小猿(さよ)に執心、太郎冠



やるまい会「靱猿・替装束」
野村又三郎・さよ
(杉浦賢次氏撮影)



やるまい会「靱猿・替装束」
左より野村さよ、松田孝義
右より野村又三郎、さよ
(杉浦賢次氏撮影)

者・健太郎を猿鬼の許へ連れ、無心を聞いて呉れるか否かを問わせらる。似合った御用ならば、の言葉を待ると大名、改めて太郎冠者を猿鬼へ遣り、覆まで立てさせると先づ一礼、慌てる猿鬼が御用が何かを承らぬうちに、と当惑すれば、高にかかつて一きつと一礼申しておりやぞ」と有無を言わせぬ勢い。御用は即ち大名の気紛れな殺意、小猿の皮を剥ぎ取(矢を容れる用意)に張りたいと。その交渉に当らされ、専横な大名と憐れな猿鬼の間に立つ太郎冠者、それへの立場にあつて三者の心情が自然体に出露され惹きつける。猿鬼の侮い抵抗も小猿共の射撃とあつては万事休すに。小猿は又三郎の息女さよ四歳、事の次第を言い合めるうち、又三郎の声涙共に下る猿鬼から打杖を取ったあどけない小猿が、禮古と思ひ、小猿もとろも御成敗を、と猿鬼。流石に大名も不憫に思ひ、「命真加な者ぢや」とあつさり諦めるところも亦大名。キリは重苦しい雰囲気が一転、猿鬼が子猿にお礼の舞を舞わせれば、大名も真似をしてはしやぎ(写真)、目出度く大団円。猿鬼に感情移入過多無きにしてもあらずも、幼い妻の娘との共演は自然体の当然、鼻下の先代もさぞ嬉しかつたであろう。(33分・5月29日・第54回やるまい会)

「巴・替装束」 木曾から上洛の僧(ワキ和夫)、江州粟津々原に着き憩うところ、面理・櫻白赤・ベタ金襴着付、萌黄赤段唐織着流しの、鄙には粋な気品の里子女(シテ和思)が小調の前で流立するのを不韋、問答・掛合に小調が

木曾義仲を祀ると知り下居全撃すれば、シテはそれを見て己の心情を初回(光之助・見一・雅則ら)に語らせ、ワキに面と向き合つて思いを述べ伝えたい風情に正中へ来て下居。へさる程に、と右ウケ入相の鐘をきく心に面伏せ、陰に籠る残響の物凄さに気付かされたかにスツと立ちへ我も亡者とワキへ袖アシラとし、亡者が誰と分らずに里人にへ問はせ給へ、と念を押すかにワキへ語メ、夕闇に紛れると、里人(アと隆平)が今日は粟津の御神事、と宮宮詣りか、ワキに出会うと求めに応じ、木曾殿の合戦の機、巴の働きを居場に。

待詔に粟津ヶ原の死者を申うワキ、一声離子(雅義・建作・義進)で現れる巴(後シテ和思)は面・襟・着付は斬断・梨子打烏帽子・襟黄太刀・縁長袴(御折込)小太刀の姿、長刀担げ一ノ松、長刀一閃、石突トンと突くのは前世の罪・報いの苦しみ刃先にかけ一難きする心か。舞台へ入り、武藝語るワキと掛合に、女ゆえ義仲の最期に殉死許されず恨みが残つてとシテ。地となりへ最期に臨んで功名を、とワキへ皆込聞キの氣迫に女武者の本領。義仲の事績を述べ、回郷の語で申いを乞うクセから床几に掛かり、合戦の様子を詳述するロンキ。義仲を放う馬がへ深田に駆け込み、と足掻く姿を左肩と踏む足拍子に。腰浮かせ手綱捌きに脱出試みるのはへ前後を忘れて控へ給へり、とトンと墮落シラルところに、床几

の型に舞りと落胆の心情鮮やかにみせる。深傷の義仲を後にへかくて御前を、と吹つ切れた様にスツと立ち、へ見れば敵の大勢、を長刀手に奪へ見込み、へいで一戦賭女丈夫・巴は鮮やかな長刀捌きに敵を追い立て二ノ松へ。へ後も遠かに、と幕へ敵を見やるところ充て足感。へ今はこれまで、と長刀杖に戻ると、後見が正面に置いた義仲形見の小袖を見詰め、へ巴泣くく、両手に拘り取り抱きか、え、立つと義仲の腕を見る心はへ行けども悲しや、と振り返るところなど余情惻々。小書で鳥帽子・長袴を脱いで形見の小袖着け、抱えた小太刀を後見へ渡すと代つて笠を取り一ノ松へ。独り木曾に落ちて行く心残りへワキを見込みへ執心を申して、とシラルところにまさしく、憐れ一入だった。(1時間12分)

「薩摩守」 天王寺詣りの出家(シテ隆司)、喉が渴き大小前の茶屋(アト良介)に奪るとスミで立つたまま、一服、更に茶屋が運ぶ二服目を。流派の極りか、出家の処世規範なのか、茶を淹れる茶屋の傍に坐らないのが珍しい。発つ段になり茶代請求されると、出家ほど心安い者はないと自認するシテ、施し受けるのは当然の思い、悪化する事無くしやあくとも無銭を吐露。却つて先を案じる茶屋が、徒勞では渡れない大河。神崎川に言及すればシテは素直、それなら此処から伏し拝むと。本当に持合せはないのか、と確める茶屋に、「くどい事を」とシテは「笠なりとも数珠なりとも取らせられい」と。シテの正直に感じ入り、茶代を取らぬ上に渡しの船賃に代わる秀句を伝授する茶屋。さて、シテは秀句好きの船頭(次アト隆平)に会うと、その名は唐天竺我朝三國に隠れもない、と婿で、喜ばせるが、船賃は薩摩守とばかりで対岸まで気を持たせ、その心を問われ苦慮。「忠度」ならぬ「書海苔の引手し」で面目失墜。折角の茶屋の好意が却つて徒しいや、僧は川を渡れたのでは。いや、茶屋も船頭も金銭的ダメージを受ければ、僧も恥をかき精神的ダメージを。後味あまり悪くないのはシ

テと次アトの口跡の爽やか。(23分)

「遊行柳・青柳之舞」 從僧(ワキツシ) 雅人・正彦)を伴い諸国を行脚布教の遊行上人(ワキ和幸)、白河の関を過ぎ奥州に入ると教多の道から広い方を一行かばやと)ワキ屋へ行きか、と、速くから呼び掛ける故老(シテ善高)、先の遊行上人は「昔の街道を御通り」ゆえ、それを教えたに「遙々これまで参りたり」と二ノ松に。昔はこの広い道は無く、「あれに見えたる」と右へ眺め、先の上人の通った街道にはその上「朽木の柳とて名木あり」とワキを見込むのが是非この街道を、の思い。初回(雅義・見一・礼久ら)になり、へ急がせ給へ、とワキへ袖アシラとするのも強くワキに此の街道を勤める心。へ返にさぞな所から、の返シ句で運ビ出すと荒れ果てた街道は野草生い茂りへ乱れ合ひたる、と舞台へ入ると右ウケ、へ秋の輝、を見、へ聲分け、二足出るとへ昔を残す古塚に、朽木の柳を胸材にしつと眺め、へ薩摩守道は、と直つて下へ面便と静かに進むのは、風の行方を眺め眺め心か。へ風のみ渡る気色かな、の情趣沁々と、朽木の柳「よくく御覧候へ」とワキへアシラと、詰メルのも興を暖らぐため。されば、名木のこと委しく、と問うワキに西行の詠んだ一首を紹介、杖つき静かに塚へ進み、へ末の世々までも、で塚を上から下へと眺め、へ残る老木は懐かしや、でワキへアシラフのは同意を求め心。中入はへ御十念を賜はり、と合掌、へ古塚に奪るか、と、で身体が塚に付く程に右へ廻り、返シ句で塚に入る。所ノ者(アト忠一郎)がワキとの問答から唐語に西行に関わる朽木ノ柳の謂れ淡々と語つて退くと後場。

ワキ・ワキツシの待詔から出端(雅義・舜一郎・芳昭・悟)、シテは塚の中から謡い出し、地へ忽然と現れ、と引廻シ下ろされると老柳ノ精(後シテ善高)が面黻尉・白垂・柳左比風折烏帽子・襟淺黄・小格子厚板着付、濃暗緑大口・赤地ベタ金襴衣の姿で扇を笏の様立て、持ち、床几に居る。ワキとの掛合に、弥陀の教えは佛法

何	<p>東海能楽研究会 代表 林 和 利</p> <p>東海能楽伝承会 代表 辻 本 正 樹</p> <p>名古屋市中村区下米野町三十一 寛 鑛 一 方 電話 052-451-9797</p>
御	<p>ウシマド写真工房 牛 窓 正 勝 雅 之</p> <p>〒600 京都市上京区北野上七軒 TEL(075)464-1234 FAX(075)464-1572</p>
中	<p>朝日カルチャーセンター 離 子 教 室</p> <p>小鼓 後藤孝一郎 丸栄スカイル10階</p>
暑	<p>栄 能 楽 舞 台</p> <p>名古屋市中区栄五十六十四 電話(二六二)二一八三番</p>

の難さを説かれ、へ上詰上生に(到らん事を履しき、と合掌のシテ、地クリへ南無や、と立つとへ(本願偽り)まします、と塚を出る。サシ・クセに柳に纏わる和漢の故事を述べ、就中、舞付セは臺上人の逸話にも触れる。へ幕に教ある昔の昔、と右足拍子一ツ強く踏み、爪先上げるのは蹴鞠の足応えか。へ手廻の虎、は左下に見て左袖掻い込むようにきつく引くと見えた。へ恋路も由なしや此れは老ひたる柳色の、と踏む五ツ拍子には悔懨懨も。序之舞は小書で短かく舞上げると、地と掛合にキリ。

葵 心 庵 舞 台	<p>尾張旭市東大町原田二四九三之二 電話 〇五六二五〇②三三四六番 能舞台 電話 〇五六二五〇④六九八</p>
楽 諷 庵 舞 台	<p>連絡先 名古屋市昭林区川名山町一〇五 電話 (八三二) 三四九一番</p>
お稽古用敷舞台	
彰 諷 閣	<p>連絡先 安城市三河安城東町一十七三 グレイシャスビル安城内 電話 (〇五六六) 七七八二四二一</p>
能 楽 の 友 社	<p>(おことわり) 専中広告掲載にあたりましては、紙面の都合により順不同とさせて頂きましたので何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。</p>

へ報謝の舞も、と正中へ出るとへこれまでなりと、ワキへ指返開キ、へ名残の涙の、とシラリ、別れとなるころ、へ柳條を結ぬ、は枝を何本か撓めて輪にすること、へ手折るは青柳の、と扇を左手に替えるのは折る心、へ奏もたをやかに、で手から扇が落ちる奇構が。

ここに(柳を折る)とは中国の風習で別れる人に柳の枝を折つて贈る意、柳の枝はしなやかで元へ返るので「帰る」にかけて言う。

シテの意図では当然無いが、へ結ぶは老木のへ枝も少なく、しな

やかさを失い輪にも結べない代物では贈るに値しないと思う心が、そつさせたと。しかし流石にシテの老練、少しも慌てず騒がず、さりげなく左手に拾い上げると舞い続け、へ倒れ伏し、と右膝つき、へ柳飯褒の、と扇で面を蔽い、へ一夜の(涙りも)、と立つ構が。

ハネ厲ニツ、終始老柳ノ精の性び、寂び、の風情素直に表わし痺味も、心に沁みる舞台だった。(1時間40分・6月4日・梅嶺会大阪公演・大阪能楽会館)

NHK放送予定(平成23年8月~9月)

8月21日	人間国宝に聴く(3) 笛方一噌流 一噌 仙幸 聞き手:高桑いづみ
8月28日	人間国宝に聴く(4) ワキ方下掛宝生流 宝生 閑 聞き手:増田 正徳
9月4日	素謡「本 誠」(観世流) 山本 順之 大坪喜美雄
9月11日	素謡「三 輪」(宝生流) 松野 恭憲
9月18日	素謡「遊行柳」(金剛流) 高橋 章
9月25日	素謡「江 口」(宝生流)

演能カレンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係)
(TEL.052-231-0088)

23日(水)	名古屋学生能楽連盟例会	(無料)
28日(日)	第27回衣斐正宜後援会能	(有料)
3日(出)	ござる乃座	(有料)
4日(日)	名古屋能楽堂9月定例公演(初秋能)	(有料)
10日(出)	片山慶次郎一周忌追善会	(有料)
11日(日)	名古屋幽花会秋季大会	(無料)
19日(月)	名古屋 恵美流	(有料)
23日(金)	名古屋 泉流	(有料)
24日(出)	名古屋 泉流	(無料)
25日(日)	名古屋 泉流	(無料)

能楽の友

発行能楽の友社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号 464-0858)
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-363993
購読料 1年 1100円
1年 1800円
郵送の場合 1100円

第1回 久田観正会

10月9日 名古屋能楽堂

NPO法人名古屋能楽振興協会では、十月九日(日)名古屋能楽堂で「第一回久田観正会」を開催する。十二時半始。能組は、能半部「立花供養」(シテ久田三津子狂言「腰折」(佐藤融)能融「十三段之舞」(久田勘助)。立花は、華道石田流・石田香翠氏。チケット料金/前売指定席八千円(正席) 自由席一般七千円、学生三千円(自由席のみ)、当日は各五百円増。前売チケット取扱い「プレイガイド」(ナディアパーク七階、三越・愛知文化センター)、松坂屋本

梅田邦久師傘寿記念 能「娘捨」上演

観世流シテ方、梅田邦久師は、傘寿を記念して、きたる十月二十一日(日)名古屋能楽堂で「第三十三回邦謡会能」を開催、能「娘捨」を上演する。午後二時開演。

10月22日 邦謡会能

熊澤恵美子偲ぶ会

11月19日(土)名古屋能楽堂

女流能楽師として中部能楽界に活躍された観世流シテ方・準職分熊澤恵美子師は平成21年8月逝去され、昨年5月に観世宗家、梅若吉之丞師ら梅猶会の出演で追悼能が催されたが、吉之丞一門の今後のさらなる発展を希求して、このたび「梅若吉之丞先生後援会」が発足。後援会長には、故恵美子師夫人・熊澤敦氏が就任して今後の活動を推進していくことになり、同後援会主催、梅猶会後援により、きたる十一月十九日(土)名古屋能楽堂で「熊澤恵美子・偲ぶ会」が催される。演能は能「鸚鵡小町」(梅若吉之丞)能「求婚」(梅若猶義)能「岩船」(梅若秀成)の三番のほか、狂言、仕舞。チケットは、指定席一万円(前売)、自由席七千円(当日券はいずれも千円増)。問い合わせは、小松勝彦氏(電話094・233・45882、発名古屋市西別所10661・5)、又は出演楽師宅。(番組②面載)

野村又三郎襲名披露

12月23日やるまい会 公演

和泉流狂言方・野村小三郎師は、今春、小三郎改め野村又三郎を襲名、名古屋での襲名披露公演について、十二月二十三日(祝)金・東京・国立能楽堂でのやるまい会で、「野村又三郎襲名披露」公演を開催する。能組は「翁」(観世清和、三番叟・野村小三郎)「風風流」(野村四郎)狂言「遊艇」(三宅石近)狂言「鶴生」(野村万作)狂言「木六郎」(野村又三郎)主催 株式会社野村事務所、フックス052・350・7992 前売(花)一万三千円(当日一万五千円)(鳥)前売一万円(当日一万二千円)(風)前売八千円(当日一万円)(向)前売六千円(当日八千円)/問い合わせ・電話090・8323・3210(月・金)

演能案内

のうのう能 名古屋

第五回 能の旅人

九月十日(土)午後二時開演
名古屋能楽堂

解説 天鼓 観世 喜正
能の音楽 河村真之介
後援 藤津幸 竹市 学

一調花 筐 片山九郎右衛門 小鼓 後藤孝一郎

天鼓 飯富 雅介 河村真之介 加藤 洋輝
手鼓之舞 問 野村又三郎 後藤 藤津幸 竹市 学

後見 坂 真太郎 地謡 高橋 暎一 古橋 正邦
駒瀬 直也 中所 直夫 武田 邦弘

問い合わせ
のうのう事務所
電話033・32666・1020

取扱い のうのう事務所
チケットぴあ(0570・02・9999、Pコード413・966)

片山慶次郎 一周忌追善

名古屋幽花会秋季大会

九月十一日(日)午前十時開演
名古屋能楽堂

素謡 花 筐 石黒 直子 松久 祐子
市野美代子 磯高 まり

天半 鼓 部 徳岡 孝二 石川 輝夫
岡本 耕蔵 長柳 敬明

舞囃子 船 弁 慶 磯部 まり 河村真之介 竹市 学
葛 大 城 舞 村木 玲子 曾和正博 前川 光範

鉄 輪 石黒 享子 河村真之介 前川 光範
曾和正博 竹市 学

仕舞 小袖曾我 片山 紫乃 紫乃 乃

番外仕舞 誓願寺々々 片山 幽雪 真山 清和

独吟 砧

能 鉢 木

分林 道治 村木 豊茂
中村 宜成 河村 隆一郎 藤田 六郎兵衛
福王 和幸 曾和正博
是川 正彦 野村又三郎

濃 雨 之 段 岩瀬 多美子
小野 博幸 小田 和季

素謡 隅 田 川 片山 峻佑 味方 大玄
宮崎 晃吉 武田 大志

舞囃子 楊 貴 妃 松久 祐子 河村真之介 竹市 学
曾和正博 前川 光範
融 パンキ 比江 孝子 曾和正博 藤田 六郎兵衛

仕舞 通 小 町 木村 厚 花 月 想澤 早苗
葵 上 輪 地大 公代 蝉 丸 神谷 映里

舞囃子 小 塩 懸 瑛子 河村真之介 前川 光範
曾和正博 藤田 六郎兵衛
唐 船 市野美代子 河村真之介 前川 光範
曾和正博 藤田 六郎兵衛

濃 吟 江 口 山邑 英之 野瀬 兼治郎
高木 寛敬 西野 宏

追加
番外舞囃子 海 士 片山 伸吾 河村真之介 前川 光範
曾和正博 竹市 学
[御米場歓迎] 主催 名古屋幽花会
片山 伸吾

九月十九日(祝)十二時半開演
名古屋能楽堂

能 自然居士 土方 浦部 美有 古橋 正邦
橋本 幸 河村真之介 竹市 学
問 橋本 正樹 後藤 藤津幸
井上 靖浩

後見 梅田 嘉宏 地謡 吉沢 孝 武田 大志
武田 邦弘 加松 神充 幸親 充
加賀 敏彦 清沢 一 政

狂言 雁 磔 佐藤 融 今枝 郁雄
佐藤 友彦 後見 井上 靖浩

仕舞 松 虫 清沢 一政
鉄 井 輪 筒 祖父 江修一
武田 邦弘 地謡 梅田 大志
高橋 暎一 磯 久

能 安 達 原 観世流之丞
黒頭 高安 勝久 河村真之介 加藤 洋輝
杉江 元 久村 舜一郎 大野 誠輝

問 鹿島 俊裕

附祝言 (終演四時過頃)
主催 名古屋観世会
事務所 名古屋市昭和区台町2-16-5
TEL/FAX052・841・4633
前売取扱い所 名古屋能楽堂(TEL052・231・0088)
名古屋観世会事務所(梅田邦久方)

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ③

竹尾 邦太郎

八、「中日五流能」①

昭和三〇年代から昭和五〇年代、一時代を劃した「中日五流能」、その発足の端緒は昭和二十七年一月二十四日、御園座の特設舞台での催能であった。

先づ此の前後の、当地に於ける能楽界の舞台活動の様子を概観、

昭和三〇年(一九五五)一月二十七日、熱田神宮能楽殿が舞台坂をすするまでに御園座で行われた六度の催能をみている。

昭和二〇年三月二十八日、名古屋大空襲で本地の名古屋能楽堂が灰燼に帰してからは演能の場を失っ

た当地の能楽界。八月一五日の敗戦後、葉巻を着けた本格的な能公演は同年二月二二日、戦火を免れた京都から戦災見舞かたがた来名した片山九郎右衛門一行が柳橋の名古屋宝塚劇場(名宝)仮設舞台での「能楽復興大衆公演」を嚆矢とする。番組は舞囃子「高砂」柴田初太郎、能「羽衣」和合之舞「片山九郎右衛門」西村弘敬・藤田六郎兵衛・田鍋初一郎・谷口幸治郎・前川光隆、狂言「権縛」茂山十五郎、七五三「眞」能「乱」置産「片山九郎右衛門」高安遊男・藤田六郎兵衛・田鍋初太郎・谷口幸治郎・前川光隆(番組は慶堂版印刷だったという)。

田鍋初太郎は自著「小鼓談話」昭和三年六月二〇日わんや刊の

中で次のように述べている。「この時は戦後最初の演能として戦時中四散していた名古屋の楽師諸君もひよこり楽屋へ現われたりしてお互いに再会を喜ぶという場面も見られ、弁当の代わりにパンを買って食べて頂いた記憶があります」と。

本舞台を失った戦後の当地能楽界は各流とも社中の素謡会や囃子会などは焼失を免れた寺社や料亭・自宅などで行ってきたが、本格的な楽能の公演可能な舞台が昭和二年六月一九日、車連の名古屋市立第一高等女学校(市一高女)講堂に舞台が設けられ、能楽協会名古屋支部による戦後第一回の催能があり、番組不備で詳細不明(②面へつづく)

第10回記念、「名古屋名駅新能」は、七月三十一日(日)親世流宗家・親世清和師が来演して開催、聴衆がつづくなか愛好者がつめかけ幽玄の境地に誘われた。

演能に先立ち、全国学生能楽コンクール参加の金城学院大学、法政大学、関西大学、東京大学、学習院大学、名古屋市立大学、南山大学、明治大学の能楽部の審査結果発表があり、最優秀賞が関西大学をはじめ優秀賞、審査員特別賞などが授与された。

演能は、能「高砂」(シテ親世清和)舞囃子「玉鬘」(シテ久田

三津子)狂言「権男」(シテ井上靖浩)仕舞「田村」「西行桜」、半能「石橋」(シテ久田勘鷹)で盛会のうちに終了した。

小牧山新能

9月10日 小牧山史跡公園

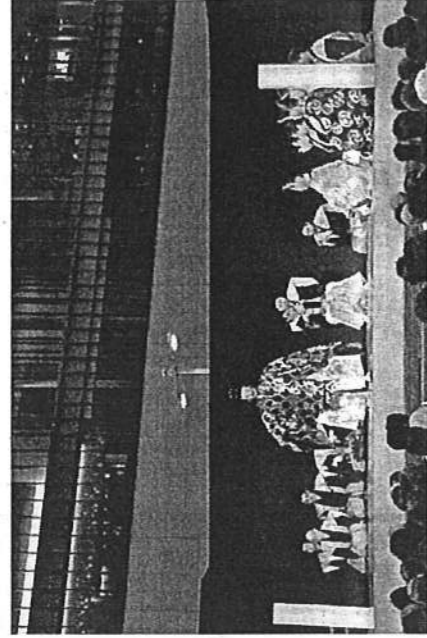
小牧市、小牧山文化事業「小牧山新能」実行委員会主催の「小牧山新能」は、九月十日(日)、小牧山史跡公園お月見まつり会場で催される。入場無料、午後五時四十分火入れ式、午後六時開演。

能組は、一齣「花廬」謡「片山九郎右衛門」、小鼓・後藤孝一郎、能、天鼓、(弄鼓之舞)シテ親世喜正、ワキ飯富雅介、間・野村又三郎、笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村真之介、太鼓・加藤洋輝、地頭・片山九郎右衛門ほか

料金S席指定席五千元、A席自由席四千元、学生自由席二千元。申込みのうの事務所(TEL0570・02・9999、Pコート412・576)

チケット取扱い 豊田市能楽堂(0565・35・8200)チケットぴあ(TEL0570・02・9999、Pコート412・576)

能「高砂」「石橋」 第10回 名古屋名駅新能



第5回能の旅人

9月10日(日) 能天鼓上演

第5回能の旅人(のうの能)in 名古屋公演が九月十日(日)名古屋能楽堂で開催される。午後二時開演。

能組は、一齣「花廬」謡「片山九郎右衛門」、小鼓・後藤孝一郎、能、天鼓、(弄鼓之舞)シテ親世喜正、ワキ飯富雅介、間・野村又三郎、笛・竹市学、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村真之介、太鼓・加藤洋輝、地頭・片山九郎右衛門ほか

料金S席指定席五千元、A席自由席四千元、学生自由席二千元。申込みのうの事務所(TEL0570・02・9999、Pコート412・576)

チケット取扱い 豊田市能楽堂(0565・35・8200)チケットぴあ(TEL0570・02・9999、Pコート412・576)

狂言づくし

9月11日(日) 豊田市能楽堂

豊田市能楽堂では九月十一日(日)「狂言づくし」として、狂言「権縛」「呂運」新作狂言「ある日の三英雄」安土城のイソップ」を上演する。

「権縛」シテ井上靖浩、アド佐藤、アド佐藤友彦、後見会枝郁雄

「呂運」シテ野村萬、アド野村萬、アド野村萬、後見、小笠原匡

新作狂言「ある日の三英雄」安土城のイソップ」

初演、作・柳沢新治、演出・小笠原匡、織田信長 野村万蔵、明智光秀・佐藤友彦、羽柴秀吉・小笠原匡、前田利家・佐藤融、徳川家康・井上靖浩、森蘭丸・野村萬丞、お江・寺田琴葉、侍女・今枝郁雄、大名ほか・拳母狂言会

午後二時開演、入場料全席指定・正面席五千元、脇・中正面席四千元(学生半額)

チケット取扱い 豊田市能楽堂(0565・35・8200)チケットぴあ(TEL0570・02・9999、Pコート412・576)

和泉流狂言大会

(初日) 九月二十四日(土) 名古屋能楽堂
(二日目) 九月二十五日(日) 名古屋能楽堂

(初日) 九月二十四日(土) 正午開演

賞 賀
杭か人か
伯母ケ酒
附子
小舞 海淵守治の晒
追下り
二千石
泉山伏喜水
二人大名
禰宜山伏
鬼
杭か人か
水掛賀
伯母ケ酒
竹生島参
雷
昆布
鏡空
呂鏡
男腕
縛
縛
縛

主催 狂言共同社

梅田邦久師 傘寿記念 第三十三回 邦謡会 能

十月二十二日(土) 一時始
名古屋能楽堂

お話 本日の能について 村瀬 和子

舞囃子 養老 水波之伝

仕舞 野宮 片山 幽雪

能娘 拾

附祝言

チケット料金 前席、当日券とも五千元
申込み 名古屋能楽堂 邦謡会事務所 / 電話 052・841・463・2

和泉流狂言大会

(初日) 九月二十四日(土) 名古屋能楽堂
(二日目) 九月二十五日(日) 名古屋能楽堂

(初日) 九月二十四日(土) 正午開演

賞 賀
杭か人か
伯母ケ酒
附子
小舞 海淵守治の晒
追下り
二千石
泉山伏喜水
二人大名
禰宜山伏
鬼
杭か人か
水掛賀
伯母ケ酒
竹生島参
雷
昆布
鏡空
呂鏡
男腕
縛
縛
縛

主催 狂言共同社

第一回 久田観正会

十月九日(日) 十二時半始
名古屋能楽堂

能半部 久田三津子
立花供養
問 杉江 元
後見 松山 幸親
仕舞 鳩 久田勘鷹
狂言 腰折
能融
付祝言

主催 NPO法人名古屋能楽振興協会

チケット料金 指定席(前席)八千元(正席)自由席一般七千元、学生三千円、※当日は五百円増
取扱い/ブレイガイド、チケットぴあ、名古屋能楽堂、名古屋能楽振興協会(電話052・734・6192、FAX052・705・1585)

和泉流狂言大会

(初日) 九月二十四日(土) 名古屋能楽堂
(二日目) 九月二十五日(日) 名古屋能楽堂

(初日) 九月二十四日(土) 正午開演

賞 賀
杭か人か
伯母ケ酒
附子
小舞 海淵守治の晒
追下り
二千石
泉山伏喜水
二人大名
禰宜山伏
鬼
杭か人か
水掛賀
伯母ケ酒
竹生島参
雷
昆布
鏡空
呂鏡
男腕
縛
縛
縛

主催 狂言共同社

和泉流狂言大会

(初日) 九月二十四日(土) 名古屋能楽堂
(二日目) 九月二十五日(日) 名古屋能楽堂

(初日) 九月二十四日(土) 正午開演

賞 賀
杭か人か
伯母ケ酒
附子
小舞 海淵守治の晒
追下り
二千石
泉山伏喜水
二人大名
禰宜山伏
鬼
杭か人か
水掛賀
伯母ケ酒
竹生島参
雷
昆布
鏡空
呂鏡
男腕
縛
縛
縛

主催 狂言共同社

和泉流狂言大会

(初日) 九月二十四日(土) 名古屋能楽堂
(二日目) 九月二十五日(日) 名古屋能楽堂

(初日) 九月二十四日(土) 正午開演

賞 賀
杭か人か
伯母ケ酒
附子
小舞 海淵守治の晒
追下り
二千石
泉山伏喜水
二人大名
禰宜山伏
鬼
杭か人か
水掛賀
伯母ケ酒
竹生島参
雷
昆布
鏡空
呂鏡
男腕
縛
縛
縛

主催 狂言共同社

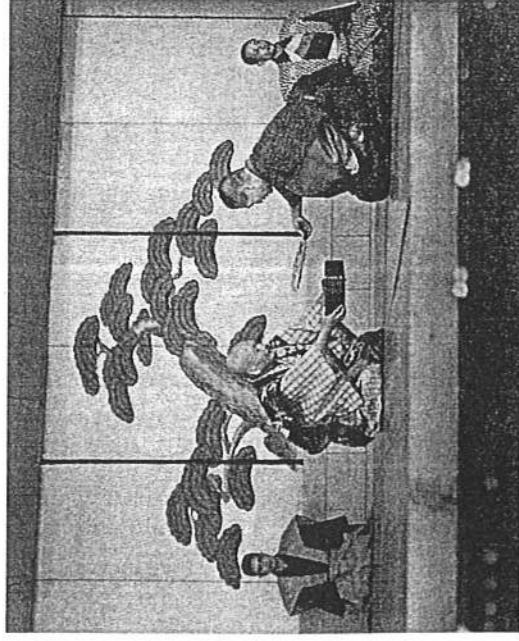
和泉流狂言大会

(初日) 九月二十四日(土) 名古屋能楽堂
(二日目) 九月二十五日(日) 名古屋能楽堂

(初日) 九月二十四日(土) 正午開演

賞 賀
杭か人か
伯母ケ酒
附子
小舞 海淵守治の晒
追下り
二千石
泉山伏喜水
二人大名
禰宜山伏
鬼
杭か人か
水掛賀
伯母ケ酒
竹生島参
雷
昆布
鏡空
呂鏡
男腕
縛
縛
縛

主催 狂言共同社



左より 大藏弥太郎(後見)、井上新三郎(太郎冠者)、茂山弥五郎(伯父)、井上禮之助(祖父・父を憶ふ)より転載

明だが橋岡久太郎シテの能「羽衣」と「雨法師」、井上新三郎シテ、井上松次郎・河村丘造アトの狂言「末広かり」が演じられた。この特設舞台を公演の拠点とし、追々演能の場を増やし、昭和三年には大池町・名古屋商工会議所ホール、昭和五年には松坂屋ホール、二七年は四川端町・中日会館にも舞台ができ、能楽界も活況を呈してくる。しかし、この舞台として本舞台とは言えず、仮設・時設が付いてまわるとなれば、欲しいのは本格的な能楽堂。そこで昭和二七年一月二四日、「名古屋能楽堂建設基金」を設立し、五流宗家並二代表楽師大演能が御園座で行われるのであるが、これが名古屋の歌舞伎・商業演劇の殿堂・御園座での初の演能ではなく、これより先、昭和二年二月四日、「名古屋能楽本格式復興公演会」が観世流による第一回が二部制で、同年四月二六日、第二回が宝生流で、六月二七日、第三回は観世流で何れも名古屋能楽復興後援会により行われる。

さて一月二四日の大演能は二部制、一部の番組は能「橋弁慶」金森信高・平岡雅之助・本田光洋(子方)・茂山千五郎・千之丞・金森進三・青木恒治・西尾榮太郎・本田秀男(地頭)・金森光太郎(後見)、狂言「素袍落」井上新三郎(伯父)忠郎、能「義上・梓之出」観世元正・片山博太郎・福王茂十郎・鈴川幹夫・佐藤卯三郎・藤田六郎兵衛・田鍋徳太郎・谷口喜代三・前川光隆・井上嘉介(地頭)片山九郎右衛門、舞囃子「安宅」桜間龍馬、仕舞二番「松風」杉浦義朗(山姥)本田秀男、能「土蜘蛛」千筋之伝、金剛殿、豊嶋弥左衛門(頼光)広田隆一(胡蝶)豊嶋訓三、高安滋郎・西村欽也・和泉勉・森田光次・幸田次郎・谷口勝三・鬼頭八郎・種田次郎(地頭)広田泰三(後見)。

第二部 舞囃子「高砂」片山九郎右衛門、能「羽衣」徳富喜多

Table with 12 columns (years 2013-2023) and 3 rows (Miyaguchi Kaichiro, Sakai Kiyomasa, Kashiwabara Kiyomasa) showing performance counts.

戦後の特設舞台使用概略(個人名を省く)

美、西村弘敬、岡次郎右衛門・沢保太郎・森田光次・田鍋徳一郎・谷口喜代三・前川光隆・喜多長世(地頭)和泉徳太郎(後見)、狂言「末広」茂山弥五郎・茂山千五郎・千之丞、一齣「女郎花」田鍋徳太郎・井上嘉介、仕舞三番「八島」宝生英雄「殺生石」喜多長世、能「船弁慶」後之出・留之伝「宝生九郎」田鍋洋一(子方)宝生弥一・宝生閑・佐々木則之、歌村彦四郎・藤田六郎兵衛・幸田次郎・谷口勝三・前川善雄・宝生英雄(地頭)朝倉宗太郎(後見)。因に第一部の狂言「素袍落」は異流共演。世上で伝説された昭和二八年六月二九日、第一回回覧会での山本東次郎・野村万蔵・万作による「武蔵」・昭和三七三年三月二六日、東京能楽鑑賞会での茂山弥五郎(79)・野村万蔵(64)・茂山圭五郎(44)の「武蔵」の先駆をなすものである(括弧内は当時の年齢)。

初夏の舞台から(その二) 「名古屋観世会定例公演能」 「名古屋宝生会定式能」 竹尾邦太郎

「竹生島」竹生高明神の靈験あらたかを仄聞、休暇をとり從臣(ワキツル元・正徳)を伴い参詣に赴く臣下(ワキ勝久、連行に弾む心の連吟が如何にも。

五)は昭和五四年三月刊の自著「西田三好能評集・五流小書演劇」の中、このときの「羽衣・霞留」について「二ノ松あたりにて、能「狂言に就く」のあと、能「三輪」を向き、左袖かついで、謡はへ霞に動れて、と打ち切り、シテは静かに後ろ姿のまゝ、幕へ入った。後はハヤシが残り留となったが、橋懸りが短いのて充分このところの興儀を見ることができなかったのが残念」と述べている。「素袍落」の写真に見るように背景は鏡板に非ず老松を描く屏風、橋懸は寸法に足りず、舞台の上と下、みな一日も早い立派な能楽堂の実現を希求したことであろう(河野参照)。

士々。そこにワキから便船を名われるシテ、問答に便船には非らずと一度は断るも、霊地参詣の人の志を無にし、明神の心にも背き兼ねずと乗せるシテとツシ、總やかな対応に品位。湖上の風光を描写する初回(邦久・正邦、一政ら)に、へ所は海の上、と右前方遠く眺めれば開ける眺望、舟が着きシテ、ワキ問答に道案内するシテ、「よくく御祈念候へ」と正中に下居。女人禁制の島にツレの上陸を不許するワキ、シテは地のへ弁天は女体にて、の返シ向に水衣

能評家で啓蒙書も多々著し能楽協会書記長でもあった三宅襄(一八九七―一九六五)の講演「本日の能「狂言に就く」のあと、能「三輪」白式神神楽」観世元正・野島信・茂山七五三・森田光春・豊和博朗・谷口勝三・小寺金七・藤波順三郎(地頭)片山九郎右衛門(後見)、仕舞三番「松風」野村保「班女」高瀬寿美之「船弁慶」本田秀男、独吟「松浦物狂」藤波順三郎、仕舞五番「笠之段」片山九郎右衛門「野宮」大槻十三「隅田川」橋岡久太郎「藤」観世世之「藤」武田太知忠、新作狂言「瀧ぎ川」茂山七五三・千五郎・千之丞(地)、能「黒塚」白頭「桜間弓川」高安滋郎、西村欽也・井上松次郎、一噌正之助・幸田次郎、山本敬一郎・三島太郎・高瀬寿美之(地頭)中村政男(後見)、能「半番」立華供養・替之型」金剛殿、西村弘敬・山本東次郎・藤田六郎兵衛・田鍋徳太郎・谷口勝三・今井幾三郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)、仕舞四番「坂下傳」柴田初太郎「花筐」狂「杉浦義朗」笠之段」山田仁三郎「熊坂」豊嶋弥左衛門、独吟「四季」林鳳藏、仕舞四番「義上」辰巳孝「経政」喜多美「雲雀山」喜多節世「谷行」喜多長世、舞囃子「山姥」宝生英雄、狂言「八尾」山本東次郎、則直、能「景清」喜多六平太・長田鏡・錦木孝男(トモ)森茂好、一噌正之助・幸田次郎、山本敬一郎、喜多實(地頭)和島實太郎(後見)。

の肩を下ろして、知らぬ人の言葉なり、とクセに。へけにくかほと疑ひも、と上ゲ端あと、へ荒磯島、でツレは立つとスミへ、小廻りしてワキを見込み、扇開いて扉を開ける型から御殿へ入らせ給ひ、とするく作物へ、恭拝裏やかである。へ翁も、立つシテは常座へ、ワキを見込むとへ此の海の主導、と指込開きに威をみせ、来序(学・嘉津幸一・洋輝)で中人、重々しく退いて行く姿に後シテを暗不する。残された(4)面へつつき)

熊澤恵美子 偶 心 会

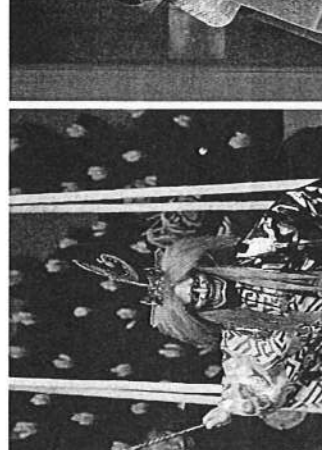
十一月十九日(土) 午前十一時始 名古屋 能楽堂

演能 鴉 小町 狂言 犬山伏 能 求 塚 問 後見 仕舞 船 井 通 盛 船 弁 慶 美 盛 盛 船 岩 後見 仕舞 竹 生 島 追 加 舞 囃 子 當 麻

指定席一万円(前売)当日券一万二千円 自由席七千円(前売)当日券八千円 お問い合わせ 電話0594・23・41582 桑名市大字西別所106115 出演楽師宅

「縛縛」留守中、盗み酒をする太郎冠者(シテ又三郎)に次郎冠者(小アド健太郎)、手を焼く主(アド高義)は何食わぬ顔で次郎冠者の助言を得ると、樽を使うという太郎冠者をあざさり縛しは

(写真)は、逆に恋の痛みもあらわ。へ楊の端書、と踏む四ツ拍子に苦渋をみせ、指折り数え九十九夜に、へ胸苦しや、と胸を打ちかやうに物には狂はするぞや、でワキにアシラフところなどには従ならぬ恋慕の情。物着に風折烏帽子、長絹を着け常座へ出ると、へ浄衣の袴かいてつとて、へ浄衣の袴かいてつとて、と胸に抱き、さつとハネ扇はへ花を佛に、敬華の心、合掌して重び扇右手に右ウケ拍子は踏まずトメ。シテ、ワキがつぶ四つの気合充分、引き締まった好舞台だった。(1時間27分・6月12日・観世会定例公演)



「竹生島」アド 梅田嘉宏 (杉浦賢次氏撮影)



「竹生島」アド 梅田嘉宏 (杉浦賢次氏撮影)

りに。桑山子同様にしてしまうと、今度は油断する次郎冠者も後ろ手に縛り上げ、安心して外出するが、まんまと主に嵌められた阿人は不自由な手も物かは、却つて腹癒せの盗み酒に挑む情熱を燃やすことに。三人寄れば、ではないが、小才の利く兩人が寄つて絞る智慧、酒倉へ入ればこちらの物とばかりに手荒かなう太郎冠者が先づ酒に手が掛かるが、飲みたい一念も物理的に口が盆に届かない(写真)。が、そこは智慧の出どころ、運籌アレで酒に有り付けばお定まりの宴、着に次郎冠者が「七ツ子」を舞えば、連吟に能「羅生門」の二くさりへ兵の交はり頼みある仲の運案かな、の好い気なもの。代つて「暁」を舞う



「縛縛」野村又三郎 (杉浦賢次氏撮影)

「卒都婆小町・一度之次第」小書で先づ老小町(シテ幽霊)が習ノ次第(六郎兵衛・孝一郎・総一郎)に出る。三ノ松で胸杖にクツロギ、極く静かに運ビ一ノ松、ふつと止まると今の己の存在を悲しみ、懐旧の思ひは老いた今を脚つ次第・サシ、後ろ向陣近々左へ壁に向かい語う姿には孤愁も一人、へ雲居(百歌や)、と直つて運ビ出すと、へ斯かる(裏き身)、を絶句する。しかしこれも、人目恥して月の出に都を出るを、後める役人を懼れる緊張か、とも思われ、へ秋の山、と舞台へ入つて来ると、へ桂の川柳舟、を右ウケて左手笠にやり、二・三歩出て眺むる姿には感慨を覚える風情が。へ(響きゆく人は)誰やらん、と笠の手離すと、返シ句で胸杖は一息入れる心、「余りに苦しう候程に、これなる朽木に」と笠を脱ぎ大小前へ、杖は右肩に凭せ、杖に笠を滑らせるように静かに

太郎冠者、暁(後朝)の別れは切り無く、へきりく限り無う切り無う手も力もないもの、と舞上げれば、「手の力も無い、が出かいたわい」と現状を茶化す次郎冠者の一言が利く。とこうする程、後ろ手もがいてる次郎冠者が縄脱げに成功すると、太郎冠者も自由となり、「紅葉狩」の一ふしは、へ所は山路の菊の酒向かは若しかへべき、と連吟に調子づき、「字治の廻」を相舞に。野村又三郎家の当主として一門を統率する十四世を襲名したばかりの又三郎、門弟共々意気軒昂の熱演だが、縄脱の件をもつ演出は損としか言いようがない。キリは二流各派も同じ「松風」のパロディに落着き、活きの良い舞台ではあった。

「誓願寺」三熊野に参籠、六十萬人決定往生と記したお札を國中に広めよの神託を蒙り、從僧(ワキツレ正樹・親)を伴い都へ上る一連上人(ワキ雅介)、角帽子・襟淺黄・小格子着付・白大口・赤茶水衣の姿にお札を懐中する。願いが叶い連行の連吟吟々となり、意気揚々、都誓願寺に着くと「この所にてお札をぬぐうするにて候」とワキは床几に、ワキツレ二人は「尤もにて候」と次に下居。シテ博誌)は面小面・襟白二・白地撫子文摺着付・萌黄赤段袴

に下居の膝に置きクツロギと、何事もなく高野を下山の僧(ワキツレ)が從僧(ワキツレ英志)を伴い出る。一ノ松で各乗り、阿倍野へ着くと行く手のシテを見始め、「なうくこれなるを乞人」と呼びかけ舞台へ入つて来ると、ワキはシテの後ろを通り胸座へ、ワキツレはシテの右横を通りスミへ、双方から卒都婆に腰を下ろすシテの非常識を詰問する卒都婆問答に、後めるワキ・ワキツレに応答するシテの冷静は、壁くいなすかにみえて理詰め之余裕。小嬢な、の思ひが次第に昂ぶりがちに二人がかりで矢継ぎ早に問いかけるワキ・ワキツレの焦燥。地となり、へ元より感傷の、でワキツレはシテの後ろを通つてワキの傍に下居、ワキと離れて居ては怖い、の心もある。へ真に悟れる非人なり、と恐懼平伏するワキ、シテは直つたま、恐れ入らせた自信にへなほ戯れの歌を詠ひ、と思いを述べる。此処に大小習ノ手はシテの悪いを励ますが、ワキはシテの歌を聞くべく面を上げる。シテは歌の下の句へ何かは若しかるべき、で巧みに杖を頼りに立ち、へむつたしの僧の教化や、と往くところ、もう構つては居られん風情。この狷介な老女も小町の成れの果てと分れば、へ傷はしやな、と憐憫の情のワキとワキツレ、古の美貌も今やへ百歳に(二歳足らぬ)、とシテはワキにアシラフ、直ルとへ影恥かき我が身かな、と笠に面を隠す(写真)のも未だ誇りを失わぬ自利心の一端。しかしロンギに身の廻りの物を一々註

素されるに及び、自利心が解けたように物乞いの狂乱は、更に四位ノ少僧の雲が憑き、百夜連いの再現。へあら人恋しや、とシラリ、「人は多き中にも」とワキヘアシラフと「四位ノ少僧」と話メルところには従ならぬ恋慕の情。物着に風折烏帽子、長絹を着け常座へ出ると、へ浄衣の袴かいてつとて、と胸をつまむ心に一寸屈み、拍子一ツ踏むとイロエで小さく一巡、再度シテのへ浄衣の袴、から地の返シ句となり、へ立烏帽子を、扇で頭上を指シ、扇開きつ、へ(符衣の袖を)うち被いて、ときれいに袖被キ、面を扇で隠す人目眩姿



「卒都婆小町・一度之次第」片山幽霊 (杉浦賢次氏撮影)

を説くワキに納得のシテ、へその人数をばらちら捨て、と合掌すればワキも。更にシテはへ往生なれや何事も皆うら捨て、南無阿弥陀佛と、ワキに共鳴しての連吟は女声と男声もあろうが、しつくりしむ心は皆同じ、とシテはへ心は誰か一声の、の返シ句で運ビ出すとへ(魂さぬ誓ひ)目のあたり、とワキの前へ。膝をつきお札を受け、正中へ戻るとワキへ向き下居、お札に記された六十萬人決定往生の文字を不審、ワキと問答。掛合に。六十萬人は人数でない由



「誓願寺」を六字ノ名号にの難題に、予期せぬワキも御本尊の御告とあつては聞き捨てならず、問答の末にシテの名を問えば、へ和泉の末にシテの名を問えば、へ和泉の式部は我ぞ、とワキへ詰メ、へ石塔の、と右へ廻り常座へ、聞キ、静かに送り笛で退いてゆく風情は女流の優しさ。所ノ者(アと友彦)の居語あと、「御本尊の御告に任せ、昔より誓願寺と打たる額を除け、六字の名号に引きかへへ佛前に移し奉れば、とワキ、立つてワキツレと連吟に待読、へ南無阿弥陀佛 阿彌陀如来、と合掌すると、出端(希世・萬津幸・真之介・義命)で和泉式部ノ畫(後シテ博誌)が出る。面増女・黒垂・天冠・襟淺黄・白帯・紫舞衣・垂折の姿は、扇額の六字の名号を、己れは佛果を得て歌舞の菩薩に成つたことを、よろこび、クリ・サシ・クセに誓願寺の沿革、その存在理由を。クセ中は上段端あつて、へ十悪八邪の、とサツと両相返すところに迷いの雲を晴らし、へ(真如の月)の西方も、と踏む六ツ拍子にへ此を去る事遠からず、を發聲して妙。此処へ来て長丁場のは序之舞に少々構彩を、でワキにアシラフところなどに、とスミへ進みつ、扇左に取ると胸に抱き、さつとハネ扇はへ花を佛に、敬華の心、合掌して重び扇右手に右ウケ拍子は踏まずト

「奴相撲」大名(シテ俊翁)、そち一人では使え足らぬので新參の者を抱えようと太郎冠者(アド博造)に相談すれば、人数は御分別次第にと太郎冠者。分別のせかしく置かうより一度にとつと八千人抱へう」と大きく出る大名の真顔が可笑しければ、付き合つて太郎冠者の呑気に居るのも可笑しい。八千人では置所が無いと一氣に五百人に減らす、これも堪忍(経済上の負担力)が統かないとれば「くわつと減して二人抱へう」と、それも「汝共に二人」と結局は一人、八千人から一人という落差の大きさが突飛すぎて面白い。構われたのは興がった面の江州守山の男(実は蚊ノ精・小アド郡雄)、相撲の相手に已むなくなった大名は日陰まじに合つたかに刺されて負

かされる。ならば蚊帳の中で取らうなどと天真爛漫な雅気がよい。水衣の袖を大きく羽搏かせて飛ぶ蚊の生體模写も言かつたが際を落したのは頂けない。(37分)

「蘇蘭」夫の不実を恨み、相手の女ともども呪い殺そうと貴船明神に丑の刻詣をする女(シテ和英)、面深井(か)襟淺黄・白帯着付・段縫箔腰巻・萌黄唐織を折・男笠。面が涙眼でないのが珍しく、胸にわたかまりのある連行の、抑えた重つ苦しさとさこそと思わせる。杜人(アと趣)から神託を伝えられ、それが身に覚えのある事として訝りもするが、神託の通りにせんと、へ言ふより早く色かたり、の初回(孝史・滿次郎・寿一ら)で、女の背がスツと伸びたように思えたのは怒髪天を衝く勢いか。へ煩悶降り風と鳴神も、避けるように笠を騎ノ舞台一巡すると大小前・笠叩きつけて走り込むところ鮮烈。代つて葉桐袴・小刀の男(ワキツレ元)、夢見が悪しいと陰陽師・安倍晴明(ワキ勝久)に助けを求め訪ねると問答に。ワキの卦は、女人の恨みの呪詛に命は命有限り、と。壇が築かれ供物が調えられ、ワキのノットに。そこへ、出端(六郎兵衛・孝一郎・鉦一・洋輝)で女ノ生靈(後シテ和英)が面構(か)襟淺黄赤・赤地金鱗箔着付・紺地金

立湧二丸文尺シ縫箔腰巻姿に出る。へ煩悶の赤き鳥となつて、と踏む七ツ拍子は嫉妬の怒りに踏む地団駄の怖さ。舞台に入り、壇上へへ思ひの涙に沈み、シラリ、へ夫を叩ち、と三重櫓の壁に右から左へ面使と見詰る執心の恐ろしさ。一旦下りてへ後妻の、と再度壇上へ髪を手にかからまいて、と三ツ打杖を振り下ろして下り、へ極しかるらめされて懲りや、と二ツ強く踏むのも迫真。へ殊更恨めしき使し男を、と六ツ拍子からへ臥したる枕に、と膝をつき三重櫓を見上げると、三十番神と魁神との闘争にキリはへこの度は帰るべしと言ふ声ばかりは定かに聞えて、と地のうち二ノ松へ、トメ拍子踏んだ。大宝生を背負つて立つ若き宗家の、力強く気魄に満ちた舞台・囃しだった。(1時間1分・6月19日・宝生会定式能)

「誓願寺」を六字ノ名号にの難題に、予期せぬワキも御本尊の御告とあつては聞き捨てならず、問答の末にシテの名を問えば、へ和泉の式部は我ぞ、とワキへ詰メ、へ石塔の、と右へ廻り常座へ、聞キ、静かに送り笛で退いてゆく風情は女流の優しさ。所ノ者(アと友彦)の居語あと、「御本尊の御告に任せ、昔より誓願寺と打たる額を除け、六字の名号に引きかへへ佛前に移し奉れば、とワキ、立つてワキツレと連吟に待読、へ南無阿弥陀佛 阿彌陀如来、と合掌すると、出端(希世・萬津幸・真之介・義命)で和泉式部ノ畫(後シテ博誌)が出る。面増女・黒垂・天冠・襟淺黄・白帯・紫舞衣・垂折の姿は、扇額の六字の名号を、己れは佛果を得て歌舞の菩薩に成つたことを、よろこび、クリ・サシ・クセに誓願寺の沿革、その存在理由を。クセ中は上段端あつて、へ十悪八邪の、とサツと両相返すところに迷いの雲を晴らし、へ(真如の月)の西方も、と踏む六ツ拍子にへ此を去る事遠からず、を發聲して妙。此処へ来て長丁場のは序之舞に少々構彩を、でワキにアシラフところなどに、とスミへ進みつ、扇左に取ると胸に抱き、さつとハネ扇はへ花を佛に、敬華の心、合掌して重び扇右手に右ウケ拍子は踏まずト

NHK放送予定(平成23年9月~10月)

Table with columns for date, program name, and performer. Includes NHK-FM ラジオ能楽鑑賞 and NHK総合 能楽の友.

演能力レンダー

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)

Calendar table showing performances from September 23 to October 28, including events like '能楽鑑賞' and '狂言鑑賞'.

能楽の友

発行能楽の友社 名古屋千種区千種2丁目18-18 (郵便番号: 464-0858)

狂言共同社結成120周年記念特別展 「狂言でござる」 名古屋市博物館で

狂言共同社結成120周年記念特別展「狂言でござる」が十月十二日(出)から十一月四日(出)まで名古屋市博物館で開催される。

第32回 名古屋金春会

能「舍利」葛城「葵上」狂言「長光」

11月5日 名古屋能楽堂

名古屋金春会は、きたる十一月五日(出)名古屋能楽堂で「第32回名古屋金春会」を開催する。

観覧料金 一般十円、高天生六百円、小中生三百円 開催時間 9時30分~17時、休館日毎週月曜日と10月25日(出)11月22日(出)

「平家物語を観る」

大槻能楽堂自主公演能

大槻能楽堂企画・能の魅力を探るシリーズとして、「平家物語を観る」戦のあわれノを語る。10、11、12月公演は次のとおりである。

村総一郎、大鼓、加藤洋樹 仕舞「放下傳」小歌高橋忍、「杜若」キリ(山井綱雄)、「融」(金春豊利)

「葵大名」「井杭」公演、狂言共同社 講演会/11月13日(出)「名古屋の狂言」講師・名古屋女子大学大学院教授・文学博士・林和利氏

第53回 鎌倉新能

10月7日、8日

秋の恒例行事、鎌倉新能は、ことし五十三回目を迎える。

名古屋観世九阜会

十月一日(出)午後一時開演 名古屋能楽堂

高橋 一 飯富 雅介 河村 総一郎 大野 誠 替装束 杉江 元 後藤 藤幸 間 野口 隆行

能松

中宣夫 観世 喜正 高安 勝久 河村 眞之介 苗 鹿取 希世 間 野村 又三郎

梅田邦久師傘寿

邦誼会祝賀記念会(三)

十月二日(出) 午前九時三十分始演 名古屋能楽堂

素謡 神歌 長谷川 雅彦 梅田 嘉宏 素謡 弱法師 木村 万寿豊 兼松 三欣 番外仕舞 景 清 片山 幽雷

舞囃子 阿 漕 観世 喜之 河村 眞之介 加藤 洋輔 後藤 藤幸

素謡 鵲鳩小町 遠山 美津子 下川 智恵子 仕舞 笹之段 芦谷 民枝

素謡 正尊 尾藤 英郎 佐藤 英生 番外舞囃子 老松 梅田 邦久

附祝言

「チケット」全自由席 観正会 一般五千円 学生二千円

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ⑮

竹尾 邦太郎

八、「中日五流能」 ②

—— 承前 ——

昭和三年六月一七日、愛知県文化会館(講堂・美術館・図書館を併設)の開館式。六月二三日付の中部日本新聞は「わが国有效のホール・愛知文化講堂一七日に」こけら落し。」と四段抜き見出しで次の紹介記事を掲載する。これについては、本紙に連載した

「戦後名古屋能楽史」の中、⑮(平成五年八・九月号)に既出だが、改めて過去を憶ふ縁に再録する。

県文化会館の講堂が完成、一七日午後一時から開館式がおこなわれる。こけら落しの出しものは狂言三番叟、仕舞舟弁慶、日本舞踊賀祝権松様ときまつた。講堂は愛

知文化講堂と呼ばれ、講和記念事業の一環として、美術館につづく第二期工事として昨年五月着工された。三千坪の敷地の上に鉄骨、鉄筋コンクリート造二階建(二部三階)で延べ二千坪が建っており、舞台、設備などが固有数のホールである。とくに音響効果、照明装置に力が注がれ、音楽、舞踊、演劇、能、映画、講演その他の各種の大会に利用できるところが特徴である。

舞台は間口二三・二メートル、奥行二メートル、天井高さ二メートル。大・中・小三種のせりが四台あり、せりが下つたあとを埋めるスライディング・ステージが三カ所。危雪防止のため、せりおのシヤフトはおおわれており種類はすべて防燃加工されている。両わきの花遣はとりはずし出来、舞台の前のオーケストラ・ボックスは上下に動いて、エプロンステー

ジにもなり、また客席にもなる。客席はワンズロップ式で千四百三十八席、補助席が二百五十二席あるので収容人員は千六百九十人。イスは背側がうしろに傾くうえ、幅があるのでゆつたりしている。舞台から客席をみた感じはただひろくないのでアトホームな感じ。照明が自慢のもので、天井照明室が完備しているのと蛍光灯の調光が出来るのが特徴。照明装置は九十二個にのぼる。十日音響測定しており、音楽会には最も適している。そのほか装飾の広いこと、昨年初めて国際展本市に出品された英国製の映写機を持っていること、舞台の使い方で反対の立場にある日舞と洋舞、旧劇と新劇のどちらにもいいように中座をとってあること、なども特徴である。

地下は武庫や荷物預り所になっており、隣の美術館との間は繋

て集いに利用出来るようになってい。建築費は建物だけで二億七千万円、設備を入れると三億三千七百万円。こけら落しは使用申込みが殺到しており土・日曜は十二月まで全部予約済み。平日でも十月まではほぼ埋まっているという。

なほ式典に続く掃落シの記念公演には「三番叟・橋懸之舞」三宅藤九郎・和泉保之と仕舞「船弁慶」梅若六郎がある。多目的ホールとしての文化講堂には能舞台も必備、特設舞台が設置される経緯については「金剛」誌・昭和33年9月刊に寄稿した西田三好の次の記事に詳しい。

愛知県文化会館に大講堂が出来るといふ話は数年前から聞いていた。当時、熱田神宮の能楽殿建設計画が進められていたが、名古屋に大衆能がやれる会場が欲しいこ

とは能楽人の誰もが考えていたときであったので、この文化会館の講堂に組立式の能舞台を備えることが、是非とも必要であると思っていた。それで私は私なりに一人で県の要路に話しかけて、能舞台設置の運動を始めた。

一方、期せずして、能楽師の人々が同じ具へ陳情を行つていことを知って、目的が同じであるから大いに意を強うした。文化会館々長の徳川義親氏も、元々能や狂言の犬の愛好者であつて、この方面では一かどの識見を持つている方であるから、話にゆくと大いに共鳴して、嬉しいことには氏自身もその実現に乗り気になつて下さつたのである。

かくて、この運動には幾多の曲折はあつたが、成功をみて、能舞台の設置が認められることになつたのだ。しかも能舞台を設けるに

名古屋能楽堂十月定例公演

十月二十八日(金) 午後六時三十分開演
名古屋能楽堂

狂言 鳴子 シテ 佐藤 融 太郎 寛者 井上 靖浩
(和泉通) 主人 大野 弘之 後見 野村又三郎

能石橋 高安 勝久 河村真之介 加藤 洋輝
(観世流) 後藤 嘉宏 後藤 嘉幸 大野 誠
間 佐藤 友彦 鹿島 俊裕

後見 武田 大志 地謡 黒田 孝博 清沢 一政
久田 勲 加賀 敏彦 梅田 邦久
祖父 江修一

(午前八時三十分終演予定)

チケット前売(指定) 四千元
(自由) 三千元
(学生) 二千元
(自由席のみ当日五百円増)

取扱い 名古屋能楽堂(0522・231・0088)
ブレイクガイド(栄アレチケ・松致屋他)
ナナイアバーク7階P.G.(0522・2665・5015)
チケットぴあ(0570・922・9999、5015)
Pコード415・016)

梅田邦久師 傘寿記念 第三十二回 邦謡会 能

十月二十二日(土) 一時始
名古屋能楽堂

お話 本日の能について 村瀬 和子

舞囃子 養老 水波之伝 片山九郎右衛門 河村真之介 上田 慎也
曹和尚 清 竹市 孝

地謡 清沢 嘉一 片山林 分
梅田 嘉宏 味方 伸吾 玄

仕舞 野宮 片山 幽雪 地謡 武田 大志
古橋 正邦 藤田 喜志

能嬢 梅田 邦久 高安 勝久 河村真之介 上田 慎也
拾 高安 勝久 曹和尚 梅田 邦久
杉江 元 曹和尚 藤田 喜志
間 野村又三郎

後見 片山 伸吾 地謡 梅田 嘉宏 古橋 正邦
青木 道善 味方 伸吾 武田 邦久
藤田 喜志 橋本 謙道

附祝言 終了 四時半頃
主催 邦謡会

チケット料金 前売、当日券とも五千元
申込み 名古屋能楽堂、邦謡会事務所/電話052・841・4632

武田謡楽会 秋季大会

十月十六日(日) 午前九時半始
名古屋能楽堂

能田村 木下 孝慈 杉江 元 河村真之介 藤田六郎兵衛
間 野村又三郎 曹和尚 藤田六郎兵衛

仕舞 柏崎 道行 井内 孝子 芭 蕉 山本 千里
富士太鼓 加藤 愛郎 阿漕 山本 三江

舞囃子 松風 小瀬 喜代子 河村真之介 藤田六郎兵衛
班 渡邊 一彦 河村真之介 藤田六郎兵衛

素謡 隅田川 齋藤 忠佳 加藤 愛郎 武田 大志

仕舞 花笠 長谷川 邦彦 野宮 豊田 えつ子
通小町 川合 幸子 鳩 市川 敦子

番外仕舞 岩 船 武田 大志 (終了予定 六時頃)
主催 武田謡楽会
武田 大志

「御来場歓迎」

「竜泉会」結成

水田純子氏主宰

観世流・観世喜之師門下の名著師範、水田純子氏は、師の奨めでこのほど「竜泉会」を結成、後継者育成をめざすことになった。

第一回の竜泉会は九月十六日、水田舞台で行われた。この会の特長は、初心者へのけい古をはじめとくに地謡の充実に力を注ぐことで、会への参加が期待されている。

連絡所 名古屋市守山区竜泉寺 1-130-2 水田方。電話052・791・3804。

演能案内

番外仕舞 経 正 武田 邦弘

素謡 杜 若新 傳子 前川 桂子
松 虫 永田 豊子 富田さだ子

番外仕舞 山 姥 片山九郎右衛門

能卒都婆小町 田中 壽子 高安 勝久 河村真之介 藤田六郎兵衛
一度之次第 杉江 元 曹和尚

仕舞 弱法師 八塚 きく江 蟬 丸 森藤 敬代子
笹之段 前川 桂子 善知 鳥 松陰 真澄

舞囃子 西王母 白井 享子 河村真之介 加藤 洋輝
胡 蝶 岡田 明子 河村真之介 加藤 洋輝

第17回 廣田鑑賞会能

10月2日 金剛能楽堂

第17回廣田鑑賞会能は、十月二日(日)金剛能楽堂で開催される。午後二時半始。番組は、狂言「寝音曲」シテ 善竹 忠一郎、能「遊行柳」シテ 廣田 幸稔、ワキ 高安勝久、笛・左 鴻泰 弘、小鼓・久田 舜一郎、大鼓・河村 大、太鼓・前川 光範、後見・金剛 永護、廣田 泰三、廣田 泰能、地謡・松野 恭養、今井 清隆、種田 達

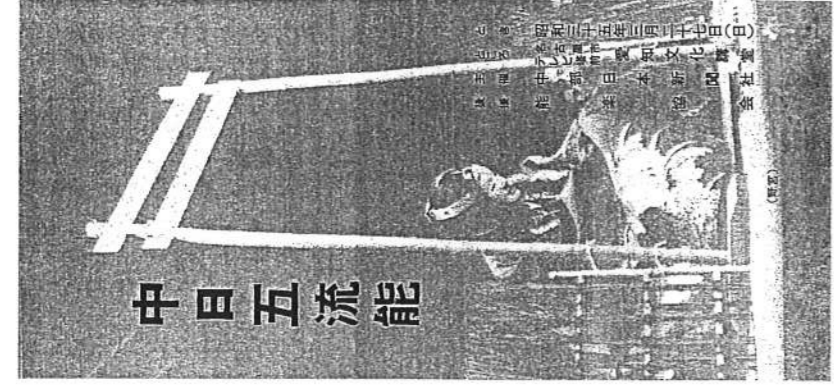
一、金剛龍謡、豊嶋島岡、豊嶋 幸洪、今井 克紀、宇高 章成。チケット 一般券(正面・脇正面) 八千円、(中正面) 五千円、学生券二千五百円。取扱い ローソンチケット、金剛能楽堂(075・441・7222)、京都新聞文化センター、絵書店、広田鑑賞会(TEL075・722・9123)

金剛流 豊春会秋の能

10月16日 金剛能楽堂

金剛流・豊春会は十月十六日(日)金剛能楽堂で、「豊春会秋の能」を開催する。芸術文化振興基金助成事業。午後一時始。演能は能「井筒」(シテ 豊島 三千春、ワキ 久馬 治彦、間 網谷 正美)

狂言「伯母ヶ酒」(勢 茂山 十郎 伯母・松本 薫) 能「紅葉狩」(上臈・加藤 おおる、鬼女・重本 昌也、侍女・鈴村 正美、同・赤星 久代、同・四ツ井 つや子、ワキ 高安勝久、ワキツレ 小林 夢)



◎面よりつき

当つては、徳川氏自ら陣頭に立たれ、名古屋能界の人士を集めて種々と構造上の意見を聞き、それをよく採用して設計されたことも嬉しいことであった。

間口十三間という大ステージに相応しく、能舞台の大きさは三間半四方とし、後見座一間半、地謡座一間、橋掛り巾一間半、長さ六間の本格的な広さを持つ物である。組立式舞台でこれだけの橋掛りを持つ物は他にない。

設計者を東、西に派遣して既設の組立式能舞台を視察したり、施工は宮大工に当らせるなど、慎重なる注意が払われ、観客の松は副館長の太田三郎画伯の選定で、地元の画家・小寺礼三氏が当るなど、仮設舞台と思われない程の力の入れようであった。会館職員の方々の能舞台に対する努力も大しもので、工事が進むにつれ、雑食を忘れての熱意で竣工を急がせていたのは全く涙ぐましいものであった。はじめこの能舞台の予算は四十万円とされていたが、工事の進むにつれ、よりよき物にするため、次から次へと増額されて遂に一五〇万円に達したと聞いて驚いた。それでも舞台の屋根だけは今期予算の関係から、どうしても設けることが出来ないで、次回に延ばされることになり、橋懸りだけは屋根も備えて堂々たるものである。

こうして本年六月十七日には、一七〇〇名を収容でき、近代的舞台設備を誇り得る文化会館講堂が完成し、その竣工式が挙げられ、しかも時を同じうして待望の組立式能舞台も完成した。

仮組立の日、その舞台を見た私

共は、日本一の組立能舞台と言つても決して言い過ぎとは思えない程に立派な出来栄と、その余りの豪華さに、名古屋能界がこれを使いこなせるであろうかと心配になりだした。この舞台の実現には能楽師連の熱心な陣営運動が功を奏したことは勿論だが、取分け徳川氏の能楽への深き理解と、惜しまない尽力とに依るところが大きいと私は信じている。

昭和三十三年六月一七日、愛知文化講堂の棟落し後、使用申込みが殺到し、日は年内全て予約済み、とあつてか此の年、中日五流能は催されず、六月二十九日、大阪・東京・福岡で行われている朝日五流能が名古屋へも参入、その第一回があり、それも影響したのだろうか。中日五流能同様に朝日五流能も二部制、参考にも能と狂言及びシテのみ挙げる。一部は一翁一観世元正、「佐渡狐」茂山幸四郎、「三輪」岩戸之舞、喜多實、「葵上」梓之出・無明之折、金剛殿。二部、「弱法師」近藤乾三、「熊野」誠經之伝・藤行・村岡留、梅若六郎、「止動方色」佐藤卯三郎、「山姥」桜間道雄。

昭和三十四年三月二八日、中日五流能は二年続いた熱田神宮能楽殿を離れ、昨年新設成つた愛知文化講堂特設舞台での催能。昼の部は午後零時半始、番組は能「清経」恋之音取、観世元正、柴田収、宝生弥一、杉市太郎、幸祥光、亀井俊雄、藤波順三郎(地頭)梅若猶義(後見)、狂言「實録」茂山千五郎、茂山七五三、茂山千之丞、仕舞二番「綱之段」山田仁三郎「葵上」柴田初太郎、能「鶴」喜

郎・井上松次郎(能力)河村丘造(本社)藤田太郎兵衛・田鍋惣太郎・山本敬一郎、金春惣右衛門、宝生英雄(地頭)鈴木右門(後見)。

夜の部は午後五時半始、番組は能「景清」金春八条、金春欣三(一人丸)高安滋郎、西村欣也(一人丸ノ従者)藤田六郎兵衛、大倉六藏、山本敬一郎、金春信高(地頭)桜間龍馬(後見)、一調「花魁クルト」幸祥光、林原藏、仕舞二番「笠之段」辰巳孝一野守一和島富太郎、能「松風」見留、梅若猶義、梅若盛義、宝生弥一、佐藤卯三郎、杉市太郎、田鍋惣一郎、亀井俊雄、藤波順三郎(地頭)井戸良造(後見)、狂言「佐渡狐」野村万蔵、野村万作(越後)野村万之丞(佐渡)、半能「石橋」猿野之式、金剛殿(白)今井幾三郎(白)広田隆一(白)西村弘敬、藤田大五郎、幸円次郎、安福春雄、金春惣右衛門、種田次郎(地頭)豊嶋弥左衛門(後見)。

同年七月五日、同会場で昨年引き続き朝日五流能が第二回を催す。番組(能と狂言及びシテのみ記す、二部制)は第一部、能「郡」金剛殿、狂言「瓜袋人」茂山弥五郎、能「砦」観世鎮之丞、能「船弁慶」喜多實。第二部、舞獅子「喜砂」金春信高、能「安宅」延年之舞、貝付貞立、宝生九郎、狂言「悪太郎」佐藤卯三郎、「蓮成寺」本田秀男。

この朝日五流能も、当地での朝日と中日、年二回の大規模な五流能では能楽界に限られた人材の中からの人選や、限られた観客動員数など、考慮すれば、衆目的一致するところ名古屋を本拠の中日五流能と競合することは難しかった

のではなからうか。能楽愛好者には残念だつたに違いないが、この年限りになる。

昭和十五年三月二七日、愛知文化講堂特設舞台。ここに来て中日五流能は、昭和二十七年一月二四日に御園座で催した「名古屋能楽堂建設基金落成・五流宗家並二代素築師大演能」を「中日五流能」の第一回に直し、第五回とする。三ツ折の番組(写真)の中で主催する中部日本新聞社は次のように述べている。

本社では、今年第五回を迎えた中日五流能を、つぎのとおり能界最高の陣容をもって催すことにいたしました。

今回は、第一部には、能の新しい動向を盛り、かついまだ能を知らない人にも親しめるような興味多い番組にいたし、第二部は、能本来の古典的な名作を選びまして、その幽玄味を充分味つて頂けるような番組とし、出演者はいつ

れも各流それぞれ実力的に最高級の人々を配するなど、飽くまで観る人本位の番組をもって、各位のご鑑賞に供したいと考えております。なにとぞこの機会に多数ご来観下さるようお願いいたします。

番組は第一部、午前九時半始。能「歌盛」二段之舞、脇之語、梅若三三郎、梅若乃紀夫、稲田慶治、若三三郎、梅若乃紀夫、稲田慶治、柴田収武、宝生弥一、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、吉見嘉樹、藤井久雄(地頭)塚本秀雄(後見)、新作狂言「彦市ばなし」茂山千之丞(彦市)野村万作(天狗ノ子)野村万之丞(殿様)、仕舞二番「鷹追」辰巳孝「殺生石」柴田初太郎、能「狂言」金剛殿、今井幾三郎(光源氏)金剛水調(重)種田和雄(隨身)大塚二(権光)種田道雄、豊嶋三千春(侍女)広田泰三、渡辺寿、伊藤鉄之進(従者)西村弘敬、佐藤卯三郎、森田光春、幸直佳、谷口喜代三、豊嶋弥左衛門(地頭)種田治郎(後見)、仕舞「郡」金春

信高、新作能「青衣女人」喜多實・森茂好、野村又三郎、藤田大五郎、幸円次郎、安福春雄、柿本豊次、喜多實世(地頭)和島富太郎(後見)

第二部、午後三時半始。能「通小町」イロエ之働、本田秀男、本田光洋(小町)森茂好、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、谷口喜代三、桜間龍馬(地頭)金春信高(後見)、仕舞二番「権之段」山田仁三郎「熊坂」和島富太郎、一調「巻絹」柿本豊次、林原三、能「野宮」拜留、片山博通、宝生弥一、井上松次郎、森田光春、幸直佳、安福春雄、藤井久雄(地頭)浦田保利(後見)、狂言「鬼ヶ谷」茂山七五三(太郎)茂山千之丞、能「山姥」雪月花之舞、近藤乾三、畑富次、高安滋郎、西村欣也、井上礼之助、藤田大五郎、幸円次郎、吉見嘉樹、柿本豊次、辰巳孝(地頭)内藤泰二(後見)。因に第一部の新作の能、狂言について作者はそれ／＼次の言葉を述べている。

会心の一曲 土岐善麿

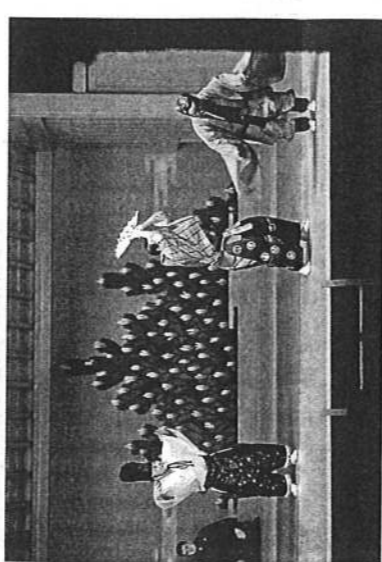
新作能「青衣女人」は、奈良二月堂のお水取り、すなわち修二会行法に関する伝説から採り想を構えたもので、たまたま昭和十八年十月東大寺の大佛建立発願一千二百年の記念法要が営まれたとき、六日夜、その二月堂の礼堂で奉納されたのが初演である。二月堂縁起にしろされた伝説によると、お水取りの五日目と十二日目初夜に、東大寺上飯修中過去帳を読み上げるが、昔、承元年中のころ、そこへ青い衣を着た女が現われ、その名を読み落したことを恨んで、かき消すように先立た、というんだ。それだけ忝、能「山姥」雪月花之舞、近藤乾三、畑富次、高安滋郎、西村欣也、井上礼之助、藤田大五郎、幸円次郎、吉見嘉樹、柿本豊次、辰巳孝(地頭)内藤泰二(後見)。因に第一部の新作の能、狂言について作者はそれ／＼次の言葉を述べている。

狂言への期待 木下順二

狂言による「彦市ばなし」の初演の時に、私が一番満足したのには、演者たちの表現の安定していることであつた。一つ一つの発音は、どの一つも聞き違ふ心配のないように、十分に朗々たる発声で発音され、からだの動きも、はしはしまで、一つのあいまいな点もなく、見ている私を安心させてくれた。そういう意味で、狂言「彦市ばなし」の初演の舞台に私は満足したといえる。だが、考えてみると、こういう安定性は、それがあつたからこそ古典芸術だと狂言が呼ばれる、当然の本質の一つなのだろう。だとすれば今度の「彦市ばなし」は、あの善事な安定性の上に、さらに現代人としての演者たちの、一種自由な人間表現をこそ見たいものと期待する。

以下次号

◆盛夏の舞台から◆
「名古屋能楽堂七月定例公演」第12回御洒落名匠狂言会「豊田市能楽堂七月能」



名古屋能楽堂同七月定例公演「蚊相撲」左より野村又三郎、松田高義、野口隆行(撮影・杉浦賢次氏)

名の気徳、一方、吸々として大名に仕える割には平直に物も言い、輔佐もする太郎冠者、両者とも役に振り生氣漲満。

さて、太郎冠者が連れて来た新参ノ者(小アト隆行)が多芸の中にも得て相撲を取ると知る大名、相撲を見たくも相手が居ないとすれば已むなく自身が相手を。太郎冠者を行司に、両手を腰に当てて立つ構えには硬い闘志が。しかし無念や初戦は「鼻の先がシク／＼としたが」と躊躇けて太郎冠者に抱きか、えられる仕来。相手は江州守山の出と聞かされ「もし蚊ノ精ではあるまいか」と大名、太郎冠者はお道徒に「蚊帳を吊つてお取りなされませ」と勧めるが、太郎冠者の方から蚊帳をもちだすのが珍しい。蚊は風を嫌うとて、二戦目は行司に相手を願ておあがせ蚊ノ精を翻弄、雪辱を来す(写真)が、三戦目は壇られて勝をついた蚊ノ精の嘴を引き抜いたはよ覚。蚊ノ精はと云えば、抜かれた嘴を指し「此の嘴なんの役にも立たぬ」と投げ捨て、退いてゆくのも珍しい。倒された大名の無念

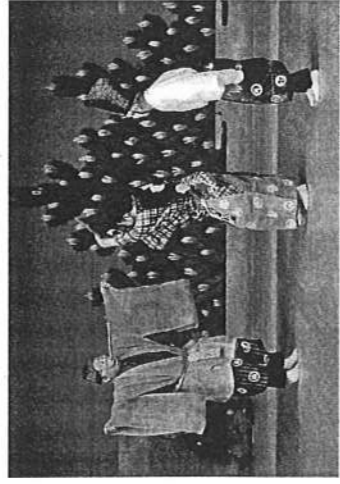
は、汝は何をして居たと太郎冠者にとはつちりが。「なに、行司」と怒鳴るや太郎冠者の腕をとつて倒すと「勝つたぞく」と溜飲を下げ、両手を腰に当て悠々と退いてゆく体裁家の大名が可笑しければ、無言で埃を払い立つと、静かに退いてゆく太郎冠者の寂しみ。(35分)

「一角仙人・酔中之舞」扇を争い、雲雨を支配する龍神を通力で岩窟に幽閉した一角仙人(シテ邦久)、ために早越たやならずを案じた善は、一角仙人を美人の色香に迷わせ、通力を失わせんと旋陀夫人(ツレ藤恋)を仙境に赴かせ。ツレに随伴する巨匠(アキ雅介)、此の仔細を神妙に語り、興昇(ワキツレ幸・正徳)との道行の運吟しんみりとへ身に沁みまざる、か。仙境は魔の中、独居の境遇を述べるシテのサシ謡のうち「まづは恥かしながら我が姿」と魔を立ち出てシテ、再びワキとの問答に美人のツレを意識すると、「これは如何なる人にてまします

ぞ」と関心を示せば、ワキはたゞ道に迷つた旅人、とはかりて業姓を明かすところか、機先を制して携行の酒を勧めにかゝる。結局ツレの善性は有耶無耶で、シテには百薬の長も無用の心だが、ツレの酌に好意を無には出来ず、ハタメの月の歪を、の返シ句にシテとツレ互に見詰め合うところ(写真)濃密な空気が。へ面白や狂の、と地(修一・一政・藤一ら)の返シ句に立つツレ、連舞掛の業(六郎兵衛・菊建幸・総一郎、義命)となると初段過ぎた頃にシテも立ち、ツレが誘うようにシテへ指してゆくと、シテもさこちなく舞出し連舞に。途中、酔いの勢いは、ツレの肩に手を延ばすも録されてそのまま、独り舞い続け、ツレはそれを魔の横で様子を窺うように行立する。この辺り如何にも小書「酔中之舞」を具現して舞上げると、へ竹の調め、の返シ句で酔に傾ける心に勝をつくシテに前しと立つツレは最早酔奔定まらず、魔の横へ安座すると枕の肩に

◎面へつづく

「蚊相撲」大名シテ十郎、太郎冠者(アド大二郎)に申し付け、構い入れたのが異相の男(次アド高太郎)、相撲が得手と知り「追つ付けて相撲が見たい」とは言うもの一相撲は見なし相手はなし」とて、自身取ることになり、ひと手合は目障ましに運つたように劣勢明らか。生国の精かと行司をさせる太郎冠者に加勢させ、蚊は風を嫌うと罵り煽き立てさせ(写真)、「構がる体ぢや」と蚊ノ精を圧倒、転かして大名、太郎冠者と幕へ退くと、転かされた蚊ノ精は体をうち震えさせ



御酒落名匠狂言会「蚊相撲」
左より壺竹富太郎、大二郎、十郎
(撮影・杉浦賢次氏)



御酒落名匠狂言会「重喜」
左より井上富大、井上靖浩
(撮影・杉浦賢次氏)



御酒落名匠狂言会「悪太郎」
左より佐藤誠、佐藤友彦
(撮影・杉浦賢次氏)

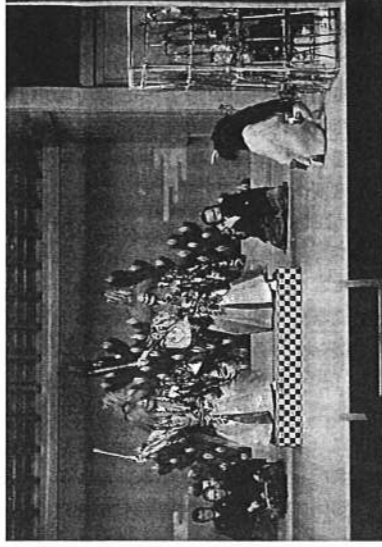
「蚊ノ精」の体。シテ邦久の巧技が光る。目的達して一行が退くと岩屋が鳴動、へ(天地も響く)ばかりなり、と嵐り醒され岩屋へ目を運るシテが、へ山風荒く、の返シ句に立つと、揺くとみえて割れる岩屋に現われる龍神(ツレ旭・勘吉郎)。剣ふりがやまず二龍(写真)は飛び下りると激しい舞動の示威、シテと斬組になると、一龍に手応えがあつたか、そのまゝ、地のうちに幕へ退き、討たれたシテは大小の間を抜け後座から切戸へ退くのも珍しく、別の一龍のトメ。重喜の奮闘気をもちながらもシテとツレ互いの内面の有り様もありなんを的確に描写、面白かつた。(48分・7月3日・名古屋能楽堂七月定例公演)



名古屋能楽堂七月定例公演
「一角仙人」左より梅田嘉宏、梅田邦久
(撮影・杉浦賢次氏)

せて立ち、ブーンと一啼き、そのまゝ、愕然と入る。蚊ノ精に負けて裏さ晴らしに行司の太郎冠者を倒し、キリに大名が「勝つたぞ」と入るのは当然なく、至つて静か。蚊ノ精の嘴が長いのが目についた。東京、善竹家一家の舞台、初見だが圭三郎から教えて三代目の成長ぶりが頼もしかった。(38分)

「重喜」住持(アド靖浩)、明日の法事に剃髪を頼もうにも寺僧は出払つて居らず、止むを得ず新発意の重喜(シテ善大)に任せれば、こまじやくれた重喜、伴に連れて行つて貰えんと知ると、「定めて明日、私にもお布施が」などと、大人の領分に際み込み、誓められ、ば、お師匠はお布施の多寡で御機嫌が変るなどと痛い所を衝いてくる小癩、この辺りの無



名古屋能楽堂七月定例公演
「一角仙人」左より久田勘吉郎、吉沢旭、梅田邦久
(撮影・杉浦賢次氏)

邪気なシテ善大君七藏、はきくした住持との応対はきくくと素晴らしい。

髪を剃る段になると、剃刀の手合せ(刃を磨くのに手に剃刀を当て擦り合わせる)ことに気を取られ住持と接触、粗忽を咎められ、「弟子七尺去つて師の影を踏まず」の訓戒。早速、羊の先に剃刀を括り付けいでて、髪を剃らんとて、と剃り始める(写真)が、鼻唄気分が浮かれて住持の鼻の先を削ぐ始末。へ重喜は余りの迷惑を押さえ、へ眼藏指して、と地謡(地頭、友彦)の裡に入りトメ。観子井濱も微笑ましかつた。(16分)

「悪太郎」伯父(アド友彦)が陰で深酒を非難すると聞き乗り込む悪太郎(シテ融)、逃るをい



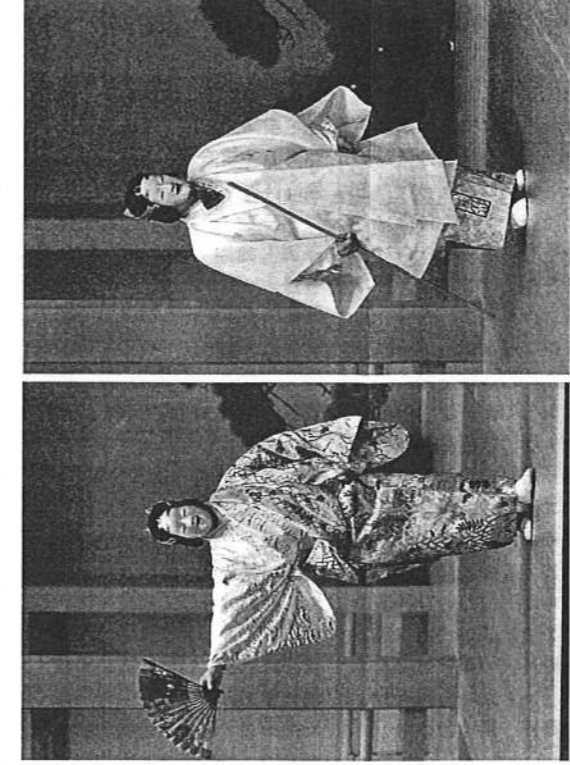
御酒落名匠狂言会「箕被」
左より野村萬、万蔵
(撮影・杉浦賢次氏)

なし、隠裏に済まそうと図るのが伯父の大人の智慧、文字通り酒を以て酒飲みを制すれば、素より目の無い悪太郎、盃を重ねる程に(写真)伯父へ阿諛追従。世間は「ただお慈悲深いと申されます」と聞けば伯父も満更ではなからうが、「このくどうなるにははらうと困つた」と酒飲みの通弊にはお手上げ。よう／＼酔弁辞去する悪太郎、へあの山みさい、と小説気分も路傍に酔臥。案の定、と後を見舞う伯父、戒めに悪太郎の身形を俤体に替え、「善心となつて後生を願へ」、「則ち汝が名を南無阿弥陀佛と付けるぞ」と夢の中に居る悪太郎へ思念伝達(テレパシー)。

目覚めて悪太郎、南無阿弥陀佛と唱えて歩く僧(小アド又三郎)に我が名を呼ばれたと思ひ「やあ、やあ」と返事をすれば不審がられ、果ては笑われ、ば、僧に笑う理由を質す悪太郎。こゝに至る経緯を知つて南無阿弥陀佛の有難さを説く僧。納得した悪太郎、これからは僧共々佛道修行だ、一筋と、連吟へ念佛申して帰りに

り、と留メル。シテ融、悪太郎の柄でないが、前は父と、後は盟友と巧く絡み力演。(36分)

「箕被」生計ままならず二人を呼び連歌の会を、と云い出す男(シテ融、手元不如意な身で何を、と妻(アド万蔵)。金箒を巡り一悶着は、連歌の会を止めないのなら暇を、と妻に切り出されては如何に連歌狂とはいへ、妻を看み、説得せねば、と真剣に語る唐士は朱置臣の故事。学問を志して貧を顧みない夫に妻は愛想をつかし離縁したが、夫は貧窮の中、一意専心ついに帝に召し出された。更に我朝では源頼實が住吉社に祈籠をかけ、五年の命に換えて一首を詠んだと、満面朱を掃き力説するところ、何とか妻を留めた熱意に溢れ、早事を話さ。しかし妻はにべもなく、連歌を止めねば暇を呉れと冷やか。結局、暇をやることになれば、要求されるのは塵を結んでなりとも暇の印、箕以外何もなければ、それを一極い



豊田市能楽堂七月能
「浮舟」アド桜間金記
(撮影・杉浦賢次氏)



御酒落名匠狂言会「葺」
大野弘之(アド何某)、井上靖浩(シテ山伏)
(撮影・杉浦賢次氏)

てなりとも去にませう」と妻。一ノ松を去り行く後ろ姿に男は呼掛け、「親の所に言伝がある」と後ろ姿に触発された発句「三日月の出づるも惜しき名残かな」と詠めば、歌を詠みかけられて返歌をせずば口ない虫と父様に叱られようと女、「立戻つて(写真)ワキを致さう」と、「秋の形見に奪れて行く空」と付ければ、男は女の嗜みに驚き、復縁を願ひ、改めて盃事に。めでたく一さし譚い舞うは能「言刈」クセのトメ、へ浜の真砂、を教え尽すことはあつてもへ此の道(連歌)は尽きせぬや、

ただ、楽しもうへなにしておふ難波の怨み(裏芝)うち忘れ(被け)て、と男は妻に箒を被せ、へありし契りに帰る会ふ縁こそ惜しかりけれ、と舞納めると、「なう愛しい人ごちへ渡しめ」と、妻を誘うも逸る心、愛を取り戻した喜び全身に溢れ、見所もはのびくした気分。それにしても当時の庶民の教養の高さ、品のよい舞台だった。(30分)

「葺」屋敷に得体の知れぬ葺が蔓延り、不安になった何某(アド弘之)、法力の強いという山伏(シテ靖浩)に祈籠を願ひ出れば、へ九藏の窓の前、などと横川小聖なりに恰好をつけるのが可笑しい。へ橋の下の草薙は誰が植えた草薙ぞ、と唱える呪文も空しく、次々に生える葺に困惑するが、葺の群が何某を連つて消えたと、一ノ松に出現する鬼葺(立衆頭・郁雄)。「あれが開いたならばさぞ」と怖がる山伏を、笠を開き脅す鬼葺「許してくれい、へ」と逃げ込む山伏、全員染しんで演つているのが何より。(22分・7月10日・第12回御酒落名匠狂言会)

「浮舟」初瀬から宇治を経て都へ上る旅僧(ワキ謙吉)、宇治で柴舟に楫さず里女(シテ金記(写真)に遇い問答。ワキが土地の名所を問えば、昔、浮舟とかの住居が在つた。それならば光源氏の所縁、是非とも残らず話を、と意気込むかのワキ。「難し人の仰せやな」とワキへアシラと、反発するかのシテ。土地の風光にシテの心情を重ねる初回(光洋・廣明・穂高ら)となり、へ小島が崎を見渡せば、と葦から左へ眺め、へ立つ川風に行く雲の、と面使と、左へ廻つて正先から正中へ、直るとへなお身をうじと思わぬや、の返シ句にワキへアシラと下居、棹を置き、直つて櫂中の扇を取り出すと膝の上は左巻に受ける。ここへきてワキとじつくり向き合うのは、浮舟のこと知らぬは偽り、のワキの言葉に應えるためとも。クリ・サシ・クセで語るは、浮舟にまつわる愛に淡白な薫大将と執拗な兵部卿のこととも、ほとんど型として無くワキへ同意を求めアシラとだけで、地を聞かせるだけの印象。へ水の面も曇りなきと上ノ端で立つ。優柔不断の浮舟は、嘆きの末に行方知らずと。問答になつて住居を問われてシテ、小野は此親坂、物の怪に應かれた身、法力を頼りにお待ちすると送り笛に中入。里人(アド又三郎)浮舟・薫大将・兵部卿の仲を克明に語つて退くと後場。

ワキが小野を訪ね回ると、一声ノ離子(六郎兵衛・達志・真之介)で一ノ松に現われる浮舟ノ靈(後シテ金記)、前シテと面も替り葦束も纏箔隠巻、水衣が唐織脱皮下に(写真)。物の怪に憑かれ狂おしいカケリ、在世には横川の傳説に歌われて物の怪は退けられたが、死後の苦しみ多く、へ今この聖も同じ便り(手堅)に、と正中膝をつきワキに合掌し、立って踏む五ツ拍子にはへ思ひのまゝに執心はれて、浄土に生まれる嬉しさが。へ杉の風や残るらん、とシテ柱を向きトメ拍子。シテ、地とも小風風景微塵やかに描くも、ストーリー展開に起伏が乏しい印象だつた。(1時間16分・7月16日・豊田市能楽堂七月能)

NHK放送予定(平成23年10月~11月)

Table with 2 columns: Date and Program Name. Includes NHK-FM ラジオ能楽鑑賞, 10月23日(日) 素謡「玄象」, etc.

演能力レンダ一三

名古屋能楽堂

(能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)

Table of performances with columns for date, time, and program name. Includes 10月22日(出) 梅田邦久師尊奉念記講義会能, etc.

能楽の友

発行能楽の友社

名古屋千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858) 電話 FAX 振替口座 購読料 郵送の場合

金沢

金沢能楽美術館では、開館5周年特別記念展として、「東京国立博物館蔵・金春座伝来能面・能装束」展を10月

金春座能面・能装束展

金沢能楽美術館開館5周年記念特別展

この企画は、加賀藩の能の原点である金春座を紹介するもので、東京国立博物館が所蔵する奈良金春座伝来の能面・能装束のなかから、重要文化財16点をふくむ選りすぐりの46点を紹介します。

金剛流能「朝長」

11月12日 豊田市能楽堂

豊田市能楽堂では、十一月十二日(出)特別公演として金剛流能「朝長」を上演する。

後見・松野恭憲、豊嶋幸洋、重本昌也 地謡・宇高通成、田中敏文、山口尚志、都丸勇、竹市幸司、中嶋謙昌、岩切直次、上村雅義

能「攝待」上演

11月4日 大概能楽堂

大阪 大概能楽堂は、平家物語「義経」のテーマで、十一月四日(出)ナイトシアター、自主公演を開演する。

法政大学

能楽七三十一 10・11月4日開講

法政大学では、第16回能楽セミナーを10月24日、31日、11月14日、21日の4日間、法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都千代田区富士見2-17-1)で開催する。

能葵

中村 昌弘 鬼頭 尚久 飯富 雅介 寛 敏一 鬼頭 養命 橋本 幸 船戸 昭弘 鹿取 泰世

能葛

本田 光洋 杉江 元 河村 総一郎 加藤 洋輝 大和 舞 高安 勝久 後藤 孝一郎 大野 誠

能舎利

金春 飛翔 金春 穂高 飯富 雅介 河村 眞之介 加藤 洋輝 野村 又三郎 後藤 孝一郎 大野 誠

能長光

スッパ 野村 又三郎 使いの者 奥津 健太郎 目代 松田 高義 後見 伴野 俊彦

能舎利

十一月五日(出)午後一時半開演 名古屋能楽堂

能葛

十一月五日(出)午前九時半始 名古屋能楽堂

能葵

十一月五日(出)午後一時半開演 名古屋能楽堂

能国

後見 武田 邦久 梅田 邦久 橋本 幸 飯富 雅介 河村 眞之介 船戸 昭弘 大野 誠

能隠狸

後見 高橋 隆一 武田 邦弘 梅田 嘉安 古橋 正邦 松山 幸親

能藤戸

後見 高橋 隆一 武田 邦弘 梅田 嘉安 古橋 正邦 松山 幸親

能綱

後見 佐藤 融 高橋 隆一 武田 邦弘 梅田 嘉安 古橋 正邦 松山 幸親

能萩

後見 佐藤 融 高橋 隆一 武田 邦弘 梅田 嘉安 古橋 正邦 松山 幸親

能狂言会

十一月九日(出)午後六時半始 名古屋能楽堂

「チケット料金」 正面指定席 五〇〇〇円 連絡/名古屋金春会(後藤方) TEL 052-806-4791

「入場料」(金座指定) S席 85500円、A席 75000円 B席 65000円

八、「中日五流能」③

— 承前 —

昭和三十六年四月二日、第六回「中日五流能」は愛知文化講堂特設舞台。なお此の舞台は昭和三四年の第四回から昭和四〇年の第一〇回公演まで使用されることになる。番組は発会当初から二部制。今回も昨年度に続き第一部には新作の能、狂言を上演、番組リーフレットに次のように云う。

第一部は、能や狂言をいろいろの角度からみて、とみなすにも親しみやすく、興味深くみていただくように選び、また近ごろの新しい

動向を織り込んであります。ことに虚子の作能「奥の細道」(写真はりフレット表紙。シテ本田秀男、面は面打・入江美法の創作面「芭蕉」という)などは、従来の能よりも別な境地をひらいたもので、是非はもとより、ひろく国文学、演劇愛好家の方にもこの機会を逃さずみていただきたいと考えています。

番組は能「鶉鷓・真如之月」観世喜之・西村弘敬・西村欽也・アト不明・藤田六郎兵衛・田鍋徳太郎・山本敬郎・金春敬右衛門・梅若六郎(地頭 観世武雄 後

当地の各流儀・流派・結社 社中の消息を辿る ③⑥

竹尾 邦太郎

狂言「鐘の首」(佐藤友彦、佐藤 誠)

「五色の会・能を観る」公演は今年で第十三回を数え、毎年愛好者多数の盛賞で、歴史ある岡崎での恒例の演能として関心がひろく市民から期待されている。補佐・宇高通成師。後援・岡崎市教育委員会。

「五色の会・能を観る」公演は今年で第十三回を数え、毎年愛好者多数の盛賞で、歴史ある岡崎での恒例の演能として関心がひろく市民から期待されている。補佐・宇高通成師。後援・岡崎市教育委員会。

五色の会 能を観る 能「黒塚」上演

12月23日 岡崎・花朋会舞台

金剛流・朋の会(羽多野良子師主宰)は、五色の会(第十三回能を観る)公演をきたる十二月二十三日(金・祝)、岡崎市の花朋会敷舞台(岡崎市大西町奥長47-4)で開催する。

「五色の会・能を観る」公演は今年で第十三回を数え、毎年愛好者多数の盛賞で、歴史ある岡崎での恒例の演能として関心がひろく市民から期待されている。補佐・宇高通成師。後援・岡崎市教育委員会。

狂言「鐘の首」(佐藤友彦、佐藤 誠)

能「黒塚」(シテ羽多野良子、ワキ高安勝久、ワキツレ相元正樹、問・今枝郁雄、笛・鹿取希世、小鼓・後藤嘉津幸、大鼓・河村真之介、太鼓・加藤洋輝、後見・広田幸稔、伊藤雅子、小鴨梨辺

華、地謡・宇高通成、宇高寛成、宇高徳成、百々康治、武市幸司、漆理謙次)

入場料 前売五〇〇〇円(当日五五〇〇円、高校生以下三〇〇〇円。

中日五流能



見、新作舞囃子「嵯峨之雨」片山博通・森田光春・曾和博朗・谷口勝三・片山博太郎(地頭)、新作狂言「雪まろけ」野村万作(大地) 茂山七五三(男形) 茂山千之丞(女神) 万代孝子(里ノ女)、能「羽衣」床几之物着 金剛殿・江崎直質・南岩夫・杉市太郎・大倉六蔵・吉見嘉樹・金春徳右衛門・今井健三郎(地頭) 豊嶋弥左衛門(後見)、新作小舞「細雪」茂山十五郎、仕舞二番「玉之段」辰巳孝「歌占」喜多節世、一響鶉鷓「班女」杉市太郎・林 愿蔵

(謡)、新作能「奥の細道」本田秀男(芭蕉) 本田光洋(遊女夕顔) 宝生弥一(宿ノ主人) 野村万作(遊女葵) 三宅右近(遊女見) 一噌幸政・北村一郎・安福泰雄・金春信高(地頭) 金春欣三(後見。因に舞囃子「嵯峨之雨」を舞う片山博通、能「奥の細道」については俳人・池内たけし(池内信嘉の息、虚子の甥)は次のように述べる。

能による「佯び」の表現 片山博通

「嵯峨の雨」はもともと吉井勇先生が、芭蕉の「嵯峨日記」取材して、井上流京舞のために書かれたもので、富崎春昇作曲、井上八千代唄付で上演された。その作詞を拝見した時から是非能にして見たいと思ひ、長年その機会を求めていたところ、幸いこの秋「難見会」で舞囃子の形式でシテ芭蕉、夢の中に出てくる弟子の社国をツレとして型を付けた。つづいて冬に、「N日五流能」なすけあい能と狂言の夕で再演した

時は、能にかえてみた。といつてもシテ一人で、ワキもツレも出ない。こんどの再演では再び舞囃子にもとし、シテ一人でやってみるつもりである。なんとか従来の能、舞囃子といつた形式にとわれず、しかも能の技術で芭蕉の「佯び」と嵯峨の白雨といつた感じを出したいと思つている。

耳に聞きつつ 池内たけし
鶉鷓や羽衣の能を観るのには、能を見馴れた人には謡本は無くとも舞台の方を観ておるだけで良い。
奥の細道だけは謡本を手にしつつ舞台を観、時に又謡本を見つつ謡はる文句を耳に聞きつつ味わつて見ると、おのづから奥の細道なるものの味わいがしみじみと感じられるであろう。
此の能を観る機会を得られた事は、日頃読んでみたいと思ひつつ未だ読んでみなかつた人のために奥の細道を読む機会と、何かしら此の能らしもの淋しさといふものを味わわれる。

③(面くづ)

能「鶉鷓小町」高安勝久 河村総一郎 大野 誠

解 説 飯塚恵利人
十一月十九日(土)午前十一時始
名古屋能楽堂

熊澤恵美子 偲 ぶ 会
主権名 古屋 観世 会
名古屋平昭和区台町2-16-15
TEL/FAX 0522841463 2

①(固観世会番組つき)
後見 梅田 嘉宏 地謡 吉八八 神 孝 充 旭 加 實 敏 彦
観世 豊正 須部 南 祖父江 修 弘 一

仕舞 実 盛 梅若 善高

能 求 塚
飯富 元 正 尚 寛 上田 希 悟
橋本 幸 後藤 嘉津 幸 鹿取 希 世

狂言 犬山伏 野村又三郎 松田 高 義 野村 信 朗

仕舞 兼 平 岡田 見 一
善知鳥 池内光之助 井戸 和 男

能 海 人
子方 坂口 伸 衣斐 愛 仲
杉江 元 河村 総 一郎 加藤 洋 輝
相元 正 樹 船戸 昭 弘 竹市 学

能 組
野口 隆 行
後見 内藤 飛 能 地謡 阪口 泰 子 玉井 博 祐
茅賀カズ子 土屋 周 子

狂言 禰宜山伏 シテ 野村小三郎 アト 野口 隆 行
子方 野村 信 朗

能 岩 船
後見 梅若 善 高 地謡 小川 晴 子 梅若 基 徳
梅若 吉之丞 立花 香 幸 子 池内 光 之 助

主権名 古屋 宝生 会
名古屋平昭和区御器所3-23-19-8 02
TEL/FAX 0522842560 0
主権 梅若吉之丞 後援 梅 猶 会

第55期 第4回 名古屋宝生会定式能
十一月二十日(日)午後一時始
名古屋能楽堂



世阿弥の自署と花押

世阿弥の自署と花押
高村光太郎氏作「智恵子抄」が...

昭和三十七年三月二五日、第七回「中日五流能」...

第一回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

第二回は能「花月」後藤得三、久保田巨亮...

狂言の台本を書いたのは、この「とりかえばや」...

氏の中に永遠の智恵子像と、狂った智恵子の二影が...

第二回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

②面よりつづき
此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

また「智恵子抄」については西田三好が一観能の手びきとして...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

第一回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

第二回は能「花月」後藤得三、久保田巨亮...

狂言の台本を書いたのは、この「とりかえばや」...

氏の中に永遠の智恵子像と、狂った智恵子の二影が...

第二回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

②面よりつづき
此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

また「智恵子抄」については西田三好が一観能の手びきとして...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

第一回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

第二回は能「花月」後藤得三、久保田巨亮...

狂言の台本を書いたのは、この「とりかえばや」...

氏の中に永遠の智恵子像と、狂った智恵子の二影が...

第二回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

②面よりつづき
此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

また「智恵子抄」については西田三好が一観能の手びきとして...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

第一回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

第二回は能「花月」後藤得三、久保田巨亮...

狂言の台本を書いたのは、この「とりかえばや」...

氏の中に永遠の智恵子像と、狂った智恵子の二影が...

第二回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

②面よりつづき
此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

また「智恵子抄」については西田三好が一観能の手びきとして...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

第一回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

第二回は能「花月」後藤得三、久保田巨亮...

狂言の台本を書いたのは、この「とりかえばや」...

氏の中に永遠の智恵子像と、狂った智恵子の二影が...

第二回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

②面よりつづき
此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

また「智恵子抄」については西田三好が一観能の手びきとして...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

第一回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

第二回は能「花月」後藤得三、久保田巨亮...

狂言の台本を書いたのは、この「とりかえばや」...

氏の中に永遠の智恵子像と、狂った智恵子の二影が...

第二回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

②面よりつづき
此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

また「智恵子抄」については西田三好が一観能の手びきとして...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

第一回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

第二回は能「花月」後藤得三、久保田巨亮...

狂言の台本を書いたのは、この「とりかえばや」...

氏の中に永遠の智恵子像と、狂った智恵子の二影が...

第二回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

②面よりつづき
此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

また「智恵子抄」については西田三好が一観能の手びきとして...

高村光太郎氏作「智恵子抄」が武蔵鉄二の演出...

第一回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

第二回は能「花月」後藤得三、久保田巨亮...

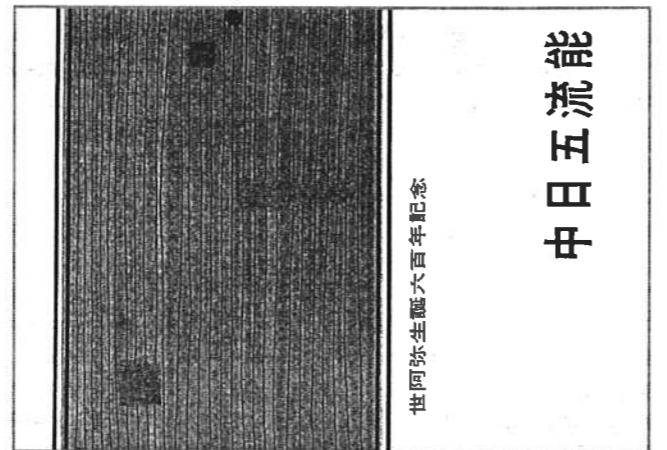
狂言の台本を書いたのは、この「とりかえばや」...

氏の中に永遠の智恵子像と、狂った智恵子の二影が...

第二回は能「満仲」宝生英雄(仲光)野口禄久...

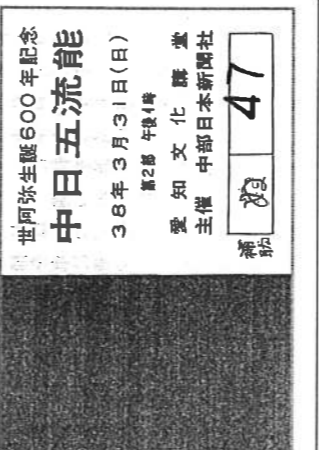
此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...

②面よりつづき
此の能の間の野村万作、三宅右近二人の交々に...



世阿弥生誕六百周年記念

中日五流能



世阿弥生誕600周年記念 中日五流能 38年3月31日(日) 第2部 午後4時 愛知文化センター 主催 中日日本新聞社

王輝幸、粉河幹夫、貞光義次、北村一郎、亀井俊雄、金春惣右衛門、本田秀男(地頭)松岡金記(後見)...

◆晩夏から初秋の舞台◆ 「第18回 久習会」 「第27回 衣斐正宜後援会能」と「第14回 こぎる乃座」

竹尾邦太郎

上流極めて稀な社寺神佛にまつわる彫能の一。天地開闢と共に現れた天神(あまつかみ)七代を継ぐ地神(ちじん)初代天照大神の子...

事 序奏思わず一帯が門出の昂り鎮めるようにあり、ヒシキから次第の囃子で出る。勅を負う重々しき無縁に名宣も晴れぐと、一行の道行は口跡爽やか。座着くと、真ノ一声で漁翁(シテ亮)漁夫(ツレ美樹)橋懸に向き合うと...

・戀一・桂三らへ天の橋立光添ふ、とツレは苗前へ、シテも下居に水衣の厚下ろせば寛く心、へ月澄みのぼる気色かな、の詩情。クリ、サシに衆生階度のため神代の昔に天下つた地神二代が文殊菩薩を此の地に勧請した事を、クセは...

とワキにアシラヒ、へ大聖文殊の(御側)、と立つシテ、へさいしやう老人は我なり、と扇できつとワキを指すところに威、来序の囃子でシテ、ツレ中入する。代つて門守ノ神(アヒ健太郎、立シヤベリに九世戸の謂れ滔々と語り、更にワキをお慰めとばかり「何ぞ一曲任らうするか、任るまいか」とワキに問いはしても、独り合点に「華からう、とにっこり笑はせられた」と右袖担げ舞う三段之舞が可笑しい。アヒが退くと、出端の囃子(六郎兵衛・葛津寺・崇志・佐七)で天女(後ツレ美樹)が燈明台を掛け、へ松へ、へ久方の、と諷い、へ月も更けゆく、の地の裡に舞台へ入りへ松の梢に、と作物前から(④面へつづき)

野村又三郎襲名祝賀 第10回 狂言三の会公演

十一月二十三日(日)午後二時開演 名古屋能楽堂

翁 味方團 三番野村伊藤 泰 附之舞 千歳 野村又三郎 赤一郎 烏帽子祝儀 大鼓 河村真之介 小鼓 船戸昭弘 後藤嘉幸 笛 大野 誠 腰鼓 福井 啓介

後見 林守右衛門 地謡 河村和貴 祖父江修一 河村和重 清沢一政 久田勘徳 狂言後見 野口 隆行 興津健太郎

狂言 鬼瓦 大巻 奥津健太郎 太郎若者 野口 隆行 狂言 那須語 伴野 俊彦 狂言 金岡 長巻 金岡 松田 高義 藤波 徹

主催 狂言三の会 全席指定 一般五千円 会員二千円 問い合わせ TEL 090-66707-4714 FAX 042-3927-5996 狂言三の会事務局

名古屋能楽堂

定例公演の能面募集

応募締切り 明年1月15日

名古屋能楽堂では、来る平成二十四年三月三日(土)に開催する一名

寺の修復が成り、世話になった衆を振舞うのに近在の山の物では御馳走にならないと住持(アト高養、寺ゆえ應物の魚は御法度と

「若和布」

寺の修復が成り、世話になった衆を振舞うのに近在の山の物では御馳走にならないと住持(アト高養、寺ゆえ應物の魚は御法度と

速い曲の上演はシテ方・三夜の集中心が大事故だが、力演、よく纏まった好舞台だった。積極的に稀曲を採り上げる久習会の情熱が結構。(1時間29分)

飛返って袖被き、袖被木で立ち留拍子。松立木は兼へ、燈明台は切戸へ、別々にひく。

天地の両燈一つに、でツレ共々作物を進み、それが左右に燈明台を置くくと、八九世の明方明々たり、と打村手にシテはツレと短い連舞、ツレが下がるとシテは兼社

燈明台掛けたま、右に廻り筋前に。へ海上に、で兼を見込むと早苗で龍神(後シテ兼)も燈明台を

④面よりつづき

〔応募期間〕平成24年1月6日(水)～15日(日)必着

〔賞〕最優秀賞 一点、賞状、能「隅田川」で使用、名古屋能楽堂において作品展示▽優秀賞 二点、賞状、名古屋能楽堂にて作品展示▽審査員特別賞 三点、賞状、名古屋能楽堂にて作品展示▽佳作 六名、賞状、名古屋能楽堂

長・観世流シテ方・久田勘助氏、喜多流シテ方・長田颯氏。〔賞〕最優秀賞 一点、賞状、能「隅田川」で使用、名古屋能楽堂において作品展示▽優秀賞 二点、賞状、名古屋能楽堂にて作品展示▽審査員特別賞 三点、賞状、名古屋能楽堂にて作品展示▽佳作 六名、賞状、名古屋能楽堂

〔審査員〕能楽協会名古屋支部

〔応募点数〕一人一面(未発表の新作能面に限る)

〔審査要項〕は次のとおり。

〔応募締切り〕は、二十四年一月十五日(日)

〔応募料〕三〇〇〇円、送金は振替口座〇〇8990・9・61040 加入者名(例)名古屋市文化振興事業団

〔審査結果の通知〕応募者には24年1月下旬に通知

〔作品展示〕名古屋能楽堂2月企画展「隅田川展」、平成24年2月1日(水)～3月5日(月) 9時～午後5時(最終日は午後3時まで)で。名古屋能楽堂展示室

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

あつて新発意(シテ又三郎)を都へ遣り若和布(わかめ)を求めさせ。が、若和布が何物か知らな

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

〔審査員〕能楽協会名古屋支部

〔応募点数〕一人一面(未発表の新作能面に限る)

〔審査要項〕は次のとおり。

〔応募締切り〕は、二十四年一月十五日(日)

〔応募料〕三〇〇〇円、送金は振替口座〇〇8990・9・61040 加入者名(例)名古屋市文化振興事業団

〔審査結果の通知〕応募者には24年1月下旬に通知

〔作品展示〕名古屋能楽堂2月企画展「隅田川展」、平成24年2月1日(水)～3月5日(月) 9時～午後5時(最終日は午後3時まで)で。名古屋能楽堂展示室

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

あつて新発意(シテ又三郎)を都へ遣り若和布(わかめ)を求めさせ。が、若和布が何物か知らな

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

〔審査員〕能楽協会名古屋支部

〔応募点数〕一人一面(未発表の新作能面に限る)

〔審査要項〕は次のとおり。

〔応募締切り〕は、二十四年一月十五日(日)

〔応募料〕三〇〇〇円、送金は振替口座〇〇8990・9・61040 加入者名(例)名古屋市文化振興事業団

〔審査結果の通知〕応募者には24年1月下旬に通知

〔作品展示〕名古屋能楽堂2月企画展「隅田川展」、平成24年2月1日(水)～3月5日(月) 9時～午後5時(最終日は午後3時まで)で。名古屋能楽堂展示室

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

あつて新発意(シテ又三郎)を都へ遣り若和布(わかめ)を求めさせ。が、若和布が何物か知らな

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

〔審査員〕能楽協会名古屋支部

〔応募点数〕一人一面(未発表の新作能面に限る)

〔審査要項〕は次のとおり。

〔応募締切り〕は、二十四年一月十五日(日)

〔応募料〕三〇〇〇円、送金は振替口座〇〇8990・9・61040 加入者名(例)名古屋市文化振興事業団

〔審査結果の通知〕応募者には24年1月下旬に通知

〔作品展示〕名古屋能楽堂2月企画展「隅田川展」、平成24年2月1日(水)～3月5日(月) 9時～午後5時(最終日は午後3時まで)で。名古屋能楽堂展示室

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

あつて新発意(シテ又三郎)を都へ遣り若和布(わかめ)を求めさせ。が、若和布が何物か知らな

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

〔審査員〕能楽協会名古屋支部

〔応募点数〕一人一面(未発表の新作能面に限る)

〔審査要項〕は次のとおり。

〔応募締切り〕は、二十四年一月十五日(日)

〔応募料〕三〇〇〇円、送金は振替口座〇〇8990・9・61040 加入者名(例)名古屋市文化振興事業団

〔審査結果の通知〕応募者には24年1月下旬に通知

〔作品展示〕名古屋能楽堂2月企画展「隅田川展」、平成24年2月1日(水)～3月5日(月) 9時～午後5時(最終日は午後3時まで)で。名古屋能楽堂展示室

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

あつて新発意(シテ又三郎)を都へ遣り若和布(わかめ)を求めさせ。が、若和布が何物か知らな

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

〔審査員〕能楽協会名古屋支部

〔応募点数〕一人一面(未発表の新作能面に限る)

〔審査要項〕は次のとおり。

〔応募締切り〕は、二十四年一月十五日(日)

〔応募料〕三〇〇〇円、送金は振替口座〇〇8990・9・61040 加入者名(例)名古屋市文化振興事業団

〔審査結果の通知〕応募者には24年1月下旬に通知

〔作品展示〕名古屋能楽堂2月企画展「隅田川展」、平成24年2月1日(水)～3月5日(月) 9時～午後5時(最終日は午後3時まで)で。名古屋能楽堂展示室

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

あつて新発意(シテ又三郎)を都へ遣り若和布(わかめ)を求めさせ。が、若和布が何物か知らな

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

〔審査員〕能楽協会名古屋支部

〔応募点数〕一人一面(未発表の新作能面に限る)

〔審査要項〕は次のとおり。

〔応募締切り〕は、二十四年一月十五日(日)

〔応募料〕三〇〇〇円、送金は振替口座〇〇8990・9・61040 加入者名(例)名古屋市文化振興事業団

〔審査結果の通知〕応募者には24年1月下旬に通知

〔作品展示〕名古屋能楽堂2月企画展「隅田川展」、平成24年2月1日(水)～3月5日(月) 9時～午後5時(最終日は午後3時まで)で。名古屋能楽堂展示室

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

あつて新発意(シテ又三郎)を都へ遣り若和布(わかめ)を求めさせ。が、若和布が何物か知らな

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

〔審査員〕能楽協会名古屋支部

〔応募点数〕一人一面(未発表の新作能面に限る)

〔審査要項〕は次のとおり。

〔応募締切り〕は、二十四年一月十五日(日)

〔応募料〕三〇〇〇円、送金は振替口座〇〇8990・9・61040 加入者名(例)名古屋市文化振興事業団

〔審査結果の通知〕応募者には24年1月下旬に通知

〔作品展示〕名古屋能楽堂2月企画展「隅田川展」、平成24年2月1日(水)～3月5日(月) 9時～午後5時(最終日は午後3時まで)で。名古屋能楽堂展示室

〔応募先〕問合せ先 (〒460-0000) 名古屋市中区三の丸一―一―1、名古屋能楽堂・能面係、TEL052・231・0088、FAX052・231・8756

〔主催〕公益財団法人名古屋市文化振興事業団(名古屋能楽堂)

〔協力〕公益社団法人能楽協会名古屋支部

あつて新発意(シテ又三郎)を都へ遣り若和布(わかめ)を求めさせ。が、若和布が何物か知らな

NHK放送予定(平成23年11月~12月)

Table with NHK broadcast schedule for November and December, including program names like 'NHK FM ラジオ能楽鑑賞' and 'NHK 金曜 金記'.

演能力レンダー

名古屋能楽堂

能・狂言演能関係 (TEL 052-231-0088)

Calendar of performances from November 11 to December 3, listing dates, times, and titles.

能楽の友

発行能楽の友社 名古屋千種区千種2丁目18-18 (郵便番号 464-0858)

能「翁」小鍛冶

名古屋能楽堂正月公演 名古屋能楽堂正月特別公演は、新春一月三日(火)午後二時開演で催される。

山本能楽堂が受賞

博報賞 日本文化理解教育部門

公益財団法人山本能楽堂(代表理事・山本章弘氏、大阪市中央区徳井町1-3-6)は、このたび「第42回博報賞 日本文化理解教育部門」を受賞。

梅若吉吉之丞氏逝去

能楽の国際交流に貢献

親世流能楽師・梅若吉吉之丞氏(本名盛義)は十月二十八日、胆のうがんのため逝去した。享年73。

附祝言

当り券 三千元 小田あさ乃 柴田得美子 柴田雄次 飯田吉平 飯田謙一 飯田謙二 飯田謙三 飯田謙四 飯田謙五 飯田謙六 飯田謙七 飯田謙八 飯田謙九 飯田謙十 飯田謙十一 飯田謙十二 飯田謙十三 飯田謙十四 飯田謙十五 飯田謙十六 飯田謙十七 飯田謙十八 飯田謙十九 飯田謙二十 飯田謙二十一 飯田謙二十二 飯田謙二十三 飯田謙二十四 飯田謙二十五 飯田謙二十六 飯田謙二十七 飯田謙二十八 飯田謙二十九 飯田謙三十 飯田謙三十一 飯田謙三十二 飯田謙三十三 飯田謙三十四 飯田謙三十五 飯田謙三十六 飯田謙三十七 飯田謙三十八 飯田謙三十九 飯田謙四十 飯田謙四十一 飯田謙四十二 飯田謙四十三 飯田謙四十四 飯田謙四十五 飯田謙四十六 飯田謙四十七 飯田謙四十八 飯田謙四十九 飯田謙五十 飯田謙五十一 飯田謙五十二 飯田謙五十三 飯田謙五十四 飯田謙五十五 飯田謙五十六 飯田謙五十七 飯田謙五十八 飯田謙五十九 飯田謙六十 飯田謙六十一 飯田謙六十二 飯田謙六十三 飯田謙六十四 飯田謙六十五 飯田謙六十六 飯田謙六十七 飯田謙六十八 飯田謙六十九 飯田謙七十 飯田謙七十一 飯田謙七十二 飯田謙七十三 飯田謙七十四 飯田謙七十五 飯田謙七十六 飯田謙七十七 飯田謙七十八 飯田謙七十九 飯田謙八十 飯田謙八十一 飯田謙八十二 飯田謙八十三 飯田謙八十四 飯田謙八十五 飯田謙八十六 飯田謙八十七 飯田謙八十八 飯田謙八十九 飯田謙九十 飯田謙九十一 飯田謙九十二 飯田謙九十三 飯田謙九十四 飯田謙九十五 飯田謙九十六 飯田謙九十七 飯田謙九十八 飯田謙九十九 飯田謙百

演能案内

Performance schedule for the 'Seiryukai Seisiki' (第33期) on November 26th, listing various plays and performers.

歳末助け合い

協賛能 12月23日 大槻能楽堂

大阪 能楽協会大阪支部は、2011年度歳末助け合い協賛能を十二月二十三日(金)大槻能楽堂で開催する。

新作能面展

市博物館で12月20~25日 中部能面研究会主催 中部能面研究所(磯部孝義氏主宰)は、「第九回新作能面展」を十二月二十日(火)から二十五日(日)まで名古屋博物館3階ギャラリー1で開催する。

久田観正会

十一月二十七日(日)午前十時開演 名古屋能楽堂

Performance schedule for 'Kudakansei Kai' on November 27th, listing various plays and performers.

御来場歓迎

主催 久田観正会 久田勘会



昭和39年3月29日(日) 250 新 廣 島 社
5 重 中 日 本 新 聞 社

八、「中日五流能」④

— 承前 —

昭和三十九年（一九六四）三月廿九日、第九回「中日五流能」。三ッ折の案内リーフレットに「今回は趣きをかえまして、どなたにも

親しまれている名曲ばかりを特に加え、能特有の小書（巻子演出）でこれを一周興味深く覗いたただける異色番組を企画いたしました。」とある。中日五流能の企画・立案に携わるプロデューサー西田三好が常々標榜している小書

当地の各流儀・流派・結社
社中の消息を辿る ③①

竹尾 邦太郎

能で、それも全曲というのが珍しい。番組は午前十時開演の第一部は能「鉢木・黒頭・春装束」宝生九郎・佐野正治・松本謙三・鈴木峯男・井上松次郎（早打）佐藤卯三郎（木刀持）藤田六郎兵衛・住駒陽介・谷口喜代三・辰巳孝（地頭）佐野安彦（後見）、新作狂言「へんじやく」茂山七五三（大名）千之丞（すつば）、能「井筒・物着」観世喜之・久保田辰亮・杉市太郎・大倉長十郎・亀井俊雄・観世寿夫（地頭）観世鏡之丞

（後見）、仕舞三番「田村七十七」山田仁三郎「角田川」金春信高「野守」観世寿夫、能「黒塚・春装束」後藤得三・高安滋郎・西村欽也・善竹忠一郎・一噌幸政・北村一郎・飯島佐六・柿本豊次・大島久見（地頭）和谷亀二郎（後見）。因に新作狂言「へんじやく」についてシテ茂山七五三は後年の目録「千五郎狂言咄」昭和五八年・講談社刊の中、「辻久一さんの新作狂言」で次のように述べている（抄録）。



狂言を二本書いてもらいました。大映のプロデューサーで、依田義賢さんのシナリオ、溝口健二さんの演出で、「羅生門」や「雨月物語」など、いろいろ立派な映画を制作された方ですが、もともとはお芝居が好きで、若い頃から演劇青年で、演劇雑誌の編集などもずっとやっておられたのだと聞いております。最初の「狐川」は昭和三十七年九月八日に京都の観世会館で「狂言新作発表会」というタイトルの催しで初演しまし

た。もう一本は「へんじやく」でした。普賢鳥籠（ぎはへんじやく）というのは、中国古代の名医の名刺だそうです。登場人物は大名とスッパの二人で、民主主義的な名君をよそおつていて実は独裁的な大名の奇病を、山伏に化けているスッパがインチキ療法で治してやるという話です。これは初演が京都ではなく、昭和三十九年三月廿九日の中日五流能でした。この時は、片山（博通）さんが亡くなっておられたので、辻さんと千之丞の共同演出でした。

第二部は午後四時開演、能「景清・松門之応答・小返」観世鏡之丞・大槻秀夫（入丸）上田照也（従者）松本謙三・杉市太郎・大倉六蔵・亀井俊雄・観世寿夫（地頭）観世喜之（後見）、一調「歌占」田鍋惣太郎・福岡周齋（訛）、仕舞二番「善知鳥」辰巳孝「殺生石」柴田初太郎・能「百萬・舞入」金剛藏・種田運一（方）久保田辰亮・森本幸治・茂山伴一・藤田六郎兵衛・大倉長十郎・谷口喜代三・柿本豊次・今井鏡三郎（地頭）嶋崎弥左衛門、狂言「鈍太郎」茂山千五郎・善竹忠一

部・茂山様一（土京ノ女）、半能「石橋・蓮獅子」本田秀男（白）嵯岡龍馬（赤）鈴木峯男、一噌幸政・北村一郎・大倉七左衛門・観世元信、嵯岡道雄（地頭）金春信高（後見）。B5判A4紙28頁の冊子には番組、西田三好による演出解説のほか「能園解説」中村保雄、上演曲目について「鉢木・雁渡かざる」「へんじやく」辻久一、愛の奇蹟「井筒」西田正好、「黒塚」の鬼女・長田午狂・鏡之丞の「景清」沼淵雨、「百萬について」四番目の礼賛・栗林貞一、演技力に待つ鈍太郎・古川久、獅子の位置・かうのよし、諸氏の小文を載せる。カッパ松野秀世。

昭和四〇年三月二八日は第拾回記念能。例の番組など掲載の小冊子は、巻頭に此の記念能へ日本芸術院長・高橋誠一郎、愛知県知事・桑原毅根、名古屋市長・杉戸清が祝詞を寄せらる。第一部は午前十時開演、番組は能「絵馬」金剛藏・豊嶋弥左衛門（手力雄命）種田治郎（姥）広田泰三（天鈿女命）桑茂好・殿田保（〇面へつづく）

◆出版案内◆

『能楽大事典』

筑摩書房発行

筑摩書房では、『能と狂言』の鑑賞の道案内として、『能楽大事典』を上梓、明春一月十八日発売する。この出版は、圧倒的な項目数と綿密な記述を併せ持つ空前の総合的大事典として大きく期待されている。A5判、一二〇頁。定価一五七五〇円（税込）。

- ◎本書典の特色
- * 四〇〇〇項目に迫る全見出しを
 - 〔一〕能現行曲一覽
 - 〔二〕狂言現行曲一覽
 - 〔三〕復曲一覽
 - 〔四〕復曲狂言一覽
 - 〔五〕新作能一覽
 - 〔六〕新作狂言一覽
 - 〔七〕能楽遺失図録
 - 〔八〕能楽面図録
 - 〔九〕能楽諸家系図
 - 〔一〇〕主要能楽堂一覽
 - 〔一一〕楽器（四拍子）図
- 注文・問い合わせは書店、または筑摩書房（東京都台東区蔵前2-15-3、電話03（5687）2680、FAX03（5687）2685）



五十音順に掲載し、一般の国語辞典と同様の項目検索が可能。*収録項目は、能と狂言の歴史・流儀・曲目・技法・演出等全般に及び、現代の読者の幅広い関心と疑問に対応。*項目の記述は分かりやすさを旨とし、曲目解説では筋の展開が容易に会得できる。*巻末資料として以下の十二分類を取載。

名古屋能楽堂十二月定例公演

十二月四日(日) 十二時三十分開演 名古屋能楽堂

- | | | | | | | | | |
|----|-----|----|------|----|----|----|----|----|
| 能楽 | 衣裳 | 愛 | 高安勝久 | 嵐 | 敏一 | 鹿取 | 幸世 | |
| 仕舞 | 葛城 | 七 | 松井俊介 | 地謡 | 長田 | 英藏 | 綱島 | |
| 仕舞 | 六浦 | 六 | 廣瀬雅弘 | 地謡 | 前田 | 尚久 | 加藤 | |
| 狂言 | 棒縛 | | 佐藤 | 友彦 | 内藤 | 龍 | 飛騨 | |
| 後見 | 和久井 | 博祐 | 地謡 | 竹内 | 上 | 茂 | 佐藤 | 耕司 |
| 後見 | 久保田 | 辰亮 | 地謡 | 平田 | 正 | 文 | 衣 | 妻 |
| 後見 | 久野 | 幸三 | 地謡 | 久野 | 幸三 | 内藤 | 飛騨 | 龍 |
| 後見 | 今枝 | 郁雄 | 後見 | 今枝 | 郁雄 | 後見 | 今枝 | 郁雄 |

舞獅子 龍田 大川 慶美 河村真之介 加藤 淳輝
(金剛藏) 給戸 昭弘 大野 誠
地謡 田中 春奈 加藤 小おる
形谷 真知子 伊藤 雅子
鈴村 昌美 羽多野 良子
木刀持 吉沢 旭
頼光 八神 孝
胡蝶 山 幸親
能楽 飯富 雅介 河村真之介 鬼頭 義命
(綱世流) 橋本 正幸 後藤 孝一郎 大野 誠
間 井上 靖浩
今野 村文三郎
後見 武田 邦弘
地謡 本田 博 武田 大志
高橋 剛一 津 一政
付祝言 (午後四時頃終了予定)

名古屋竹謡会四十五周年
伊勢竹謡会十五周年
記念大会

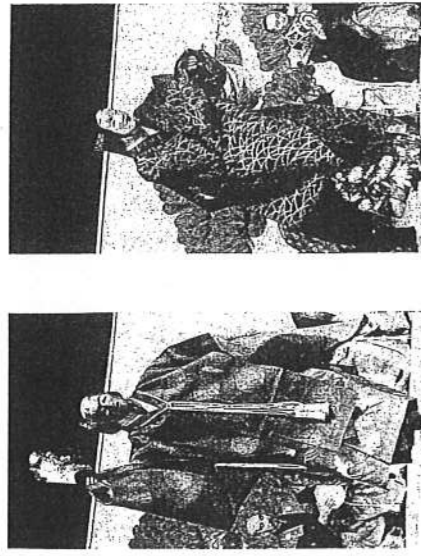
十二月十一日(日)午前九時三十分始 名古屋能楽堂

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|--------|--------|-----------|---------|-------|--------|--------|-----------|--------|---------|-------|--------|-----------|-------|--------|---------|--------|-------|-------|
| 番外仕舞 | 竹生鳥 | 古橋 正邦 | 仕舞 | 鶴亀 | 宇佐美 弓子 | 経 | 正七 | 藤枝 マヤ | | | | | | | | | | | | |
| 仕舞 | 楓川 | 七 | 岡田 英徳子 | 仕舞 | 鶴亀 | 井上 真理 | 葛城 七 | 竹村 康 | | | | | | | | | | | | |
| 狂言 | 盛 | 朝倉 秀雄 | 教 | 盛 | 朝倉 秀雄 | 盛 | 朝倉 秀雄 | 中山 栄子 | | | | | | | | | | | | |
| 義経 | 大 | 洋子 | 義経 | 大 | 洋子 | 義経 | 大 | 洋子 | | | | | | | | | | | | |
| 安宅 | 谷口 彰 | 井関 和彦 | 安宅 | 谷口 彰 | 井関 和彦 | 安宅 | 谷口 彰 | 井関 和彦 | | | | | | | | | | | | |
| 舞獅子 | 西王母 | 平石 よしみ | 杜 若 | 門脇 千鶴 | 舞獅子 | 西王母 | 平石 よしみ | 杜 若 | | | | | | | | | | | | |
| 能半 | 蒞 | 飯富 雅介 | 河村 総一郎 | 藤田 六郎兵衛 | 能半 | 蒞 | 飯富 雅介 | 河村 総一郎 | | | | | | | | | | | | |
| 番外仕舞 | 質 | 盛 | 片山 幽雪 | 番外仕舞 | 質 | 盛 | 片山 幽雪 | 番外仕舞 | 質 | 盛 | 片山 幽雪 | | | | | | | | | |
| 兼謡 | 姨 | 捨 | 外村 政雄 | 片山 九郎 右衛門 | 兼謡 | 姨 | 捨 | 外村 政雄 | 片山 九郎 右衛門 | 兼謡 | 姨 | 捨 | 外村 政雄 | 片山 九郎 右衛門 | | | | | | |
| 味方 | 雷田 | 定子 | 飯富 雅介 | 河村 尚 靖 | 藤田 六郎兵衛 | 味方 | 雷田 | 定子 | 飯富 雅介 | 河村 尚 靖 | 藤田 六郎兵衛 | 味方 | 雷田 | 定子 | 飯富 雅介 | 河村 尚 靖 | 藤田 六郎兵衛 | | | |
| 後見 | 朝 長 | 日比 成之 | 後見 | 朝 長 | 日比 成之 | 後見 | 朝 長 | 日比 成之 | 後見 | 朝 長 | 日比 成之 | 後見 | 朝 長 | 日比 成之 | 後見 | 朝 長 | 日比 成之 | 後見 | 朝 長 | 日比 成之 |
| 連吟 | 橋 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 連吟 | 橋 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 連吟 | 橋 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 連吟 | 橋 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | |
| 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | |
| 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | |
| 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | |
| 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | 橋 | 舟 慶 | 尾崎 敏子 | 大 熾 洋子 | 門脇 千鶴 | |

〔入場無料〕

主催 竹 謡 会
古 橋 正 邦
滋 賀 県 長 浜 市 平 方 町 二 二 八 一
☎ 〇 七 四 九 六 二 三 四 〇 〇 七

(終了六時頃)



金春流能「卒都婆小町」金春栄治郎

観世流能「百萬・法楽之舞」観世元正

又、男がみた場合の悪女と、女がみた場合の悪女では、その内容にだいぶ相違があるに違いない。はたまた、悪女という言葉がありながら、どうも悪男という言葉

近頃、だいぶ流行おくれになりかけたが、ひとしきり悪女という言葉がえらくブームになったことがある。テレビ、映画の世界にもつばら悪女ものが氾濫したが、そのいうところの悪女が、果して本当の悪い女かどうか、私はかねがね疑問に思っていたものであ

る。又、男がみた場合の悪女と、女がみた場合の悪女では、その内容にだいぶ相違があるに違いない。はたまた、悪女という言葉がありながら、どうも悪男という言葉

かいたが、ひとしきり悪女という言葉がえらくブームになったことがある。テレビ、映画の世界にもつばら悪女ものが氾濫したが、そのいうところの悪女が、果して本当の悪い女かどうか、私はかねがね疑問に思っていたものであ

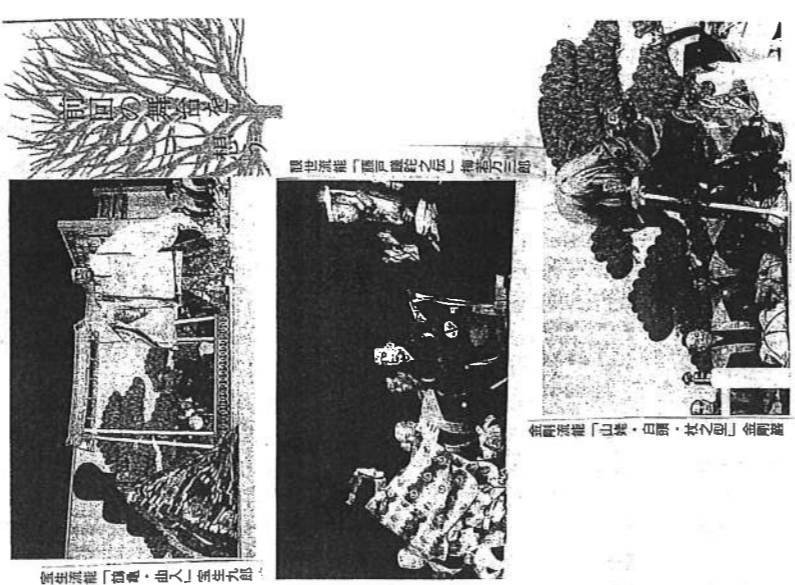


喜多流能「花蓮・舞入」後藤博三

る。又、男がみた場合の悪女と、女がみた場合の悪女では、その内容にだいぶ相違があるに違いない。はたまた、悪女という言葉がありながら、どうも悪男という言葉

かいたが、ひとしきり悪女という言葉がえらくブームになったことがある。テレビ、映画の世界にもつばら悪女ものが氾濫したが、そのいうところの悪女が、果して本当の悪い女かどうか、私はかねがね疑問に思っていたものであ

る。又、男がみた場合の悪女と、女がみた場合の悪女では、その内容にだいぶ相違があるに違いない。はたまた、悪女という言葉がありながら、どうも悪男という言葉



喜多流能「山姥・白頭・杖之型」金剛蔵

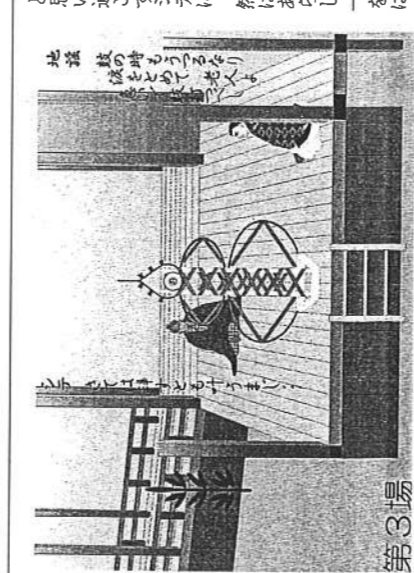
る。又、男がみた場合の悪女と、女がみた場合の悪女では、その内容にだいぶ相違があるに違いない。はたまた、悪女という言葉がありながら、どうも悪男という言葉

◆秋の舞台から(その一)◆

「第五回 能の旅人 のうのう能 in 名古屋」 「観世会定例公演」 「二〇一一年 茂山狂言会」

竹尾邦太郎

「天鼓・舞鼓之舞」シテは観世喜正。「のうのう能」の呼称は、隅田川「なうく我をも舟に乗せて給はり候へ」、自然居士「なうくその御舟へ物申さう」など、人に呼び掛ける言葉、差語め「なうく能」尊候へ」ということか。また、英語(Do You Know NoH?) (能を御存知?)と異国の人に問い掛け、興味を喚起させる意味も。「のうのう能」は平成一二年、普く能を知つて貰おうと主宰が開設した講座のち、それを更に発展、普及させるのに平成一七年、



第3場 「能の旅人」プログラムより転載

の父・王伯(シテ喜正)の方へ赴く由を淡々と語つて滋味。小書で、子を先立て承らえる老残を叩つシテの一セイ、サシ、下歌。上歌を省き、一気にワキの呼出しになるのが、徒らに湿っぽくなるのを阻むか。ワキを迎え度まるシテ、子の不心得に処刑されるものと思ひ遇すシテに、然はあらじ

とワキ、問答・掛合へたと、罪には沈むとも、と覚悟の程のシテも、忘れたい思はふつと右ウケルところに、放心の心をみる思の返シ句に立ち、弱々と運ぶところには憔悴もあらは。舞台に入れば矢張り氣後れ、へ老人が事をな、とじりく膝をつき、へ御免あるべく候、と合掌、懇願するも然もありませんの風情。願い叶えられるべくもななく、再び膝を固めてシテ、もし鼓が鳴ればへ上に輝く王殿に、と居立ち、昂然と面テラシ、へ初めて臨む老の身の、と立つとへ天の鼓を打たうよ、と羯鼓を左手で指すと、こころ、奮い起つ闘志。が、次元の異なる世界に在れば氣も萎えようか。クリに大小前下居すると、親子が存在するがゆえの別離の悲し

みを嘆くサシ、へ苦しみの海に沈むとかや、のシヨリも切ない。クセは唐グセ、上段端あと、罪科をウケルのもへ(唯命)なれや、と背筋を伸ばしてまじまじと鼓に對峙はしても、へ時の鼓の現とも、と再び腰を落しシヨリところには、正気とも思えぬ我が身の恨めしさが如き。ロンギはワキに急かされ、立つとへ玉の床に、と手の腕を腰に差し、へ老の歩み、にや、屈み歩幅小さく運ぶと撥を取り、へ打てば不思議や、と小首傾げへ心耳を澄まし、聴く交差しく、右、左と撥取り落し、退つて安座双シヨリは緊張を解かれた一種の虚脱状態とも。中人は、立つと漸うシヨリ解き、へ松まで物使ノ従者(アヒ又三郎)の送り込み。立シヤベリ、ワキと問答、天鼓の跡を申う管弦の役者の召集を触レ、アヒは笛前に退くと後場。天鼓ノ靈(後シテ喜正)水上をへ行ノ運びをみせ、へ呼かみ出でたる呂水の上、と幕へ見込み、颯と袖返入の鮮やかに水滴

(④面へつづ)

郎、「杜若」網野菊、「水汲」の能「安宅」勅進帳、延年之舞、貞立「梅若六郎」竹中徹也(子方)梅若貞英、大槻文蔵、大西智久、殿島修二、佐藤本俊、加藤丈太郎、柴田収武、杉浦元三郎、片山慶次郎(同山)宝生弥一、三宅藤九郎(強力)三宅右近(富樫従者)藤波順三郎(地頭)武田太加志(後見)。例の冊子には番組、西田三好による演目解説、「能面解説」後藤淑のほか、上演曲目に就いて次の諸氏の小文がある。絵寫について、栗林貞一、悪女について、平岩岩枝、双シテの手手、北岸佑吉、「郡郎」の動と静、長田午狂、世阿弥と「忠度」安藤常次

光治・田鍋惣太郎、谷口勝三・金春物右衛門、辰巳孝(地頭)内藤泰二(後見)、能「百萬・法楽之舞」観世元正、吉田隆(子方)松本謙三、野村又三郎、藤田六郎兵衛、北村一郎、亀井俊雄、金春惣右衛門、梅若万三郎(地頭)大西信久(後見)、狂言「ぬげがら」茂山千作、茂山千五郎(主)、仕

舞三番「花月」豊嶋弥左衛門「遊行」柳大西信久「巴」喜多節世、能「卒都婆小町」金春栄治郎、久保田巨亮、森本幸治、森田光春、曾和博朗、青田喜兵衛、金春信高(地頭)金春貞実(後見)。第二部は午後三時開演、能「藤戸」陸路之伝、梅若万三郎、松本謙三、殿田保輔、藤田昭、和泉保之(大根渡)藤井久雄(地頭)梅若万好夫(後見)。仕舞三番「阿彌」辰巳孝「忠度」藤井久雄「福」金春信高、狂言「種」の酒「三宅藤九郎、和泉保之(次郎冠者)三宅右近(主)、能「花」蓮・舞入」後藤得三、佐々木宗生、丸山邦夫(子方)岡田昭右衛門、高安守彦、勝久、森田光春、大倉長右衛門、亀井俊雄、粟谷菊生

昭和四二年三月二六日、第十二回「中日五流能」は昨年新築成つた中日劇場特設舞台を本拠とし、以後、納会まで使用する。第一部は午前十時開演、番組は能「田村・長床丸」金剛蔵、高安滋郎、西村欽也、和泉太郎、佐藤卯三郎、杉市太郎、曾和博朗、山本敬一郎、豊嶋弥左衛門(地頭)金剛水護(後見)、仕舞「漣」

観世元昭、狂言「猿頭」茂山千作、千之丞(妻)茂山忠三郎(猿鬼)柴田能生(小猿)、能「楊貴妃」台留「観世鏡之丞、森茂好、野村又三郎、寺井政致、幸祥光、亀井俊雄、梅若瑞藏(地頭)片山博太郎(後見)、仕舞三番「花月」桜間龍馬「綱之段」友枝喜久夫「船弁慶キリ」片山博太郎、能「綾」宝生英雄、野口禄久、久保田巨亮、井上松次郎、藤田六郎兵衛、幸円次郎、谷口豊代三、小寺金七、辰巳孝(地頭)吉田俊彦(後見)。

第二部は午後三時半開演、能「景清」西川運雄、瀬尾菊次(入丸)森茂好、殿田保輔(入丸の従者)寺井政致、田鍋惣太郎、谷口豊代三、桜間龍馬(地頭)金春信高(後見)、一調「玉之段」幸祥光、梅若猶義、仕舞三番「通小町」柴田初太郎「笹之段」山田仁三郎「高野物狂」辰巳孝、狂言「寝音曲」茂山千作、茂山忠三郎、能「熊野」謙輝之伝、村雨留、豊次之伝、藤行「梅若六郎」梅若貞英、久保田巨亮、森本幸治、杉市太郎、幸円次郎、亀井俊雄、

以下次号



観世会定例公演「自然居士」
左より浦部美有、古橋正邦

を振り払う趣。掛合で、ワキに天鼓である証は鼓を打つよう求められ、へ菩薩も此處に、で後見が稽団扇をひくと、シテ・ワキ連伶にへ天降ります気色にて打つなり天の鼓、羯鼓台から撥を取る後シテ。(手向の舞楽は(有難や)、と鼓を打つと、太鼓が反応、楽(分ク、学・嘉津幸・眞之介、洋舞)になる。途中、一ノ松へ流れ、袖被キ、羯鼓台を見込むと、戻つて羯鼓台の鼓を打ち、退りつ、スキップを踏むような喜悅は、もう一度打つて羯鼓台の後ろを廻るはしゃぎようも面白く、舞上げるとキリの型所さびくと極め、へ現か夢か、と飛退つて袖被キ、立つと留メ拍子、若々しく爽やかな舞台だった。(1時間15分・9月10日「第五回 能の旅人」のうけ)

「自然居士」 豊屋寺門前(アヒ構造)、自然居士(シテ正邦)の説法聴聞に集まられたい旨を触レルと、やがてシテが寺堂のためお札を求められたいと現われ、床几に掛かると読経を。そこへ一人の少女(子方、浦部美有、可憐)が施物の小袖に添え、親の追善供養にシテの誦経を請う誦誦文を齎す。それをアヒを介して受取るシテがへ敬つて曰す、と讀み出すうまに(写真)、現われる人商人(ワキ等ワキツレ正樹)、少時暇を許すも未だ戻らぬ少女を探し出し拉致するを咎めるアヒ。この騒ぎにシテは、誦誦文に因つて少女が身を売り施物に代えたことを憶り、少女を連れ帰



観世会定例公演「自然居士」
古橋正邦
(杉浦賢次氏撮影)

ろうとすると、アヒに謀められるが撥ね付け、「善悪の二道(こゝに極まつて候は如何に)」と扇ではつしと膝を打つところ、義を見て為さざるは勇無きなり、決断の程をきつぱりみせ痛快。へ佛道修行のため、と立ち、後を追うかに小袖を首に巻き懸へ、「なうく(その御舟へ)」と大きく撥キ扇を二ツして廻る心は、大柄なシテとワキの、互いに譲らぬ激突する問答が迫力。「元の小袖は参らす」と小袖を投げ返し、「裾を濡らし絞りに取りつき」、「命を取るともふつと下りまじい」と安座打合せ、など飽くまで少女奪回に執念を燃やすシテの、余りの強情を持って余し群易するワキとワキツレ。少女を返すにしても隠慮せにシテを玩弄してからと舞わせる中、之舞(学・嘉津幸・眞之介、舞グセ・彫之段・羯鼓(写真)。シテは使命感もあり、舞尽しは終始気合充分、力強い。羯鼓を打ち乍ら一ノ松へ流れ、切地(動鶴・修一・一政)はへとどろくと、面使と、膝をつき羯鼓を打つてへ池の水の、で戻ると、へ膝をなほ擦り、と彫正に撥を置いて扇に唇を、少女に走り寄つて大団円、常座まで送り留メ。一体は大味な気しなくもないが、伸びくと閑遠な大きな舞がそう思わせるかも。ワキもシテに拮抗する勢いをみせ力演。(1時間8分)

「雁標」 野遊びに出た大名(シテ融)、雁が一羽下りているのを見付け、先づは左の肩を脱ぎ身持えを。あでもない、こでもないとい狙いを決めていくと、たましく連行人(アド部雄)が雁に氣付いてこれ幸いと膝を打てば、一発で仕留め

「雁標」 野遊びに出た大名(シテ融)、雁が一羽下りているのを見付け、先づは左の肩を脱ぎ身持えを。あでもない、こでもないとい狙いを決めていくと、たましく連行人(アド部雄)が雁に氣付いてこれ幸いと膝を打てば、一発で仕留め



観世会定例公演「雁標」
左より今村部雄、佐藤麟、佐藤友彦(後方)
(杉浦賢次氏撮影)

「妙言への物語」 昨年師走四日、死去した茂山千之丞の作・演出。本来なら追善公演となるどころ難やかな事を好まなかつた千之丞、例年何らかの副題が付く「茂山狂言会」だが本年は副題と言え程でもなく唯「作茂山千之丞」とあるだけ、此の「作」が意味深で番組は千之丞尽し。そういえば過ぐる昭和五八年(一九八三)六月二六日、千之丞は疾つづくに葬式を出しており、何を今更追善など、との洒落つ氣を残したのだろうか。

因に当時の朝日新聞のコラム欄「青鉛筆」に次のようにある。

オペラや新劇の出演や演出まで手がけ、狂言界の異端児として知られる狂言師茂山千之丞さんが二十六日、「選擧祝いを葬式で」と自分の葬式を出した。千之丞さんが自ら演出したもので会場の京都府立文化芸術会館には葬儀委員長をつとめる指揮者の朝比奈隆さんら約四百人が参列。作家の小松左京さんがねんごころにおくやみの辞を述べた。亡者あきさつ段には(老となる)、で止めてしまふ。亦ワキヘアシラと面を伏せ、へかほど修き夢の世を、と右へ目をやるのは諦め心、へ徒なる心こそ、と手を放すと、へ恨みてもかひなかりけれ、とシラ。シテ



観世会定例公演「安達原・黒頭」
観世鏡之丞
(杉浦賢次氏撮影)

「安達原・黒頭」 阿闍梨

と地、掛合のロンギ(糸之段)は糸織りの退屈を紛らす糸尽しの労働歌、へ月に夜を待ちぬらん、と面を上げて右前方を眺め、へ思ひ明石の、から糸を手繰る手を早め、へ幸をのみ独り鳴き明かす、の返し句にハタと手を止め安座歎シワリの辺り、昂ぶる感情のシテにワキ・ワキツレは手を掛くはか



観世会定例公演「安達原・黒頭」
左より観世鏡之丞、杉江元
(杉浦賢次氏撮影)

中入は、シテ・ワキ問答に夜寒ゆえ焚火の木を、と立つて行きかけるシテ、不安を覚えず中踏み止まると「や」と押し殺したような

「黒頭」に併用される「急進之出」、早苗(誠・舜一郎、総一郎、洋輝)で出るシテは一旦兼へ退くと助走を利かせ、打杖を掲げて走り出る。般若・黒頭(大元徳)鷹巻着着開姿に水衣に包む負傷を。約束を裏

「呂運」 昨年十月十日、千之丞が演じた最後の曲という。「追善」など選つばく嫌だといふ千之丞だったが追善の会にはよく上演される出家物の一。此の皮肉、相応しいか。

さて、投宿した宿の主(アド正邦)から出家になりたいとせがまれて旅僧(シテ千五郎)、「何らや、坊主になりたい。」と少々当惑も「御二門衆や女共が御待とか、狂言回しを返す今出川中納言(逸平)の佳臣・左近丸(千三郎)右近丸(宗彦)の伝信もあつて有名になり金持ちになつた織部のことを知り、貧しい隣に藤太(あきら)の猛毒おくま(茂)は夫を養ひ付け、隣の子になつて芸を習得せよと囁す。

「さて、これからが大事なことで御座る」と織部から二粒の薬を貰い、空きつ腹や二粒以上は駄目と念を押されて藤太、それを服用して中納言の所へ参上、これ努めて芸を披露するが失敗して面目失墜する。

見るべきは七五三とあきら、阿人の放屁の際の形態模写もさりながら、おつとりして惚けた味をみせる逸平中納言の、公家の「おちやる」言葉の聲響模写が出色だった。演出には四拍子の外に公家屋敷の雰囲気を出すため、地謡座には尺八(小山警山)を。(52分)

「室町歌謡組曲 遊びをせんとや」 構成・演出は千之丞。「梁塵秘抄」から採つた冒頭のへ遊びをせんとや生まれけむ、の一首が「七つに成る子」や「小原木」などの小舞謡やその他を集めた歌謡の組曲の内容を端的に現わしている。朗々とした連吟、独吟、活きくした小舞謡など、賑やかな一座は正にへ戯れせんとや生まれけん、の趣。歌謡の中心にあつた千之丞の、よく透る、厚みのある、美しい、素晴らしい声が懐しい。改めて読んで御真福をお祈りする。(34分・9月29日、二〇一一年茂山狂言会・京都観世会館)

「先号の訂正」 2頁6段後から「行目 能らし」→「能らしき」3頁4段7行目 黒八ノ里人▶4頁1段13行目 は下に

切られた怒りは心頭、へ鬼一口に、と打杖振り上げワキに迫る勢いは(写真)凄まじい。面ヲ切ル強さ、打杖振う鋭さ、折の痛快も、へ見我身者、と左手打杖に添えて踏む数拍子には、ワキ・ワキツレの加持に圧倒されて昂進する動悸が感じられる。へさて懲りよ、とワキに数珠で打ち揺えられ打杖捨て安座すると、キリは弱り果てた態に立ち、足元荒寒無くへよろくと、ジグザクに退り、へ黒塚に、と膝をつき萩柴屋を見上げるところには、浅まし身を恥じるも哀憐の情も。留メは地の裡に二ノ松へ、二ツ拍子踏み、するくと入つた。鬼女の哀れ側々。(1時間15分・9月19日・観世会定例公演)

能楽の友

発行 能楽の友社
名古屋千種区千種2丁目18-18
(郵便番号) 464-0858
電話 (052) 731-7984
FAX (052) 733-2837
振替口座 00800-6-36393
購読料 1年 1100円
1年 1800円
郵送の場合 100円

NHK放送予定

- NHK-FMラジオ能楽鑑賞
12月25日(日)7時20分～8時15分
素謡「三井寺」(喜多流) 塩津哲生
「定家」(部分) 塩津哲生
- 新春素謡狂言(10時10分～11時)
●1月1日 素謡(鶴世流)「神歌」
翁 千歳 観世清和
地頭 観世三郎太
素謡(鶴世流)「養老」
シテ 観世清和
ワキ 関根知孝
シテ 関根知孝
ワキ 関根知孝
狂言(大蔵流)「末広がりがり」
シテ 善竹十郎 善竹富太郎、善竹大二郎
アト 善竹富太郎、「昆布売」
シテ 三宅右近
アト 三宅右近
シテ 三宅右近
素謡(金春流)「東北」
シテ 金春安明
ワキ 辻井八郎
ワキツレ 今春憲和
- 1月2日 狂言(和泉流)「末広がりがり」
シテ 善竹十郎、善竹富太郎、善竹大二郎
アト 善竹富太郎、「昆布売」
シテ 三宅右近
アト 三宅右近
シテ 三宅右近
素謡(金春流)「東北」
シテ 金春安明
ワキ 辻井八郎
ワキツレ 今春憲和
- 1月3日 素謡(金春流)「東北」
シテ 金春安明
ワキ 辻井八郎
ワキツレ 今春憲和

演能カレンダー

名古屋能楽堂

- (能・狂言演能関係) (TEL 052-231-0088)
(TEL 052-231-0088)
- [24年1月]
- 2日(月) 名古屋能楽堂新春素謡初め
(番組①面) (要整理券) (有料)
- 3日(火) 名古屋能楽堂正月特別公演(番組①面) (有料)
- 7日(土) 学生能・狂言の会 (無料)
- 8日(日) 下田文庫設立記念東海能楽伝承会 (無料)
- 9日(月・祝) 名古屋清調会(番組②面) (無料)
- 14日(土) 第14回万作を観る会(番組③面) (有料)
- 22日(日) 名古屋宝生会(番組③面) (有料)
- 28日(土) 青陽会(番組③面) (有料)

関西観世花の会

明春2月18日 名古屋能楽堂

観世流女流能楽師による「関西
観世花の会」は、明春二月十八日
(名古屋能楽堂で第16回公演を開
催する。
能組は、番囃子「経正」(シテ加
藤春枝)
能「羽衣・彩色之伝」(シテ近
藤幸江、ワキ高安勝久)
狂言「粟山伏」(シテ野村又三
郎)
仕舞「氷室」(村井邦子)「網
之段」(小川晴子)「阿漣」(塩
谷恵)
仕舞「三輪」(上田貴弘)「道

観世寿夫記念 法政大学能楽賞 石田幸雄氏 受賞 藤田六郎兵衛氏 受賞

法政大学(増田善男総長)は、
一九七九年(昭和五十四年)に「観
世寿夫記念法政大学能楽賞」を設
定し、すでに三十二回の贈呈を重
ねているが、平成二十三年も各方
面の識者の推薦による候補者につ
いて、選考委員(福田好朗法政大
学国際学術支援本部担当常務理
事、徳安彰法政大学法人本部担当
常務理事、松本雅、みなもところ
う、西野春雄、観世謙之丞、山中
玲子、宮本圭造)が慎重に審議し
た結果、第三十三回の受賞者を次
のように決定した。
両氏の受賞理由は次のとおり。
(略歴など②面に掲載)
〔受賞者〕
●石田 幸雄氏
(いしだ ゆきお)
〔贈呈理由〕和泉流狂言方とし
て長年の研鑽を重ねてきた氏の狂
言は、明快な口跡と的確な人物表
現により、狂言の良き品格を示し

ている。アト役としての過不足の
ない演技にも長け、古典・新作を
問わず、数々舞台の成功に大きく
寄与している。特に本年の「千切
木」(鎌生種)では、すぐれた舞
台成果を見せ、観客に強い印象を
与えた。
●藤田六郎兵衛氏
(ふしたろくろびょうえ)
〔贈呈理由〕的確な技術と深い
作品理解に裏打ちされた氏の笛は
近年ますます充実し、得難い調子
と位を創り出して多くの舞台成果
に貢献している。特に本年の「関
寺小町」(鏡捨)での演奏は、曲
趣を見事に体現して秀逸であつ
た。重要な舞台になくはならない
囃子方の人として、東西を問
わず積極的に舞台を動めるととも
に、優れた後継者を育てているこ
とも高く評価される。

催花賞

三島元太郎氏

法政大学は、服部康治氏からの
観世新九郎家文庫受贈を記念し
て、1988(昭和63)年4月に
「服部記念法政大学能楽振興基
金」を設定し、同基金に基づき事
業の一つとして、能楽三役の功勞
者及び能楽の普及・発展に貢献の
大きい個人・団体を顕彰する「催
花賞」を設定。各方面の識者にご
推薦いただいた候補者について、
法政大学能楽研究所と能楽賞選考
委員とが慎重に選考した結果、受
賞者に三島元太郎(みしまげんた
ろう)氏を決定した。
〔贈呈理由〕
金春流太鼓方の重鎮である氏
は、長年にわたりその確実で安定
した技量によつて東西の多くの舞
台を支えたとともに、後継者育成
にも多大な尽力を続けてきた。
(浅草橋法)を二度動めた実力は
もちろんのこと、能についての深
い知識、温厚誠実な人柄から、シ
テ方囃子方を問わず人望が篤く、
特に関西の囃子方の要として、重
要な役割を果たしている。

演能案内

名古屋能楽堂

新春素謡初め

平成二十四年一月二日(月・振休)
午後一時～二時半(開場十二時半)
名古屋能楽堂

連吟 四海波(観世流) 久田 勘助 他
舞囃子 高砂(金春流) 佐藤 耕司
大鼓 河村眞之介 太鼓 加藤 洋輝
小鼓 船戸 昭弘 笛 竹市 学

舞狂言 餅酒(和泉流) 野村又三郎
大鼓 河村眞之介 太鼓 加藤 洋輝
小鼓 福井四郎兵衛 笛 竹市 学

連吟 老松(金春流) 鬼頭 尚久 他
舞囃子 屋島(観世流) 梅田 邦久
大鼓 河村眞之介 太鼓 加藤 洋輝
小鼓 後藤孝一郎 笛 鹿取 希世

舞囃子 羽衣(金剛流) 竹市 幸司
大鼓 鬼頭 尚久 太鼓 鬼頭 義命
小鼓 後藤孝一郎 笛 大野 誠

狂言語 海人(和泉流) 井上 靖浩
舞囃子 岩船(喜多流) 長田 郷
大鼓 河村眞之介 太鼓 加藤 洋輝
小鼓 船戸 昭弘 笛 大野 誠

〔入場無料〕(要整理券)
ナナイアパーク七階プレイ
ガイドで配布お一人機2
枚まで)

主催 名古屋市文化振興事業団
(名古屋能楽堂)
能楽協会名古屋支部

第56回学生能・狂言の会

平成二十四年一月七日(土)正午始
名古屋能楽堂

狂言 「口真似」
舞囃子 「吉野天人」「小督」「七騎落」

〔無料〕 主催 第56回学生能・狂言の会
連絡・久野方
(TEL 090・4465・6579)

名古屋能楽堂正月特別公演

平成二十四年一月三日(火)午後二時開演
名古屋能楽堂

能翁(観世流) 久田 勘助 三番 奥津健太郎
千歳 久田 勘吉郎
大鼓 河村眞之介
小鼓 後藤孝一郎 笛 竹市 学
後見 祖父江修一
梅田 邦久
狂言 後見 佐藤 融
唐高 俊裕

狂言 素袍落(和泉流) シテ 野村又三郎 アト 井上 靖浩
アト 佐藤 友彦
後見 佐藤 融

能小鍛冶(観世流) 武田 大志
高安 勝久 河村眞一郎 加藤 洋輝
梅元 正樹 船戸 昭弘 大野 誠

後見 アイ 今枝 郁雄
前野 郁子 地謡 吉沢 旭 加賀 敏彦
武田 邦弘 八神 孝充 梅田 義安
松山 幸親 祖父江修一

(午後四時四十分頃終了予定)

主催 名古屋市文化振興事業団
(名古屋能楽堂)
能楽協会名古屋支部

〔入場料〕前売指定席五〇〇〇円
前売自由席四〇〇〇円
(当日五〇〇円増)

取扱い 名古屋能楽堂(TEL 052・2231・0088)
プレイガイド(奈アプレケ・松坂屋他)
ナナイアパーク7階PG(052・2231・5015)
チケットぴあ(0570・929999、Pコード415
・016)

「下田文庫」が誕生

1月8日設立記念の能会

東海能楽伝承会主催

観世流能楽師 下田雄三師は、愛知、岐阜県にわたり戦前より指導にあたり平成二十一年逝去されたが、雄三師の先代益三師は、多くの貴重な書物を収集・書写され所蔵、雄三師も能楽について深く調べ、記録されていた。このたび東海能楽伝承会・寛鈺一氏(能楽大鼓方)は、雄三師のゆき子夫人より、能楽の普及・研究に役立つならば、との理解を得て「下田文庫」として開設することとなり、記念能会が催されることになった。「下田文庫」開設にちなむ能会について、寛鈺一氏は次のようにあいさつしている。

皆様もご存知の通り、去る平成二十一年十月十三日、観世流能楽

師 下田雄三先生が逝去なさいました。先生は、名古屋から飛騨路にかけて戦前より多くの弟子の指導にあたり、その誠実なお人柄で慕われていらつしやいました。その雄三先生の先代益三先生は、多くの貴重な書物を収集・書写され所蔵されてきました。雄三先生もまた、学者肌の一面をお持ちになり、能楽について深く調べ、ノートに綴っていらつしやいました。こうした書物について、このたび、雄三先生の令夫人ゆき子様より、能楽の普及や研究に役立つならば、とのお話をいただき、東海能楽伝承会がお借りし、管理させていただきますことになりました。ここに、名称を「下田文庫」と

し、蔵書を整理するとともに、能楽に真摯に向き合われた雄三先生のご遺志を継いでまいりたいと存じます。この文庫開設を記念して能会を企画いたしましたところ、雄三先生が師事されていた橋岡淡交会御一門のご協力をはじめ、雄三先生ゆかりの方々や、能楽愛好者のご参加を得まして、開催にこぎつけることができました。深く感謝申し上げます。ところで、能楽など伝統文化を取り巻く状況は、ますます厳しくなっています。例えば、子どもたちが気軽にお稽古する機会を、との目的で設けられていた文化庁「伝統文化子ども教室」助成は、政府の方針により平成二十二年度限りで廃止されてしまいました。が、東海能楽伝承会といたしましては今後とも教室の継続に努力していく所存であります。このたびの舞台では、二つの団体の発表の場を併せて設けさせていただきます。一つは、東海能楽伝承会が前述の文化庁助成を受けて運営してきた、「子ども能楽教室」のお稽古発表会です。

また、もう一つは、三河地方で室町時代より伝承されながら、知られる機会がなかつた大草流虎刀式です。直接的には料理に関わるものですが、室町幕府の將軍直胤の慶賀の儀式として、数多くの厳密な作法が伝えられる貴重なものなのです。今回の舞台を通して、伝統文化に関わってきた人々の心と、それを次世代に引き継ぎ、意義とを、あらためて感じていただければと存じます。なお、名古屋能楽堂展示室では、当日を含め一月の企画展示として、「下山益三師蔵書展 貴書に学び、希書と遊ぶ」が開催されます。こちらもあわせてご覧いただければ幸いです。

下田文庫

場所 愛知県名古屋市中村区下米野町
三丁目二十九番地
寛鈺一方
電話・FAX
〇五二一四五二一九七九七

東海能楽伝承会 下田文庫開設記念会

平成二十四年一月八日(日) 十時半開場
名古屋 能楽堂

- 十二時 舞台挨拶
十二時 大草流虎刀式
十二時 大草流虎刀式
十二時 ことば能楽教室
おけいこ発表会
仕舞 獅子、つつみけいこ、一口謡
- 第一部(二時)
- 仕舞 竹生島 坂野 晃
囃子(宝) 雲雀山 松浦 祥子 竹内 淳一
羽衣 サシ・シメ 青山 武雄 中里三紀 稲谷 典子 戸田登紀子
- 独吟 蝉丸 鬼頭 晴義
西行 桜 加藤 順子
網之段 浅田 宏 小川 尊子
- 連吟 杜若 鈴木 幸子
伊東 重政
奥田 明徳
戸田 英子
水野 明子
山下 安子
- (副) 玉 葛
伊藤 尚子 杉浦 敏二 阪口 春子
中島 暉夫
- 仕舞 尊子洗小町 国島とし子
羽衣 杉山 善生子
- 第二部(二時半頃)
- 仕舞 清玉 経 加賀 敏彦
福代 綾子
胡蝶 松田 憲二 長田 朔人 鬼頭 泰命
松風 藤井 千鶴子
蟻通 飯富 雅介
- 囃子 熊野 山崎 美紗子 大倉 栄太郎 帆足 正規
村留 船戸 昭弘
- 狂言語り 奈須与市 佐藤 友彦
- 囃子 船弁慶 山崎 浩之 船戸 昭弘 鬼頭 泰命
八田三津子 船戸 昭弘 大野 誠
新鼓之舞 高安 勝久 坂野 晃 加藤 洋輝
- 半能 天 後見 山崎 浩之 地謡 福代 綾子 前野 郁子
久田 勲 山崎 美紗子 近藤 幸江

法政大学能楽賞 受賞者の略歴

◎石田 幸雄氏
【主な経歴】
和泉流狂言方。日本能楽会会員(1998年認定)、1949(昭和24)年8月3日、東京に生まれる。高校在学中に野村万作に入門し、卒業後、師にあこがれプロの道を目指す。66年に(音)で初舞台。79年に(三番叟)、87年に(釣狐)、90年に(花子)を抜くなど、既に多くの大曲のシテを勤め、野村万作の会の主要な演者として活躍している。
1978年から8年間にわたる、同世代の能楽師とともに「傑の会」を開催。2001年、宝生流シテ方の田崎隆三とともに「雙ノ会」を設立。06年には同会の成果により芸術祭大賞を受賞した。「万作の会」の海外公演にも多数参加。

藤田六郎兵衛氏

【主な経歴】
藤田流狂言十一世宗家。本名藤田昭彦。宗名六郎兵衛重昭。日本能楽会会員(1991年認定)。1953(昭和28)年10月19日、十世六郎兵衛の孫として名古屋に生まれ、藤田流芸嗣子として祖父の養子となり、その指導を受ける。99年に一管(中之舞)で初舞台。65年(狸々丸)、66年(翁)、68年(蓮成寺)、74年(清経 恋之音)、83年(娘捨)、96年(権)、2002年(関寺小町)など、若年時から次々に大曲を抜く。シテ方・囃子方からの信頼も篤く、大曲・秘曲の上演に欠かせない師方と

催花賞受賞

◎三島元太郎氏
【主な経歴】
金春流大鼓方。日本能楽会会員(1978年認定)。1936(昭和11)年2月11日、故三島太郎の長男として大阪に生まれる。父および、故前川宗閑、金春惣右

衛門、故柳本豊次に師事。54年、能(紅葉狩)で初舞台。同年上京し、金春惣右衛門(当時の住まいは深井能楽堂)の内弟子となるとともに、同能楽堂でおこなわれていた能楽三役養成会の第一期生となつて研鑽を積んだ。習物の謡は観世寿夫の直伝。(朝長機法)(90年2月、11月)、(伯母捨)(2002年)等の大曲・秘曲を含め、数多くの舞台を勤める。新作能や復曲能への参加も多く、初演に関わつた(希留)(維盛)や英語能(鷹の井)(深炎)の他、(鷹姫)(大般若)(無明の井)等、枚挙にいとまがない。「世阿弥座」の一員として通つた東西ヨーロッパ各地をはじめ、インド、アメリカ、オーストラリア等、数多くの海外公演に参加している。国立能楽堂養成事業には84年の開設以来講師として参加するほか、大阪能楽養成会の講師としても後進の指導にあつている。

附 祝 言

【御来場歓迎】
(無料)
主催 東海能楽伝承会
寛鈺一氏
名古屋市中村区下米野町三十九
電話0522・4551・9797

名古屋清韻会

平成二十四年一月九日(月・祝)
午前十一時始
名古屋 能楽堂

- 素謡 杜若 佐藤 尚雄 佐藤 加代子
地謡 梶原 恵美子 岩田 正子
安藤 美奈子 御伊 隆子
浅井 廣子 緒方 隆子
- 仕舞 松風 鶴岡 良久
網之段 久野 洋子
賀茂 佐藤 由美子
- 多入島法子 後藤 貴代子
二人静 宝生 閑 河村 総一郎 藤田 六郎兵衛
- 問 野村 又三郎
- 仕舞 白楽天 谷口 寛子
土車 加藤 新一郎
- 独吟 草子洗小町 渡辺 健一
仕舞 賀馬天狗 中村 貴太
中村 大起
- 舞 囃子 芭蕉 篠田 幸子 寛鈺一氏 藤田 六郎兵衛
後藤 孝一郎 寛鈺一氏 鹿取 希世
御牧 紀代 船戸 昭弘 鹿取 希世
- 連吟 鞍馬天狗 中村 貴太
中村 大起
- 独吟 勸進帳 中原 基夫
- 一調 西行桜 渡辺 鏡子 観世 元伯
- 素謡 檜垣 古井 佐孝 宝生 閑
- 舞 囃子 忠度 加藤 美智子 船戸 昭弘 大野 誠
寛鈺一氏 船戸 昭弘 加藤 洋輝
後藤 孝一郎 鹿取 希世
- 現在七面 杉浦 善康 船戸 昭弘 鹿取 希世
福間 克彦 船戸 昭弘 大野 誠
- 源氏供養 船戸 昭弘 大野 誠
佐久間 美親 船戸 昭弘 大野 誠
加藤 千一 船戸 昭弘 大野 誠
- 花 塀 船戸 昭弘 大野 誠
加藤 千一 船戸 昭弘 大野 誠
- 郡 加藤 千一 船戸 昭弘 大野 誠

祝 言

仕舞 放生川 大槻 文藏

【御来場歓迎】

主催 大槻 清韻会

(終了予定五時半)



梅若盛義「鷓鴣小町」披キ (パンフレットより転載)

これより先、平成六年三月二十七日、観世能楽堂に於ける梅若盛義二三回忌退誓場、初回(意正・恒治・喜久)へ大誓の影そありがたき、と正面へ片手合掌。シテ、ワキ問答に名所教えに桜花への哀惜の思は、へ春宵一刻值千金、と連吟に共鳴、へあらく面白の、とする

追悼 梅若吉之丞さん

竹尾邦太郎

昭和三四年(一九五九)名古屋梅猶会を興した師父・初世猶義を補佐し、昭和四七年七月五日、師父没後は梅猶会の大屋台を主宰として背負い今日まで、例年春には定期能催し、また当地では昭和五〇年に、第一回が独演能(通小町・雨夜之伝・船弁慶・重き前後之巻)で催された「梅若盛義後援会」が発足、更に社中の「猶義会」や門下の熊澤重美子「猶思会」などを育て当地名古屋でお馴染みの梅若盛義さん、平成一四年一月には由緒ある吉之丞の名跡を襲名、益々の活躍を期待されて居られたが一月二八日、旅立たれてしまわれ唯々残念、御冥福を祈るばかりである。

よそ乍ら筆者が知る吉之丞さんは哲学をもつ寡黙な人、濃やかな情を内に秘めた金差の人、当然のこと乍ら能の道にかけける情熱の人の印象、舞台は端正で慎ましくやかな氣品に湛れ清栄だった。平成二年、自身の研鑽の場に東京で立ち上げた「こころみの会」のネーミングにしても、その人となりをよく表わしているように。

は観世能楽堂で「木賊」が演じられたが、その時の番組パンフレットで挨拶に次のように述べている。

今回の「木賊」は私にとりまして初めての演能(披キ)となります。この曲の題名になっている木賊を「存じでしょうか。青々とした細い節のある草です。以前はよく庭先などで見つけたものですが、今でも名前には知らないままで、見れば「あ、これが」と思われる方は多いのではないのでしょうか。これを乾かして、磨き物に使ったものであろうか。「木賊」のシテはこの草を刈って生活している老人です。他にも能は「蘆刈」の蘆を刈る人の質し人達の生業だったように思われます。

この曲は、昭和四七年に六一歳で亡くなりました父猶義から昭和四四年に初めて稽古をつけてもらった曲です。当時私は三歳でしたので、この曲を舞台で舞えるのはまだまだ先の事だと思っていたのですが、諸先輩方のお力添えを

の「鷓鴣小町」、多分再演だろうと思うが一月一九日、名古屋梅若吉之丞後援会第一回公演「熊澤重美子「愚ぶ会」で演じることになった。しかし、有る事か後援会の熊澤敦(意美子・末君)会長が九月八日に亡くなった上、「当会は故熊澤敦氏のご意思をそのままに現パンフレットによりすすめさせていただく所存でございます」と本公演に強い意欲を示していた吉之丞さん自身も一月二八日に死去、葬事などは催され

るのだろうかと思いたが杞憂。中止は罷りならぬ、と病床にあつても道に殉じる気概をみせたという吉之丞さんは後事を全て梅猶会に託し、後嗣・二世猶義さんに代動させ、吉之丞さんとも盛義時代によく演じた須田三番を做わされるように「求塚」との二番を務めさせ、吉之丞さんはせめて病軀を押しても後見に就きたかつたであろうが、立派に役を果した二世猶義さんを黄泉から眺め、後願の無い無きを望まれたことである。

謹んで御冥福を改めてお祈りする。さようなら吉之丞さん。
合掌



名古屋観世九皇会 「田村・替装束」高橋謙一(撮影・杉浦寛次氏) 左よより「田村・替装束」高橋謙一、鏡置雅介

◆秋の舞台から(その二)◆

「名古屋観世九皇会」第二回・久田観正能「梅田邦久翁寿記念・邦謡会能」

竹尾邦太郎

「田村・替装束」旅僧(ワキ 雅介、從僧(ワキツレ元・正樹)と都見物に出、清水寺に仕える鳴食(シテ際二)と出会い、寺の縁起は観世音の功徳から桜花爛漫辺りの名所まで教えられる前場、初回(意正・恒治・喜久)へ大悲の影そありがたき、と正面へ片手合掌。シテ、ワキ問答に名所教えに桜花への哀惜の思は、へ春宵一刻值千金、と連吟に共鳴、へあらく面白の、とする

に掛け(写真)へ地主の花、を嘆賞、ワキから離れ八月の雪も降る夜風の、と目付柱上方に目を遣り、正先へ出ると画面に落花を受け、中々ケセはへた、願め、と上方端あくと我世の中にある限りは御誓願、と袖アシラとに左袖ワキへ指白、ワキもそれへ納得の風情、面白。へ天も花に酔へりや、は頭トラス雲ノ廓のようにするのが珍しく、如何にも

愉悦の心が。ケセ留メに下局、ロンギに素姓問われ、地主権現の御前より、と立ち、地のうちに構懸へ、一ノ松で月のみら戸を、開いた扉で開ける型から地一杯に中入。ワキの問いに門前ノ者(アと陸行)が居語に清水寺の縁起、田村唐への供養を勤めて退くと後場音の推進で鈴鹿山に逆旅を平らけ

④面へつづく

新春能展

1月1日(日) 6時35分~7時35分
能「天鼓」片山 宝生 藤山 本 本
前シテ ワキ 笛 大鼓
シテ 片山 宝生 藤山 本 本
シテ 片山 宝生 藤山 本 本

1月2日(月)
狂言「貝物左衛門・深草」(和泉流)
シテ 野村 萬蔵 後見 野村 萬蔵
狂言「茶袍彦」(大藏流)
シテ 山本 則重 山本 則重
シテ アド 山本 則重

1月3日(火)
能「三笑」(宝生流) 近藤 俊樹 扇丞
シテ 近藤 俊樹 扇丞
シテ アイ 野村 萬蔵

「下田文庫の世界」
「淡交会をめぐって」
下田益三師(明治20年生)は、祖父が橋岡雅書師に謡曲を習った縁で、18歳のとき、雅書師の芸子である久太郎師に入門した。明治42年に雅書師が没すると、益三師は大阪の淡交会を引き継ぎ、観世家来阪時には世話を引き受けていた。「和歌山謡曲寺図経(巻物・複製)」は、雅書師の十三回忌退誓記念に作成、配布されたものである。
「光悦謡本をめぐって」
光悦謡本は桃山時代に刊行され、雲母模様の紙や本阿弥光悦流の書体が美しく、美術品として珍重されている。下田文庫には、実物が4冊収められている。
大正時代、能に対する古典的趣味が高まり、光悦謡本の模本が致

種類作られた。大正10年の精藝社複製本もその一つだが、採算が合わず中断された(下田文庫が3冊所蔵)。益三師は、このうちの老松、高砂に新たに野端(東北)を加えたる冊を「松竹梅」と称し、大正13年に刊行、頒布している。
「能伝書の書写をめぐって」
益三師は、金銭で書物を買ひ集めるだけでなく、自らが筆を執って古文書を忠実に写している。例えば、桃山時代末綴の伝書で諸大名家に相伝された本願寺坊官・下間少進著「言伝舞抄」は、大正10年、わんや書店主、江島伊兵衛氏所蔵の本を借り受け、模写された。当時、益三師は視力を失いつつあり、その中で情熱と確かな仕事ぶりには驚くばかりである。

第14回 万作を観る会
一月十四日(土) 午後二時始
名古屋能楽堂
解説 林 和利
狂言 田植 神主 野村 万作
後見 河村 真之介 太鼓 加藤 洋輝
小鼓 後藤 嘉津幸 笛 竹村 幸雄

狂言 魚説法 新巻著 石田 幸雄 地主 高野 和意
後見 岡 聡史

狂言 閻罪人 大筋記者 野村 萬蔵
立立 衆 衆 衆 衆 衆 衆
立立 衆 衆 衆 衆 衆 衆
後見 石田 幸雄 月崎 晴夫

第56期第1回 名古屋宝生会定式能
一月二十二日(日) 午後一時始
名古屋能楽堂
主権 なごや・万作の会
「入場料」S席八千円 問合万作の会
A席七千円 B席六千円
取扱い 電子チケットびあ TEL0339977877
(TEL05209202999)
柴アテレク92(TEL05209202999)

能 小袖管我
主演 和久 莊太郎 和久 莊太郎
上七 衣江 正直 衣江 正直
五郎 衣江 正直 衣江 正直
内藤 巳大 飛能

能 小鍛冶
主演 河村 真之介 河村 真之介
自見 橋本 幸 橋本 幸
間 井上 謙浩 井上 謙浩
後見 内藤 巳大 飛能 飛能
衣裳 愛 石森 智幸

狂言 空腕 佐藤 友彦 鹿島 俊裕
後見 大野 弘之

仕舞 笹ノ段 竹内 尊子
後見 玉井 博祐

能 小鍛冶 高橋謙一 高橋謙一
(撮影・杉浦寛次氏)
主演 河村 真之介 河村 真之介
自見 橋本 幸 橋本 幸
間 井上 謙浩 井上 謙浩
後見 内藤 巳大 飛能 飛能
衣裳 愛 石森 智幸

「入場料」(全自由座)
正会員一八〇〇〇円(年間通用4枚)
観客券五〇〇〇円(一回限り)
取扱い/プレイガイド(芸文館2階) 名古屋市昭和区御薬所
柴アテレク、ナディアパーク、中日サービス 312319101
(中日ビル)、松坂屋(本館7階) 衣 斐 正 宜 方
電話 0528825600



観世九皇会「薩摩守」左より野村又三郎、奥津健太郎(撮影:杉浦賢次氏)

「薩摩守」幕槍を当てる世間を渡れると思つて居る僧(健太郎)、茶屋(徹)で湯を癒しそのま、券とつすれば、代金請求されるのも当然だが無一文。それを話として恥しない余りの世間知らずの愚直ぶりに、茶屋は代金ちや

キリに田村麿の掩護に千手観音がへ光を放つて虚空に飛行し、と阿エウケンの様にバツと両手を上げるのは正に閃光、電光石火の飛来を象徴して面白い。へ一戻せば、と左袖さつと緩ね、漸く床几を下り立つのは小書「長胡床」の併用、正先へ出ると立場は逆賊に一転、降りかゝる千の矢先がへ乱れ落つれば、と唐團扇を頭上にかざして膝をつき、へ討たれにけり、を唐團扇を伏せて象徴、立つと常座へ廻り込み留めた。氣力充実、終始緊張した舞台が好ましかった。(1時間18分)

「⑤面よりつづき」る様をみせる。小書で面大天神・黒頭・唐冠・半切・袷衣折込(敷斗二着ル)・剣を背負い、唐團扇を持ち堂々たる威風(写真裏)。へ仰せによつて、と袴の股立となる心に馬は大小前の床几にかゝる。クセはへ石山寺を、目付柱へ見て合掌、へ勢田の草橋、と指廻し四ツ拍子踏み、へ駒も足並や、と手綱を引く心に腰を浮かせ、上が端へ既に伊勢路の山近く、と腰を下ろすと、へ(狂き心は)あらかねの土も木も、と強々と踏み七ツ拍子に逸る心まどくとみせる。カケリは無く、逆賊との闘争は、へふりさけ見れば伊勢の海、と四ツ拍子に荒れる海の様を、へ安瀟の松原むらだち、と指廻しに松原を重ねて群がる逆賊の様を、見せる。



観世九皇会「松風」中所宜夫(撮影:杉浦賢次氏)



観世九皇会「松風」中所宜夫(撮影:杉浦賢次氏)

らにした上、先の渡しで只乗り出来るよう秀句好きの船頭(シテ又三郎)の歡心が買える極め付きの秀句を「平家の公達」と教える。しかし、乗船に一人二人では不可と言われると口実を設けたり、乗る際「船が返る」などと禁句を口走つては面話されて詫びたり、でその対応に俄仕込みの秀句の心はすつかり失念か。岸を離れ「いつもこの辺で船賃を取る」と言われ、「平家の公達」から「薩摩守」までは言えても、更にその心を追求されて二進も三進も行かす「忠度」の「のり」だけが頭にあつたか、「青海苔の引き干し」と。シテの熱演は僧に苛立つ声の大きさ聲田のきらいも。(90分)

「松風」在原行平が須磨に配流のとき馴染んだ松風(シテ宜夫)村雨(ツレ喜正)の姉妹、そ

かな風姿は楚々として美しく、へ影恥かしき我が姿、と右へ面を背けるようなシテのしおらしさは、へ寄せては帰るかたを波、と引く波を連うように前へ、へ声辺の田鶴こそは、と右ウケ、群が飛び立つ様を見上げるかに面テラス辺り、行平遺慕の心情。汐汲むところろはへ影を汲むこそ心あれ、と二度汲む手動きも美しく、しみぐく痛の中を眺める(写真)のも優しさの表われ。地(三郎・直也・恒治ら)と掛合のロンキは所謂「離グリ」、へ離の汐汲む憂き身そと人にや誰も黄楊の橋、と汐汲みの辛さを人には誰も告げては呉れなす。次いでツレが立ち、水桶を汐汲車に載せ、引紐取つてシテに持たせる手際も美しい。堰屋に戻ればワキとの問答に名を問われ、へ恥かしや、とよく揃つたシテ。ツレ連吟にクドキへと名を明かしてゆくところ上々。クセ中、後見から小立高帽子・長絹を持たされると上が端あと、床几を立つとへ忘れ形見も田なしと、でハラリと垂れ下がる長絹、へ(捨て、も置かれず)取れば、と梅と掻き抱くのも思ひの深さ。物着して懐かしさに耽せる思いのシラリ、へ三瀬川、と詠い出す。へあら唐しや、と松に行平の姿を認め、歓声を上げ立つて出る

の旧跡の松を引う旅僧(ワキ勝久)、家路に戻る二人の汐汲みの海女の堰屋に宿を許され、そこで二人から松風・村雨の幽霊と明かされる。二人は行平との三ヶ年を懐しみ、松風は形見の烏帽子・袴を着けると、狂おしく舞い、僧に後生を頼むと僧の夢は消える。シテとツレ、傳まじや、傳まじや、と詠いながら出た。後場、一ノ松に裏屋根・芝理付の半部門。へ草の半部押し上げて、白長絹・黄太口の夕顔女(後シテ三連子)が橋から出て来る姿は如何にも寂しげ。クセは夕顔ノ上が光源氏に邂逅した時の回想。へ惟光を招き寄せへあの花折れ、と半部門を指し、へこの花を折りて参らする、と折つた花を載せた心に開いた扇を掲げ持ち出る姿、と画面を見詰めるところ、なと女流らしい艶やかな気持だが、順序之舞は作物が常座の半部屋ではないので、舞の中、右袖被き退つて部下へ入る型はなく、膝をつきワキへ合掌するのが珍しかった。舞上げるのと地との掛合にきりへ明けぬ前にと夕顔の借り、の返シ句に嬌態へ、へまた半部の内

と、へ浅ましや、と止めるツレ(写真)、理を説くツレに反発するシテ、掛合の呼吸よく合い好調。へ立ち別れ、とシテは二ノ松へ、イロエ掛中之舞三段、袖を綺麗に被いたのが印象的。舞上げ、へ磯馴松の懐かしや、は左袖透シにしておとなしい感じ、退つてシラリと慕情は敬之舞に。松の後ろ、程を扇ガサシて廻るのも鮮やかに、へ松に吹きくる、と双マネキから正中へ出、下居ワキに合掌、へ腹申して、立ち、へ帰る波の言、を踏む四ツ拍子に、へ吹くや後の山風、を月ノ扇に街柱上を眺め、そこに山を見る心、トメは常座。階が乗るシテとツレ、揃やかな好舞台。(1時間45分、10月1日・名古屋観世九皇会)

「半部・立花供養」佛事に用いた花を引う夏安居の僧(ワキ元)、所ノ者(アト又三郎)に立花供養を執り行つと触れさせる、と、白い花を供えに来る里女(シテ三連子)、ワキと掛合に花の名を、更に自分の名を問われ、へ五糸辺りと夕顔の、と初回(徳三・貴弘・直長ら)に葉姓仄めかすように消え失せてゆくところ、短い前場の、夕暮の儂げな夕顔の花がイメージされる寂しい雰囲気がい。ワキの求めに、アトが光源氏と夕顔ノ上の事に傾れ、五糸辺りを訪ねるよう勧める唐語が巧く一曲の主題を明快にする。後場、一ノ松に裏屋根・芝理付の半部門。へ草の半部押し上げて、直くワキとの問答からロンキへ名所教えに。ワキの求めに壺釜の浦を都へ移した謂れを語るシテ語、懐旧の念に昔を怨う下歌・上歌は省く。名所教えにかかすらい、汐汲へ忘れたり、と一ノ松へ走つて田子を取ると、框一杯に出て外から右、左と汲むのも鮮やかだったが、へ夜の老人と、と退いて行く時、後ろ向きに田子を下ろし、天秤棒を捨てると、見事に田子の上に載つたのも鮮やかだった。中入は二ノ松で一度沈み、立つと地のうちに静かに入る。ワキの求めに所ノ者(アト小三郎)が融大臣の事どもを唐語に語つて退くと後場。出端の雛子(学・達志・総一郎

に、と都を上げさせて入ると、その原直ラスに留ま。余情を残して品の良い舞台だった。(1時間34分)「麗祈」山伏(シテ融、久しぶりに祖父(アト又三郎)を見舞い、ひとく腰が屈んでいるのを見てここぞと己の行力を恃み、加持を試みるが、効き過ぎて腰の伸縮を自在にはできても、祖父の身ろ、程を扇ガサシて廻るのも鮮やかに、へ松に吹きくる、と双マネキから正中へ出、下居ワキに合掌、へ腹申して、立ち、へ帰る波の言、を踏む四ツ拍子に、へ吹くや後の山風、を月ノ扇に街柱上を眺め、そこに山を見る心、トメは常座。階が乗るシテとツレ、揃やかな好舞台。(1時間45分、10月1日・名古屋観世九皇会)



邦語会能・梅田邦久・梅田邦久・梅田邦久(撮影:杉浦賢次氏)

・慎也)で出る後シテは融ノ靈、面中将(今若か)小立高帽子・黒垂・紫指貫・白直衣・木刀の気品。舞台へ入ると、へあら面白曲水の盃、と正先へ出て膝ついて一つ構み、へ受けたりく、と違拝して早舞は五段五段。前の五段に膝をついて両袖合わせ合掌する様な型があり、後の五段には三ノ松へゆきツツロギがある。三鼓の取りスミで小廻りから急之舞三段、一ノ松で舞上げるとロンキに。型所まぎりと決めて小気味よく、へ魚は月下の波に伏す、と左袖まきりきりと巻上げて膝をつき、面伏せ左手で蔽うところ、技の切れ味。キリは地を踐してシテが入るとワキが常座へ出、膝をつきシテを見送ると立つて留めた。力の籠つた颯爽とした融大臣の風格、勘齋遺憾なく力量発揮、素晴らしい。(1時間31分、10月9日、第一回久田観正会)

新春能 大槻能楽堂

大槻能楽堂では一月三日、四日の2日間、新春公演として両日とも「翁」と「翁」(片山幽雪、三番三・野村万作、千歳・味方玄、面箱・高野和憲)能「賀茂」(観世鎮之丞、ワキ福王和幸)入場料(全座指定)前売5席7三〇〇円 A席六三〇〇円 (当日5席八二〇〇円 A席七〇〇円)入場券発売/大槻能楽堂(06・67661・8055) ローションチケット(1月3日Lコート58560、1月4日Lコート58572)

めかねつ更科や、娘捨山に照る月を見て、と詠んだ人の跡なら、と舞台へ近づきつ、初回(丸郎右衛門・邦弘・磯遣ら)はへ緑も残らずか一重山、と常座で右へその跡を見る心。へ風凄しく、を小首勝久、彼地で一人の里女(シテ邦久)に呼掛けられ、問答に胸中葉老伝説を踏まえ「古娘捨の在所は何処」と問えば、シテは葉氣なく「心得ぬ」と答え、へ我が心懸

つめれば、シテは名前通り娘、と明かして、へそれと言はんも恥かしや、と肩を狭め、面クミラセ、佇立の風情が如何にも寂しい。中秋月夜の度へ執心の闇を晴らさんと今宵現れ出でたりと、ワキへ詰メルところが。寂々とした送り笛に入ると、静かな冷

えぐした空気。月見の里人(アト又三郎)が娘捨伝説を語つて退くと後場。ワキ・ワキツレの待謡が済むと出端(六郎兵衛・博明・総一郎・悟)で出る清浄無垢日装束の老女(後シテ邦久)。ワキと掛合から地へおもてを更科の、とワキにアシラウと、へ月に見ゆるも(恥かしや)、と左袖で面を隠すところのしおらしさ。クセはへ又ある時は影欠くる、と扇ガサシ面を隠すように廻る姿の恥らしいの美しさ。序之舞は扇を左手に、映る月光を見詰め(写真)つ、廻り、脇正に安座すると扇面を眺め、光のよつて来るところ、月を右上に暫時眺めるところ、いわゆる弄月の型が美しく素晴らしい。ワキはワキ・ワキツレが帰るのを面伏せて後姿見送り、二・三足出てゆつくり直ルとへ独り捨てられて、と膝をつき安座。左袖シラリ、へ今もまた、とシラリ返すとへ娘捨山とぞ、と面上げ、凝視したように返シ句を聞くと立ち、常座で背を見せたまま、に雛子が留めた。(2時間26分、10月22日、梅田邦久・梅田邦久・梅田邦久(撮影:杉浦賢次氏))